

一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)
埋蔵文化財発掘調査報告書

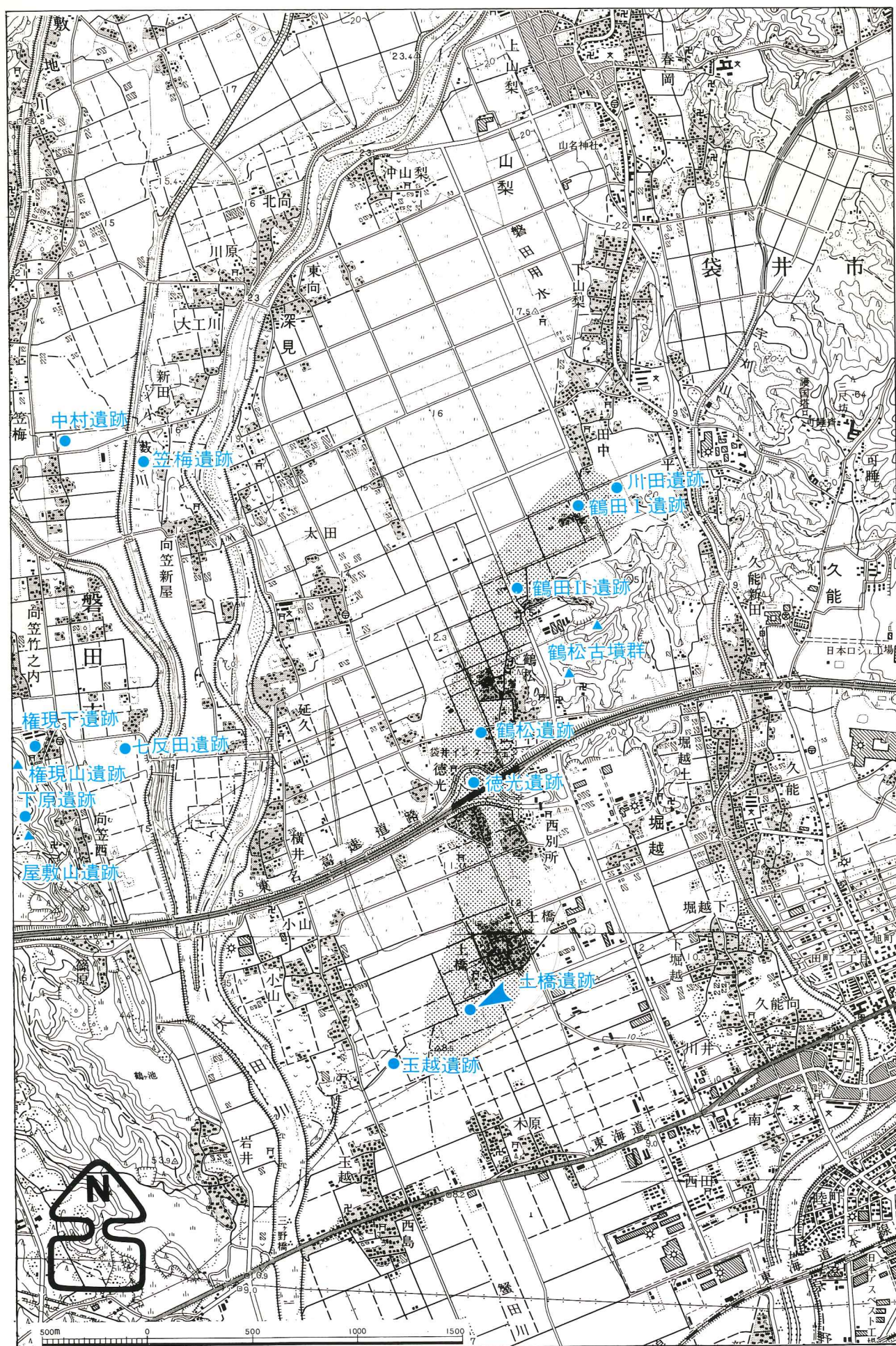
土 橋 遺 跡

— 基礎資料編 —

1985

建設省中部地方建設局
静岡県教育委員会
袋井市教育委員会

土 橋 遺 跡



第1図 土橋遺跡位置図 (スクリーンは遺物散布地)



「国厨」墨書土器について

墨書土器は木簡と異なり、出土した遺跡の性格を直接に示す場合が多い。「国厨」墨書土器の出土した例としては栃木・下野国府跡の政庁付近から2点発見されたことから、国府に設けられた給食施設＝国厨で使用された土器と考えることができる。遠江国の国府は、隣接する磐田市の遠江国分寺の調査結果から同市見付周辺と推定されているが所在地は不明である。土橋遺跡は国府推定地より東へ5 km離れた太田川の沖積平野に位置し、国府（国司）が直接経営する水田が営まれることも可能であろう。



土壙（SK3）より出土した壺と高坏（右）—弥生時代後期—



土壙（SK77）より出土した壺・甕・高坏のセット—弥生時代後期—



環濠をもつ掘立柱建物跡群—古墳時代初頭—



土壙（S K 77）内の一括出土土器
—弥生時代後期—



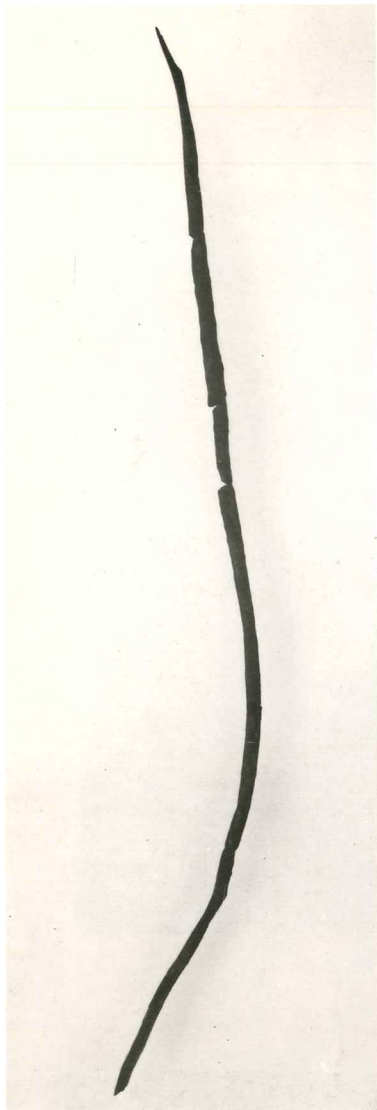
土壙（S K 80）出土の埋葬された犬遺体
—弥生時代後期—



土壙（S K 76）出土の古式土師器と丸木弓



土壙（S K 13）出土の着柄式二叉鍬



丸木弓 (S K76出土)



S字状口縁台付甕 (S K76出土)



へら状木製品 (S D115)



ヨコヅチ (S K36)



着柄式二又鍬 (S K13出土)



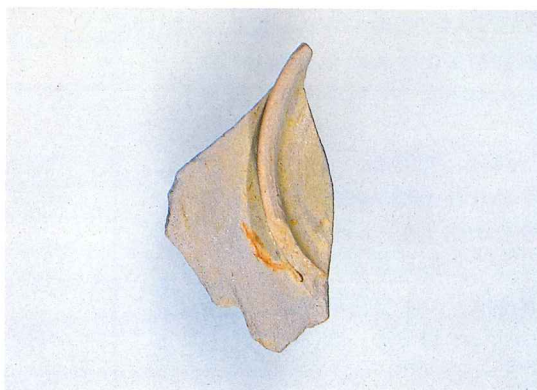
中世屋敷跡 (S D 85)



池状遺構 (S X 1)



祭祀用卒塔婆出土



緑釉陶器片



青磁片

土 橋 遺 跡

土橋遺跡は、国道1号線袋井バイパスの建設によって破壊されてしまう埋蔵文化財を記録に残すため昭和57年4月から3年間に渡って発掘調査が実施されました。この遺跡は、近くを流れる太田川が上流から運んできた土砂によって形成された肥沃な沖積平野のまん中にあります。そのため、この地方で米作りが本格的におこなわれるようになった弥生時代の後半から古墳時代にかけて、たくさんの「ムラ」がこのあたりにあったと考えられます。そして、この豊かな人々の力を背景として磐田原台地上に墳墓や古墳がたくさん造られるようになりました。またこの地は東西交通の要所で、森町方向へぬける分岐点にもなっているため古代から交通路を把握する拠点となっていました。奈良・平安時代に入っても墨書土器を散布させる地域で、平野全体に条里制の跡が残されています。土橋遺跡のように各時代の遺物を出土する遺跡は複合遺跡と呼ばれたいへん重要な遺跡の1つです。

— 袋井市遺跡略年表 —

旧石器時代（約11,000年前） このころの遺跡としては三川・山田原遺跡があります。ここからはスクレイパー、ナイフ型石器、スモールブレイドなどと呼ばれる石器がたくさん出土しています。

縄文時代（約11,000～2,300年前） 人々は山でシカやイノシシを追い、浅瀬や河口では貝や魚をとって生活していました。笠原の大畑遺跡や豊沢の長者平遺跡が市内では有名で、住居跡や墓地も発見されています。

弥生時代（約2,300～1,700年前） 土橋遺跡のある太田川流域は稲作にたいへん適しているため弥生時代の後半になるとたくさんの人々が住みはじめました。鶴松遺跡や徳光遺跡は土橋と同じように農耕をする人々が住みました。かわったところでは宇刈・一色前田遺跡の人々は山の上に住居を作って住みました。弥生時代のお墓は方形周溝墓と呼ばれる地面に浅い溝を四角に掘ってまん中に人を葬ったものですが、市内では高尾・掛之上遺跡や国本・山下遺跡で発見されています。

古墳時代（約1,700～1,300年前） 袋井は県内でも古墳の数の多いことでは有名です。皆さんの家の裏山にも古墳がある方が何人かいると思います。古墳は大きな前方後円墳から直径10mくらいの円墳までさまざまです。市内で形のよくわかるのは三川・川会坊主山古墳、国本・宇佐八幡宮古墳、豊沢・丹生神社古墳などの前方後円墳があります。また中遠地方の特色として横穴古墳があります。いまでもよくわかる場所は宇刈横穴群や菅ヶ谷の横穴が安全に見に行けます。

奈良・平安時代（約1,300～800年前） 最近、新聞をにぎわしたものに、国本の坂尻遺跡があります。ここは出土品から当時の役所の跡ではないかと言われ、墨書土器、木簡、和銅開珍などが出土しています。墨書土器を出す遺跡はほかに山梨・稲荷領家遺跡とここ土橋遺跡があります。

中世・鎌倉時代～戦国時代（約800～400年前） 土橋遺跡では屋敷跡が発見されています。ここからは魚をかたどった水摘や鉢、甕、皿、そして箸なども出土しています。

序

近年における産業経済の発展は、文化財保護行政、とりわけ埋蔵文化財の保存に大きな影響を与えています。諸開発に伴う発掘調査は年々その件数を増しており、地理的・歴史的景観をも大きく変え、そこに生活する人々の価値観にも変化を生じさせています。

一方、地方の時代、文化の時代と言われる今日、地域の伝統文化の見直しや郷土の自然を大切にしようとする動向とともに、新しい地域文化の創造をめざす努力が各地で着実になされて来ています。このような傾向は、社会の激しい変動によって失いがちになった豊かな人間性の回復を強く求めているあらわれと思われるます。

さて、一般国道1号袋井バイパス建設の計画は昭和48年ごろからありましたが、昭和53年から具体化されました。坂尻遺跡は、昭和55年の分布調査に引き続いて以後4年間、また、土橋遺跡は、昭和57年から3年間にわたって調査を行い、その成果には多大なものがあったと聞いております。こうした数年間にわたる調査の成果をまとめたものが、この度、袋井市教育委員会の努力によって刊行されることになりました。

ここに、建設省中部地方建設局ならびに袋井市をはじめとする関係諸機関、さらには発掘調査に従事された関係者の方々に深く敬意を表するとともに、本書が広く活用され新しい地域文化の創造の一助ともなることを念願するものであります。

昭和60年3月

静岡県教育委員会

教育長 吉川晴夫

序

袋井市は、昭和33年市制をしき、現在人口50,000人、面積78km²余、県西部の地方都市として成長してきました。温室メロンと茶は特産品として世に知られています。江戸時代には、東海道27番目の宿場町として栄えました。市民憲章に「豊かな自然と遠州三山などの古い文化に恵まれていることに誇りをもち」とあります。法多山尊永寺、医王山油山寺、万松山可睡斎の遠州三山、その他多くの文化財を「心の広場」とし、ふるさと意識を高め、産業の発展とともに生活文化を重視した、創造性豊かな袋井市をめざしています。

産業経済の発展に伴い、東名高速道路が開通し、磐田・掛川バイパスの開通による市内交通とりわけ国道1号線の渋滞を見るとき、袋井バイパスの開通を急がなければならないことを痛感します。昭和55年に具体化されたバイパス路線には埋蔵文化財が所在します。そのため工事に先立って調査することになりましたが、当市にとって今までに類を見ない大きな発掘調査となりました。調査の結果は予想もしなかった重要遺跡として誇りうるものとなりました。

昭和55年から59年に調査された坂尻遺跡では、掘立柱遺構、和同開珎、銅印、墨書土器などの遺物が検出され、奈良時代の佐野郡衙推定地となりました。また、昭和57年から59年に調査された土橋遺跡では、弥生時代の集落や土器、木器が検出され、さらに近世・近代へと続く農耕遺跡であることが判りました。

変化の激しいゆれ動く時代の私たちは、過去を見直し、今日ある姿を知り、未来を考えていかなければなりません。道路を新しくするときにはふるさとの古径を見直し、橋を新しくするときは風景に合ったものにする。そうした緑や文化財を考慮した都市づくりの中に「うるおいとやすらぎのあるまち」が生まれるのではないのでしょうか。

ともあれ、ここに本報告書が刊行できることになったのは、建設省中部地方建設局、静岡県教育委員会、ならびに関係諸機関の協力と援助のたまものであり、厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査に従事された関係者に対し感謝の意を表します。本報告書が文化財保護関係者、学術関係者、さらに社会教育、学校教育に携わる関係者に広く活用されることを望んでやみません。

昭和60年3月

袋 井 市 長
湖 東 二 郎

序

袋井市は、県西部、天竜川左岸の磐田原台地と小笠山に囲まれ、太田川と原野谷川が緩やかに流れる低地一帯に広がっています。山田原の旧石器、大畑・長者平の縄文、鶴松・徳光・土橋の弥生、丘陵や山腹の古墳群・横穴群等々の遺跡は、そうした台地や低地を生活の舞台として選ばれ点在しております。さらに奈良・平安時代の坂尻遺跡、遠州三山に代表される寺院、近世には宿場町が栄えてきました。また、温暖な気候は山麓地帯の茶、平野部の温室メロン栽培に好条件をもたらしています。近年は産業経済の発展と共に工場用地の開発、新しい道路の建設などが相次いでいます。

一般国道1号袋井バイパスに伴う埋蔵文化財発掘調査は、昭和55年度の坂尻遺跡に始まり、昭和57年度からの土橋遺跡と5年間にわたって行われてきました。坂尻遺跡は約3,000㎡を残し、新しく国本遺跡の調査を控えています。本年度で一応の節とすることができました。坂尻遺跡は佐野郡衙推定地、土橋遺跡は広範にわたる農業遺跡という予想もしなかった成果となりました。

古墳や松並木、建造物などは袋井市の豊かな自然の中に溶け込んで歴史的景観をつくってきました。広重の袋井宿の風景や子規が車窓から見た景観は、東海道の地方都市のいずれもがそうでありますように、近年の開発によって急速に失われています。自然景観と共に歴史的景観は一度失えば元に戻すことは至難の技であります。埋蔵文化財も発掘されれば破壊されたも同然で残るのは遺構の記録と遺物だけとなります。後世に残すためには精細な調査と克明な記録が必要となります。

また、情報化社会による多面的な変化は人々の価値観を経済から教育文化に、物から心へと転換させています。地域文化が見直され歴史の証としての文化財の重要性が指摘されています。そうしたとき、本報告書を発刊できることに大きな意義があるものと思います。

終わりにになりましたが、建設省中部地方建設局浜松工事事務所、静岡県教育委員会文化課及び関係諸機関に深く感謝致しますと共に、寒風吹き荒ぶ中、酷暑の中で従事して下さいました作業員、調査補助員、調査員の方々、そして、有形無形のご支援、ご厚情をいただきました地元の皆さん等々にお礼を申し上げます。また本書が文化財保護関係者、学術研究者、そして社会教育、学校教育の関係者に活用されることを念願して序文といたします。

昭和60年3月

袋井市教育委員会

教育長 鈴木 勲 一

例 言

1. 本書は、一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、昭和57年度・58年度・59年度に実施した土橋(つちはし)遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は建設省中部地方建設局長を委託者とし、袋井市長を受託者として袋井市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査は寺田義昭、永井義博(袋井市教育委員会)を調査担当者として、静岡県教育委員会文化課の指導を得て実施した。
4. 現地調査は対象面積が広いため12の区画に分け、調査員が次のように分担した。
寺田義昭・山本宏司……1区、4区、5区
寺田義昭・松井一明……3区
寺田義昭・永井義博……2区、6区、7区、8区、9区、10区、11区、12区
5. 資料整理は寺田の指導をうけて永井、山本、松井が行った。
6. 本文の執筆は調査員が分担し、それぞれの執筆者名を記し文責を明らかにした。
7. 報告書の編集は寺田の指導を受けて永井が担当した。
8. 出土遺物の写真撮影及び遺物実測図(土器・石器・木製品・金属器等)作成については永井が文字資料(墨書土器・卒塔婆等)釈文作成は山本が、すべての遺構、遺物実測図のトレースは早川保子が担当した。表作成は大庭京子、白井洋子、寺田妙子、内山笑子、鈴木栄子の協力を得た。
9. 調査資料はすべて袋井教育委員会が保管している。
10. 本調査に関する事務は袋井市教育委員会社会教育課職員が行った。
11. 本調査及び資料整理参加者は次のとおりである。(敬称略)
山本宏司(土橋遺跡調査員)
松井一明(袋井市教育委員会)
渡辺菊男、大庭嘉平、大橋庄一、佐藤好孝、川島良一、鈴木嘉三郎、大庭千代子、大庭泰子
鈴木喜代子、寺田すぎ、大庭つや子、友田みさ子、寺田しま子、内山夏代子、大庭はつゑ、
鈴木好子、寺田なか、鈴木栄子、白井洋子、鈴木直子、寺田妙子、内山笑子、藤城まさ江、
青木君子、丸野礼子、寺田健、横山利典、大場公彦、平田貢一、大場伸一
太田馬仔雄、高野由美子、森永明美、鈴木利枝、大庭京子、浅井征江、寺田せつ子、寺田ひ
で子、鈴木桂子、榎田チエミ
三浦政平、三浦久雄、石川一二、川村義雄、三浦とく江、山本まさ子、太田清子、鈴木敏子
寺田しま、山崎雪江
ここに記して深く感謝の意を表したい。
12. 発掘調査及び報告書の編集にあたって次の方々の協力をえた。(敬称略)
五島康司、吉岡伸夫、前田庄一、兼子弘美、高木真澄、西尾玲子
磐田市立郷土館、焼津市埋蔵文化財調査事務所、静岡市登呂博物館、浜松市博物館、愛知県陶
磁資料館、同志社大学考古学研究室、榎原考古学研究所、栃木県文化振興事業団、秋田城発掘
調査事務所、島根県教育委員会、富士市教育委員会、駒沢大学考古学研究会、元興寺文化財研
究所

目 次

第1章 国1バイパス（袋井地区）の発掘調査について……………〔寺田義昭〕……………	1
第1節 調査に至る経過……………	1
第2節 バイパス建設計画の概要……………	2
第3節 文化財に対する措置……………	3
第4節 調査体制……………	4
第5節 分布調査（試掘）……………	5
第6節 調査方法……………	6
第2章 遺跡の周囲……………〔寺田〕……………	7
第1節 研究史……………	7
第2節 歴史的環境……………	9
第3節 土橋遺跡をめぐる地形・地質学的背景……………〔静岡大学教授 加藤芳朗〕……………	11
第3章 遺構……………〔永井義博〕……………	27
第1節 概 要……………	27
第2節 土 壙（S K）……………	34
第3節 その他の遺構（S X）……………	52
第4節 柱穴・その他の小穴（Pit）……………	72
第5節 掘立柱建物跡（S B）……………	72
第6節 溝 跡（S D）……………	79
第7節 特殊な遺構……………	85
a. 環濠を持つ掘立柱建物跡群……………	85
b. 中世屋敷跡（鎌倉時代）……………	85
c. 池 状 遺 構……………	91
d. 近世杭列（江戸時代後期）……………	91
第4章 遺 物……………〔永井〕……………	95
第1節 弥生土器・土師器……………	95
第2節 須 恵 器……………	139
第3節 陶 質 土 器……………	142
第4節 墨 書 土 器……………	171
第5節 銭貨・金属製品……………	180
第6節 木 製 品……………	180
第7節 卒 塔 婆……………	191
第8節 動物遺体……………〔早稲田大学考古学研究室 金子浩昌〕……………	197
a. 土橋遺跡弥生期土壙（S K 80）内出土のイヌの遺体……………	197
b. 土橋遺跡池状遺構（S X 1）出土のイヌ遺骸について……………	198
第5章 まとめにかえて……………〔永井〕……………	201

挿 入 目 次

第 1 図	土橋遺跡位置図	
第 2 図	土橋遺跡周辺遺跡地図	8
第 3 図	(加藤) 太田川・原野谷川流域の地形・地質図	10
第 4 図	(加藤) 土橋遺跡周辺の地形・地質図	11
第 5 図	(加藤) 土橋遺跡周辺の微高地帯と低湿地	13
第 6 図	(加藤) 徳光遺跡附近の微高地と表層地質	14
第 7 図	(加藤) 袋井バイパス予定線沿いの地下地質断面図	15
第 8 図	(加藤) 試掘調査地点	17
第 9 図	(加藤) 試掘調査の土層柱状図(測線 A—A')	17
第 10 図	(加藤) 試掘調査の土層柱状図(測線 B—B')	19
第 11 図	(加藤) 試掘調査の土層柱状図(測線 C—C')	20
第 12 図	(加藤) 試掘調査の土層柱状図(測線 D—D')	20
第 13 図	(加藤) 遺構周辺の礫層出現深度分布図	21
第 14 図	(加藤) 溝・建物などの遺構と旧流跡との関係	22
第 15 図	(加藤) 遺構周辺のグライ層の出現深度分布図と建物・井戸などの遺構	23
第 16 図	土橋遺跡発掘調査区画図(第 1 区～第 11 区)	27
第 17 図	第 11 区トレンチ設定図	29
第 18 図	土橋遺跡発掘調査区画図(第 12 区)	30
第 19 図	第 12 区平面実測図	31
第 20 図	土壌〔SK〕実測図(1)	34
第 21 図	土壌〔SK〕実測図(2)	35
第 22 図	土壌〔SK〕実測図(3)	36
第 23 図	土壌〔SK〕実測図(4)	37
第 24 図	土壌〔SK〕実測図(5)	38
第 25 図	土壌〔SK〕実測図(6)	39
第 26 図	土壌〔SK〕実測図(7)	40
第 27 図	土壌〔SK〕実測図(8)	41
第 28 図	土壌〔SK〕実測図(9)	42
第 29 図	土壌〔SK〕実測図(10)	44
第 30 図	土壌〔SK〕実測図(11)	45
第 31 図	土壌〔SK〕実測図(12)	46
第 32 図	井戸遺構・土器集中地点〔SX〕実測図	51
第 33 図	掘立柱建物跡〔SB〕実測図(1)	72
第 34 図	掘立柱建物跡〔SB〕実測図(2)	74
第 35 図	掘立柱建物跡〔SB〕実測図(3)	75
第 36 図	掘立柱建物跡〔SB〕実測図(4)	76
第 37 図	掘立柱建物跡〔SB〕実測図(5)	77

第 38 図	溝跡〔SD〕実測図(1)	79
第 39 図	溝跡〔SD〕実測図(2)	81
第 40 図	溝跡〔SD〕実測図(3)	82
第 41 図	溝跡〔SD〕実測図(4)	83
第 42 図	環濠を持つ掘立柱建物跡群実測図	85
第 43 図	中世屋敷跡(鎌倉時代)実測図	87
第 44 図	池状遺構〔SX〕実測図	91
第 45 図	近世杭列跡実測図	93
第 46 図	土橋遺跡出土土器実測図(1)	97
第 47 図	土橋遺跡出土土器実測図(2)	98
第 48 図	土橋遺跡出土土器実測図(3)	99
第 49 図	土橋遺跡出土土器実測図(4)	100
第 50 図	土橋遺跡出土土器実測図(5)	101
第 51 図	土橋遺跡出土土器実測図(6)	102
第 52 図	土橋遺跡出土土器実測図(7)	103
第 53 図	土橋遺跡出土土器実測図(8)	104
第 54 図	土橋遺跡出土土器実測図(9)	105
第 55 図	土橋遺跡出土土器実測図(10)	106
第 56 図	土橋遺跡出土土器実測図(11)	107
第 57 図	土橋遺跡出土土器実測図(12)	108
第 58 図	土橋遺跡出土土器実測図(13)	109
第 59 図	土橋遺跡出土土器実測図(14)	110
第 60 図	土橋遺跡出土土器実測図(15)	111
第 61 図	土橋遺跡出土土器実測図(16)	112
第 62 図	土橋遺跡出土土器実測図(17)	113
第 63 図	土橋遺跡出土土器実測図(18)	114
第 64 図	土橋遺跡出土土器実測図(19)	115
第 65 図	土橋遺跡出土土器実測図(20)	116
第 66 図	土橋遺跡出土土器実測図(21)	117
第 67 図	土橋遺跡出土土器実測図(22)	118
第 68 図	土橋遺跡出土土器実測図(23)	119
第 69 図	土橋遺跡出土土器実測図(24)	120
第 70 図	土橋遺跡出土土器実測図(25)	121
第 71 図	土橋遺跡出土土器実測図(26)	122
第 72 図	土橋遺跡出土土器実測図(27)	123
第 73 図	土橋遺跡出土土器実測図(28)	124
第 74 図	土橋遺跡出土土器実測図(29)	125
第 75 図	土橋遺跡出土土器実測図(30)	126
第 76 図	土橋遺跡出土土器実測図(31)	127
第 77 図	土橋遺跡出土土器実測図(32)	128

第 78 図	土橋遺跡出土土器実測図 (33)	129
第 79 図	土橋遺跡出土土器実測図 (34)	130
第 80 図	土橋遺跡出土土器実測図 (35)	131
第 81 図	土橋遺跡出土土器実測図 (36)	132
第 82 図	土橋遺跡出土土器実測図 (37)	133
第 83 図	土橋遺跡出土土器実測図 (38)	134
第 84 図	土橋遺跡出土土器実測図 (39)	135
第 85 図	土橋遺跡出土土器実測図 (40)	136
第 86 図	土橋遺跡出土土器実測図 (41)	137
第 87 図	土橋遺跡出土土器実測図 (42)	138
第 88 図	土橋遺跡出土土器実測図 (43)	139
第 89 図	土橋遺跡出土土器実測図 (44)	140
第 90 図	土橋遺跡出土土器実測図 (45)	141
第 91 図	土橋遺跡出土土器実測図 (46)	142
第 92 図	土橋遺跡出土土器実測図 (47)	143
第 93 図	土橋遺跡出土土器実測図 (48)	144
第 94 図	土橋遺跡出土土器実測図 (49)	145
第 95 図	墨書土器出土地点分布図	170
第 96 図	土橋遺跡出土墨書土器実測図 (1)	172
第 97 図	土橋遺跡出土墨書土器実測図 (2)	173
第 98 図	土橋遺跡出土墨書土器実測図 (3)	174
第 99 図	土橋遺跡出土墨書土器実測図 (4)	175
第 100 図	土橋遺跡出土遺物実測図 (1)	178
第 101 図	土橋遺跡出土遺物実測図 (2)	179
第 102 図	土橋遺跡出土木製品実測図 (1)	181
第 103 図	土橋遺跡出土木製品実測図 (2)	182
第 104 図	土橋遺跡出土木製品実測図 (3)	183
第 105 図	土橋遺跡出土木製品実測図 (4)	184
第 106 図	土橋遺跡出土木製品実測図 (5)	185
第 107 図	土橋遺跡出土木製品実測図 (6)	186
第 108 図	土橋遺跡出土木製品実測図 (7)	187
第 109 図	土橋遺跡出土木製品実測図 (8)	188
第 110 図	土橋遺跡出土民俗事例関連遺物実測図 (1)	193
第 111 図	土橋遺跡出土民俗事例関連遺物実測図 (2)	195
第 112 図	(金子) 池状遺構〔SX〕出土犬遺体実測図	202

図 版 目 次

- 図版 1 土橋遺跡周辺航空写真
- 図版 2 A. 土橋遺跡遠景（磐田原台地より）
B. 土橋遺跡遠景（木原・旧東海道より）
- 図版 3 A. 土橋遺跡近景（東より）
B. 土橋遺跡近景（蟹田川より）
- 図版 4 A. 第 1 区検出溝跡（西より）
B. 第 1 区検出溝跡（東より）
- 図版 5 A. 第 2 区遺構全景（東より）
B. 第 2 区遺構全景（西より）
- 図版 6 A. 第 3 区遺構全景（西より）
B. 第 3 区遺構全景（東より）
- 図版 7 A. 第 4 区遺構全景（東より）
B. 第 4 区遺構全景（西側）
- 図版 8 A. 第 5 区遺構全景（東より）
B. 第 5 区遺構全景（西より）
- 図版 9 A. 第 6 区遺構全景（北より）
B. 第 6 区遺構全景（西より）
- 図版 10 A. 第 7 区遺構全景（西側部分）
B. 第 7 区遺構全景（東より）
- 図版 11 A. 第 8 区遺構全景（西側部分）
B. 第 8 区遺構全景（東より）
- 図版 12 A. 第 9 区遺構全景（東より）
B. 第 10 区遺構全景（東より）
- 図版 13 A. 第 12 区遺構全景（東より）
B. 第 12 区遺構全景（西より）
- 図版 14 A. S K 3 全景（南より）
B. S K 3 土層堆積状況
- 図版 15 A. S K 13 全景（北より）
B. S K 13 着柄式二又鍬出土状態
- 図版 16 A. S K 14 全景（南より）
B. S K 15 全景（南より）
- 図版 17 A. S K 33 遺物出土状態
B. S K 33 全景（南より）
- 図版 18 A. S K 34・S K 35 全景（西より）
B. S K 34 遺物出土状態
- 図版 19 A. S K 36 全景（南より）
B. S K 36 出土ヨコヅチ

- 図版20 A. S K44全景（西より）
B. S K38全景（南より）
- 図版21 A. Pit413遺物出土状態
B. S K47全景（西より）
- 図版22 A. S K59全景（東より）
B. Pit477全景（北より）
- 図版23 A. S K73全景（南より）
B. S K73全景（西より）
- 図版24 A. S K74全景（北より）
B. S K75全景（東より）
- 図版25 A. S K76上面出土遺物
B. S K76下面出土遺物
- 図版26 A. S K77全景（東より）
B. S K77全景（南より）
- 図版27 A. S K78全景（南より）
B. S K79全景（南より）
- 図版28 A. S D102と中央のS K80
B. S K80全景（弥生後期犬遺体）
- 図版29 A. S X 4 全景
B. S K41全景
- 図版30 A. S B 1 全景（南より）
B. 柱穴内に残る根固めの木片
- 図版31 A. S D29・S D21・S D 3・S D 2・全景
B. S B 2 全景
- 図版32 A. S B 4 全景
B. S B 3 全景
- 図版33 A. S B 5 全景（北より）
B. S X 2 全景（西より）
- 図版34 A. S B 6 柱穴礎板
B. S B 6 柱穴礎板
- 図版35 A. S B 7 全景（南より）
B. S B 7 柱穴（Pit356）
- 図版36 A. S D 4 全景（南より）
B. S D 7 全景（南より）
- 図版37 A. S D36全景（南より）
B. S D37全景（南より）
- 図版38 A. S D39全景
B. S D45遺物出土状態
- 図版39 A. S D89全景（東より）
B. S D89全景（南より）

- 図版40 A. S D94全景（北より）
B. S D93全景（北より）
- 図版41 A. S D114・118全景（北より）
B. S D114・118全景（南より）
- 図版42 A. S D115遺物出土状態
B. S D115遺物出土状態
- 図版43 A. S D120全景（北より）
B. S D120遺物出土状態
- 図版44 A. S D130遺物出土状態
B. S D130遺物出土状態
- 図版45 A. S I 1・2・3・4とS D32・34
B. S I 4 全景
- 図版46 A. S I 3 出土の着柄式鍬の柄出土
B. S I 2 遺物出土状態
- 図版47 A. 環濠を持つ掘立柱建物群
B. Pit449全景
- 図版48 A. Pit493（北より）
B. Pit492（北より）
- 図版49 A. Pit465
B. Pit463
- 図版50 A. Pit470
B. Pit487
- 図版51 A. 中世屋敷跡（東より）
B. 中世屋敷跡（西より）
- 図版52 A. S X 1 全景（北より）
B. 杭列としがらみ
- 図版53 A. S X 1 出土イヌ遺骸
B. S X 1 出土木製品
- 図版54 A. S D128全景（北より）
B. S D128杭列（小ポールは卒塔婆出土地点）
- 図版55 A. S D125と派生するS D115
B. S D128杭列と卒塔婆出土地点（小ポール）
- 図版56 出土土器（1）—S K 1・S K 3—
- 図版57 出土土器（2）—S K 3・S K 9・S K13—
- 図版58 出土土器（3）—S K14・S K36・S K47—
- 図版59 出土土器（4）—S K76—
- 図版60 出土土器（5）—S K76—
- 図版61 出土土器（6）—S K77—
- 図版62 出土土器（7）—S K77—
- 図版63 出土土器（8）—S K77—

- 図版64 出土土器 (9) — S I 1 ・ S I 2 ・ S I 3 ・ S I 4 —
 図版65 出土土器 (10) — S D 8 ・ S D 10 ・ S D 34 —
 図版66 出土土器 (11) — S D 34 ・ S D 45 ・ S D 102 ・ S D 109 —
 図版67 出土土器 (12) — S D 109 ・ S D 115 —
 図版68 出土土器 (13) — S D 115 ・ S D 118 ・ S D 2 ・ S D 120 —
 図版69 出土土器 (14) — S D 2 ・ S D 120 ・ S D 130 ・ S D 127 ・ S D 136 —
 図版70 出土土器 (15) — S D 85 ・ S D 99 ・ S K 78 ・ S K 79 —
 図版71 墨書土器 (1)
 図版72 墨書土器 (2)
 図版73 墨書土器 (3)
 図版74 墨書土器 (4)
 図版75 木製品 (1) 丸木弓
 図版76 木製品 (2) A. 着柄式二又鍬 B. 木製農具の柄 C. 先端加工木製品
 D. スコップ状木製品
 図版77 木製品 (3) A. ヨコヅチ B. ヘラ状木製品
 図版78 木製品 (4) A. 木製農具 B. 曲物
 図版79 木製品 (5) A. ゲタ (表) B. ゲタ (裏)
 図版80 木製品 (6) A. 日常生活木製品 B. その他の木製品
 図版81 卒塔婆 (1)
 図版82 卒塔婆 (2)
 図版83 卒塔婆 (3)
 図版84 (金子) 弥生期土壌内のイヌ
 図版85 (金子) 近世 イヌ 頭蓋骨
 図版86 (金子) 近世 イヌ
 図版87 (金子) 近世 イヌ
 図版88 (金子) 近世 イヌ

表 目 次

第1表	土橋遺跡検出土壌一覧表	48
第2表	土橋遺跡検出 Pit 一覧表	52
第3表	土橋遺跡出土土器計測表	146
第4表	土橋遺跡出土墨書土器一覧表	176
第5表	土橋遺跡出土銭貨一覧表	178
第6表	土橋遺跡出土金属製品一覧表	179
第7表	土橋遺跡出土木製品実測図対照表	189
第8表	土橋遺跡出土卒塔婆积文一覧表	196
第9表	土橋弥生犬計測表	197
第10表	土橋近世犬計測表	200

第1章 一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)の発掘調査について

第1節 調査に至る経過

東名高速道路は昭和44年5月、全線開通し袋井インターチェンジが設置された。それまで東海道の一小都市にすぎなかった袋井市に、高度経済成長期も手伝って製造業、運輸業などの企業が進出するようになった。運輸手段が鉄道から道路へと変化し、東の掛川バイパス、西の磐田バイパスの開通などによって国道1号をはじめ市内の道路交通量は年々増加の傾向を示し、各所で渋滞現象をおこしている。

一般国道1号袋井バイパスの計画が示されたのは、昭和48年のことである。計画はオイルショックの影響もあって遅延していたが、昭和53年に至り、バイパス予定路線の袋井地区について埋蔵文化財の所在の有無の確認がなされた。周知の埋蔵文化財は、坂尻遺跡(石ノ形遺跡)、国本遺跡(鳥居裏遺跡)、土橋遺跡である。

建設省中部地方建設局浜松工事事務所、静岡県教育委員会文化課、袋井市教育委員会社会教育課の三者協議により、発掘調査を昭和55年度から実施することになった。坂尻遺跡の第1次調査である。原野谷川に架かる同心橋を激甚災害対策として架け換えを急いだからでもある。調査が進行するにつれて、和同開珎、銅印、銚帯金具、分銅など金属製品、木簡、斎串など木製品、多数の墨書土器、大量の須恵器、土師器、掘立柱建物跡群などが検出され、律令時代の官衙跡(佐野郡衙跡)と推定されるに至った。そのため土橋遺跡の対応も遅れがちとなったのである。

土橋遺跡については、昭和56年当初から発掘調査の対応が検討された。しかし、坂尻遺跡の発掘調査に追われ、調査員の不足とも相まって、昭和57年度より調査を推進することが結着した。

調査予定期間は、遺跡の内容にもよるが昭和57、58、59年度の3ケ年とする。

調査対象範囲は、県道浅羽山梨線より西側、蟹田川より東側とする。

調査計画機関は、建設省中部地方建設局浜松工事事務所とする。

調査実施機関は、袋井市教育委員会とし、市職員2名が専従調査員になり、他に臨時調査員、調査補助員、作業員、資料整理員は臨時職員として市で雇用する。

調査指導機関は、静岡県教育委員会とする。

遺跡の概要は、弥生時代後期から奈良・平安時代・中近世にいたる遺構・遺物包蔵地である。

特にこの地域については、袋井インターチェンジ取付道路までの渋滞を緩和するために、磐田バイパスより接続して早急に開通させなければならないからでもある。

建設省中部地方建設局、静岡県教育委員会、袋井市の三者契約は袋井バイパス(袋井地区)であるが、坂尻遺跡とは別途契約である。委託業務の名称は、昭和57年度一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査その2業務である。委託期間は、昭和57年4月6日から昭和57年9月30日である。

4月より準備に取り掛かったが、発掘調査事務所の建設用地の交渉と建設、現地作業所の建設、発掘調査の現地説明会、発掘作業員の募集と雇用契約、発掘調査基本杭の設置委託、排水のために配電盤の設置、用排水路の付け替えと掘削などの仕事が事前に山積したため、実際の調査に入ったのは6月からである。

なお、第1次と第2次の調査は切り離して行い、その3業務となった。契約開始は9月21日からである。

第2節 袋井バイパス建設計画の概要

一般国道1号は、東京と大阪の間を約680kmで結ぶ日本の大動脈である。旧東海道を拡幅した地域もあり、近年の自動車交通の著しい増大と幹線道路への集中により、混雑が激しく、道路は常時飽和状態となっている。このような現状を打開するために、第2東海道とも言うべきバイパスが計画され施工されている。

袋井地域についても、昭和44年5月、東名高速道路の全面開通以来、袋井インターチェンジ周辺、及び一般国道1号を中心とした地域開発の進展に伴い、交通量は急激に増加してきた。また、東の掛川バイパス、西の磐田バイパスが、既に昭和56年3月に開通しており、それ以降とくに混雑が袋井市内に集中することになり、交通渋滞は慢性化している。

このため、国道1号の交通及び都市内交通の緩和、生活環境の改善、計画的な都市開発など、今後の産業経済の発展と都市整備に欠かすことのできない重要な道路として一般国道1号袋井バイパスが計画されたのである。

このバイパスは、掛川市領家の掛川バイパス接続部を起点とて、磐田市岩井の磐田バイパス接続部を終点とする、延長9.14kmの道路として建設される。建設省中部地方建設局の直轄事業である。掛川市領家の掛川バイパス接続部から袋井市国本久津部の広岡村松線との交差点まで4.2kmは、現道を拡幅として6車線化される37工区である。37工区は、第4種1級設計速度60km/h（暫定50km/h）の構造である。それより東名高速道路への取付道路（山梨浅羽線）堀越インターチェンジまでの38工区である。38工区は東通久能線との交差点、久能インターチェンジを挟んで2.28kmである。次に、磐田市岩井の磐田バイパス接続部までの39工区である。39工区は太田西田線との交差点、小山インターチェンジを挟んで2.66kmである。38・39工区は、本線4車線、側道2車線で市街地を迂回し、山梨浅羽線では850mを測る。工区間の久能・堀越・小山インターチェンジで主要道路と連絡し、既設道路とは立体交差している。本線は第3種1級、側道は第4種2級である。設計速度は本線80km/h（暫定60km/h）側道40km/hの構造である。

事業の経緯は次のようである。昭和39年度から昭和47年度にかけて調査が行われ、昭和48年度から事業に着手した。昭和54年度には用地に着手し、昭和56年度から工事に着手している。こうした一連の動きは、第1節で述べた発掘調査までの経緯とよく付合している。

また、袋井バイパス周辺の地形・地質について付言すれば次のようである。南側に小笠丘陵、北側に赤石山地、西側は磐田原丘陵に挟まれている。この中の平地が太田川・原野谷川などの中小河川により基盤が下刻されて谷を生じ、その後の海水面の上昇によって海水が浸入し湾を作り、それが海岸線の後退と共に造成された沖積低地として地形が形成されている。地盤を構成するのは、上位から第4紀沖積層、洪積砂礫層、第3紀層の推積物より成り、沖積層厚は20～30m程度である。

本稿は、建設省中部地方建設局浜松工事事務所発行のパンフレット「一般国道1号袋井バイパス」を参考にした。また袋井バイパスの路線図については、一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書「坂尻遺跡」に掲載されているので参照されたい。

第3節 文化財に対する措置

袋井バイパス予定路線内に所在する埋蔵文化財について、東から列記すると次のようである。

1. 原川遺跡 掛川市領家～掛川市原川

＜概要＞ 弥生時代中期から奈良・平安時代、中近世にいたる遺構・遺物包蔵地。

2. 坂尻遺跡（石ノ形遺跡） 袋井市国本字名栗・北原川

＜概要＞ 奈良時代を中心に、古墳時代から古代・中近世にいたる遺構・遺物包蔵地。

3. 国本遺跡（鳥居裏遺跡） 袋井市国本字上貫名

＜概要＞ 弥生時代から古代・中近世にいたる遺構・遺物包蔵地。

4. 土橋遺跡（堀越地区） 袋井市堀越

＜概要＞ 古墳時代から古代・中近世にいたる遺構・遺物包蔵地。

5. 土橋遺跡（土橋地区） 袋井市土橋

＜概要＞ 弥生時代から古代・中近世にいたる遺構・遺物包蔵地。

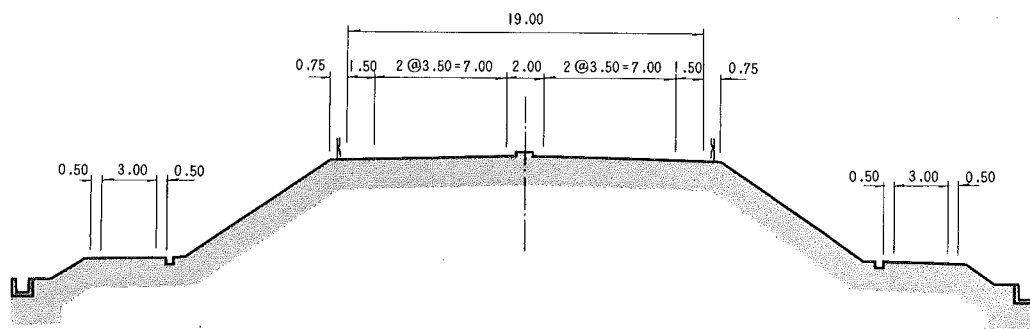
6. 玉越遺跡 磐田市玉越

＜概要＞ 弥生時代後期から奈良・平安時代、中近世にいたる遺構・遺物包蔵地。

こうした埋蔵文化財の取り扱いについて、「建設省がおこなう道路事業の建設工事施行に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて」（昭和46年11月20日、国保第47号）に準拠して、昭和48年度の事業着手以来、分布踏査、確認調査を通じて所在の有無の確認をしている。そして、それぞれの遺跡について文化財保護法に基づき、法第57条の3、98条の2による通知を文化庁長官あてに提出している。

調査は、掛川市を財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所、袋井市を袋井市教育委員会、磐田市を磐田市教育委員会が調査主体となり、静岡県教育委員会の指導により、建設省中部地方建設局の委託業務として行われている。

〔参考資料〕



39 工区横断面図

第4節 調 査 体 制

昭和55年度に始まる袋井バイパスの埋蔵文化財調査は、坂尻遺跡（石ノ形遺跡）である。坂尻遺跡は確認調査において予想はしていたのであるが、昭和56年度の調査で、掘立柱建物遺構、中小の人為的な溝、住居跡などの各種遺構、「佐野厨家」などの墨書土器、「和同開珎」、銚子金具、銅印、分銅など特殊遺物などが検出されて、単なる集落跡というより官衙跡的要素が高まった。

袋井市教育委員会社会教育課文化財係は、坂尻遺跡調査以前は1名で対処していた。昭和55年度に1名増員し、他の開発に伴う調査を行っていた。したがって、坂尻遺跡の発掘調査は、専従調査員1名調査員2名（嘱託）、調査補助員数名、作業員10数名で実施していた。坂尻遺跡が上記のような状況となり、また、昭和57年度から土橋遺跡の発掘調査も進めなければならなくなった。土橋遺跡は、当初30,000㎡～35,000㎡に及ぶ遺跡と考えられていたため、調査員を小中学校教員から2名、新たに1名を増員し、5名で文化財全般について対処することとした。

土橋遺跡は、既に述べたように、昭和57年4月6日から9月30日までの「昭和57年度一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査その2業務」、昭和57年9月21日から昭和60年3月31日までの「昭和57・58・59年度一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査その3業務」として、3年間にわたって調査を進めてきた。

<土橋遺跡の調査体制>

◎調査計画

建設省中部地方建設局 浜松工事事務所

◎調査指導

静岡県教育委員会 文化課

◎調査主体

袋井市教育委員会

教 育 長

鈴木 勲一（昭和57～59年度）

社会教育課

課長兼文化財係長

永田 新作（昭和57～59年度）

指 導 主 事

寺田 義昭（昭和57～59年度）

指 導 主 事

五島 康司（昭和57～59年度）

学 芸 員

吉岡 伸夫（昭和57～59年度）

学 芸 員

永井 義博（昭和57～59年度）

学 芸 員

松井 一明（昭和57～59年度）

土橋遺跡発掘調査事務所

主任調査員

寺田 義昭（昭和57～59年度）

調 査 員

永井 義博（昭和57～59年度）

調 査 員

山本 宏司（昭和57～59年度）

調 査 員

松井 一明（昭和57年度）

第5節 分 布 調 査

昭和48年3月の建設省浜松工事事務所長より静岡県教育委員会教育長あての埋蔵文化財分布調査の依頼に対する、昭和49年6月の回答によれば、袋井市土橋の弥生集落跡として土橋遺跡があげられている。

昭和36年発行の静岡県遺跡地名表（静岡県教育委員会）には、Ⅲ弥生文化遺跡の番号397で登録されている。調査委員は大谷純仁氏である。また、これに基づいて作成された静岡県埋蔵文化財地図（昭和40年）には土橋集落の北側に位置している。これは印刷の誤りであろう。

昭和54年発行の静岡県遺跡地名表（静岡県教育委員会）には、袋井市の76番に登録されている。また、遺跡地図には土橋集落を中心として位置している。調査委員は大谷純仁氏である。袋井市教育委員会に在籍した川井正一氏が補佐している。

こうしたことから、土橋遺跡はすでに学術研究者のみならず広く知られており、地元研究者によってよく踏査された。

さて、土橋遺跡が袋井バイパス予定路線内に所在するため、建設省浜松工事事務所、静岡県教育委員会、袋井市教育委員会の三者が現地踏査をしたのは、昭和56年度のことである。それによれば弥生土器片、古墳時代土師器片及び須恵器片、奈良・平安時代の須恵器片、鎌倉時代の山茶碗・小皿片さらに、中世・近世の陶器片が採集された。その範囲は、東名高速道路の取付道路（山梨浅羽線）より西側、蟹田川より東側の約30,000～35,000㎡とした。こうして、昭和56年度中に調査体制が考えられ、昭和57年度より調査が実施に移されたのである。

発掘調査に先立って準備が行われ、実際に確認調査に入ったのは6月のことである。調査は、既に述べたようにその2業務として行い、主たる目的は遺跡の分布状況の確認である。調査に先立ち、調査用基本杭の設定を業者に委託して、用地の南端と北端に30m間隔で設定する。6月から発掘区の設定を、中心線では15m間隔で4m×4m、北端では30m間隔で4m×4m、南端では4m×8mで行う。後述のように、西方から南北道路を境目としてイからトまでを発掘区とし、東方のト区から調査を開始した。こうして、9月に調査結果を提出した。

(1) 遺物・遺構の検出状況の密な地域は、ハ・ニ区及びロ・ホ区の一部である。また、ヘ・ト区の北半部の一部である。ホ区東半部、ヘ区南半部、ト区南半部の検出状況は粗である。

(2) 東西道路の北側と南側とでは段差があり、過去の耕地整理によって遺物包含層及び遺構の一部が破壊されている。

(3) ま と め

ア) ロ区東端から38m、ハ区、ニ区、ホ区西端から43m付近までを農耕及び耕地整理により一部破壊されながらも、弥生時代及び奈良・平安時代の遺構が残存されている部分と認める。包含層は表土下ほぼ40cm付近である。ヘ・ト北半部もほぼ同様である。

イ) ホ区東端から52m付近より、ヘ区西端から68m付近までと、ヘ・ト区の南半部は一部出土遺物が見られるが遺構はすでに農耕及び耕地整理によって破壊され現存していない部分と認める。

ウ) 以上のことから、発掘対象面積は18,500㎡である。

この結果をもとに、昭和57年9月21日より本調査に入った。

昭和58年7月、蟹田川西側の磐田市玉越地区において遺物が発見され、8月に範囲確認調査、9月に1,200㎡を袋井市教育委員会で調査を行った。その後については磐田市教育委員会が調査を進めている。また、堀越地区についても範囲確認を行い、3,000㎡について本調査を昭和59年度に行った。

第6節 調査の方法

1. 昭和57年度（第1次調査）

調査は発掘調査基本杭をバイパス路線の北端と南端に、それぞれ30m間隔で設定することから開始した。また、センター軸に沿ってグリットを設定した。基本的には4m×4mの正方形のトレンチを15m毎に設定したが、場所によっては長いトレンチの部分もある。

地区名は、長さによって多少の相違はあるが、南北道路を区画としてイ、ロ、ハ、ニ、ホ、ヘ、ト区とした。ただし、イ区は西端（蟹田川沿い）であるため使用していない。トレンチ名は、各地区内で北西より1番とし「ハー1」「ニー3」のように呼称した。

調査はト区東端から行った。4m×4mトレンチ内の耕作土を重機で排除し、水田床上より作業員が排土した。各トレンチとも無遺物上面で遺構確認を行った。

トレンチの位置は、バイパス建設のセンター杭を基準にして設定した30mグリットを使用して図化した。トレンチ内の遺構は、1/20、遺物の集中部分は、1/10で実測した。

標高は、バイパス用地北側の熊野神社境内にある静岡県1級水準点（L=9.532m）をベンチマークとして使用した。

写真撮影は、大型カメラ（トヨビュー 4×5）、中型カメラ（マミヤRB 6×7）、小型カメラ（ニコンF、ニコンFE）の4台を使用した。その際、脚立、ローリングタワーを使用した。

以上の事柄は第1次調査であるが、今後の調査の基準となっているので記しておくことにする。

2. 昭和57年度（第2次調査）

第1次調査で、用地内の調査対象面積は18,500㎡である。発掘調査は、これを受けて行われ、弥生時代後期から近世・近代にいたる遺構・遺物が検出された。

調査区は、バイパス中心線より北側10mで東西に通じる農道を南北の境界、南北に通じる幾本かの農道を境界として、西区13,500㎡を10区、東区5,000㎡を1区、計11区を設定した。（第16図参照）

本年度はそのうち、1区から6区までを終了し、7区の途中までを調査した。

グリットは、30mグリットを使用し、5m×5mのグリットに細分化した。図面、写真等は第1次調査と同じである。

水田耕作部分を重機で排除し、後に作業員による発掘調査を行った。隣地では水田耕作を行っているため、農道や用水を使用したのも、水田のくずれや用水漏れを防ぐことに細心の注意を払った。発掘区の周囲にコンパネを土止め用に張り、その内側に幅50cm、深さ50cmの排水溝を設け、調査区の東西の端に集水枡を設置し、3インチの自動排水ポンプを作動するようにした。また、広い面積であるのでベルトコンベアを多数用意して排土した。

3. 昭和58年度（第2次調査）

本年度は7区の遺構検出、8、10、9区、11区を行った。11区についてはトレンチによる遺構確認を行った。また堀越地区12,000㎡について範囲確認調査を行った。その結果3,000㎡について調査を必要とした。調査方法は57年度と同様である。溝遺構内の湧水が甚しかったため、2インチポンプをたえず作動していた。

4. 昭和59年度（第2次調査）

堀越地区の調査対象面積3,000㎡について、4～6月に行い、終了した。重機の使用、グリットの杭図面等はすべて58年度までと同様に行った。

第2章 遺 跡 の 周 囲

第1節 研 究 史

太田川は周智郡春野町の春埜山を源とし、敷地川、小藪川の水を集め、原野谷川、宇刈川と合流して太平洋にそそぐ中河川である。大井川や天竜川と異なり、流域の後背低地のなかを屈曲蛇行し、流路の両側に数条の自然堤防を形成している。そのため流域には原始・古代以来生活の拠点とした遺跡が数多く分布する。

昭和5年に出版された静岡県史第一巻に、今井村徳光（袋井市徳光）で土器、石斧、砥石が出土していることを、袋井町高尾大門（袋井市高尾）、園田村円田・栗倉・東国（森町）と共に、その所在を明らかにしている。また、敷地川の上流部磐田郡敷地村大字敷地小字中ノ谷（豊岡村敷地）で明治23年12月に銅鐸二口が発見されたこと、磐田郡と周智郡の遺跡として宇刈春岡の横穴群、堀越の古墳群など数多く発見されていることを掲載している。

太田川流域の調査は、大谷純仁氏を中心に昭和30年頃から行われるようになり、各地の小開発で遺跡が発見されている。

静岡県西部で組織的な発掘調査が行われたのは、浜松市の蜷塚遺跡である。この頃から各地で学術調査が進められるようになったのである。

昭和36・37年には新幹線工事に伴う調査が行われた。この分布調査を基礎として静岡県遺跡地名表が作られている。太田川流域の低地は遺跡が分布していないが山麓地帯に古墳等があり調査を行った。地蔵ヶ谷古墳及び横穴、谷坂第1・2・3号墳、大門遺跡である。

次に組織的な調査が行われたのは、昭和41・42年の東名高速道路工事に伴う調査である。とくに、土橋遺跡の北方にあたる袋井インターチェンジは徳光遺跡が所在した。この調査は、後に太田川中流域遺跡群として大集落跡として予想されるようになった最初の発掘調査であった。報告者（大谷純仁氏、平野吾郎氏）はその時期を弥生後期中葉から末葉としている。こうして、北方の鶴松遺跡、南方の土橋遺跡が注目されるようになったのである。

鶴松遺跡は、排水路工事、水道工事、土地改良事業などで多くの遺物が出土して広く知られていた。昭和47年、遠江考古学研究会が中心となって調査され、中期中葉から後期にかけて営まれた遺跡であることがわかった。昭和57年3月には、日本電電公社山科無線通信所建設に伴って、昭和57年6月には、中部電力の地下ケーブル埋設工事に伴って袋井市教育委員会が調査を行った。その結果でも大量の土器が出土し、住居跡が検出されて、遺跡の内容が判明しつつある。

また、鶴田Ⅰ、Ⅱ、川田の遺跡を見おろす宇刈川左岸の丘陵部に川田古墳が所在した。昭和53年、牧草地拡張のため調査が行われた。それによると、出土土器は中期中葉の嶺田式土器に対比され、遺構は方形台状墓であった。最近、同じ頃の方形周溝墓も発掘されている。こうした墳墓の成立期について再検討する必要があるのかもしれない。

近年の開発行為に伴って調査され、あるいは破壊された遺跡や古墳は数多く枚挙に暇がない。発掘調査に追われ、総合的な見地から見直す必要があるのではなかろうか。



第2図 土橋遺跡周辺遺跡地図

(緑=プレ・縄文、オレンジ=弥生、赤=古墳、青=奈良・平安)

第2節 歴史的環境

太田川流域の低地に人々が最初に住みついたのは鶴松遺跡である。これまでの3回の調査によって、竪穴住居跡22、大溝、Pit群、土壇等が発掘されている。住居跡のうち、白岩式3、二之宮式2、菊川式17と見られている。大溝も白岩式から菊川式にいたる各時期に掘削され、大雨によって氾濫を繰り返し、流路を変える太田川に気を使っていたことがわかる。現在の鶴松集落は集村的な性格をもって山麓の高い位置に所在するが、遺跡はその西側のかなりな低湿地に位置している。そうした低地への進出はとりもおさず食糧生産にあった。排水施設・かんがい施設を整備し集落を形成していったことが想像される。

鶴松遺跡を母体として弥生時代中期後半の「ムラ」は、おそらく人口増加とそれに伴う食糧不足という矛盾の解決のために、南へは徳光遺跡、土橋遺跡、北へは鶴田Ⅱ遺跡、鶴田Ⅰ遺跡、川田遺跡へと分村を繰り返していった。こうした遺跡群は低湿地ではあるが、太田川によって形成された微高地上にその範囲を確認できるのである。こうした様相は、鶴松遺跡（弥生時代中期～後期）、徳光遺跡（弥生時代後期）、土橋遺跡（弥生時代後期～古墳時代）、鶴田遺跡（弥生時代後期）のようにとらえられ、人々の生活範囲が拡大していくことを証明している。さらに、向笠遺跡群とされる中村遺跡、笠梅遺跡も、そうした形で分村していったのかもしれない。

このような遺跡群を背景として、一色前田遺跡などが形成されている。発掘された4軒の住居跡はいわゆる高地性集落（弥生時代後期後半）であった。こうした遺跡は近年各地で報告されているが、磐田原台地上の下原遺跡、東原遺跡などもそうした性格をもっているであろう。

春岡1号墓、鶴松古墳の4号墳のような台状墓、あるいは土壇墓や周溝墓などをその頃の墳墓として認めてよいだろう。また、磐田市の新豊院山墳墓群は、弥生時代の土壇3基、古墳時代前期の台状墓1基、古墳時代前期の前方後円墳1基などを検出したD地点をはじめ、弥生時代中期からの造墓地として、土壇、方形周溝墓、台状墓、前方後円墳、円墳などの遺構が発掘調査された。このような磐田原の墳墓群と太田川流域の大規模な弥生時代集落群との関連をも指摘されている。

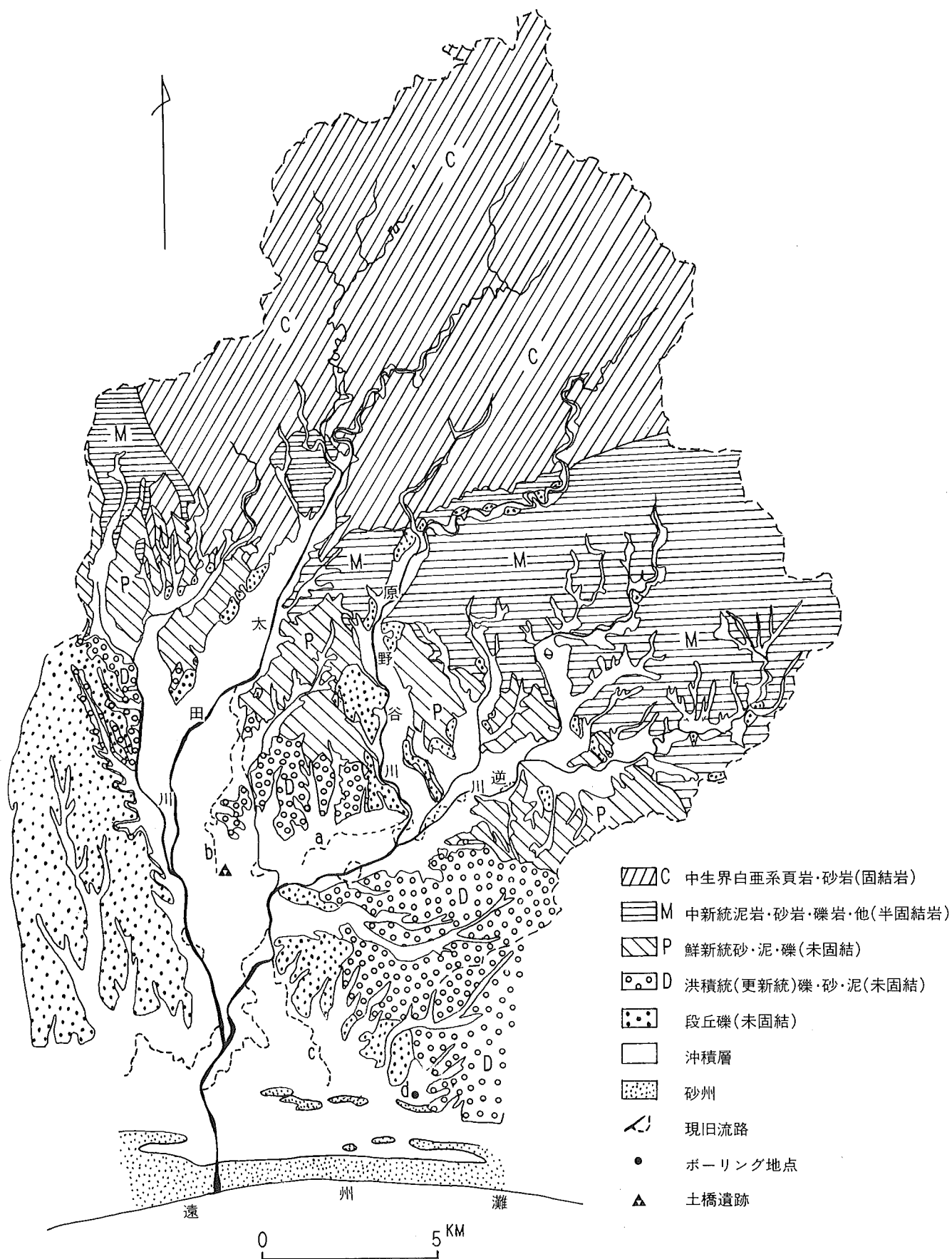
こうして地域的なまとまりから流域全体を統括する時代が、磐田原台地東南端地域に分布する松林山古墳を代表とする古墳群を形成していくのであろう。太田川流域左岸の丘陵地帯にはそれらに価する古墳は今のところ見つかっていない。

奈良・平安時代の遺跡は調査例が少ない。土地改良事業で発見された袋井市山梨の稲荷領家遺跡は墨書土器、朱書土器、刀子、瓦などが採集されている。山名郡衙の可能性も含めて何らかの官衙跡としてよいだろう。一方、国1バイパスによって調査されている坂尻遺跡は、墨書土器200点余、和同開珎、鈐帯金具、銅印、分銅の出土、掘立柱建物、大溝などの遺構群の検出によって郡衙、駅家など官衙跡とされており、佐野郡衙の可能性が高い。

この時期、遠江国府、遠江国分寺は磐田に置かれている。御殿・二之宮遺跡は磐田原台地の南端に位置し、Ⅱ期の遺構・遺物は、雑舎・倉庫と考えられる掘立柱建物跡、周囲の郷名・駅家に関連する木簡、朱書・墨書土器が検出されて、遠江国府の一部ではないかとも推測されている。

土橋遺跡で検出された掘立柱建物跡や墨書土器もそうした官衙との関係が何らかの形で指摘できそうである。

中世・近世にいたって土橋の集落もまた集村化していくが、遺跡・遺物で語るべきことは非常に希薄となる。いずれにせよ、土橋の地名が示すように東西交通、南北交通の通過地点とはなったが、静かな田園の集落となっていくのである。



第3図 太田川、原野谷川流域の地形・地質図
(a、b、c 流路微地形(自然堤防他)の不明瞭な旧流路)

第3節 土橋遺跡をめぐる地形・地質学的背景

静岡大学教授 加藤 芳 朗

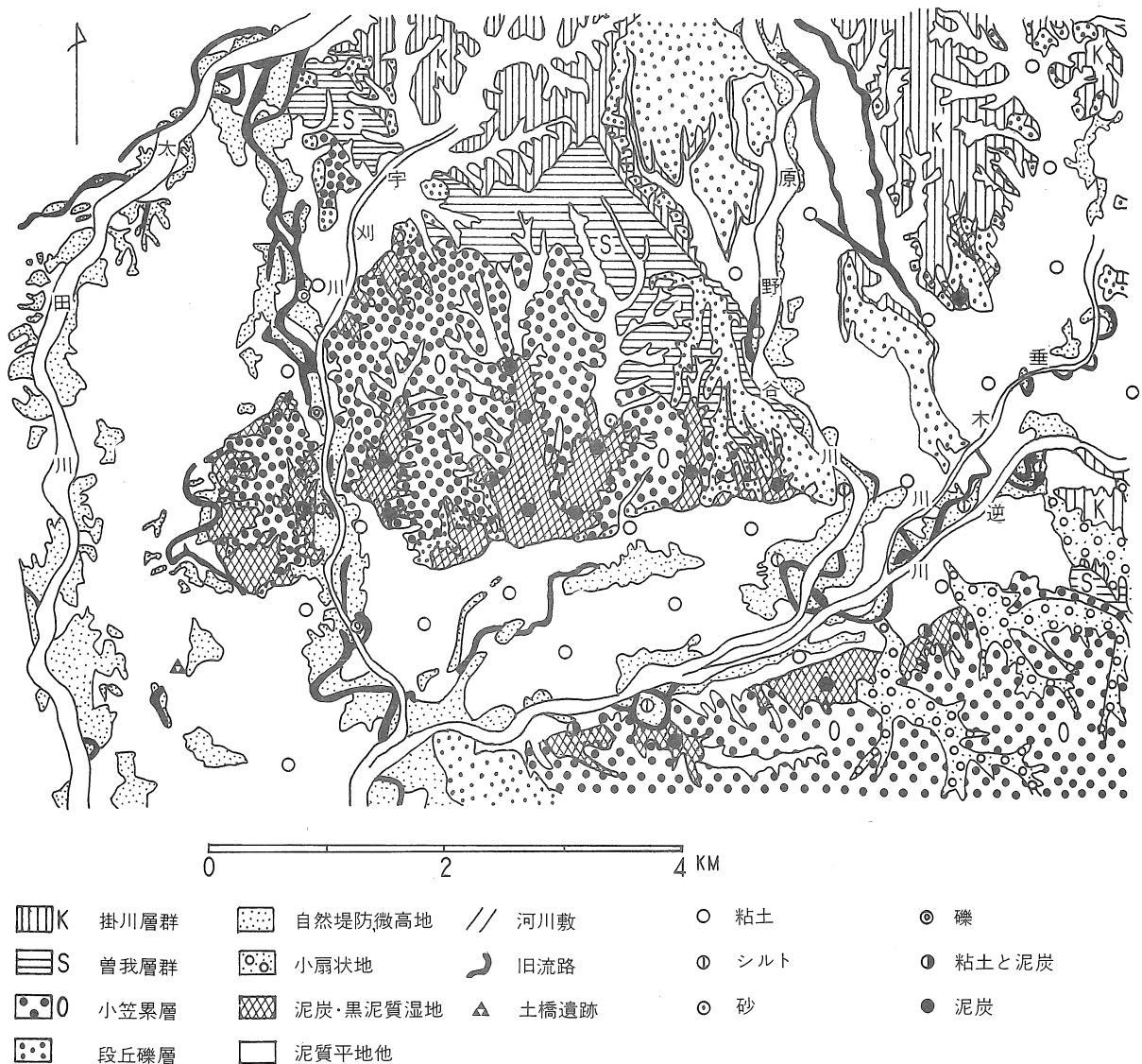
1. ま え が き

本遺跡は太田川左岸の後背低地の中央にあり、弥生後期以降各時代にわたって営まれた。その自然立地条件をさぐるべく調査を行った結果、山梨―田中―鶴松―徳光―西別所―土橋と続く、太田川からの旧派出流路を中心として立地したことがわかった。これらに重点を置いて報告することとする。

2. 太田川流域の地形・地質概況(図3)

太田川は森町市街の上流で、大日山、春埜山を、それぞれ源流とする三倉川、吉川が合流したものである。当市街以南は平野を展開しつつ南下し、途中敷地川、原野谷川を合わせて遠州灘に注ぐ。

森町市街から上流の大部分は中生代白亜紀の四万十層群(三倉層)の砂岩、頁岩からなる山地である。それより下流では新第三紀中新世の倉真層群(礫岩、砂岩、泥岩)、鮮新世の掛川層群(礫、砂



第4図 土橋遺跡周辺の地形・地質図
(門村1965、加藤、広川1965、その他から作成)

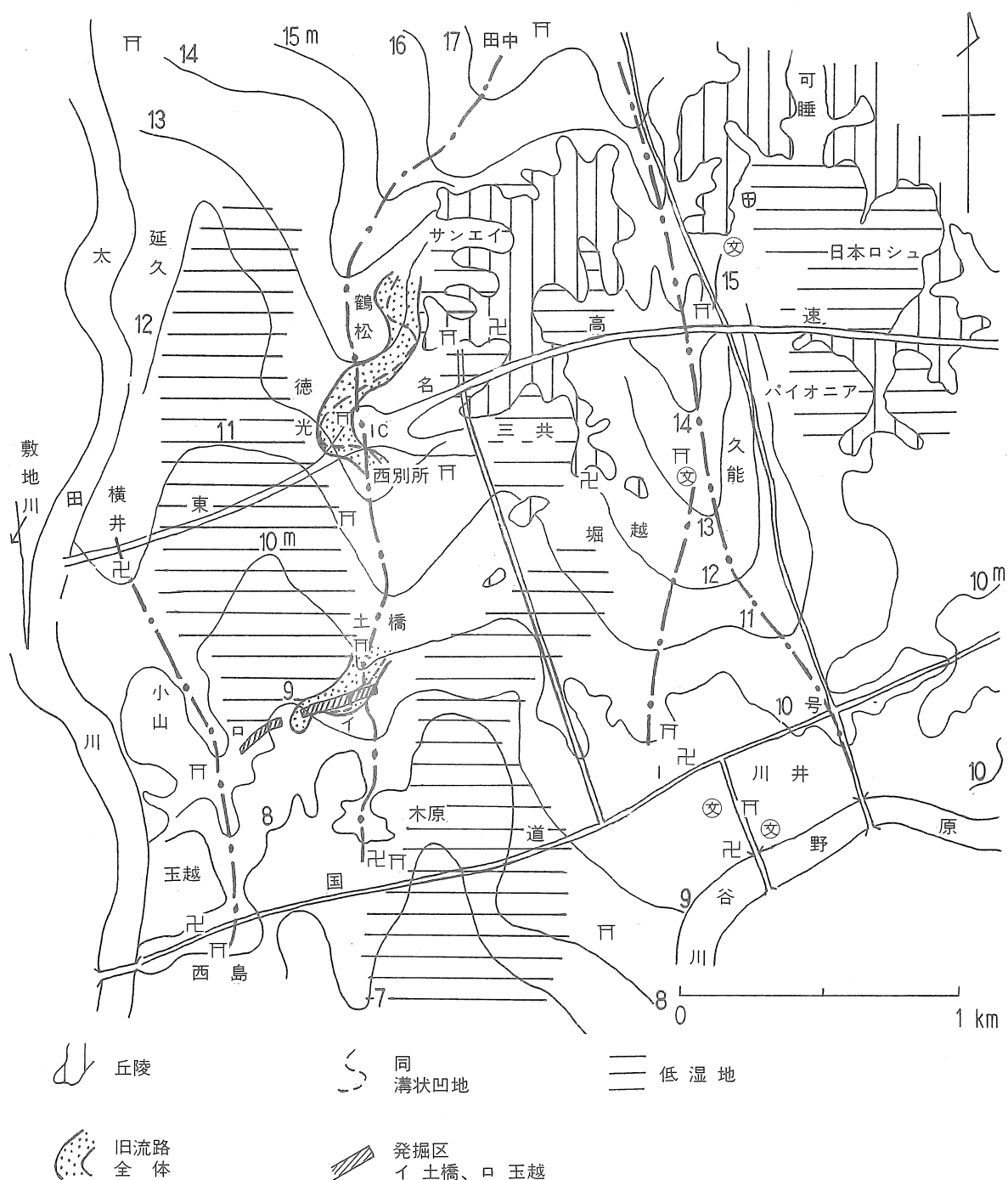
泥)、更新世の小笠累層(礫、泥)などからなる丘陵間を広く平野をなして流下する。敷地川もほぼ同様の丘陵・山地間を流れるが規模は小さい。敷地川下流部以南の西側には磐田原台地がある。このあたりから下流部の平野は一段と広がり、流れが蛇行し両側に自然堤防、その背後には背後湿地が発達する。太田川は平野の中にいくつもの分流あとを示す。最も顕著なのは山梨から南下し、平宇、久能をへて川井に達し、原野谷川と合流する流れである。その途中から派出した旧流路が土橋まで到達している(図3、b、後述)。その他、森町中川、袋井市沖山梨(図3には図示してない。加藤他、1965)、磐田市新出一東新屋一西之島にかけて(図3)それぞれ認められる。

3. 遺跡周辺の地形・地質

(1) 太田川平地 本遺跡は太田川本流と上述の山梨一川井の旧流路との中間の平野の中に存在する(図4)。遺跡の南と北には、それぞれ木原、土橋集落ののる微高地がある。図5は袋井市図2(1万分の1)をベースに、袋井市平面図(土橋、2,500分の1)の等高線も参照にしながら、1mごとの等高線を引いたものである。これによると、上述の土橋、木原の微高地は、それ以北の、ほぼ南北に走る微高地帯(田中、鶴松、徳光、西別所)の延長部に相当し、発掘区の大部分がその上にのっていることがわかる。しかし、その高まりはあまり顕著でなく、現地ではほとんど識別不能である。ただし集落は水田面より高いこと、水田中に小面積の畑地が点在し、いわゆる島畑景観をなすことがおよそ目安となりそうである。この畑地は、耕地整理のとき、高所を削って生じた余り土を盛り上げたものとされている(永井、1982、P.10)。この微高地帯で礫が浅くから出ることについては、昭和39年度の調査で山梨から鶴松まで確認されていたが(加藤他、1965)、昭和41年暮の徳光遺跡調査時およびその後筆者が行った表層地質調査で、図6のごとく、蛇行する溝状の旧流路(泥炭質堆積物で充てんされる)とその両側の自然堤防(礫が浅く出現する)とを見事にとらえることができた。この事実から同微高地帯が旧河川跡であることが明瞭になった。山梨一川井の旧流路では現地で自然堤防地形を判別できるのに対して、この微高地帯では詳細なボーリングステッキ調査(1.5mの深さまで)によってはじめてそれがわかる点が特記されることである。徳光付近の旧流路と土橋付近の、今回の調査で明らかになった旧流路とを、図5に記入した。西別所と土橋との間が未調査であるが、両部落間の微高地にそって同様な旧流路が存在することはほとんど確実であろう。この旧流路と西方、太田川左岸の横井から派出し小山、玉越、西島に至る微高地とに抱かれた部分が蟹田川の低地である(図5の横線部)。たまたま、調査時点(昭和59年11~12月)に、土橋、小山間で行われた河川改修工事、農業用水路拡幅工事現場では数m以上の青~青黒色で泥炭まじりの粘土層を確認することができた。また、土橋の微高地帯の東方の低湿地についても、堀越下付近の国1バイパス予定線の工事現場で同様の粘土の存在を観察した。なお、東名袋井IC東方の丘陵の山すその谷あいには鶴松一西別所の微高地帯によって出口を塞がれて泥炭地化している(図4)。

(2) 遺跡周辺の地下地質 図7は建設省が行った袋井バイパスぞいの地質ボーリング資料にもとづいて作成されたものである。これによると、土橋付近では、全体に粘土層が卓越する中で、地表近くの2m以浅に礫層または砂層が検出されている。それらは2層準あり、それぞれ1~1.5m(上位)、1~5m(下位)の厚さである。これは上述の旧流路下の礫質堆積物に対応するとみられる。同様なケースは蟹田川西岸、宇刈川付近でも認められる。前者は太田川左岸の、後者は山梨一川井の、それぞれ微高地帯の礫層に当るものと思われる。

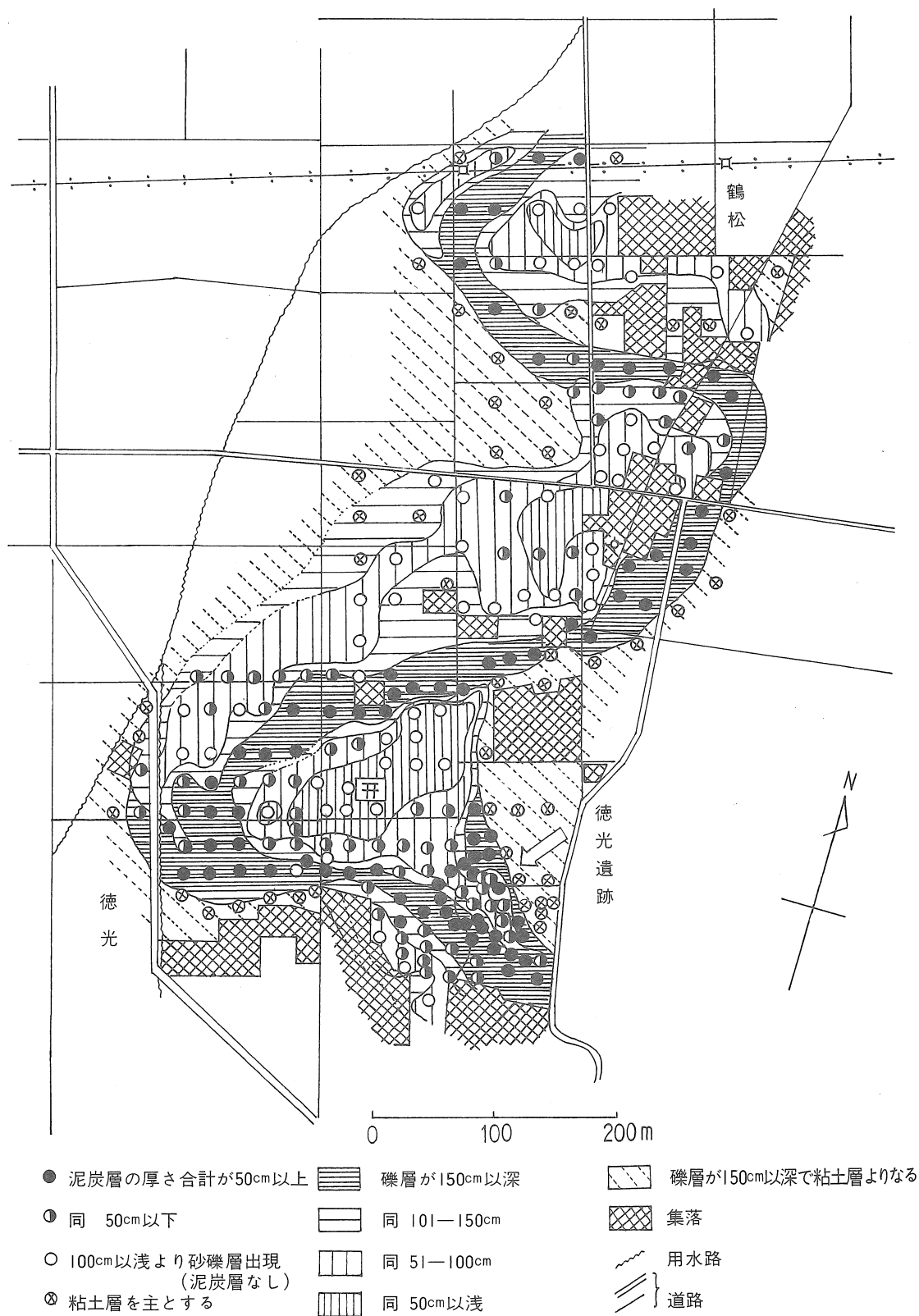
図7によると、沖積層(A)は薄く10~20mでそれ以下は洪積層(D)、または第三紀層(T)となっている。沖積層とその他との判別は主にN値に従っているようである。一方、「袋井市史」で大庭(1983、P.10、図5)が各種資料をまとめて作った沖積層の厚さの分布図では、土橋付近で、海



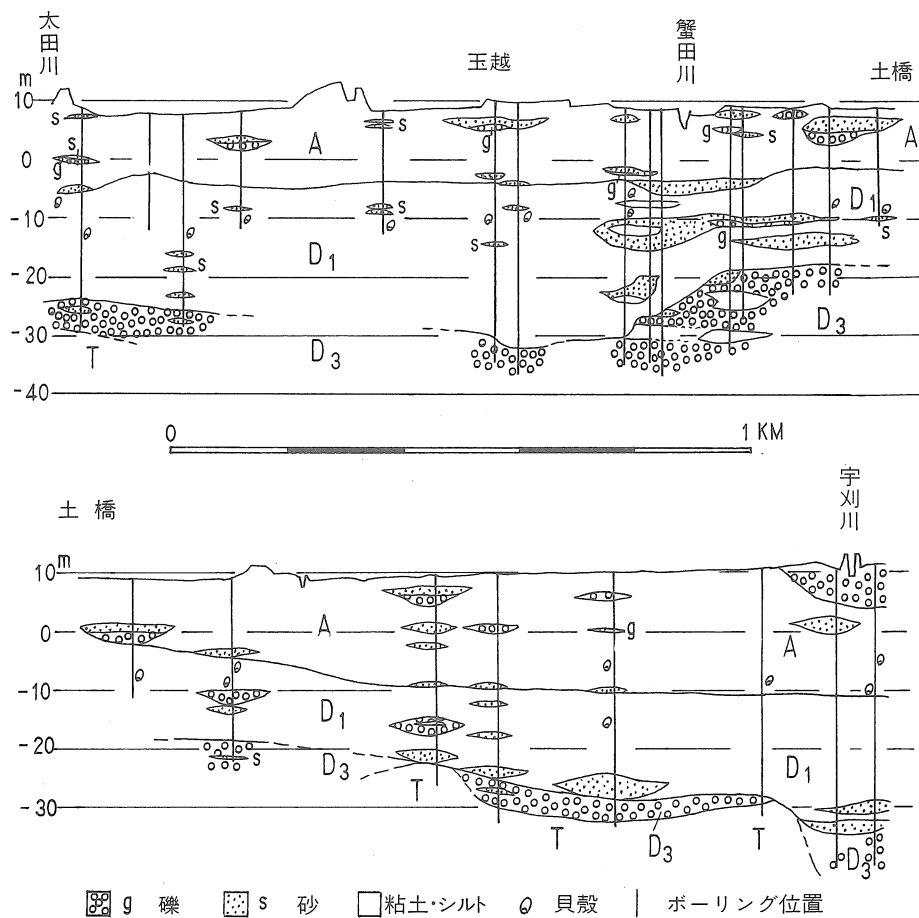
第5図 土橋遺跡周辺の微高地帯と低地湿地

(鎖線は微高地帯の軸、原図は袋井市図2、1万分の1、数字は等高線の高度)

抜一30m、小山で同一40m、宇刈川で同一40mまでが沖積層とされている。本稿の図7のD₁が下部沖積層の意味で命名されているとすれば、AとD₁を合わせたものが大庭の沖積層と大体合致するようになる。筆者にはどちらが正しいかの判断材料がないが、坂尻遺跡の調査報告(加藤、1985)にならって、一応、大庭の解釈に従っておきたい。図7のD₃は磐田原台地の下部や可睡、山科の丘陵の小笠累層(図3)に匹敵するであろう。なお、Tは同累層中の泥層になりそうである。



第6図 徳光遺跡付近の微高地と表層地質



第7図 袋井バイパス予定路線沿いの地下地質断面図

(基礎地盤コンサルタンツ、1983より簡略化)

A沖積層、D洪積層 (D₁太田川層、D₃小笠原層)、T第三紀層

(3) 遺跡周囲の表層地質調査

(a)ボーリングステッキによる細密調査 遺跡発掘区西半における礫層の露出(永井、1983)や前記徳光付近の微高地帯における礫層の産出状態(図6)を考慮して、礫層が浅所から出る範囲を抑えるため、1.5mのボーリングステッキによる調査を行った。発掘区の隣接地区を対象に、1辺25mの方眼を図上に描き、各方眼の中心点を調査点とした。図5の徳光、土橋の旧流路は、それぞれ、150cm、140cmより浅く礫のでる範囲を描いたものである。浅礫帯は土橋部落から南西に走る。これは蟹田川左岸の8mの等高線の南方への張り出しと関係しそうである(図5)。木原へ向う微高地の軸ぞいの浅礫帯については今回の調査で明らかにすることができなかった(後述)。

(b)ユンボによる試掘調査 予定路線内をユンボにより深さ2~2.5mに掘りこみ壁面の土層を観察するとともに、ボーリングステッキにより坑底からさらに1.5mの深さまで調べ地表から合計3.5~4mまでの範囲をカバーするようにした。ただし、礫層が出ると湧水が甚だしく、それ以深は調査不能となった。

調査点は図8のごとくである。4つの測線、A-A'、B-B'、C-C'、D-D'を中心とし、その他の点を含めて計43点に達した。このうち、A-A'はバイパス路線のセンター杭のすぐ南側を60m間隔で選んで調査したものである(図9、Nos. 1~11)。その他の測線は礫層が浅く出る可能性の

ある発掘区の2、3、4、7、8区内に設定した(図10・11・12)。

図9によると、測線A—A'の東部のNos. 1～4は全断面が粘土層で層相が安定しているが、No. 5から西は礫、砂、シルトが出現し、かつまた、層相の変化が著しい(隣接断面相互に土層の連続性がない)。この部分は図5の微高地帯(旧流路)に位置している。

図10の測線B—B'では、礫層の出現深度がNos. 12、13で急激に大きくなり、ここに溝状の凹地のあることが暗示される。その充てん物は細砂とシルトの互層で植物片を含むのが特徴である。この互層は溝の中心へ向ってゆるやかに傾いている(図の矢印)。溝の上面ぐらいから上位は各点とも細砂、シルト、粘土からなるが、東方ほど粘土層が多く、上部数10cmは粘土層でおおわれる傾向がある。

図11の測線C—C'でも、Nos. 23～25に溝状凹地があり、その充てん物もシルト、細砂を主とし、植物破片を含む、これら土層の傾きも溝の中心に向うことなど、測線B—B'のそれと似ている。

図12の測線D—D'は上記溝状凹地の西側に相当するもので、地表からすぐに砂または礫層が現われるがその厚さは1m強程度で、下層はシルトとなる。また礫層の上面には中～粗粒砂がのることが多い。これは測線C—C'のNos. 19～22でも同様である。この礫層は中に多数の流木を含むこと、ラミナの傾きが南西方向であること、その西端(No. 30と31の間)で下位のシルト—細砂質土層を削り取るような形をしていること、東端(No. 26)では急速に薄くなり砂層に移化することなどがわかった。測線A—A'ぞいにNos. 8、9の間で行った深さ1mの連続トレンチ掘りでも同様なことが認められた(これは図示しなかった)。

上記の溝状凹地および浅礫部の延長範囲を探るため、aで述べたボーリングステッキ調査の結果もとり入れて、礫層の出現深度分布図を作成した(図13)。

溝状凹地は横線で示したように蛇行しながら北東から南西に向う。図中の2重丸記号は礫層の深度が1m以上の場合で下位の土層が細砂、シルト層をかなり含むことを示すものであるが、溝状凹地とした範囲内にそれがかなり含まれており、前述の測線B—B'、C—C'(図10、11)での同凹地充てん物の特色と合致する。なお横破線の部分は溝状凹地の推定部分である。同図中央や、右の部分で南方へ向う凹地が推定されたが、もしこれが真実であれば、木原へ続く微高地帯に沿うことが期待される。

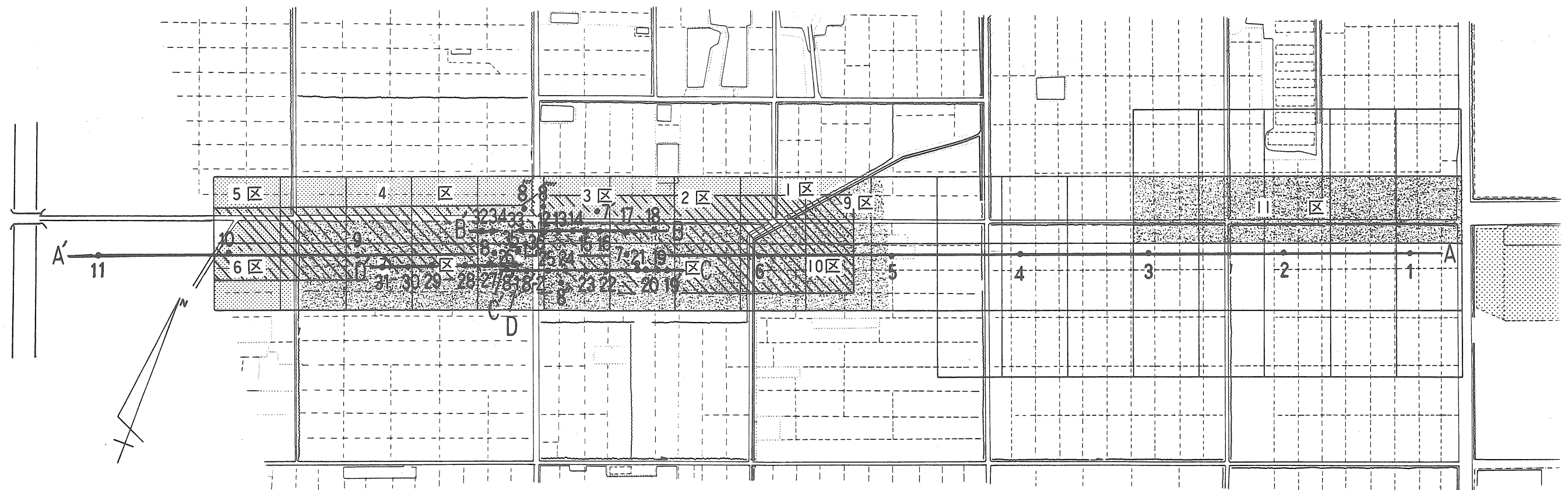
図13の縦線部は礫層が140cmより浅く出現する部分(浅礫部)である。これが溝状凹地に平行し、かつ、両側に認められる。

以上のことから、溝状凹地は旧流路の川筋、浅礫部はその自然堤防と想定することができる。これらの礫は頁岩を主とし砂岩を従とする、小亜角礫であり、太田川河床のそれと類似する。これらの特色は徳光遺跡の場合と同じであり、微高地の続きぐあいから太田川の旧支流が土橋遺跡まで届いていたとみて差支えなからう。

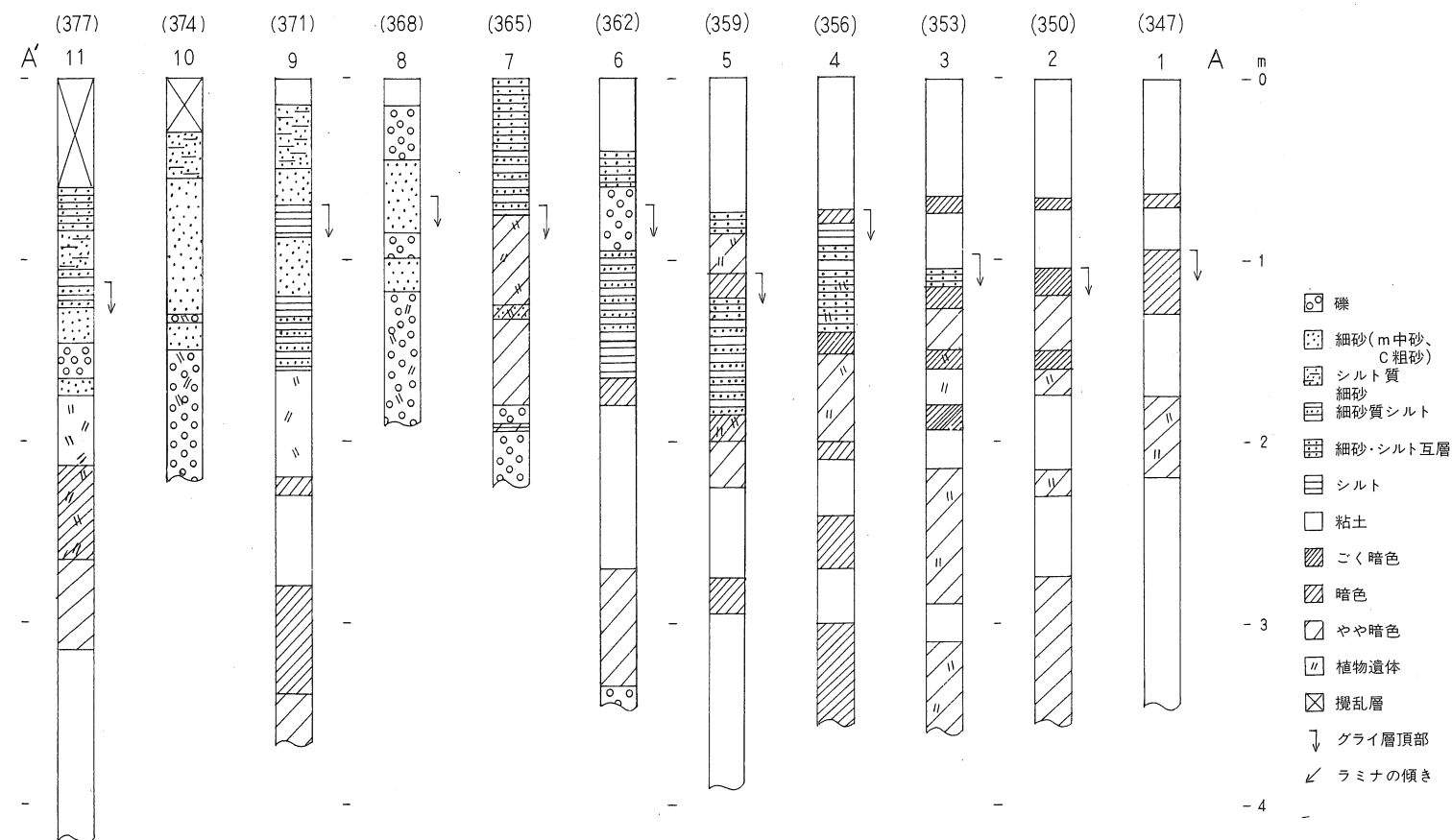
4. 遺跡の立地条件

(1) 立地的特性　すでに明らかなように、本遺跡は山梨から派出した太田川旧支川の流路あとに位置する。この旧支川をつくった微高地帯(図5)上には、北から、川田、鶴田Ⅰ、同Ⅱ、鶴松、徳光など、弥生中期から古墳時代にかけての遺跡群の存在することはすでに指摘されている(永井、1982)。従って、おそくとも、弥生中期までにはこの流路はできあがっていたと考えられる、この完成により、既述のように、その東西両側に低湿地や泥炭地が招来されたのである。

(a) 溝状遺構と旧流路　図14に発掘で検出された溝状遺構と旧流路(溝状凹地と自然堤防)とを記入してある。溝状遺構は弥生後期から江戸時代までにわたっている。その多くが溝状凹地の向きと平行に近い配列を示すのが興味深い。現水田面の勾配は旧流路と同じく南西向きだから、両者が一致する



▲ 第8図 試掘調査地点（原図は永井1982による）



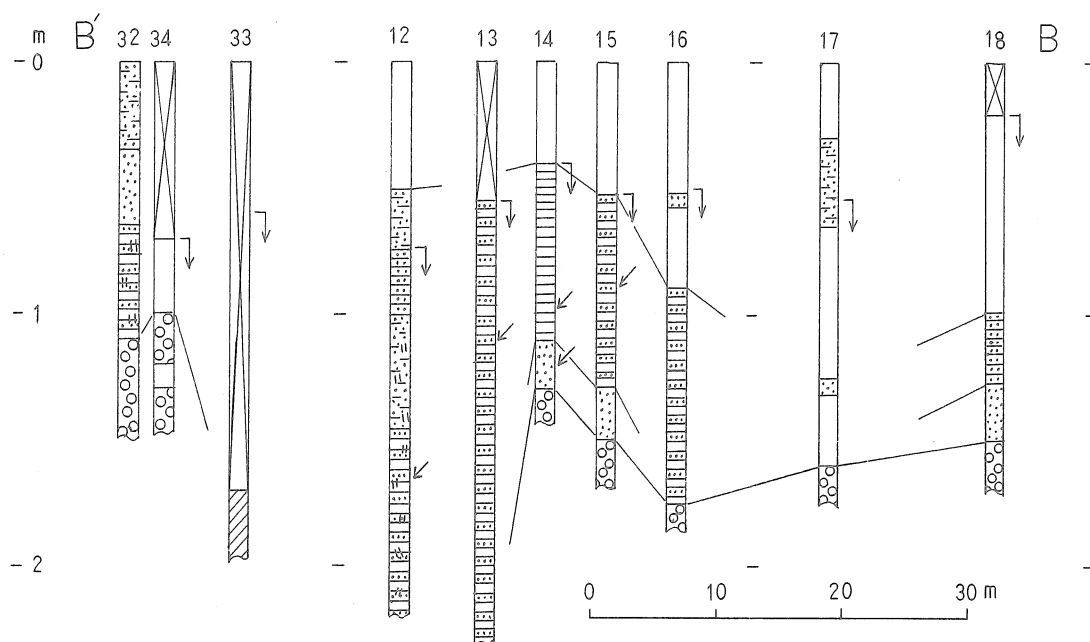
◀ 第9図 試掘調査の土層柱状図（測線A—A'）

カッコ内の数字は予定路線センター杭の番号。

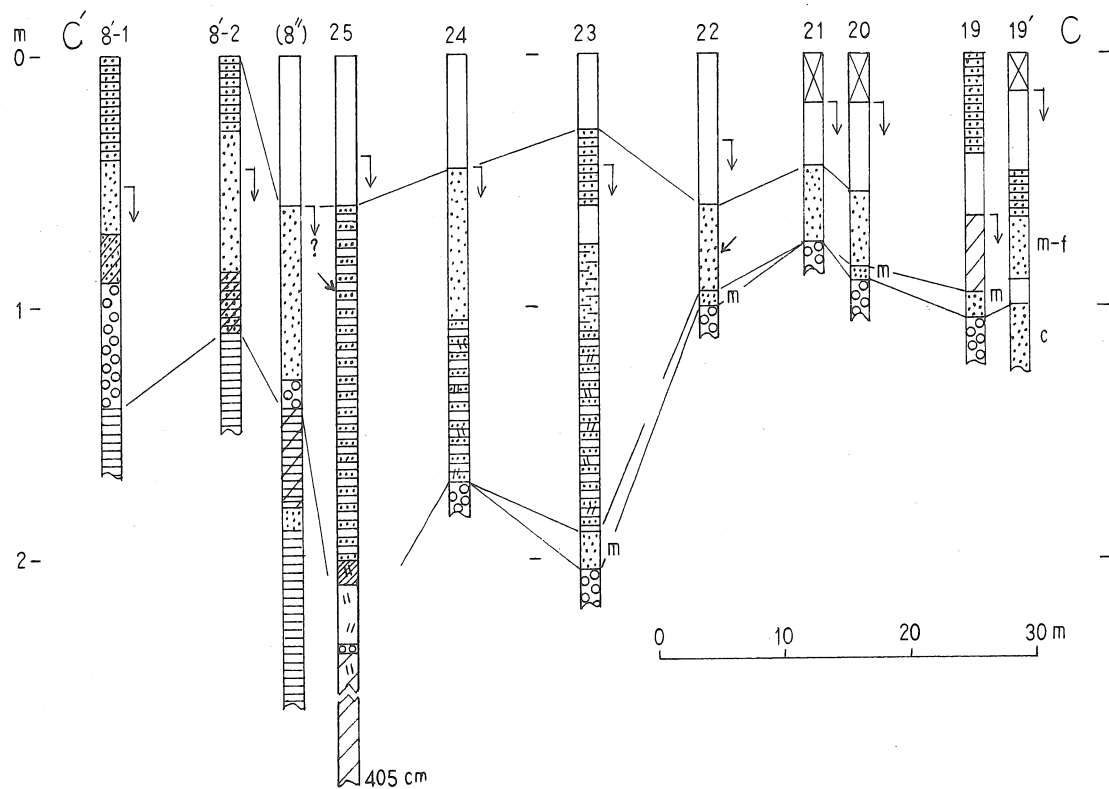
凡例は第10—12図にも共通

のは不思議ではないが、蛇行する溝状凹地に平行するような姿勢を示す遺構もある。何らかの因果関係があるのではなからうか。弥生後期の遺構は溝状凹地の上にもあるので、それが埋没つくされた後に営まれたはずである、両者間の関連をどう解釈したらよいであろうか。また、発掘区東部で推定された南向きの旧流路（図13）に平行するような溝遺構が存在する。これは同流路の傍証に役立つであろう。今後の調査による確認をまちたい。

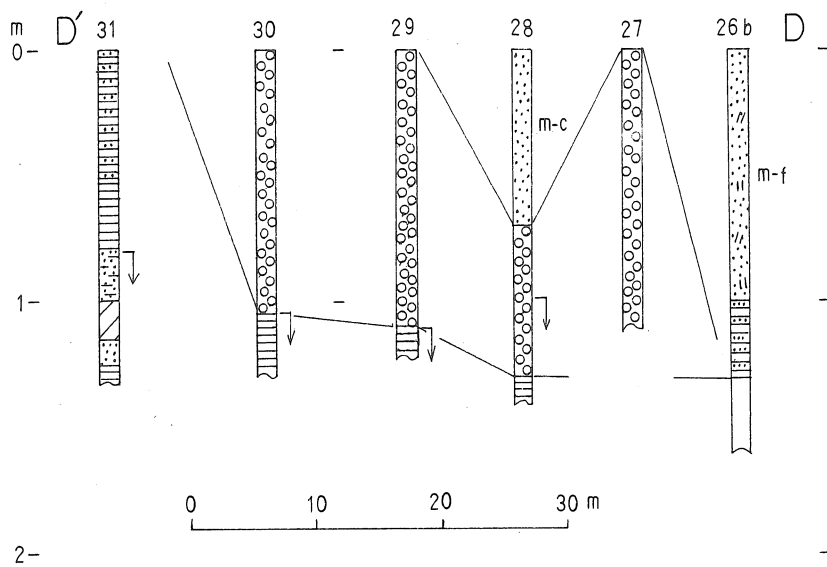
(b)遺跡と地下水位 試掘調査で経験したことであるが、地下の礫層を掘り当てると湧水が甚だしくそのままではたちまちトレンチが水没してしまう。昭和59年の11～12月は例年になく異常湧水だったにもかかわらず、水没の水位は田面下1m以浅であった。このような現象は同じく旧流路上に立地する坂尻遺跡（昭和58年度調査）ではなかった現象である。図15は遺跡周辺のグライ層出現深度の状況を示したものである。グライ層とは、酸素不足の状態（還元状態）にある土層で色が青～緑味をおびる。土層が地下水で飽和するとうなる。水が空気中の酸素の侵入をさまたげるからである。このような理由から、グライ層の頂部を地下水位の目安として使うことができる。地下水位は夏に高まり冬に低下するので、グライ層の頂部は最低水位とほぼ一致するとみてよからう。図によると、グライ層の浅い地点（黒丸と半黒丸印）が旧流路ぞいに分布するのが読みとれる。溝状凹地、浅礫帯の区別はあまりない。旧流路ぞいの方がグライ層が深いという坂尻遺跡（加藤、1985）とは全く逆である。その理由は、おそらく、旧流路下の礫層の厚い部分を伏流する被圧地下水が上位の砂質、シルト質の土層に逆浸透するためであろう。7区の浅礫帯の部分（横破線）のグライ層が80cm以深となっているのは、この礫層の下限が深さ1mぐらいにしか達せず、上記の地下水脈と隔離しているためであろう。また、6区の浅礫帯でグライ層が深いのは蟹田川低地にのぞむため地下水位の低下が起ったのであろう。図中の縦線部はグライ層が60cm以浅に出現する範囲である。図の中央付近のそれは8区の井戸尻と呼ばれる所と一致している。そこは発掘中、湧水になやまされたとのことである（永井、1982、P.10—ここではニ区とされている）。土橋部落の前面にも同様の部分があり、浅所からの湧水が予想される（区番号は第8図参照）。



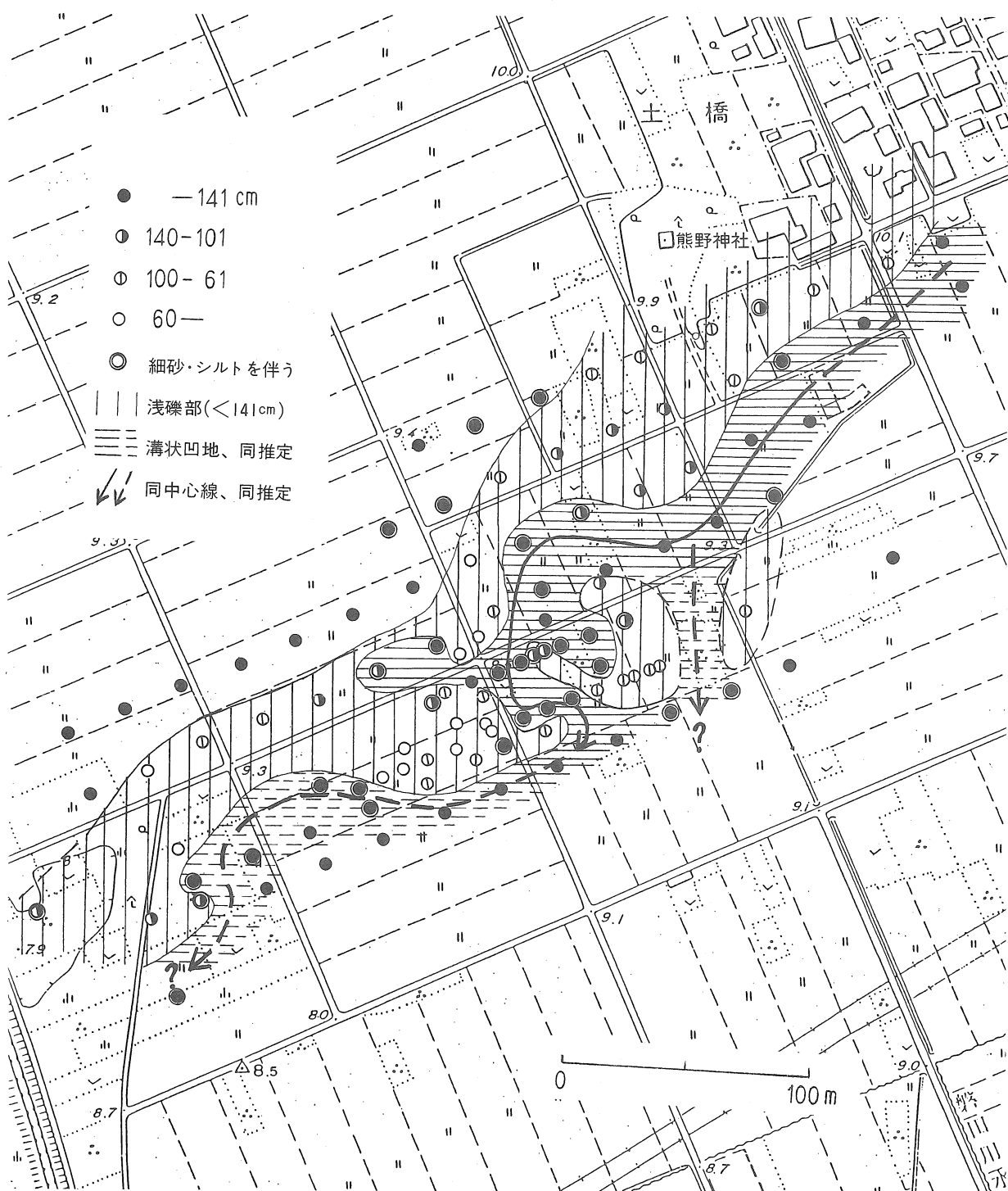
第10図 試掘調査の土層柱状図（測線B—B'）



第11図 試掘調査の土層柱状図（測線C—C'）

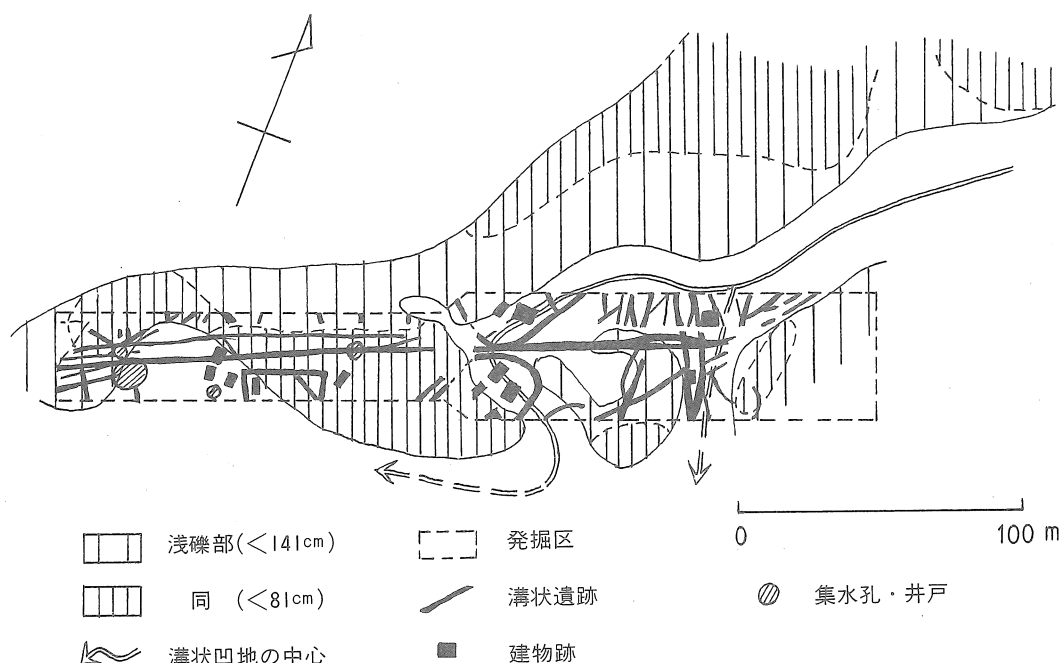


第12図 試掘調査の土層柱状図（測線D—D'）



第13図 遺跡周辺の礫層出現深度分布図

(原図 袋井市平面図(土橋)、2,500分の1)



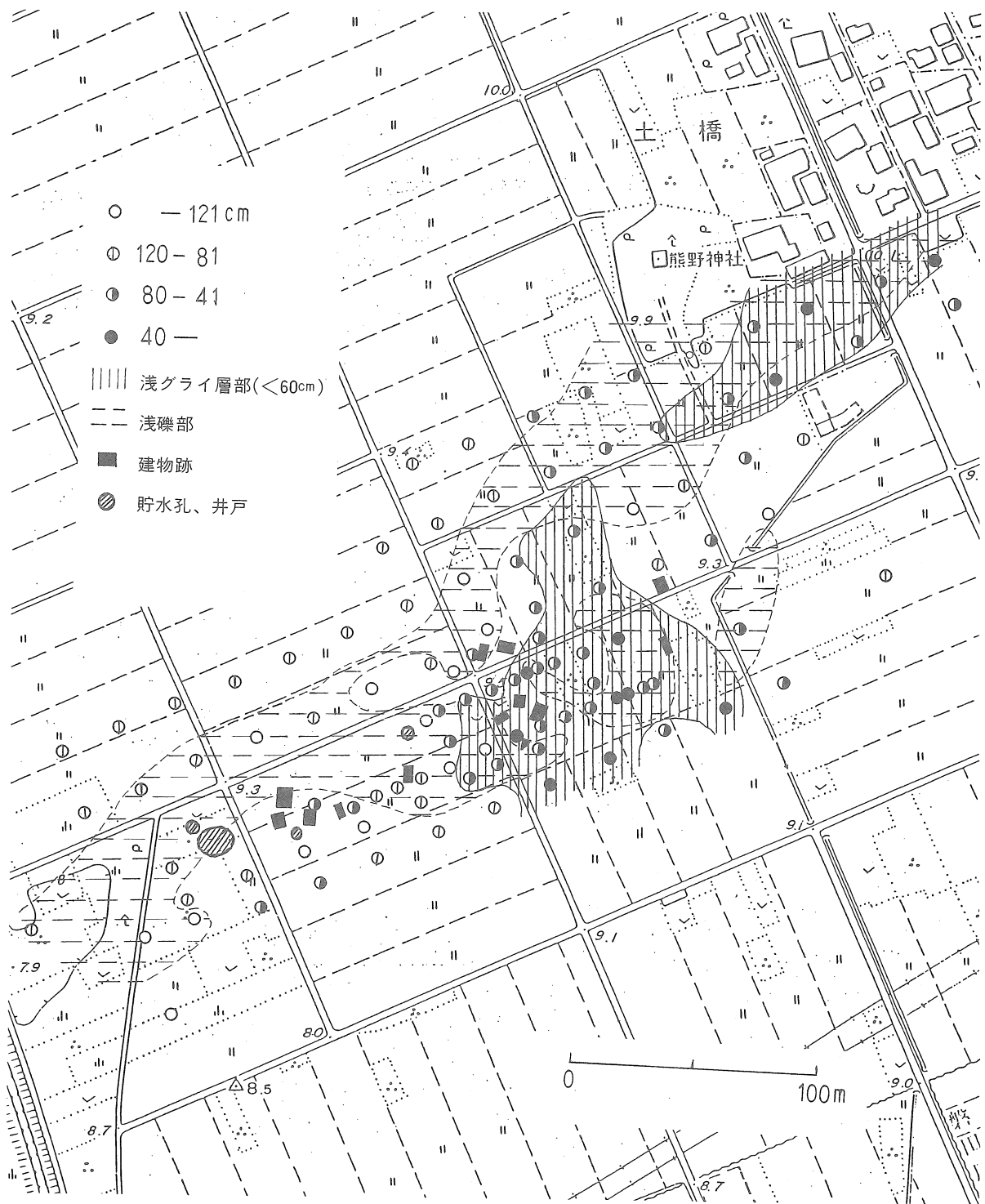
第14図 溝・建物などの遺構と旧流路との関係（第13図参照）

図15に発掘で確認された建物跡（弥生末～古墳初、奈良末～平安、中世の各時代）の位置を記入した。このうち、グライ層が80cm以深の部分に位置するものが4例、同以浅に位置するものが9例である。後者のうち、中央部の6例（弥生末～古墳初）は同時代の円形環濠らしい溝遺構に囲まれ、西部の2例（中世）は同時代の方形環濠らしい溝遺構に隣接し、東部の1例（奈良末～平安）は同時代の南北方向の直線状溝遺構の近くである。これらの一致は偶然であろうか。むしろ、これらの建物に対し、溝遺構が、雨季には50cmぐらいの深さまで上昇するであろう地下水位（湧水）を下げる役を果たしていた、あるいは、その目的のために作られたといっては過言であろうか。

貯水孔または井戸と推定される遺構（中世、江戸時代）が発見されている。その位置を図14、15で見ると、2例は礫層が深くて（1m以深）グライ層が深い（80cm以深）、他の2例は礫層が浅くて（同前以浅）グライ層が深い（同前）、といずれも地下水を得にくい場所を占める。前者は貯水、後者は雨季で地下水位上昇時の井戸として使用されたのではなかろうか。

この項の諸種遺構は永井（1983）や同氏の未公表資料に基づいたものである。

(2) 環境変遷史と立地 本遺跡の立地する太田川の旧支川流路は発掘区の遺構の出土状況からすると、弥生後期より前に形成された、その溝状凹地の埋め立ても弥生後期末から古墳初の時代までには終了した、ということが出来る。では、その発生から消滅までが、いつ、どうして起こったのだろうか。現在のところ、間接的な事実をつなぎ合わせた推論によるしかない。本遺跡は海岸から約10kmの距離があり、海拔高は約9mである。縄文時代から現在まで、臨海平地が海水位の変動（上がり下がり）によって、かなりの環境変遷を受けたことが日本各地で知られている。これが本遺跡の付近で



第15図 遺跡周辺のグライ層出現深度分布図と建物、井戸などの遺構

はどう現われたのか考えてみたい。

(a)縄文海進時の入江の侵入 今から約1.8万年前、最終氷期で低下していた海面がその後の温暖化に伴い上昇し始めた。約6,000年前ごろ、その上昇はピークに達し、以降はほぼ現海水面の高さで多少の上下変動を行いながら現在に至った。このピークが縄文前期のころなので、縄文海進という名で呼ばれる。

本遺跡付近では、これがどうなっているだろうか、地下の沖積層にその記録が残されていると考える。図7の地質断面図によると、D₁まで含めた沖積層の厚さは30~40mに達し、大部分が粘土層である。諸所に含まれている貝殻は大部分が塩水まじりの入江に棲んだものと思われる。これを含む粘土層は、上記の縄文海進に伴ない太田川下流域一帯に形成された入江の底に堆積したものと推定される。貝殻まじり粘土層の上限を海進のピーク時の層準と考えるとそれは海拔-5mぐらいにある、そのときの水深を数mとすれば、当時の水面は海拔0mをはさんで上下数mの範囲にあったであろう。これは、坂尻遺跡の調査で、その周辺部のボーリングデータ（大庭、1983）から推定した、海進ピーク時の水面高5~10m（加藤、1985）に比べるとやや低い値である。本遺跡は太田川平野の中央にあるので、あるいは水深をもう少し大きく見積もる必要があるかもしれない。

(b)河川流路の進出 入江水面の上昇がなくなると、流れこむ河川の泥土で、入江は奥から次第に埋め立てられ、河流は自然堤防を作りながら流路（おそらく蛇行）を下流に進出させてくる。自然堤防の外側は後背湿地である、

すでに述べたように、遺跡の直下に見出される2層の礫層の下限は、それぞれ、海拔3mと7m位である。前者と貝殻まじり粘土層下限との間には約8mの粘土層がある。貝殻粘土層上限と現地表（海拔9m）との間には約14mの粘土層があり、仮に、年当たりの堆積割合を一定とすると平均1,000年で約2.3m（ $14\text{m} \div 6,000\text{年}$ ）の割合になる。従って下位礫層の堆積開始（河川流路の進出）は縄文海進ピーク後約3,000年前後（ $8\text{m} \div 2.3\text{m} / 1,000\text{年}$ ）ということになる。これは縄文後期ごろに当たる。この計算はおおざっぱなものであるが、縄文中期より古くはならないといえる。同じような方式で求めた坂尻遺跡の礫層の堆積開始は、海進ピーク後約2,000年（縄文中期後半）という結果であった（加藤、1985）。従って太田川中流域では、現在から3,000~4,000年前ごろ、河川が流路を入江前面に進出させ、礫層を堆積させたとみてよいだろう。

最近、縄文中期の頃（4,000~5,000年前）に小海退（2~3m以内の海面低下）認める例が日本全国にも増えてきた。太田ら（1982）はこれをまとめて「縄文中期の小海退」としている。筆者も、伊場遺跡の調査で、縄文末~弥生初海退を考えたことがある（加藤、1977）。しかし、その後の火山灰層の発見（加藤、1979）、14C年代測定（加藤、未発表）などから、これは4,000年前より先までさかのぼると訂正したい。

この海退によって入江の縮少、埋積の進展、河流の進出が促進されたものと思われる。太田川だけでなく、原野谷川も同様である。また、同時に、海岸方面では砂州により入江の閉塞も進行した。このために、入江は周辺から低塩分化、淡水化、湿地化していったものと思われる。大須賀町山崎（図3、d点）では砂州背後に堆積した泥炭（地表下2.2m）の14C年代が $2,980 \pm 80\text{年 B.P.}$ （I-12,420）であった（鶴見ほか、1983）。つまり、縄文後期末には完全に湿地化したことを示している。磐田市西貝塚（縄文後・晩期）の貝は圧倒的にヤマトシジミである（加藤、1962）。

以上のことから、本遺跡の拠点となった太田川支流流路は山梨から分流し、縄文中~後期には土橋まで進出したと考えられる。流路の両側は湿地または入江の名残りが優勢だったであろう。

(c)流路（溝状凹地）の埋没 すでに述べたように、本遺跡の遺構（弥生末~古墳初）が溝状凹地を

埋没した土層の上にあること、徳光遺跡で、旧流路の礫層を切る溝が弥生後期から末にかけての遺物包含層によって埋没されていること（大谷ほか、1968）、などから、問題の溝状凹地は弥生時代末までに埋没された、つまり流れとしての機能を停止するに至ったと推定される。この埋没によって流路特有の微地形（溝状流路と自然堤防）は不明瞭となり、単なる微高地帯として認識できるだけである（図6、13はそれを復元したもの）。この点は坂尻遺跡の拠点である古名栗川も同様である（加藤、1985）。

ではなぜ埋没があったのだろうか。これから先は単なる憶測でしかないが、その時期の小海進のためではなかろうか。これに対応して、河流は流速の減少を起して、泥土の堆積が進んだのであろう。弥生後期ごろに小海進のピークがあったらしいことは伊場遺跡調査時に推定されたものである（加藤、1977）。磐田市二之宮貝塚（弥生後期、鈴木、1983）から多数のハイガイ小個体がでるが、この貝は瀬戸内海以南の半塩水の海に棲む種類なので、磐田市南方に塩水まじりの水域があったと考えたくなる。これも上記海進と関係がありそうである。海進ピーク時の水面は縄文中期小海退ピーク時のそれより数m上位だったであろう。これによって入江が再拡大したと思われるが、その範囲は不詳である。

(d)その後の推移 本遺跡では弥生末以降の各時代の遺構が、上記埋積物の表面に立地した（ほぼ同じレベルで）だけで、広汎な遺物包含層や自然の大規模溝状凹地が発見されていない。これは、上記時代からずっと地表面が安定し人間活動に適した状態が継続したことを意味する。微高地としての性格が明瞭なため、その後の水没をまねがれたのであろう。

主要交通ルートはこの微高地ぞいの陸路と周囲の低湿地の小河川ぞいの舟運によったであろう。

文 献

- 門 村 浩（1965） 地形分類図5万分の1「磐田・掛塚」—土地分類基本調査、1—22、経済企画庁。
- 加 藤 芳 朗（1962） 出土貝類について。「西貝塚」、16—17、磐田市。
- 加 藤 芳 朗（1977） 伊場遺跡をめぐる自然環境の地学的検討。「伊場遺跡遺構編」—伊場遺跡発掘調査報告書第2冊一、150—155、浜松市教委。
- 加 藤 芳 朗（1979） 第12次発掘区の堆積層の観察と火山灰について。国鉄東海道線路敷内埋蔵文化財発掘調査報告書、29—34、浜松市教委。
- 加 藤 芳 朗（1985） 坂尻遺跡をめぐる地形・地質学的背景。「坂尻遺跡」—自然科学編—
- 加藤芳朗・広川 治（1965） 表層地質図5万分の1「磐田・掛塚」—土地分類基本調査、1—22、経済企画庁。
- 基礎地盤コンサルタンツ（1983） 昭和57年度袋井バイパス土橋地区地質調査報告書。建設省中部地建浜松工事事務所。
- 永 井 義 博（1982） 遺跡、「土橋遺跡—第1次調査」。1—17、袋井市教委。
- 永 井 義 博（1983） 同上、第2次調査。5—19、袋井市教委。
- 大 庭 正 八（1983） 袋井市域の自然環境、「袋井市史、通史編」、1—100、袋井市。
- 太田陽子・松島義章・森脇 広（1982） 日本における完新世海面変化に関する研究の現状と問題。第四紀研究、21、133—143
- 大谷純仁・平野吾郎（1968） 袋井市徳光遺跡発掘調査概報。
- 鈴 木 久 雄（1980） 磐田弥生時代遺跡地名表、12pp. 磐田市教委。
- 鶴見英策他5名（1983） 南関東・東海地域広域変動地形調査。国土地理院。

第3章 遺 跡

第1節 概 要

土 層 当遺跡は太田川左岸の川底平野に展開する微高地上に、弥生時代後期から古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世と遺跡が分布している。調査区はこの平野の中を幅60mで東西に抜ける巨大なトレンチであるため、玉越遺跡（磐田市）までを含めると、太田川の自然堤防、後背湿地、後背湿地の水を集めて流す蟹田川、後背湿地、旧流路の自然堤防、後背湿地の順に平野のすべての部分を調査したことになる。遺跡内の基盤層はこの長大な調査区のため基本的には（泥層）（砂層）（礫層）からなり、また遺跡内では遺物包含層が見当らずこの基盤が直接遺構確認となっている。

遺跡内の基本土層は下記のとおりである。

第Ⅰ層 耕作土 茶褐色粘土層

第Ⅱ層 水田床土 灰色粘土層

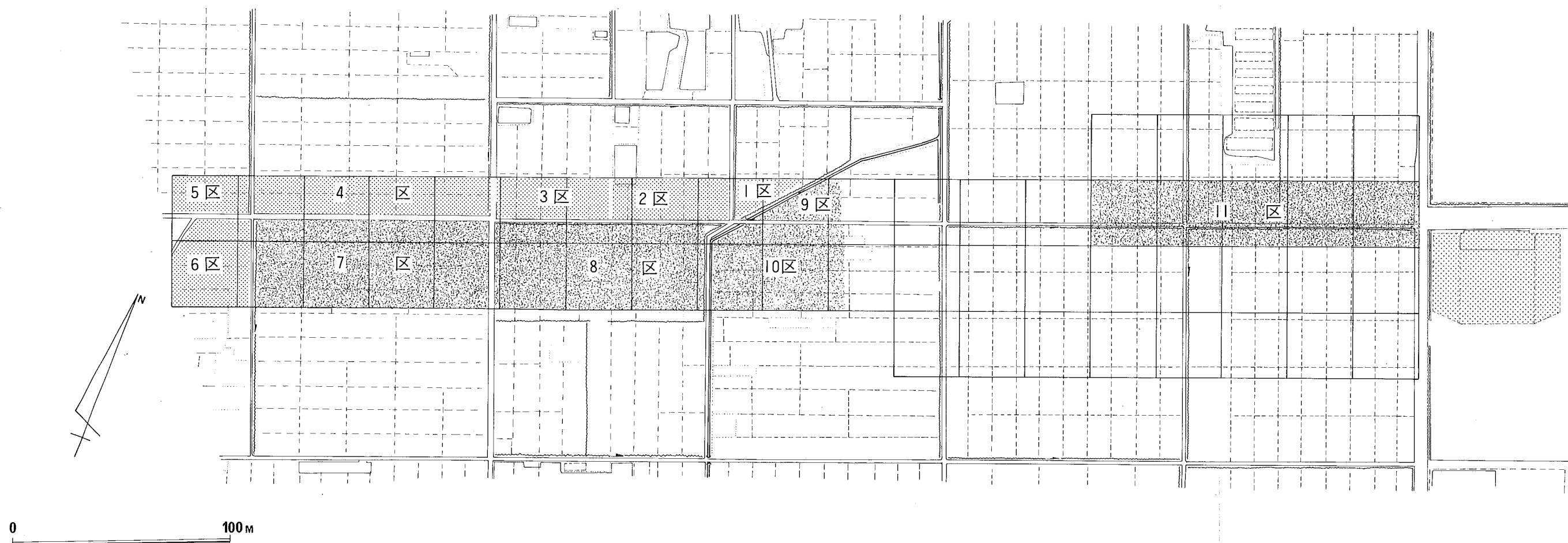
第Ⅲ層 無遺物層 東西に長大な調査区のため地区により青色粘土層、礫層、砂層、灰白色粘土層などさまざまである。

第1区 以上のような特質から各調査ごとに異なった状況を示している。まず、第1区は磐田用水と農道に挟まれた約120㎡の面積をもつ三角形の発掘調査区である。この調査区は2区から5区までの調査が終了後に発掘された区画で3本の溝状遺構が検出されている。このうちSD19とSD22は平行して北東に主軸を向けているがSD50はこの2本の溝跡と直交している。SD19・SD22は第1区内ではごく一部しか検出されていないが、この溝跡の続きは第2区、第8区へ伸びて蟹田川までとどくものと思われる。

第2区 土橋・熊野神社の南側の約850㎡の発掘調査区である。調査区東側を農道、西側を用水が通っているためこのように区切らざるをえなかった。この地区では溝跡を中心に土壇、Pitなどが散在している。主な遺構としては掘立柱建物跡SB1がある。その他の溝跡は南北方向に主軸をとるものが多いが、69ラインより東側では中・近世の溝跡が多く、それより西では奈良末～平安時代の遺構が、さらに西では弥生・古墳時代の遺構となっている。中近世の遺構群に混じってSD1の呼称する古墳時代初頭の溝跡がある。これはS字状口縁台付甕等の古式土師器が出土している。65～67ライン付近では古墳時代の溝跡と奈良末～平安時代の遺構が重複しており、特にSD4では墨書土器を含む資料を出土している。

第3区 第2区西側の約500㎡の発掘調査区である。この地区では溝跡と不定形の竪穴状遺構、Pit群が検出されている。主な掘立柱建物跡はSB3、SB4などであるがその他Pit列になるものもあり溝跡SD34、SD105、SD36に囲まれるように立地している。SI1、SI2、SI3、SK6、SK7、SD35と複雑に重複している遺構についてはその性格は解明されていない。SK3等の土壇からは弥生時代後期の一括遺物が良好な状態で出土している。

第4区 調査区西の農道北側に細長く区画された調査区である。東西105m、南北3mで東側が用地の関係で広がっている。遺構は溝跡、Pit、土壇などあるが、なにしろ調査区が細長いためにほとんどの遺構の性格が不明である。調査区東側の47ライン以东では最終遺構面

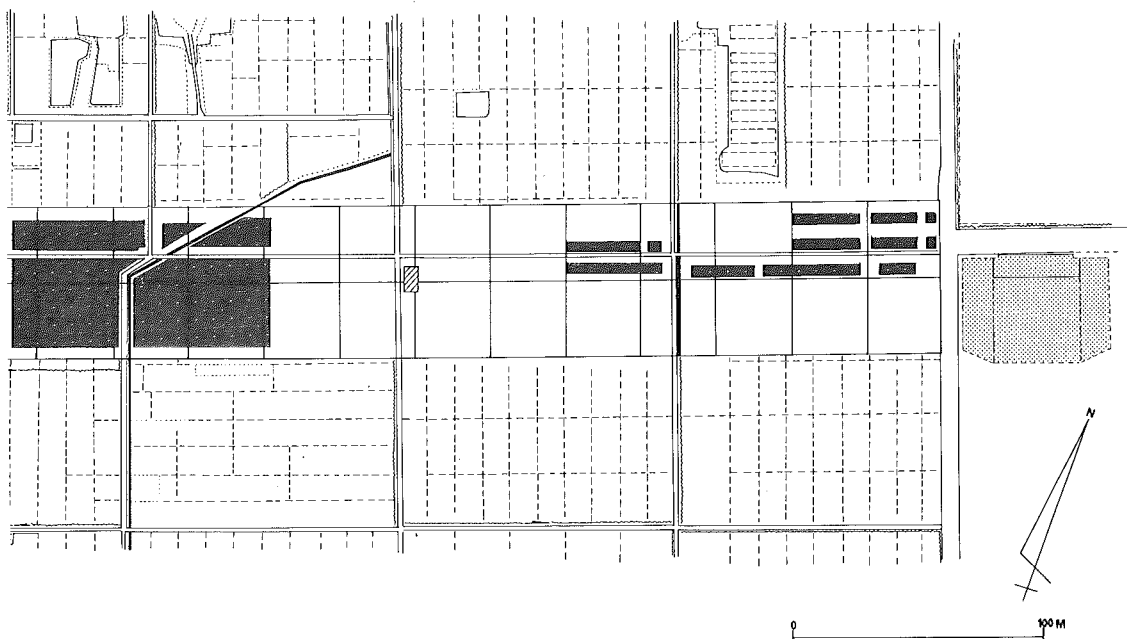


は砂利となっており旧河道である。S D38、S D39は弥生時代後期の菊川式土器を出土する溝跡であるが南例の7区とは比高差があり確認は難しいと思われる。S K13は深さ約1.5mの井戸状の遺構で、南側半分が農道の下に入って調査はできなかったが土師器や、木製品（着柄式二又鍬）を出土している。

第5区 土橋遺跡でいちばん西の調査区である。農道北側に細長く検出されている遺構は土壇とPitが若干あるだけである。S K14、S K15とも弥生土器片を出土するがその絶対量は少ない。また最終遺構面は砂質を帯びており、第6区西側の砂質、礫層の形成とも関係しているように思われる。

第6区 第5区と同じ土橋遺跡のいちばん西側の調査区である。第6区内は東から砂質粘土層砂層、礫層の最終遺構面の土層は変化しており西端では遺構はほとんどない。河川の氾濫により推積したと思われる礫層が流れ込んでいる。遺構は大きな池状の遺構S X1をはじめ溝跡、土壇、Pitなどが検出されている。S X1は直径12m、深さ1.6mの池状の遺構で、北側の直径4m、深さ1.4mの井戸状の遺構とセットになっており、この2つの池状遺構は深さ50cmの溝状遺構で結ばれている。この池状遺構S X1からはまったく湧水は見られないが、小さな井戸状遺構からは水中ポンプを回しつづけなければいけないほどで、この井戸状遺構から池状遺構へ水を導びいていたと考えられる。その他、S X1の東側にもう1つの井戸状遺構S K42が、また木製の角柱の根を残す土壇S K28が調査区やや西寄りから検出されている。

第7区 第8区とともに土橋遺跡の中で重要な調査区である。基盤層は東西100m近くある長大な調査区であるため変化が大きく、西側は第6区の影響を受けて砂質の強い土層が推積しS D85付近から太田川の支流旧河道の残存部があり、礫層・粘土層などが部分的に入ってきている。調査区内北側を東西に横切る中世・近世の溝跡は第6区から続き、第8区へ抜けている。調査区中央に位置するS D85は一辺30mの方形の溝跡で中世の屋敷跡の堀と思



第17図 第11区トレンチ設定図

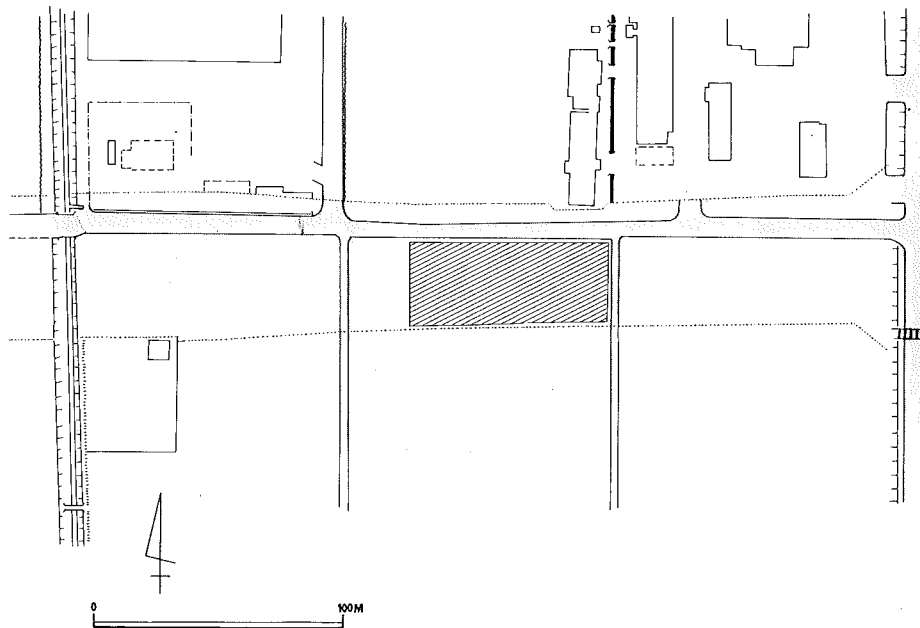
われる。この他中世の遺構としてはS X 2、S K 43、S K 44、S D 96等がありこの地区の中央から東寄に集中している。その他の遺構は一括遺物を出土する弥生後期～古墳時代初頭の土壌がある。これらからはセット関係を把握できる遺物が出土しており重要な資料である。

第8区 今回の調査で中心となる区画である。この区画内は水田の高さをそろえるため、かなりの厚さで削平され遺構も上部は失なわれているものが多い。しかし、逆に底面直上に残る一括遺物は良好に保存されており貴重な資料となっている。第8区西側では環状に巡る溝跡S D 102に囲まれた掘立柱建物群が数棟検出されている。これらは古墳時代初頭のものと考えられるが、第3区で検出された遺構群との関連が注目される。この遺構群内に先行する土壌S K 80がある。ここからは弥生後期菊川式土器の高坏接合部（櫛刺突文を持つ）と共に犬遺体が埋葬された状態で出土している。中央から東寄りの溝跡は古墳時代の遺構が多くミニチュア土器等も出土している。調査区東側ではS D 130から奈良末～平安時代の官衙的性格を持つ遺物が出土している。この中には墨書土器も見られ、太田川流域及び古代東海道のこの時期を知るうえでたいへん重要であろう。

第9区 第1区東側の磐田用水脇の調査区である。ここでは比較的新しい時期の遺構が多くS D 131は8区より北東に上ってくる溝跡のつづきであろう。その他の遺構は時期・性格とも不明なものが多い。

第10区 磐田用水東側の低湿な地区である。北側に残された茶畑で残された範囲では土師器を出土する溝跡S D 141、S D 142が検出されただけである。その他遺構の発見されていない地区は低湿なことから、水田の削平によってわずかな遺構がとばされてしまったのであろう。

第11区 この地区は第1区～第10区までの平面調査を実施した地区より東へ80m離れた土橋の集落の南、福山通運の西隣の地区である。ここではトレンチ方式で発掘調査を行ない、ほぼ



第18図 土橋遺跡発掘調査区画図 (12区)



第19图 第12区平面实测图

全面の確認をすることができた。この地区では弥生土器片、山茶碗片などの遺物があるがすべて少片で流れ込んだように考えられる。遺構は検出されていない。

第12区 堀越・経済連前の調査区である。試掘調査の結果、中央付近で遺構・遺物が検出され平面調査が実施された。遺溝は溝状遺構・池状遺構が主で、古墳時代～中世の遺物が出土している。

第2節 土 壙 (SK)

SK 3 第3区西側 (I-52) にSK 5と並んで位置する長軸2.85m、短軸0.95m、深さ0.56 mの隅丸長方形の土壙で、中央部に一括投棄されたように出土した弥生土器が多数出土している。覆土の推積状況は下記のとおりである。

第1層 暗灰色土 (炭化物・鉄分・有機質粒子を含む)

第2層 暗灰色土 (第1層よりやや暗く灰色粒子を含む)

第3層 暗灰色土 (ブロック状の灰色土を含む砂質の土)

第4層 暗灰色土 (鉄分・灰色ブロックを含む粘性のある土)

第5層 暗灰色土 (第4層より灰色ブロックが少ない土)

第6層 ピート層 (植物質の強い土)

第7層 暗灰色土 (多少の炭化物を含む砂質の土)

一括で出土した弥生土器は第3層からで、高坏・壺型土器・台付甕がセットで出土している。土壙墓であろう。

SK 9 第4区東側 (I-49) の旧太田川の流路跡と見られる砂利層上に位置する隅丸方形の土壙である。長軸2.28m、短軸1.56m、深さ0.63mの規模であるが北側の壁は攪乱のためか一部落ちている。遺物は覆土の第2層を中心に検出された。土層の推積状況は下記のとおりである。

第1層 褐色土 (黄色土・炭化物・小石・土器片を含む砂質の土)

第2層 暗褐色土 (黄色土・小石を含む砂質土)

第3層 灰色土 (黄色土ブロックを含む砂質の土)

第4層 褐色土 (黄色土を含む砂利層でやや粘土質の土)

第5層 暗褐色土 (ブロック状の黄色土、灰色粘土を含む炭化物層)

第6層 灰色土 (黄色土ブロックを含む粘土層)

出土遺物は土壙の中央付近に集中しており、ミニチュアの壺形土器、有段羽状文を持つ壺型土器の肩部、台付甕などが見られる。

SK 13 第4区西側 (J-30) に位置するこの遺構は、発掘区域内を横切る農道に一部がかかり南側部分の調査はできなかった。規模は、東西2 m、深さ1.2mの円形または楕円形を呈すると思われる。覆土は下記のとおり推積を示す。

第1層 褐色土 (黄色粒子、炭化物を多量に含むやや砂質の土)

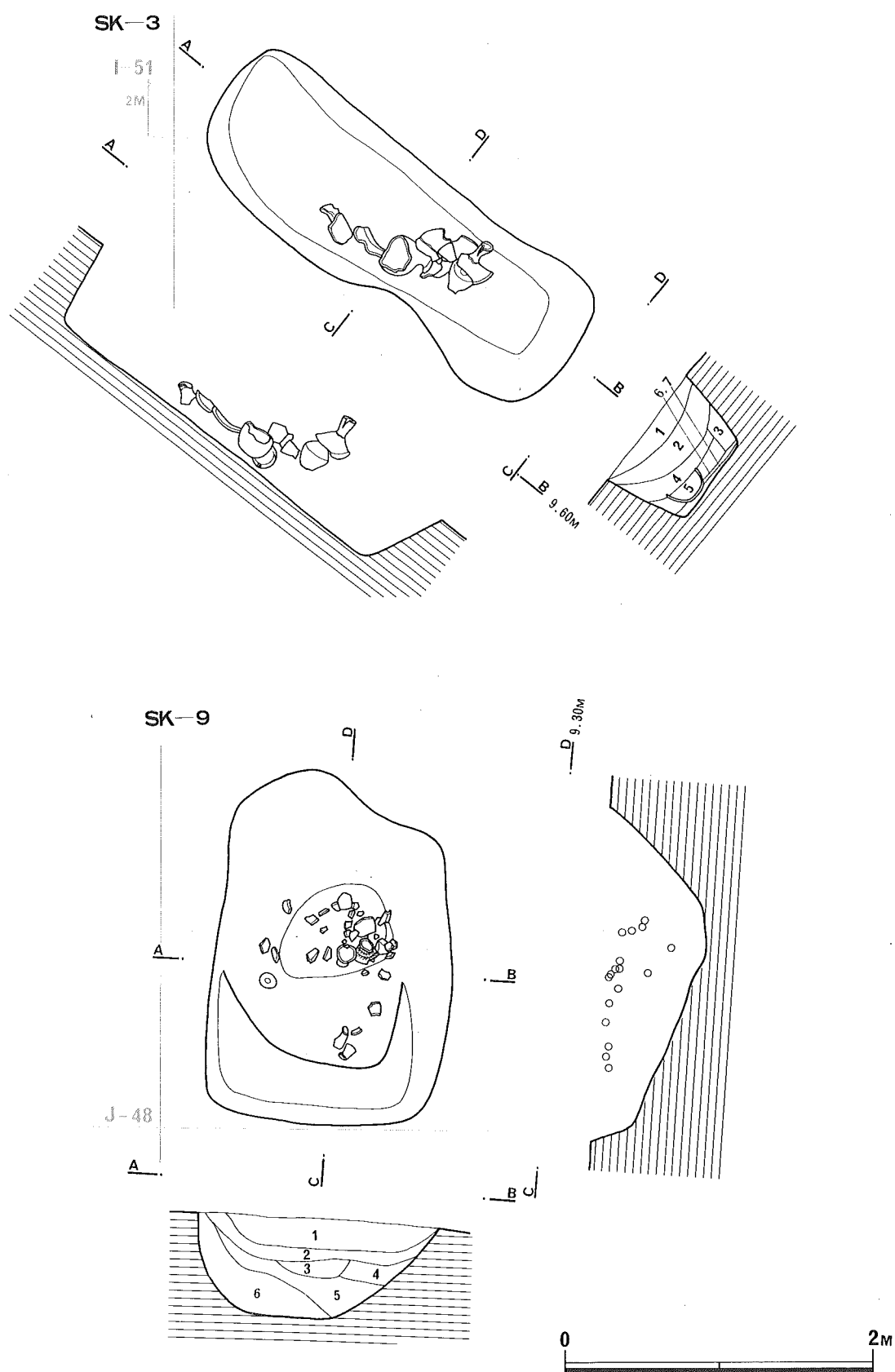
第2層 灰色土 (粒性がつよく3～5 mmの炭化物をふくむ)

第3層 暗灰色土 (3 mm前後の炭化物を含む)

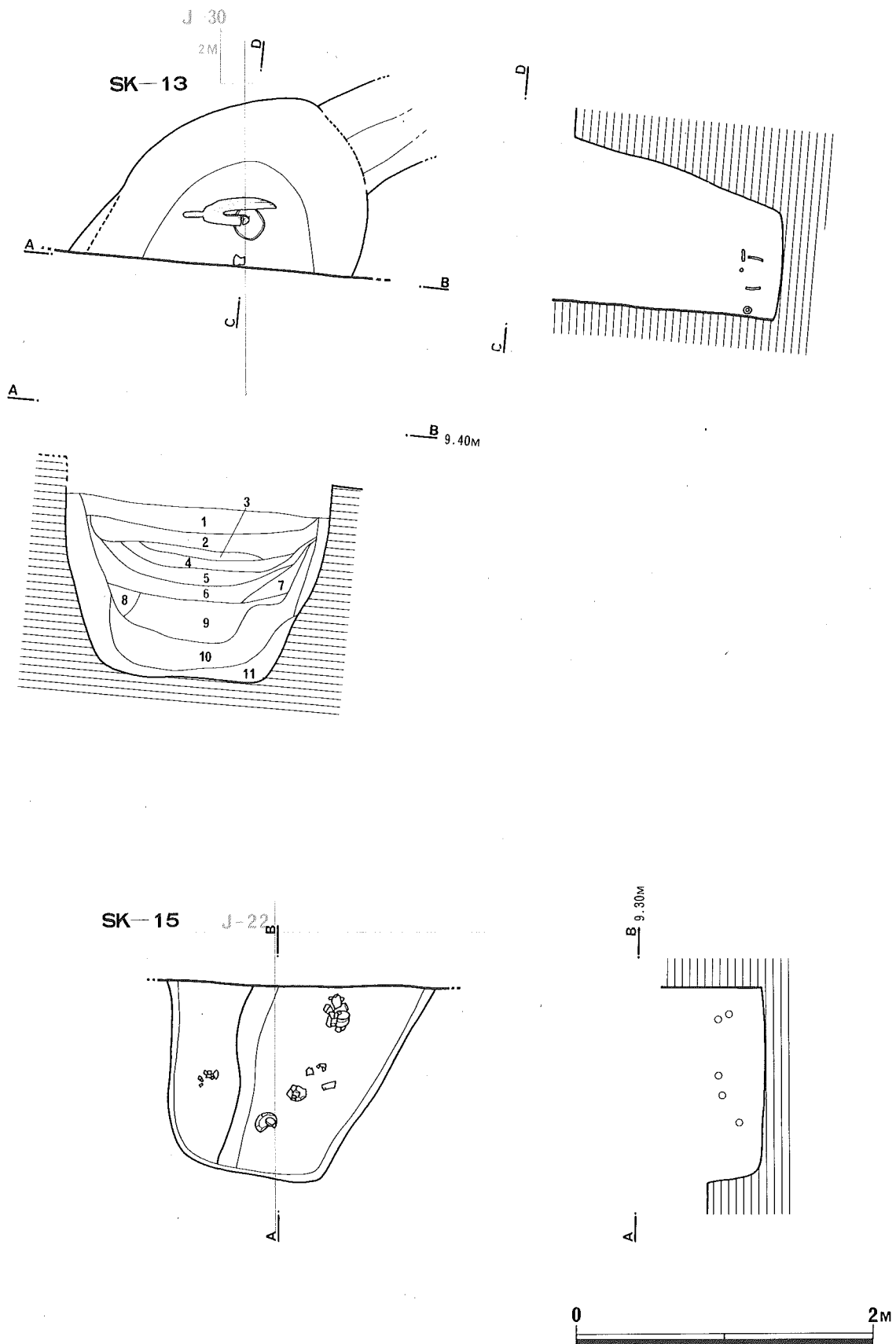
第4層 灰色土 (黄色粒子を少々含む砂質の土)

第5層 灰色土 (炭化物、木片を含む粘土層。黄白色土のブロックを含む)

第6層 灰色土 (1～4 mm大の黄白色土のブロック、木片を含む粘土層)



第20図 土壙〔SK〕実測図(1)



第21図 土墳〔SK〕実測図(2)

第7層 暗灰色土（第6層より暗い粘土層）

第8層 暗灰色土（2～7mmほどの黄白色土のブロックを含む砂質土）

第9層 暗灰色土（2～5mmの黄色土ブロック、木片を含むやや砂質の粘土層）

第10層 暗灰色土（木片を少々含む砂質土）

第11層 黒灰色土（第10層より黒く木片を含む砂質土）

出土遺物は多数の古式土師器および木製農具がある。木製農具では、県内で出土例の少ない着柄式の二又鍬をはじめ鋤、鍬の柄などが土壌底部付近から出土している。この周辺の土は酸性が強く一般的に木製品の残りが良くない地域であるが、土壌底部の粘土質の土が遺物を保護したのであろう。

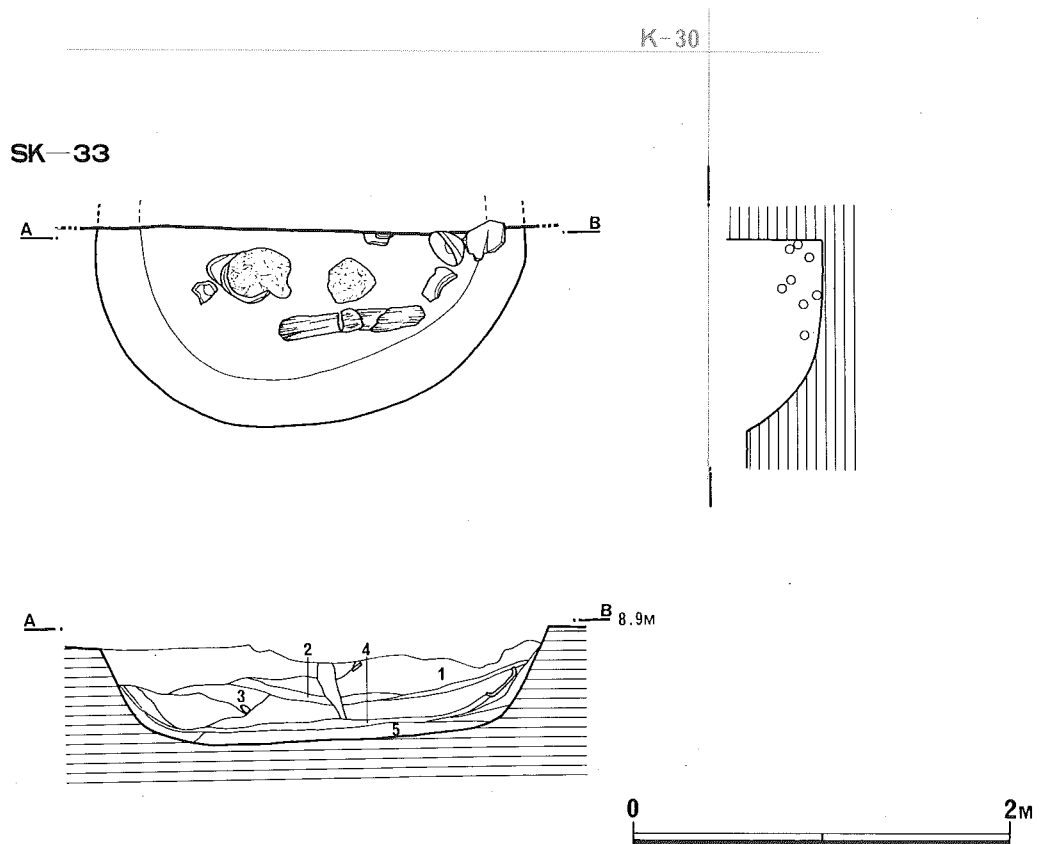
SK15 第5区西側（J-22、J-23）の青みがかった砂層の上で検出された土壌である。北側は用地外であるため調査はできなかったが、土橋遺跡西限の弥生土器を出土する土壌として重要である。規模は東西1.74m、深さ0.35mでプランは隅丸長方形であろう。覆土は砂混りの暗褐色土である。

SK33 第7区北西隅に位置する楕円形の土壌である。土壌の北半分は農道の下に入り未調査である。この土壌は東西2.27m、深さ0.31mを計る。覆土の推積状態は下記のとおりである。

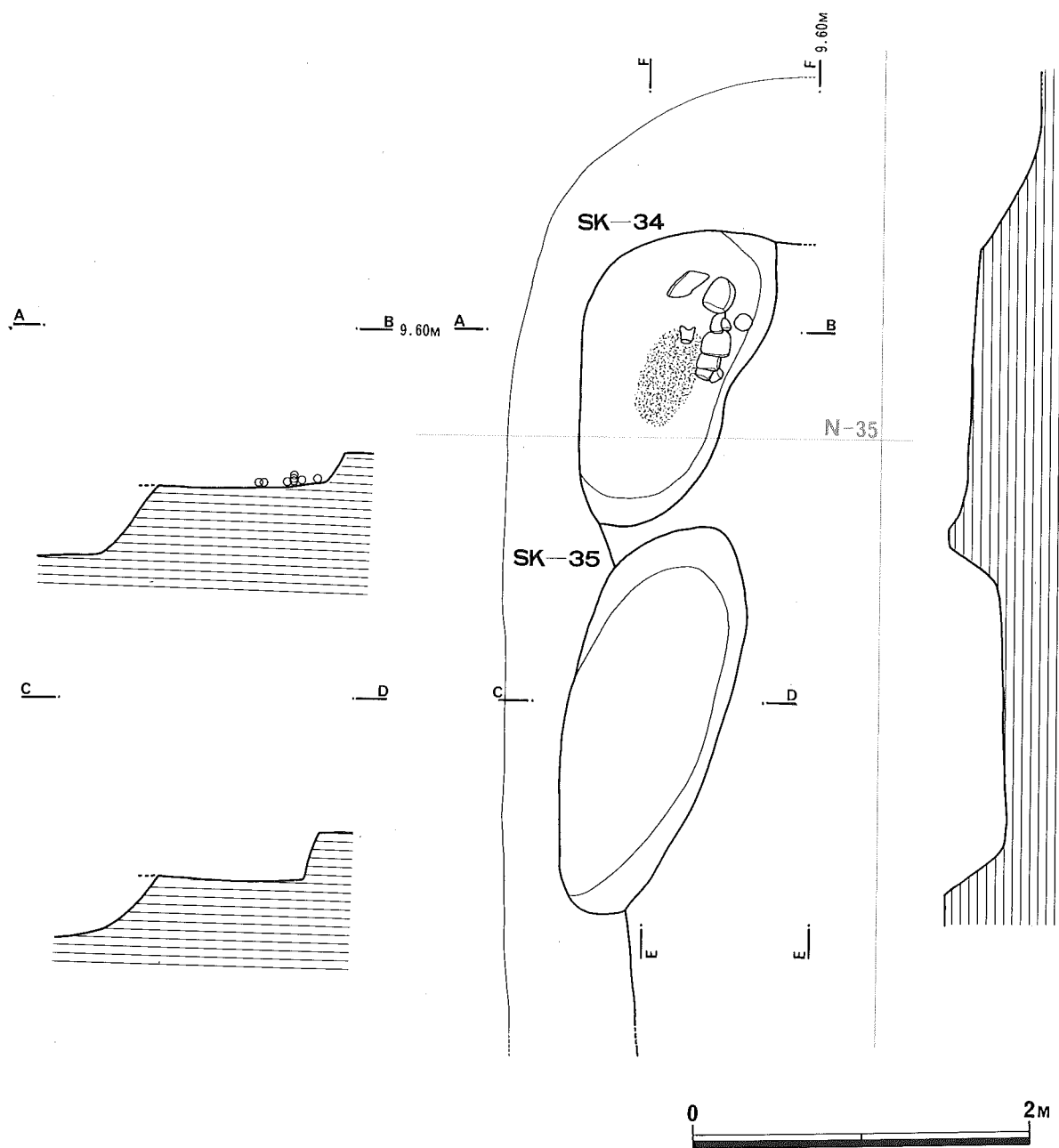
第1層 黒褐色土（鉄分を多く含む固くしまっている）

第2層 炭化物層・白色粘土層（灰層が白色粘土の上にのるように見える）

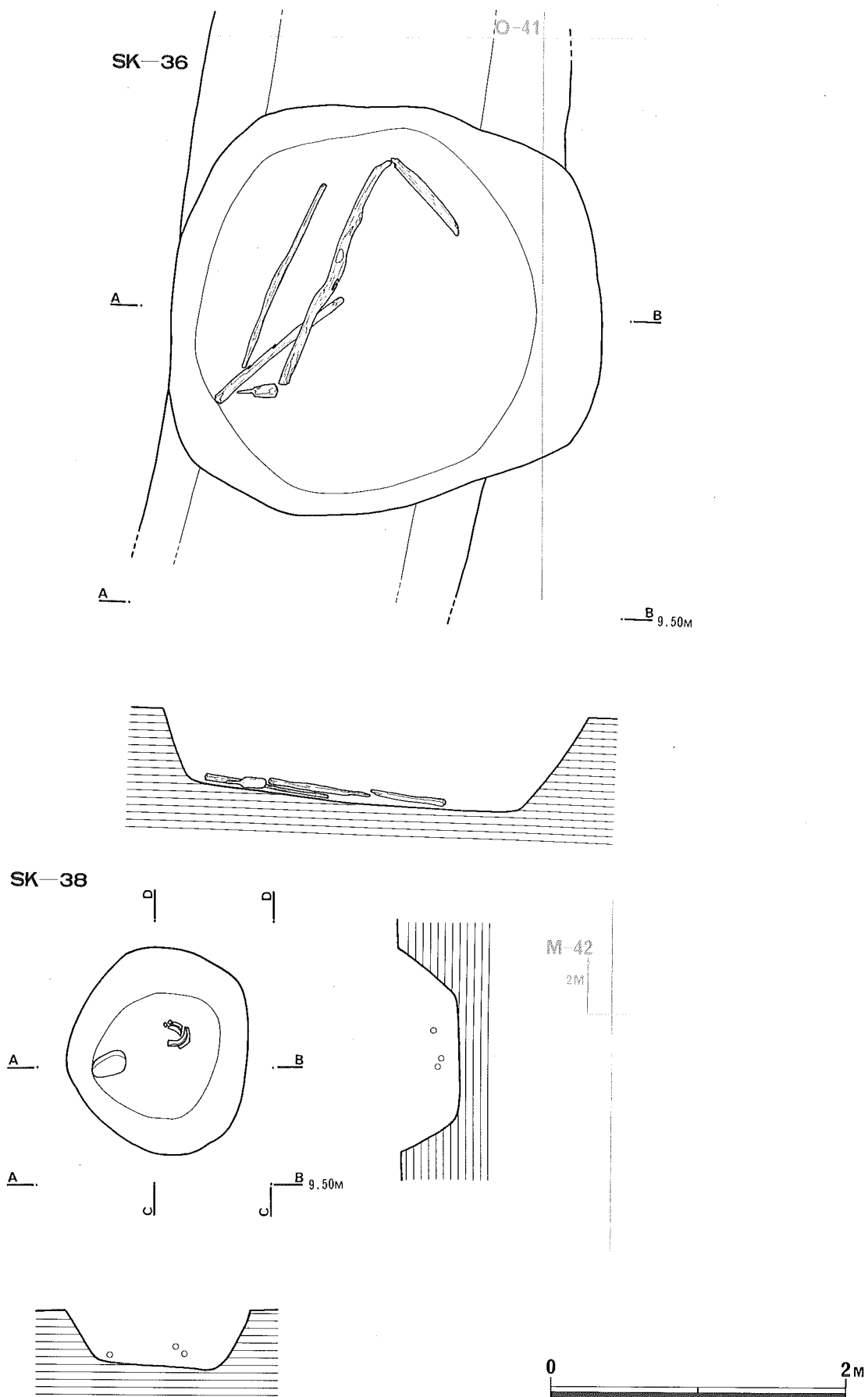
第3層 黒褐色土（層内西寄りに白色粘土塊を含む）



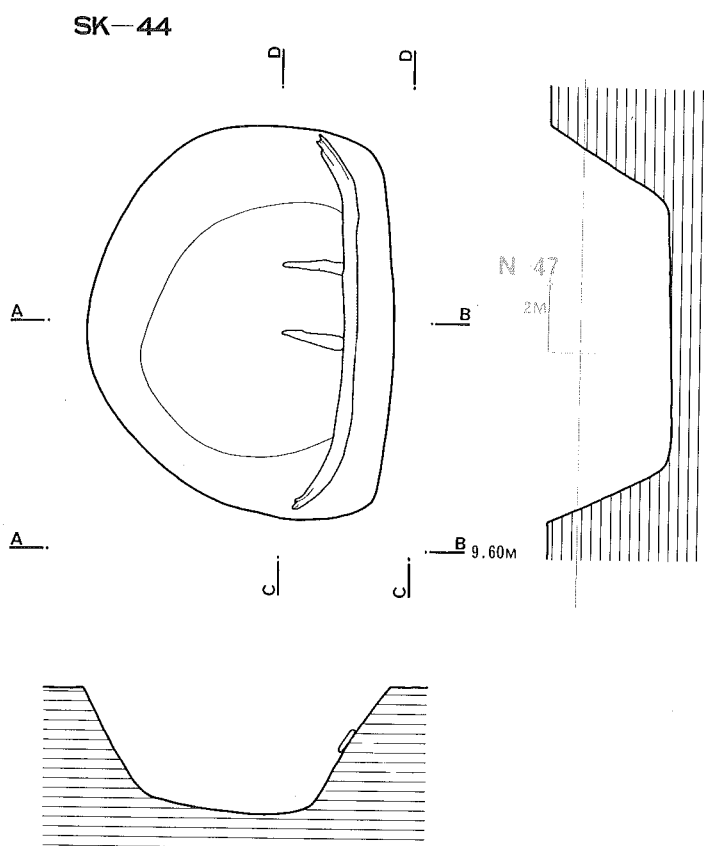
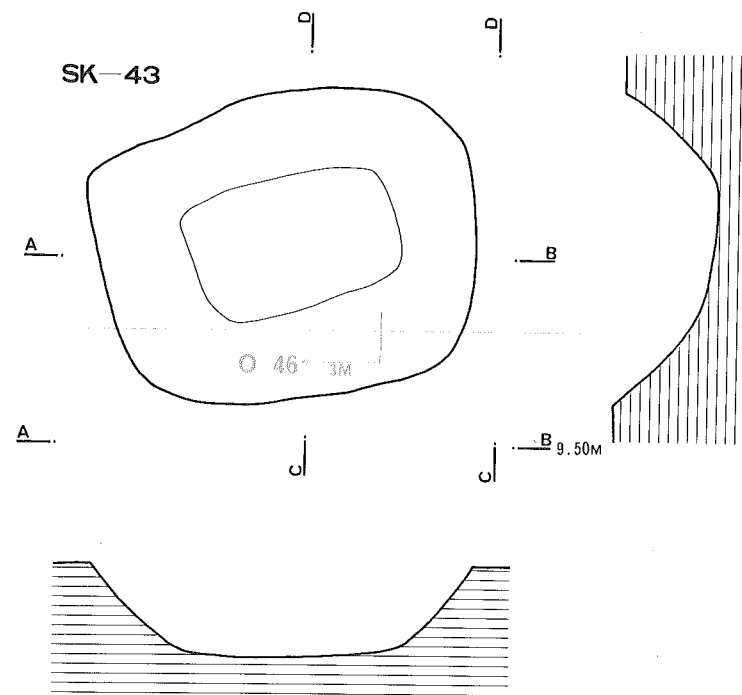
第22図 土壌〔SK〕実測図（3）



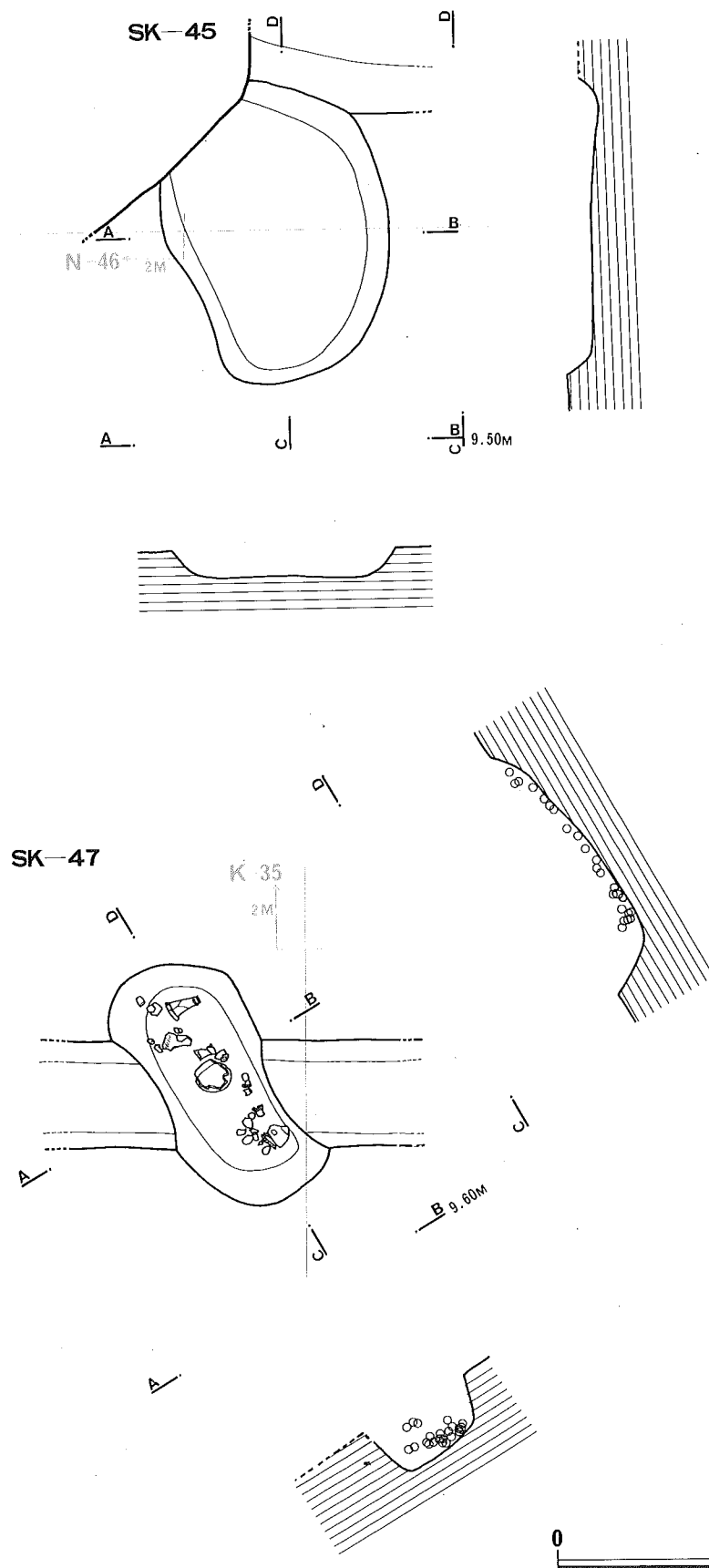
第23図 土坑〔SK〕実測図(4)



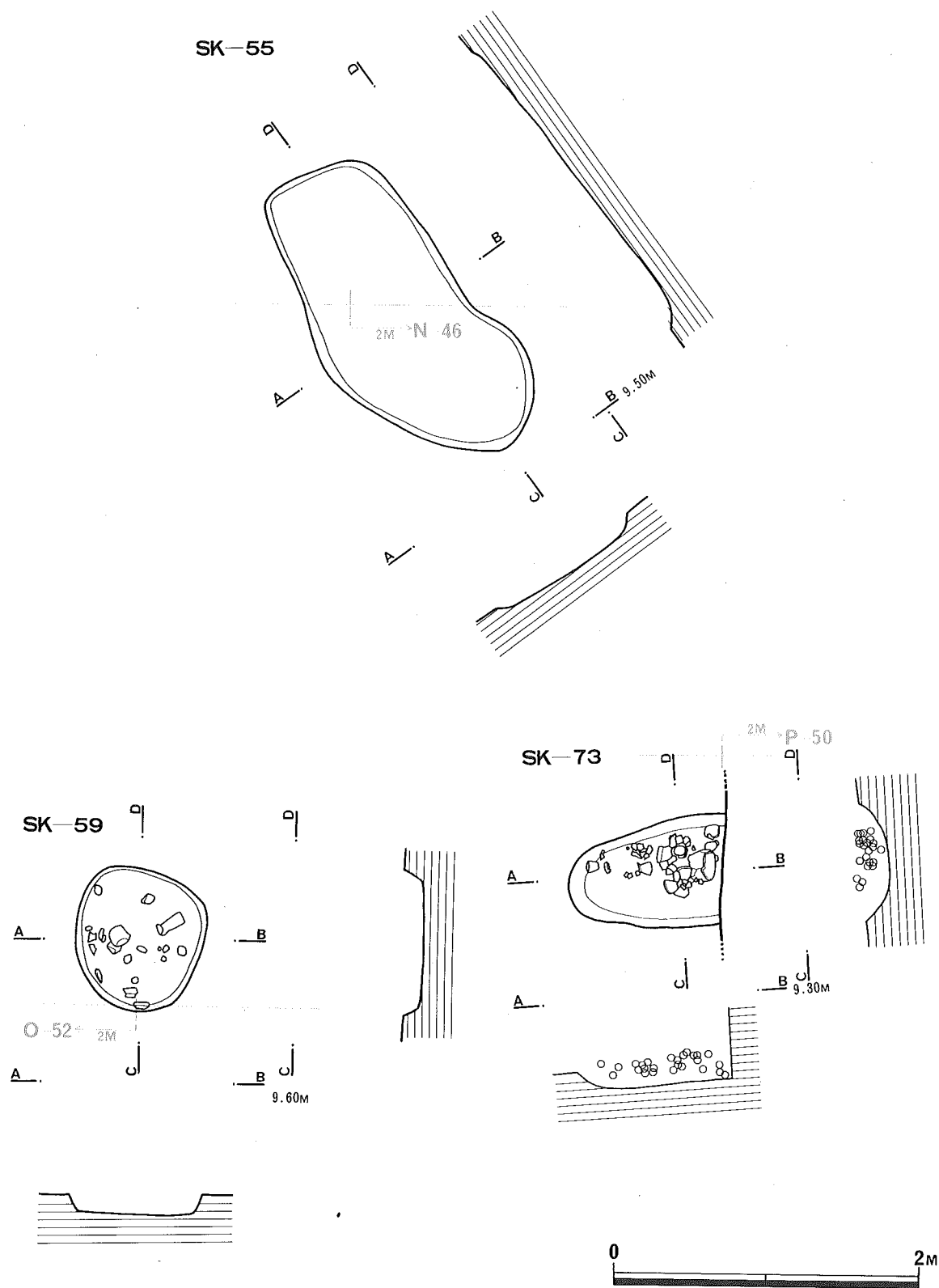
第24図 土壇〔SK〕実測図(5)



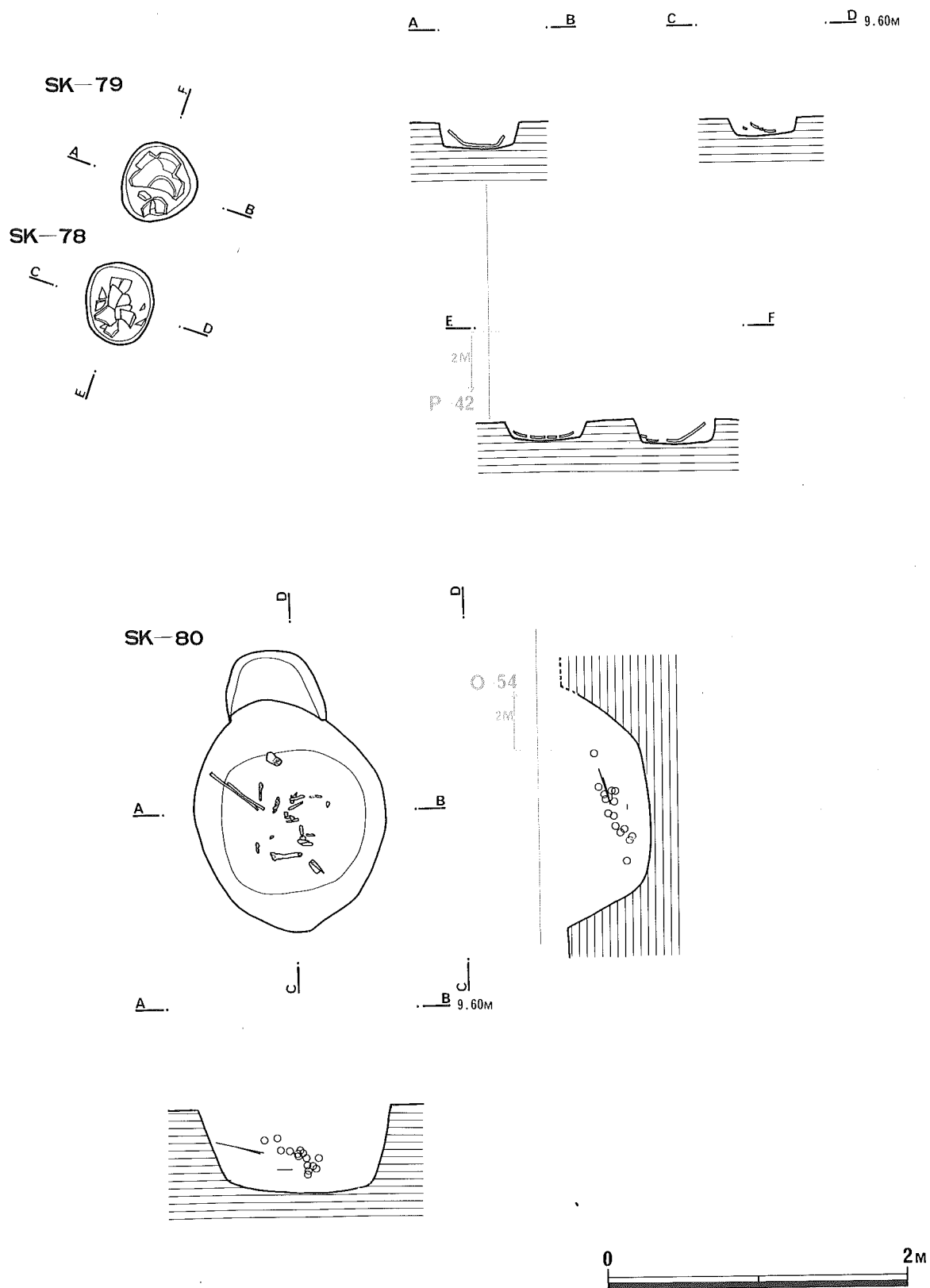
第25図 土壙〔SK〕実測図(6)



第26図 土壙〔SK〕実測図(7)



第27図 土壇〔SK〕実測図（8）



第28図 土壇〔SK〕実測図(9)

第4層 炭化物層（灰が黒く推積している）

第5層 砂混じりの白色粘土層（混入した砂は基盤層の砂である）

これらの層の推積状況から見ると、まず砂質の基盤層を掘り込んで底部に白色粘土を敷きつめる。この上に炭化物層がのり、黒褐色土の間層をはさんで炭化物層が推積し、それを覆うように白色粘土が被せてある。出土した土器に接して握り拳大の焼土塊や長さ80cm幅10cmの炭化材が出土していたが残存状況が悪く取り上げることはできなかった。土器は第2層～第4層の間で出土している。第1層は落ち込んだ土である。

SK34 第7区中央やや西寄り（M-35、N-35）で、S D85と呼称される中世の屋敷跡の堀で土壌の北側・西側の壁を失っている。規模は長軸1.74m、短軸は壁を欠損して不明、深さは約19cmである。覆土はほぼ全体に渡って黒色土が推積しており、出土遺物は弥生後期の大型の壺形土器の胴部破片と高杯の接合部の破片、そして凹石の1/4破片を出土している。土壌床面にはワラ状の炭化物が付着しており焼土もみられる。

SK35 SK34のすぐ南側に接するように掘られた土壌で西側をS D85により削ずられている。遺構の規模は長軸2.49m、短軸0.92m、深さ38cmの長楕円形である。覆土はSK34に類似した黒色土であるが、内部からは土器片がわずかに検出されただけで炭化物、焼土とも発見されなかった。

SK33、SK34、SK35は遺構の状況が類似した点が多く、弥生時代後期の土壌墓と考えられる。

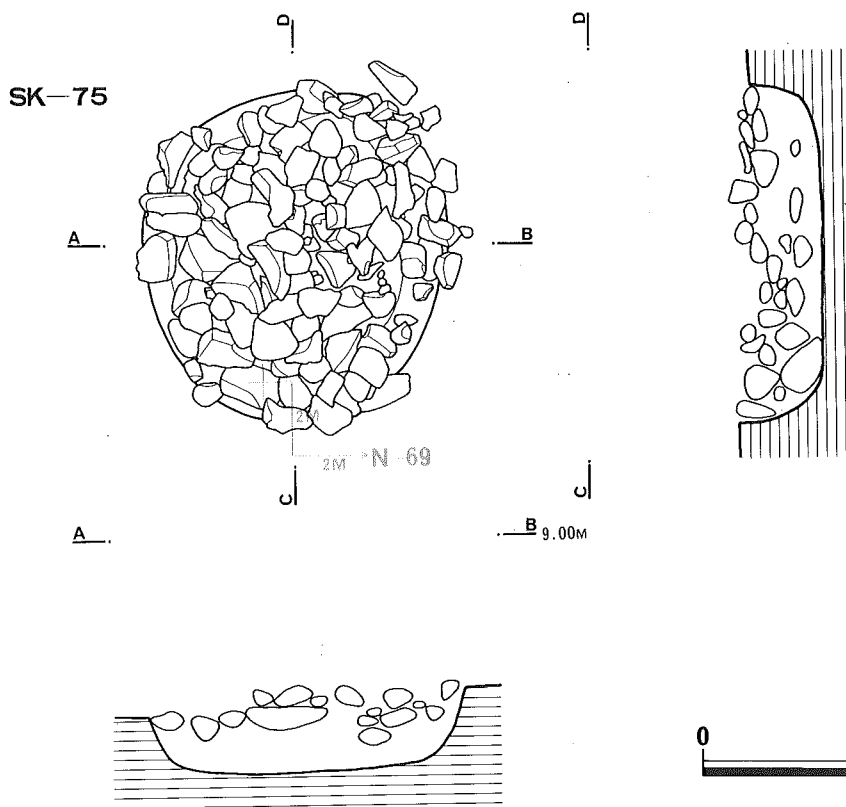
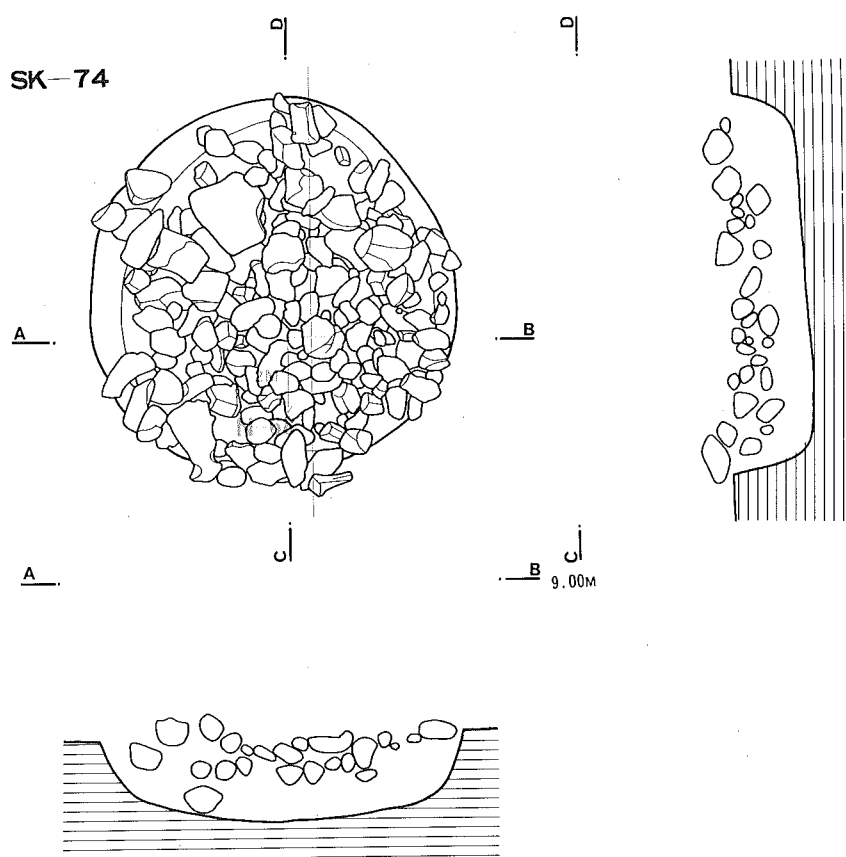
SK36 第7区中央（O-41）S D85の東側の堀と重複した形で検出された土壌で、遺構確認時はS D85の覆土に隠れて発見できなかったがS D85完掘後その堀の底部に円形のプランが見えた。このような状況のためSK36直上のS D85の覆土内には若干の土師器片が含まれていた。土壌の規模は、確認面で長軸2.82m、短軸2.75m、深さ63cmのほぼ円形で、土壌の底は旧太田川支流の砂利層で止まっている。土壌覆土は粘性の強い褐色土で、砂利層から流れ込む湧水のためグライ化している。出土遺物は古式土師器と木製品がある。木製品には建築材状のものが数点とほぼ完形のヨコヅチが1点出土している。建築材状の木製品は材質が悪いためか朽ちて取り上げることはできなかった。

SK38 第7区中央（M-42）やや東寄りのS D85北東コーナーに位置する土師器を出土する土壌である。規模は長軸1.38m、短軸1.10m、深さ38cmと小さく砂利混りの褐色土を覆土とする。遺物は床直より土師器壺口縁部や幼児の頭大の礫を出土している。

SK43 第7区東側（N-47、O-47）の中世遺構群の中に位置する。土壌の規模は長軸2m、短軸1.61m、深さ50cmで、やや深い皿状の形態である。覆土はやや粘性のある褐色土で、炭化物層（灰層）が流れ込むように推積している。この炭化物層内から山茶碗、箸（木製品）などが出土しており中世の土壌墓であろう。青磁片が出土している。

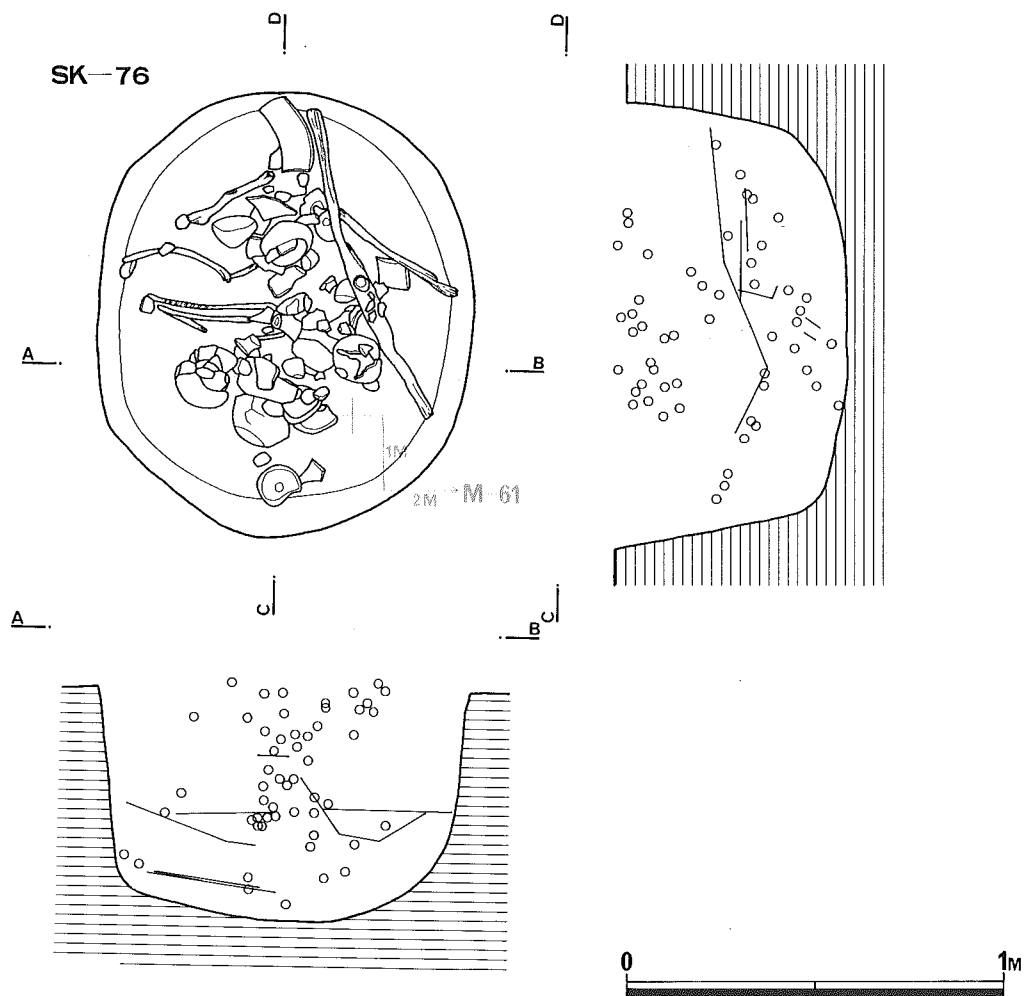
SK44 SK43に隣接する第7区東側（N-47）に位置する遺構である。この周辺の土壌群と同じく中世の遺構で、規模としては長軸2.09m、短軸1.42m、深さ63cmを計る。出土遺物としては若干の山茶碗片が見られるが絶対量としては少ない。また、この遺構は東側の壁に土止め状の横木と押さえの杭状の木が2本検出されている。これらの遺構の性格については不明であるが、木部がすでに土状に化しており取り上げることはできなかった。土壌底部は礫層で若干の湧水が見られる。

SK45 第7区東側（M-47、N-47）の中世遺構群の中に位置する浅い皿状の土壌である。規



0 1M

第29図 土壇〔SK〕実測図(10)



第30図 土壇〔SK〕実測図(11)

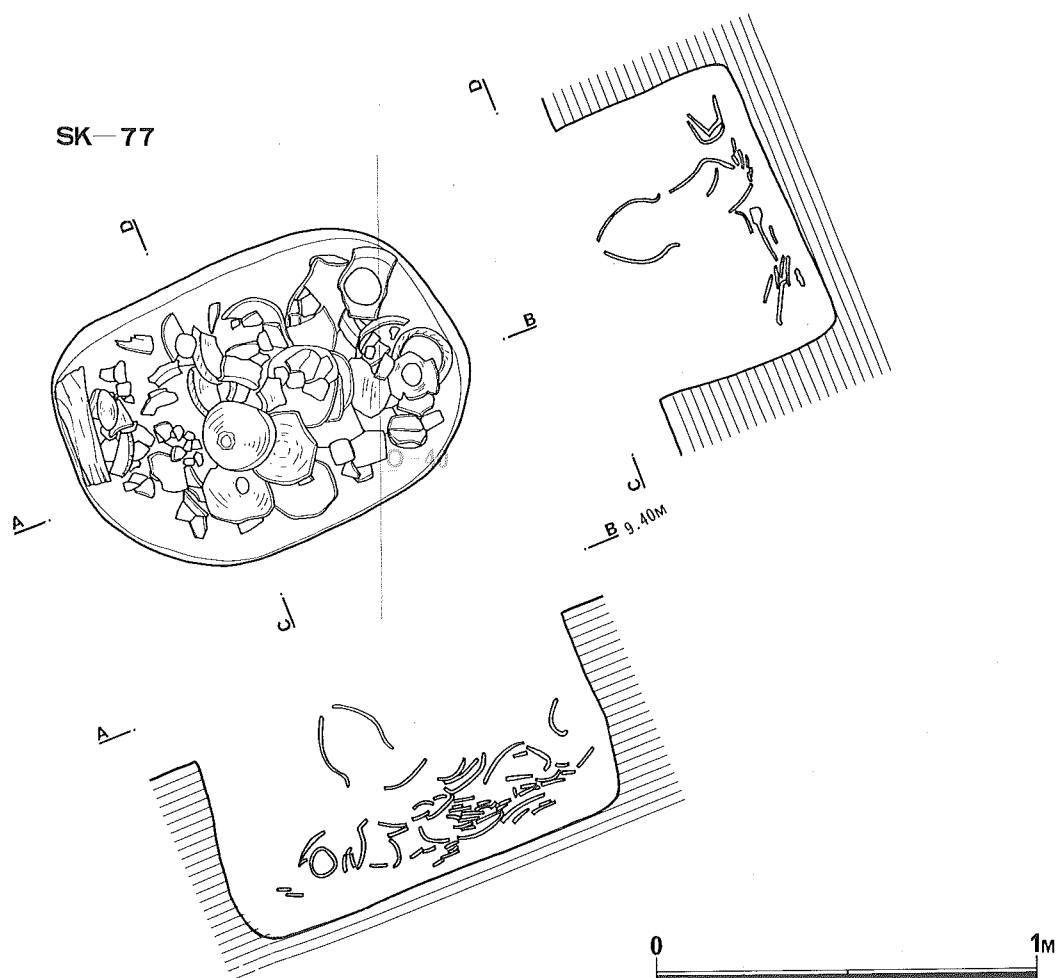
模は長軸1.76m、短軸1.30m、深さ16cmの不定形のプランである。土壇北側はS D99に、土壇西側はSK53に切られている。時期を決定できる遺物は出土していない。

SK47 第7区中央西寄り(K-35)に位置しSD79により上部を掘削されている。土壇の規模は長軸1.55m、短軸0.66m、深さ28cmの小さな遺構である。覆土は茶褐色土ではほぼ一度に埋没したようである。出土遺物は弥生時代後期の壺型土器、高坏、台付甕などの一括遺物が出土している。土壇内に投棄されたようである。

SK55 第7区東側(M-46、N-46)の中世遺構群に位置する弥生時代の土壇である。上部をかなり削平されているため底部のみ残っている。形は不定形であるが、長軸2.20m、短軸1.10m、深さ7cmの規模である。覆土は砂混りの褐色土である。

SK59 第8区西端(N-52、O-52)のSD102に囲まれた地域内に位置する。この土壇は基盤層である砂層を掘り込んでつくられた円形の土壇で、長軸0.92m、短軸0.84m、深さ12cmを計る。出土遺物は弥生時代後期の土器片が薄く推積した炭化物層内から出土している。古墳時代前期の環濠であるSD102や周辺の掘立柱建築物跡群との関連は不明である。

SK73 第7区東端(P-50)の農道に半分かった土壇で排水溝掘削中に検出された。長軸は



第31図 土壇〔SK〕実測図(12)

1 m前後、短軸は64cm、深さ17cmの遺構である。覆土は第1層 黒色土、第2層 黒褐色土で、出土遺物は弥生時代後期の一括遺物が出土している。SK47などと類似した性格であろう。

SK74 第8区東端(M-68・M-69)でSD127と重複している。規模は、長軸1.20m、短軸0.97m、深さ22cmで内部は握拳大から人頭大の礫が詰まっている。中世以降の遺構であろうがその性格は不明である。

SK75 SK74と並んで第8区東端(M-69)に位置する土壇である。この土壇にも握拳大の礫が充当され土壇墓のようである。遺構の規模は長軸0.99m、短軸0.96m、深さ21cmではほぼ円形である。SK74と同じ性格であろう。

SK76 第8区中央(L-61)のSD120の西側に位置する古墳時代初頭の土壇である。遺構の規模は、長軸1.19m、短軸1.22m、深さ60cmを計る。覆土は黒褐色土で東側から流入したように見られる。出土遺物は古式土師器の一括資料で、S字口縁台付甕・柳ヶ坪型壺の口縁部・埴・小形壺・手づくね土器等が見られる。木製品では桜の皮状の樹皮を巻いた丸木弓が1張折って埋められていた。また底部近くからは二枚貝(ハマグリと思われる)の皮の部分が数点出土している。

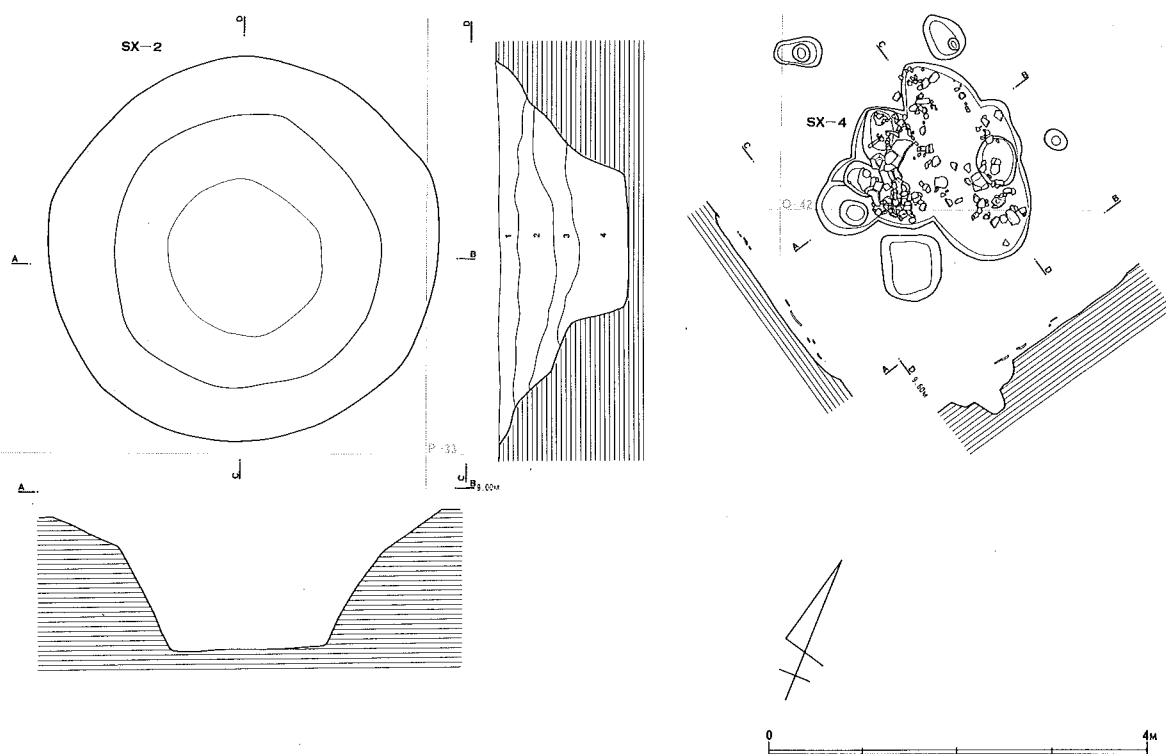
- SK77** 第7区中央(L-61)の旧太田川支流跡の礫層を掘ってつくられている。規模は小さく長軸1.19m、短軸1.22m、深さ60cmで下部は礫層から湧く水が絶えることがない。この土壌からは、弥生時代後期の一括遺物が多量に出土している。器種は、大型壺、小型壺、高坏、台付甕、注口付口縁の壺、などバラエティーに富んでいる。土壌の覆土は墨色土で、やや礫混りである。この土壌内は覆土より土器の量のはるかに多い出土状況である。この土壌の掘られた基盤層は固くしまった礫層であるが、この地点から西へ5mほどで黄褐色粘土層が露出している。遺物の出土状態はいちばん上に逆に入れられた台付甕以外は土壌中位以下に押しつぶされたようなかたちで埋められている。最下層では湿潤な環境が幸いして炭化材等の木製品がかなり良好状態で保存されている。
- SK78** 第7区中央(O-42)の中世の堀SD85の東側に2つ並んで位置している。土壌の規模
- SK79** は小さく、SK78で長軸0.56m、短軸0.46m、深さ15cm、SK79では直径52cm、深さ10cmと共にほぼ円形のプランをもつ。土壌底部には常滑の大甕の底部がそれぞれ埋められている。この甕の破片はSD85の覆土から出土した遺物と接合関係にあることから中世の屋敷跡に付随したものと考えられる。本来は、土中に埋められた埋甕の一種で上部は破壊されさらには耕作により削平されて、わずかに底部を残すのみとなったのであろう。
- SK80** 第8区西側(O-54)のSD102に囲まれたPit群の中に位置する。SK77は北側の壁の一部をPit485で失っているが全体として残りはいい。規模は、長軸1.48m、短軸0.70m、深さ57cmで、基盤層は粘土質の砂層である。この土壌内からは犬1体分の骨が出土している。この犬遺体は下顎骨の残りが良いほかわずかに土壌覆土である墨褐色土に、青白く骨の痕跡を残すのみで数本取りあげられた資料も骨の形をとどめていない。現地での発掘中の観察から、この犬は左脇腹を下にして頭骨の位置をやや高く身体を丸めるような状態で出土している。犬遺体については本報告書収録の金子浩昌先生の考察を参照されたい。出土遺物は、弥生時代後期の高坏の接合部等が出土している。

第1表 土橋遺跡検出土壙一覧表

土壙 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			長軸×短軸	確認面よりの深さ (底部標高m)		
1	第2区	H-64	108.0×88.0	46.5(8.83)	古式土師器	34ページ参照
2	"	J-55	108.0×—	7.0(9.1)	壺	
3	"	I-52	285.0×95.0	56.0(8.6)	弥生土器	
4	"	I-56	132.0×106.0	7.0(9.1)		
5	"	I-51	192.0×—	51.6(8.61)	山茶碗	
6	"	I-56 J-56	—×140.0	23.6(8.52)	弥生土器	
7	"	I-57	200.0×98.0	18.0(8.95)	甕	
	欠 番					
9	第4区	I-49	228.0×156.0	63.0(8.35)	弥生土器	34ページ参照
10	"	J-35	—×130.0	12.0(8.83)		
11	"	J-33 J-34	—×162.0	28.0(8.75)	弥生土器	
12	"	J-30	120.0×66.0	45.5(8.95)		
13	"	J-30 J-31	200.0×—	145.0(7.6)	古式土師器	34ページ参照
14	第5区	J-25	142.0×116.0	17.3(8.65)	弥生土器	
15	"	J-22 J-23	—×174.0	35.0(8.44)	弥生土器	37ページ参照
16	第4区	J-37	—×90.0	35.0(8.98)		
17	第6区	K-27	—×170.0	13.0(8.67)		
18	"	L-24	176.0×64.0	11.0(8.51)		
19	"	K-25	122.0×92.0	29.0(8.37)		
20	"	L-26	—×174.0	22.0(8.45)		
21	"	K-26 L-26	178.0×178.0	16.0(8.56)		
22	"	K-25	126.0×83.0	13.0(8.59)		
23	"	L-27 M-27	—×224.0	25.0(8.44)		
24	"	N-28	207.0×190.0	78.0(7.97)		
25	"	N-24	337.0×190.0	45.0(7.93)		
26	"	P-23	—×74.0	11.0(8.39)	山茶碗	
27	"	K-25	79.0×52.0	9.5(8.63)		
28	"	N-23	198.0×140.0	72.0(7.72)	須恵器	

土壌 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			長軸×短軸	確認面よりの深さ (底部標高m)		
29	第6区	K-26	90.0×65.0	4.0(8.73)		
30	"	"	94.0×62.0	6.0(8.72)		
31	"	K-25	80.0×47.0	11.0(8.66)		
32	第7区	P-32	220.5×—			
33	"	K-30	227.0×—	46.0(8.45)	弥生土器	37ページ参照
34	"	M-35 N-35	174.0×—	19.0(8.69)	弥生土器	44ページ参照
35	"	N-35	240.0×92.0	38.0(8.52)	弥生土器	44ページ参照
36	"	O-41 O-42	282.0×275.0	63.0(8.31)	古式土師器	44ページ参照
37	"	K-42	—×112.0	6.0(8.8)	弥生土器	
38	"	M-42	138.0×110.0	38.0(8.28)	土師器	44ページ参照
39	"	M-42 M-43	368.0×122.0	24.0(8.7)		
40	"	M-43 M-44	324.0×242.0	74.0(8.46)		
41	"	O-45	134.0×120.0	41.0(8.46)	弥生土器	
42	"	O-46	180.0×145.0	26.0(8.63)		
43	"	N-47 O-47	200.0×161.0	50.0(8.46)	山茶碗、箸	44ページ参照
44	"	N-47	209.0×142.0	63.0(8.24)	山茶碗	44ページ参照
45	"	M-47 N-47 P-49	176.0×130.0	16.0(8.66)		44ページ参照
46	"	P-50 Q-49 Q-50	318.0×242.0	23.0(8.61)		
47	"	K-35	155.0×66.0	28.3(8.47)	弥生土器	46ページ参照
48	"	K-38	192.0×192.0	43.0(8.36)		
49	"	L-45	158.0×68.0	51.5(7.96)		
50	"	M-39	148.0×—	37.0(8.05)		
51	"	M-41	132.0×106.0	26.0(8.3)		
52	"	L-42	182.0×130.0	61.0(8.0)		
53	"	M-46 M-47	330.0×300.0	47.0(8.38)		
54	"	L-46 M-46 L-47 M-47	296.0×200.0	75.0(8.09)		

土 壌 番 号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			長軸×短軸	確認面よりの深さ (底部標高m)		
55	第7区	M-46	220.0×110.0	7.0(8.79)	弥生土器	46ページ参照
56	"	N-46				
		K-46	— × 212.0	63.0(8.125)		
		K-47				
57	"	M-46	— × 152.0	10.0(8.76)		
		M-47				
58	"	K-51	120.0×84.0	28.5(8.6)		
		K-52				
59	"	N-52	92.0×84.0	12.0(8.76)	弥生土器	46ページ参照
		O-52				
60	"	O-51		8.5(8.79)		
61	第8区	K-51	— × 148.0	104.0(7.82)		
		K-52				
62	"	K-52		51.5(8.08)		
		K-51				
63	"	Q-53	— × 85.0			
64	"	L-52				
65	"	N-57	159.0×130.0	74.5(8.56)	土師器	
		N-58				
	欠 番					
67	第8区	P-58	274.0×225.0	18.0(8.83)	弥生土器	
		Q-58				
68	"	J-58	132.0×125.0	104.0(8.2)		
69	"	L-61	114.0×104.0			
		L-62				
70	"	Q-52	106.0×34.0	4.0(8.83)		
	欠 番					
72	第8区	M-53	92.0×31.0	18.0(8.69)		
73	第7区	P-50	— × 75.0	17.0(8.73)	弥生土器	用水のため東側一部未調査 46ページ参照
74	第8区	M-68	120.0×97.0	22.0(8.07)		47ページ参照
		M-69				
75	"	M-69	99.5×96.0	21.0(8.08)		47ページ参照
76	"	L-61	122.0×119.0	60.0(8.4)	古式土師器	47ページ参照
77	第7区	N-40	105.0×75.0	51.0(8.24)	弥生土器	48ページ参照
78	"	O-42	56.0×46.0	15.0(8.88)	常滑の甕	48ページ参照
79	"	O-42	52.0×52.0	10.0(8.83)	"	48ページ参照
80	第8区	O-54	62.0×39.0	9.0(8.37)	弥生土器	48ページ参照



第32図 井戸状遺構・土器集中地点〔SX〕実測図

第3節 その他の遺構（SX）

SX 2 第7区西側南のS D85の西側（O—33）に位置する井戸状の遺構である。円形のプランを持ち、確認面での直径は4.10mで深さ1.40mを計る。断面形態はスリバチ形上部とやや垂直に近く落ちる下半部に分かれている。覆土の推積は次のとおりである。

第1層 黒灰色粘土（褐色粒子を多量に含む）

第2層 灰色粘土（第1層より明るく褐色粒子を含む）

第3層 黒灰色粘土（炭化木片を少々含む）

第4層 灰白色土（木片を少々含む）

出土遺物は土器片、木製品がありS D85との関連が注目される。その他S D85内に溝跡、Pit等が散在するが出土遺物がなく時期は決定し難い。

SX 4 第7区のはぼ中央（N—42、O—42）でS D85東側の中世Pit群と重複するように検出された土器集中地点である。この遺構は、土器が集中し推積した層と不定形の落ち込み、そしてPitからなっている。土器の集中する範囲は南北1.5m、東西2m、深さ10cmの中に押しつぶされたように広がっている。土器の推積層下には直径65cm、深さ16cmのPitと深さ約5cmの不定形の落ち込みが広がっている。これらの状況から住居跡に伴う遺物の一部の可能性がある。

第2表 土橋遺跡検出Pit一覧表

Pit 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			径 (長×短)	確認面よりの深さ (底部標高m)		
1	第2区	I-68	58.0×44.0	37.4 (8.93)	須恵器片	SB-1 柱穴、木片
2	"	"	75.0×43.0	38.0 (8.92)	須恵器片	SB-1 柱穴、根固め
3	"	"	46.0×46.0	35.9 (8.95)	須恵器片	SB-1 柱穴
4	"	"	48.0×38.0	34.1 (8.91)	須恵器片	SB-1 柱穴
5	"	I-69	50.0×36.0	28.7 (9.00)		SB-1 柱穴
6	"	J-69	68.0×48.0	29.0 (8.98)	須恵器片	SB-1 柱穴、根固め
7	"	J-68	54.0×42.0	40.0 (8.85)		SB-1 柱穴
8	"	"	52.0×42.0	62.0 (8.68)		SB-1 柱穴
9	"	I-68、69	58.0×48.0	20.2 (8.98)		SB-1 柱穴
10	"	J-65	80.0×56.0	35.5 (8.93)		
11	"	"	— ×46.0	34.0 (8.93)		
12	"	I-64	40.0×36.0	27.0 (9.05)		
13	"	"		7.0 (9.25)		
14	"	"		10.0 (9.21)		
15	"	"	48.0×46.0	18.0 (9.14)		礎板
16	"	"	38.0×34.0	22.0 (9.09)		SB-2
17	"	"	20.0×18.0	13.0 (9.16)		
18	"	"	34.0×32.0	16.5 (9.11)		SB-2、木片
19	"	"	34.0×32.0	28.5 (8.98)		
20	"	"	— ×32.0	4.5 (9.24)		SB-2
21	"	H-64	28.0×26.0	20.5 (9.1)		
22	"	I-63、64	42.0×40.0	20.0 (9.09)		SB-2、礎板
23	"	H-64	38.0×28.0	6.5 (9.23)		
24	"	H-65	38.0×24.0	11.0 (9.21)		
25	"	J-64	46.0×44.0	48.0 (8.83)		
26	"	J-65	38.0×36.0	28.5 (9.02)		
27	"	"	32.0×30.0	4.5 (9.25)		
28	"	I-69	64.0×46.0	9.1 (9.24)		
29	"	"	56.0×56.0	8.6 (9.23)		
30	"	"	64.0×48.0	9.0 (9.24)		
31	"	"	32.0×28.0	18.1 (9.14)		
32	"	I-70	20.0×18.0	8.6 (9.23)		
33	"	I-71	40.0×36.0	16.1 (9.12)		

Pit 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			径 (長×短)	確認面よりの深さ (底部標高m)		
34	第2区	H-69	22.0×20.0	15.3 (9.18)		
35	"	I-62	28.0×28.0	14.0 (9.05)		
36	"	"	32.0×32.0	6.0 (9.15)		
37	"	H-62	18.0×18.0	5.5 (9.16)		
38	"	I-61	34.0×34.0	15.0 (9.04)		
39	"	"	38.0×38.0	13.0 (9.01)		
40	"	H-61	62.0×52.0	29.5 (8.89)		
41	"	I-61	42.0×40.0	20.0 (8.97)		
42	"	I-60	68.0×—	16.5 (9.01)		
43	"	"	28.0×24.0	23.5 (8.95)		
44	"	H-67	24.0×—	50.0 (9.22)		
45	"	I-53	22.0×18.0	7.5 (9.12)		
46	"	J-53	62.0×—	10.0 (9.06)		
47	"	I-55	56.0×60.0	34.3 (8.81)		SB-3
48	"	"	74.0×60.0	17.5 (8.97)		SB-3、根固め
49	"	J-54	57.0×50.0	26.5 (8.90)	須恵器片	SB-3
50	"	"	58.0×48.0	27.8 (8.91)		SB-3、根固め
51	"	I-54	48.0×44.0	13.8 (9.06)		SB-3
52	"	"	47.0×40.0	18.8 (9.00)		
53	"	I-53	66.0×62.0	45.1 (8.73)		SB-4
54	"	"	65.0×62.0	25.7 (8.92)		
55	"	"	67.0×58.0	29.1 (8.87)		SB-4
56	"	"	61.0×58.0	26.3 (8.90)		SB-4
57	"	H-53	62.0×50.0	25.0 (8.93)		SB-4
58	"	I-53	35.0×32.0	17.5 (9.03)		
59	"	"	33.0×32.0	8.5 (9.10)		
60	"	I-52	80.0×70.0	35.5 (8.77)		SB-4
61	"	"	72.0×62.0	37.0 (8.75)		
62	"	H-52	30.0×28.0	7.5 (9.08)		
63	"	I-55	48.0×42.0	18.8 (8.99)		SB-3
64	"	"	32.0×30.0	28.8 (8.88)		SB-3
65	"	"	48.0×44.0	13.5 (9.04)		SB-3
66	"	"	56.0×56.0	9.0 (9.10)		SB-3

Pit 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			径 (長×短)	確認面よりの深さ (底部標高m)		
67	第2区	I-55	52.0×48.0	17.2 (9.00)		S B-3
68	〃	H-56	58.0×54.0	11.0 (9.08)		
69	〃	I-54	26.0×20.0	17.3 (9.00)		
70		〃	62.0×56.0	30.0 (8.86)		S B-4
71		〃	36.0×34.0	26.2 (8.94)		
72	第2区	I-53	46.0×46.0	30.4 (8.88)		S B-4
73	〃	I-54	44.0×28.0	14.5 (9.03)		
74	〃	I-53	28.0×20.0	10.5 (9.08)		
75	〃	〃	23.0×24.0	5.6 (9.10)		
76	〃	H-53	38.0×37.0	17.0 (9.03)		
77	〃	〃	44.0×43.0	9.3 (9.11)		S B-4
78	〃	H-54	20.0×18.0	14.5 (9.04)		
79	〃	〃	18.0×17.0	20.0 (9.00)		
80	〃	〃	52.0×—	12.2 (9.05)		
81	〃	〃	22.0×20.0	25.0 (8.94)		
82	〃	H-53	42.0×40.0	27.0 (8.94)		
83	〃	〃	26.0×22.0	14.6 (9.05)		
84	〃	I-53	54.0×50.0	28.9 (8.92)		
85	〃	J-53	92.0×78.0	41.5 (8.75)		S B-4
86	〃	〃	72.0×46.0	31.0 (8.81)		
87	〃	〃	26.0×26.0	25.8 (8.86)		
88	〃	〃	53.0×35.0	24.3 (8.92)		
89	〃	J-52	32.0×32.0	30.9 (8.80)		
90	〃	〃	45.0×40.0	11.6 (8.98)		
91	〃	〃	20.0×19.0	15.6 (8.93)		
92	〃	H-52	48.0×—	19.0 (8.93)		
93	〃	H-51	58.0×56.0	28.4 (8.81)		
94	〃	H-52	50.0×40.0	12.8 (8.97)		
95	〃	〃	25.0×24.0	10.0 (9.04)		
96	〃	H-51	46.0×36.0	5.5 (9.10)		
	欠 番					
98		H-51	46.0×40.0	12.9 (9.00)		
99	第2区	H-58	72.0×68.0	6.5 (9.20)		

Pit 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			径 (長×短)	確認面よりの深さ (底部標高m)		
100	第2区	J-54	56.0×48.0	24.0 (8.92)		
101	"	I-58 J-58	32.0×28.0	10.0 (9.22)		
102	"	I-59	42.0×32.0	16.0 (9.17)		
103	"	J-61	34.0×30.0	9.0 (9.06)		
104	"	I-57	70.0×40.0	24.5 (9.02)		
105	"	I-54	27.0×22.0	14.5 (9.04)		
106	"	H-58	26.0×24.0	19.6 (9.10)		
107	"	I-59	25.0×22.0	5.9 (9.20)		
108	"	"	38.0×32.0	9.0 (9.26)		
109	"	"	24.0×20.0	4.0 (9.27)		
110	"	I-58	42.0×42.0	19.5 (9.12)		
111	"	H-57	34.0×32.0	27.0 (9.00)		
112	"	I-54	18.0×17.0	5.5 (9.13)		
113	"	"	18.0×16.0	10.3 (9.09)		
114	"	"	28.0×26.0	5.5 (9.12)		SB-3
115	"	"	16.0×16.0	6.1 (9.12)		
116	"	H-53	36.0×36.0	27.6 (8.89)		
117	"	"	32.0×31.0	14.5 (9.01)		
118	"	I-53	22.0×20.0	17.0 (9.03)		
119	"	"	32.0×26.0	7.0 (9.12)		
120	"	"	63.0×56.0	11.3 (9.06)		
121	"	I-53	41.0×35.0	6.1 (9.10)		
122	"	"	60.0×50.0	14.0 (9.00)		
123	"	"	38.0×24.0	16.2 (9.02)		
124	"	"	34.0×28.0	11.9 (9.03)		SB-3
125	"	H-54	13.0×12.0	5.1 (9.12)		SB-3
126	"	"	16.0×14.0	7.5 (9.00)		
127	"	"	30.0×30.0	28.2 (8.90)		
128	"	"	19.0×18.0	10.1 (9.08)		
129	"	"	20.0×20.0	10.1 (9.09)		
130	"	H-52	26.0×22.0	12.9 (9.03)		
131	"	I-53	20.0×18.0	5.5 (9.15)	須恵器片	
132	"	I-48	72.0×56.0	23.0 (8.73)		

Pit 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			径 (長×短)	確認面よりの深さ (底部標高m)		
133	第2区	I-48	56.0×52.0	18.4(8.78)	須恵器片	木片
134		"	38.0×34.0	17.0(8.83)		
135	第4区	I-47	30.0×26.0	9.2(8.94)		
136		J-48	26.0×23.0	15.5(8.81)		
137	"	J-48	30.0×27.0	11.0(8.91)		
138	"	J-47	56.0×54.0	24.8(8.80)	須恵器片	礎板
139	"	"	30.0×20.0	21.7(8.83)		
140	"	I-47	34.0×32.0	29.2(8.75)		
141	"	"	38.0×32.0	24.2(8.80)		
142	"	J-47	30.0×27.0	24.1(8.82)		
143	"	I-47	27.0×26.0	22.0(8.83)	須恵器片	礎板
144	"	"	32.0×31.0	16.5(8.89)		
145	"	"	31.0×29.0	17.5(8.87)		
146	"	"	24.0×24.0	7.1(8.98)		
147	第4区	I-46	25.0×25.0	31.4(8.68)		
148		J-46	30.0×26.0	28.4(8.70)		
149	"	I-46	53.0×—	16.5(8.87)		
150	"	J-47	32.0×—	17.7(8.89)		
151	"	J-46	25.0×—	33.1(8.74)		
152	"	"	32.0×28.0	26.4(8.74)		
153	"	"	70.0×50.0	44.0(8.58)		
154	"	J-45	61.0×60.0	7.7(8.99)		
155	"	"	48.0×32.0	15.0(8.90)		
156	"	"	46.0×40.0	4.0(9.03)		
157	"	"	52.0×42.0	18.8(8.89)		
158	"	J-44	62.0×59.0	7.2(9.01)		
159	"	J-47	39.0×32.0	33.2(8.70)		
160	"	J-48	84.0×57.0	17.0(8.84)		
161	第4区	J-45	34.0×29.0	12.3(8.96)		
162		J-44	68.0×—	27.3(8.81)		
163	"	"	35.0×32.0	15.8(8.92)		
164	"	"	43.0×—	36.0(8.69)		
165	"	"	40.0×28.0	4.2(9.01)		

Pit 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			径 (長×短)	確認面よりの深さ (底部標高m)		
166	第4区	J-42	32.0×22.0	27.3 (8.78)		
167	"	"	52.0×42.0	5.8 (9.00)		
168	"	"	30.0×—	34.6 (8.69)		
169	"	I-42	28.0×26.0	8.4 (8.96)		
170	"	J-42	44.0×34.0	6.0 (8.98)		
171	"	I-42	42.0×36.0	17.5 (8.85)		
172	"	J-42	30.0×26.0	27.3 (8.77)		
173	"	I-42	42.0×40.0	17.4 (8.87)		
174	"	I-41	52.0×35.0	6.0 (8.96)		
175	"	J-41	44.0×42.0	5.7 (8.96)		
176	"	J-37	78.0×60.0	18.0 (8.79)		
177	"	J-33	36.0×36.0	32.0 (8.71)		
178	"	J-30	72.0×42.0	41.0 (8.64)		
179	"	"	38.0×30.0	14.5 (8.92)		
180	"	"	63.0×55.0	36.0 (8.69)		
181	"	"	28.0×28.0	10.2 (8.72)		
182	"	"	40.0×39.0	13.6 (8.92)		
183	第5区	J-28	24.0×24.0	8.4 (8.66)		
184	"	J-27	36.0×34.0	9.7 (8.75)	須恵器片 土師器片	
185	"	J-25	40.0×37.0	6.5 (8.73)		
186	第4区	J-41	72.0×55.0	6.4 (8.99)		
187	"	J-33	96.0×—	24.7 (8.76)		
188	"	J-35	30.0×28.0	15.3 (8.70)		
189	"	"	43.0×36.0	16.8 (8.66)		
190	"	"	36.0×—	7.8 (8.76)	須恵器片	
191	"	J-47	30.0×28.0	12.2 (8.96)		
192	"	"	26.0×—	15.1 (8.90)		
193	"	"	22.0×20.0	20.2 (8.84)		
194	"	J-45	32.0×29.0	10.8 (8.98)		
195	"	"	40.0×28.0	19.2 (8.87)		
196	"	I-47	— ×38.0	14.5 (8.89)		
197	"	J-44	— ×36.0	16.1 (8.89)		
198	"	J-42	29.0×32.0	18.0 (8.88)		

Pit 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			径 (長×短)	確認面よりの深さ (底部標高m)		
199	第4区	I-40	50.0×-	10.0(8.75)		
	欠番					
201	第4区	J-29	40.0×37.0	9.8(8.87)		
202	"	"	72.0×-	35.2(8.70)		
203	"	J-35	38.0×-	5.0(8.88)		
204	"	J-29	56.0×-	45.2(8.61)		
205	"	H-54	-×34.0	4.0(9.15)		
206	第2区	J-53	29.0×26.0	24.3(8.88)	土師器片	
207	第6区	K-28	32.0×-	4.0(8.76)		
208	"	"	38.0×-	11.0(8.70)	須恵器片	
209	"	M-21	30.0×30.0	9.0(8.40)	"	
210	"	K-25	50.0×47.0	5.5(8.63)		
211	"	L-28	31.0×-	5.0(8.78)	須恵器片	
212	"	"	38.0×-	6.0(8.76)	"	
213	"	"	38.0×-	5.0(8.76)	"	
214	"	"	27.0×-	3.0(8.77)	"	
215	"	"	32.0×28.0	13.0(8.67)	"	
216	"	"	22.0×23.0	3.0(8.77)		
217	"	"	34.0×-	4.0(8.77)		
218	"	"	25.0×-	2.0(8.80)		
219	"	"	35.0×-	3.8(8.79)		
220	"	"	32.0×-		須恵器片	
221	"	"	25.0×20.0	8.0(8.72)		
222	"	"	48.0×39.0	11.0(8.72)	須恵器片	
223	"	O-22	60.0×50.0	25.0(8.27)		
224	"	O-28	31.0×30.0	30.5(8.43)		
225	"	"	22.0×22.0	6.0(8.69)		
226	"	O-28	29.0×18.0	2.0(8.72)		
227	"	L-27	73.0×-	10.0(8.43)		
228	"	L-28	62.0×48.0	15.0(8.63)		
229	"	K-28	38.0×28.0	4.0(8.76)		
230	"	"	19.0×18.0	10.0(8.68)		
231	"	L-27	23.0×18.0	4.0(8.76)		

Pit 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			径 (長×短)	確認面よりの深さ (底部標高m)		
232	第6区	L-26	44.0×33.0	14.5 (8.64)		
233	"	K-26	32.0×24.0			
234	"	L-26	24.0×22.0			
235	"	"	32.0×23.0			
236	"	K-25	54.0×47.0	18.0 (8.67)		
237	"	" "	22.0×21.0	9.0 (8.67)		
238	"	"	30.0×25.0	12.0 (8.65)		
239	"	N-25	72.0×68.0	17.0 (8.27)		
240	"	O-25	41.0×—	9.5 (8.43)		
241	"	"	30.0×—	11.0 (8.44)		
242	"	"	86.0×—	11.5 (8.43)		
243	"	P-25	40.0×—	13.0 (8.41)		
244	"	"	44.0×34.0	12.5 (8.41)		
245	"	"	28.0×25.0	15.5 (8.39)		
246	"	P-24	38.0×22.0	14.5 (8.40)		
247	"	N-23	49.0×—	20.0 (8.04)		
	欠 番					
249	第7区	O-30	34.0×30.0	25.0 (8.45)	須恵器片	
250	"	N-29	34.0×30.0	26.0 (8.48)		
251	"	N-30	44.0×34.0	7.0 (8.67)		
252	"	"	28.0×23.0	16.0 (8.58)		
253	"	"	42.0×34.0	19.0 (8.55)		
254	"	"	38.0×32.0	10.0 (8.63)		
255	"	"	32.0×30.0	18.0 (8.52)		
256	"	"	40.0×30.0	18.0 (8.54)		
257	"	"	51.0×42.0	14.0 (8.61)		
258	"	O-31	30.0×28.0	6.0 (8.68)		
259	"	N-31	22.0×20.0	10.0 (8.63)		
260	"	M-31	35.0×34.0	10.0 (8.61)		
261	"	O-31	31.0×27.0	38.0 (8.35)		SB-6、礎板
262	"	"	15.0×12.0	14.0 (8.58)		SB-6
263	"	"	17.0×15.0	22.0 (8.50)		
264	"	"	30.0×29.0	37.0 (8.33)		SB-6、礎板

Pit 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			径 (長×短)	確認面よりの深さ (底部標高m)		
265	第 7 区	P-33	29.0 × —	13.0 (8.57)		
266	”	N-33	52.0 × 44.0	14.0 (8.61)		
267	”	”	24.0 × 22.0	8.0 (8.68)		
268	”	”	70.0 × 65.0	56.0 (8.20)		
269	”	”	28.0 × 27.0	13.0 (8.63)		
270	”	”	42.0 × 32.0	17.0 (8.60)		
271	第 6 区	N-33	36.0 × 32.0	13.0 (8.64)		S B-9
272	”	”	40.0 × 36.0	16.0 (8.61)		S B-9
273	第 7 区	M-33	42.0 × 38.0	11.0 (8.66)		
274	”	”	35.0 × 28.0	28.0 (8.47)		
275	”	N-33	23.0 × 23.0	7.0 (8.71)		
276	”	”	46.0 × 42.0	19.0 (8.59)		
277	”	”	20.0 × 18.0	6.0 (8.72)		
278	”	”	40.0 × 36.0	41.0 (8.35)		
279	”	”	30.0 × —	32.0 (8.43)		
280	”	”	48.0 × 44.0	18.0 (8.56)		
281	”	”	32.0 × 31.0	11.0 (8.66)		
282	”	N-34	20.0 × 19.0	4.0 (8.71)		
283	”	”	49.0 × 42.0	14.0 (8.62)		S B-5
284	”	”	51.0 × 50.0	26.0 (8.56)		S B-5
285	”	”	50.0 × 40.0	35.0 (8.43)		S B-5
286	”	N-33	68.0 × 50.0	27.0 (8.51)		S B-5
287	”	O-34	53.0 × 37.0	20.0 (8.59)		S B-5
288	”	N-34	51.0 × 43.0	27.0 (8.52)		S B-5
289	”	”	44.0 × 41.0	29.0 (8.51)		S B-5
290	”	”	38.0 × 32.0	14.0 (8.63)		S B-5
291	”	”	40.0 × 37.0	3.0 (8.76)		
292	”	”	18.0 × 17.0	10.0 (8.68)		
293	”	”	37.0 × 26.0	16.0 (8.62)		
294	”	”	23.0 × 22.0	12.0 (8.67)		
295	”	”	23.0 × 20.0	8.0 (8.70)		
296	”	”	16.0 × 15.0	16.0 (8.62)		
297	”	”	72.0 × 70.0	6.0 (8.73)		

Pit 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			径 (長×短)	確認面よりの深さ (底部標高m)		
298	第7区	N-34	26.0×18.0	15.0 (8.62)		
299	"	"	34.0×34.0	10.0 (8.68)		
300	"	O-34	66.0×52.0	28.0 (8.48)		
301	"	"	70.0×44.0	36.0 (8.40)		
302	"	"	34.0×32.0	12.0 (8.65)		
303	"	M-32	60.0×47.0	12.0 (8.66)		S B-9
304	"	"	40.0×38.0	8.0 (8.68)		S B-9
305	"	M-33	22.0×20.0	9.0 (8.66)		
306	"	"	34.0×29.0	7.0 (8.65)		S B-9
307	"	"	23.0×24.0	5.0 (8.71)		
308	"	N-32	17.0×17.0	19.0 (8.59)		
309	"	"	38.0×38.0	10.0 (8.68)		
310	"	M-34	28.0×26.0	28.0 (8.60)	須恵器片	
311	"	N-34	17.0×16.0	4.0 (8.74)		
312	"	M-33		26.0 (8.47)	須恵器片	S B-7
313	"	"	13.0×88.0	40.0 (8.32)		S B-7
314	"	M-34	14.0×78.0	48.0 (8.30)		S B-7
315	"	K-34	50.0×42.0	16.0 (8.61)	須恵器片	
316	"	K-33	64.0×47.0	10.0 (8.67)		
317	"	M-30	34.0×34.0	31.0 (8.45)		
318	"	O-35	48.0×46.0	10.5 (8.72)		S B-10
319	"	"	20.0×20.0	3.0 (8.78)		
320	"	"	48.0×46.0	14.0 (8.67)		S B-10
321	"	"	20.0×20.0	12.0 (8.69)		
322	"	"	52.0×49.0	19.0 (8.63)		S B-10
323	"	N-35	46.0×38.0	12.5 (8.66)		S B-10
324	"	O-36	78.0×38.0	12.0 (8.70)		
325	"	N-36	40.0×38.0	11.0 (8.67)		
326	"	"	39.0×36.0	10.0 (8.68)		
327	"	"	30.0×28.0	10.0 (8.69)		S B-10
328	"	"	44.0×38.0	11.0 (8.69)		
329	"	O-37	89.0×85.0	64.0 (8.17)		
330	"	"	35.0×32.0	10.0 (8.73)		

Pit 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			径 (長×短)	確認面よりの深さ (底部標高m)		
331	第7区	O-36	46.0×36.0	7.0 (8.73)	須恵器片	S B-10
332	"	"	33.0×27.0	7.0 (8.75)		S B-10
333	"	"	63.0×60.0	12.0 (8.69)		
334	"	"	40.0×38.0	7.0 (8.75)		
335	"	"	100.0×96.0	12.5 (8.70)		
336	"	N-37	30.0×26.0	11.0 (8.70)		
337	"	O-37	30.0×28.0	4.0 (8.77)		
338	"	O-38	27.0×24.0	5.0 (8.75)		
339	"	O-37	56.0×51.0	16.0 (8.66)		
340	"	O-38	70.0×61.0	7.0 (8.72)		
341	"	"	34.0×31.0	8.0 (8.73)		
342	"	K-35	48.0×39.0	6.0 (8.67)		
343	"	K-35	56.0×48.0	7.3 (8.65)		
	欠 番					
345	第7区	L-36	36.0×36.0	(8.57)	須恵器片	
346	"	L-37	32.0×31.0	21.3 (8.60)		
347	"	"	28.0×26.0	13.3 (8.69)		
348	"	"	20.0×19.0	4.4 (8.80)		
349	"	"	12.0×12.0	2.3 (8.82)		
350	"	"	22.0×22.0	5.8 (8.78)		
351	"	"	29.0×26.0	11.8 (8.72)		
352	"	L-38	80.0×78.0	31.3 (8.52)		S 字、甕、壺
353	"	M-38	91.0×85.0	8.2 (8.80)		
354	"	M-39	— ×78.0	6.0 (8.78)		
355	"	P-32	34.0×31.0	47.0 (8.26)	古式土師器 (S字片)	S B-6
356	"	L-33	122.0×42.0	55.0 (8.25)		S B-7
357	"	L-34	20.0×20.0	22.0 (8.50)		S B-7
358	"	M-36	43.0×36.0	12.7 (8.73)		
359	"	M-31	40.0×36.0	16.0 (8.66)		
360	"	N-31	20.0×19.0	13.0 (8.61)		
361	"	N-32	26.0×20.0	15.0 (8.60)		
362	"	"	20.0×19.0	6.0 (8.69)		
363	"	M-33	32.0×28.0	7.0 (8.69)		S B-9

Pit 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			径 (長×短)	確認面よりの深さ (底部標高m)		
364	第7区	L-33	18.0×17.0	5.0 (8.33)	須恵器片	S B-7
365	"	K-31	74.0×66.0	21.0 (8.52)		
366	"	"	34.0×32.0	11.0 (8.62)		
367	"	O-34	21.0×20.0	8.0 (8.73)		
368	"	"	41.0×42.0	12.0 (8.68)		
369	"	O-42	22.0×22.0	36.0 (8.60)		
370	"	"	38.0×22.0	13.0 (8.86)		
371	"	"	29.0× -	50.5 (8.49)		
372	"	"	- ×42.0	36.0 (8.60)		
373	"	"	53.0×46.0	22.0 (8.76)		
374	"	"	42.0×38.0	25.0 (8.72)		
375	"	"	38.0×35.0	14.0 (8.83)		S B-8
376	"	"	40.0×26.0	14.5 (8.84)		
	欠 番					
	欠 番					
379	第7区	O-42	52.0×47.0	15.5 (8.83)	須恵器片	S B-8 礎板
380	"	N-42 O-42	134.0×132.0	91.0 (8.07)		
381	"	N-42	84.0×76.0	18.0 (8.80)		
382	"	"	88.0×52.0	8.0 (8.91)		
383	"	"	31.0×28.0	9.0 (8.89)		
384	"	"	18.0×19.0	6.0 (8.92)		
385	"	L-34	26.0×24.0	27.0 (8.47)		
386	"	P-29	56.0×46.0	14.0 (8.56)		
387	"	O-40	60.5×48.0	1.0 (8.83)		
388	"	"	50.0× -	11.0 (8.83)		
389	"	N-33	26.0×26.0	15.0 (8.64)		
	欠 番					
391	第7区	N-41	18.0×16.0	21.0 (8.68)	須恵器片	S B-8
392	"	N-40	19.0×19.0	10.0 (8.77)		
393	"	"	40.0×34.0	12.0 (8.76)		
394	"	O-42	38.0×30.0	6.0 (8.90)		
395	"	K-43	31.0×28.0	11.0 (8.75)		
396	"	N-42	41.0×38.0	21.5 (8.78)		

Pit 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			径 (長×短)	確認面よりの深さ (底部標高m)		
397	第7区	N-43	50.0×30.0	14.0 (8.85)	須恵器片	SB-8
398	"	N-43	64.0×54.0	39.5 (8.55)		
399	"	N-43	53.0×40.0	4.5 (8.83)		
400	"	"	26.0×22.0	7.0 (8.88)		
401	"	"	52.0×44.0	7.5 (8.84)		
402	"	"	44.0×34.0	11.5 (8.8)		
	欠 番					
404	第7区	O-49	88.0×66.0	43.0 (8.47)		木片
405	"	P-49	100.0×91.0	65.5 (8.23)		
406	"	"	60.0×52.0	29.0 (8.6)		
407	"	Q-49	70.0×61.0	28.0 (8.55)		
408	"	Q-50	46.0×43.0	12.5 (8.71)		根固め
409	第8区	Q-53	16.0×13.0	21.0 (8.68)		
410	第7区	N-43	66.0×41.0	16.0 (8.76)		
411	"	"	70.0×63.0	8.5 (8.87)		
412	"	K-46	68.0×57.0	30.0 (8.48)		
413	"	K-45	90.0× —	8.5 (8.68)		
414	"	K-45	54.0×37.0	12.0 (8.68)		
415	"	"	18.0×14.0	5.0 (8.75)		
416	"	K-46	— ×76.0	12.0 (8.68)		
417	"	"	— ×36.0	8.5 (8.76)		
418	"	K-47	72.0×50.0	14.5 (8.52)		
419	"	K-46	19.0×14.5	6.5 (8.73)		
420	"	L-45	40.0×39.0	17.5 (8.43)		
421	"	L-46	20.5×15.0	17.0 (8.46)		
422	第8区	Q-52	30.0×28.0	15.0 (8.7)		
423	"	P-52	28.0×28.0	13.5 (8.73)		
424	"	"	12.0×12.0	2.5 (8.86)		
425	"	"	20.0×18.0	5.0 (8.82)		
426	"	"	16.0×14.0	8.0 (8.80)		
427	"	"	15.0×15.0	3.5 (8.825)		
428	"	"	22.0×20.0	6.0 (8.82)		
429	"	O-52	21.0×18.0	6.5 (8.80)		

Pit 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			径 (長×短)	確認面よりの深さ (底部標高m)		
430	第8区	O-52	30.0×26.0	7.0 (8.70)	土師器	
431	"	"	21.0×20.0	10.0 (8.77)		
432	"	"	20.0×19.0	5.5 (8.82)		
433	"	"	24.0×22.0	19.0 (8.67)		
434	"	"	80.0×52.0	37.0 (8.49)		
435	"	N-52 O-52	32.0×29.0	11.0 (8.76)		
436	"	N-52	34.0×50.0	17.5 (8.69)		
437	"	"	64.0×57.0	8.0 (8.79)		
438	"	"	25.0×22.0	4.5 (8.82)		
439	"	O-53	76.0×66.0	12.0 (8.75)		S B-12
440	"	"	48.0×36.0	22.0 (8.65)	台付甕(完形) 壹口頸部、高 坏脚部	S B-13、木端材
441	"	N-52	65.0×57.0	8.0 (8.82)		S B-11
442	"	O-51	80.0×68.0	18.0 (8.70)		S B-11
443	"	P-52	50.0×44.0	15.5 (8.72)		S B-11
444	"	O-52	48.0×32.0	8.0 (8.79)		S B-11
445	"	"	55.0×49.0	7.5 (8.81)		S B-11
446	"	P-53	14.0×14.0	6.0 (8.82)		Y高坏、須恵 器片
447	"	Q-53	72.0×69.0	18.0 (8.70)		
448	"	N-52	42.0×29.0	112.5 (8.79)		
449	"	N-53	79.0×71.0	28.0 (8.61)		S B-12
450	"	M-53	104.0×78.0	35.0 (8.57)		S B-12
451	"	M-52	31.0×24.0	9.0 (8.81)		木片
452	"	M-52	36.0×36.0	11.5 (8.68)		礎板
453	"	M-52	18.0×14.0	7.0 (8.81)		
454	"	M-51	38.0×33.0	3.0 (8.78)		
455	"	L-52 M-52	80.0×52.0	6.5 (8.75)		
456	"	M-53	42.0×40.0	4.5 (8.80)		
457	"	M-53	90.0×44.0	8.0 (8.80)		
458	"	M-54	39.0×34.0	13.0 (8.85)		
459	"	M-53 M-54	64.0×32.0	11.0 (8.87)		
460	"	N-53 N-54	84.0×70.0	13.5 (8.86)		S B-12、礎板
461	"	N-54	60.0×43.0	20.0 (8.77)		S B-12
462	"	N-54	121.0×61.0	10.5 (8.86)	須恵器片	

Pit 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			径 (長×短)	確認面よりの深さ (底部標高m)		
463	第8区	O-53	92.0×83.0	36.0 (8.63)	土師器片	S B-12
464	"	O-54	— × 31.0	18.5 (8.84)		
465	"	"	65.0×54.0	27.0 (8.74)		礎板
466	"	P-54	— × 66.0	10.0 (8.86)		
467	"	"	72.0×51.0	34.0 (8.60)		礎板、柱根
468	"	P-53	28.0×28.0	17.0 (8.70)		
469	"	"	80.0×70.0	29.0 (8.59)		木片
470	"	"	76.0×92.0	47.0 (8.67)		柱根
471	"	"	36.0× —	24.0 (8.68)		礎板
472	"	"	104.0×103.0	48.5 (8.42)		
473	"	Q-53	26.0×20.0	5.5 (8.86)		
474	"	"	19.0×18.0	7.5 (8.84)		
475	"	Q-54	60.0×40.0	24.0 (8.70)		木片
476	"	P-58	16.0×14.0	3.0 (8.89)		
477	"	Q-54	94.0×72.0	49.5 (8.40)		木端材
478	"	"	22.0×22.0	9.0 (8.80)		
479	"	"	68.0×64.0	34.0 (8.53)		
480	"	"	90.0×59.0	25.0 (8.63)		
481	"	O-54	62.0×40.0	10.5 (8.86)		
482	"	O-54	17.0×14.0	4.0 (8.88)		
483	"	P-54	62.0×39.0	9.0 (8.86)		木片
484	欠 番					
485	第8区	P-54	— × 62.0	6.4 (8.61)		木片
486	"	P-54	70.0×38.0	7.0 (8.75)		
487	"	N-54 N-55	56.0×45.0	5.0 (8.90)		柱根
488	"	P-58	20.0×14.0	6.5 (8.90)		
489	"	N-54	70.0×62.0	20.0 (8.75)		
490	"	P-53 Q-53	100.0×98.0	19.0 (8.66)		S B-13、木端材
491	"	Q-53	16.0×12.0	10.5 (8.87)		
492	"	Q-54	112.0×84.0	30.0 (8.62)		S B-13、木端材
493	"	Q-54	104.0×61.0	32.0 (8.68)		木端材
494	"	O-55	26.0×23.0	8.0 (8.86)		
495	"	"	62.0×47.0	11.0 (8.85)		

Pit 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			径 (長×短)	確認面よりの深さ (底部標高m)		
496	第8区	J-54、55 K-54、55	174.0×170.0	13.0 (9.02)		
497	"	M-57	51.0×48.0	22.0 (9.01)		
498	"	L-57	38.0×37.0	9.0 (9.20)		
499	"	M-57	18.0×—	14.0 (9.14)		
500	"	J-53	60.0×49.0	17.0 (9.12)		
501	"	M-57	45.0×42.0	8.0 (9.21)		
502	"	"	41.0×34.0	21.0 (9.07)		
503	"	M-57	18.0×17.0	19.0 (9.11)		
504	"	N-57	34.0×22.0	15.0 (9.15)		
505	"	M-58	36.0×35.0	9.5 (9.22)		
506	"	M-58	54.0×42.0	9.5 (9.22)		
507	"	M-58	32.0×46.0	21.5 (9.12)		
508	"	N-58	27.0×22.0	16.0 (9.18)		
509	"	M-58	67.0×66.0	26.0 (9.27)		
510	"	M-58	42.0×34.0	24.0 (9.05)		
511	"	M-58	39.0×36.0	29.0 (8.99)		
512	"	"	24.0×22.0	15.5 (9.16)		
513	"	"	30.0×28.0	34.0 (8.95)		
514	"	"	51.0×34.0	17.0 (9.12)		
515	"	"	42.0×37.0	17.5 (9.13)		
516	"	L-58	30.0×28.0	17.0 (9.05)		
517	"	M-58	68.0×60.0	14.0 (9.18)		
518	"	"	30.0×28.0	27.0 (9.03)		
519	"	"	41.0×36.0	30.0 (9.00)		
520	"	"	50.0×28.0	7.0 (9.25)		
521	"	"	56.0×52.0	24.5 (9.09)		
522	"	L-58	26.0×20.5	20.5 (9.13)		
523	"	"	30.0×23.0	5.0 (9.28)		
524	"	"	29.0×28.0	3.0 (9.17)		
525	"	N-57	— ×60.0	26.0 (9.02)		
526	"	N-57 O-57	72.0×—	22.0 (8.94)		
527	"	N-57 O-57	54.0×51.0	28.0 (9.02)		
528	"	O-57	25.0×22.0	23.5 (9.01)		

Pit 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			径 (長×短)	確認面よりの深さ (底部標高m)		
529	第8区	O-57	36.0×26.0	22.0 (9.02)		
530	"	"	— ×48.0	16.5 (9.02)		
531	"	"	53.0×42.0	27.0 (8.94)		
532	"	"	26.0×25.0	7.5 (9.14)		
533	"	"	31.0×27.0	11.5 (9.10)		
534	"	"	— ×30.0	22.0 (9.00)		
535	"	J-57	33.0×33.0	27.0 (8.99)		
536	"	J-58	38.0×35.0	37.0 (8.90)		
537	"	"	48.0×38.0	11.0 (9.11)		
538	"	J-59	24.0×24.0	10.0 (9.09)		
539	"	J-60	60.0×—	17.5 (9.06)		
540	"	Q-59	— ×43.0	3.0 (8.90)		
541	"	"	42.0×30.0	15.0 (8.76)		
542	"	"	44.0×43.0	11.0 (8.84)		
543	"	P-59	26.0×23.0	5.0 (8.95)		
544	"	"	60.0×38.0	7.0 (8.93)		
545	"	"	30.0×22.0	6.0 (8.93)		
546	"	N-59	56.0×32.0	3.5 (8.94)		
547	"	O-59	57.0×29.0	5.5 (8.90)		
548	"	N-60	66.0×34.0	8.5 (8.79)		
549	"	M-60	28.0×28.0	7.0 (8.89)		
550	"	L-59	— ×38.0	7.0 (8.98)	須恵器片	
551	"	"	— ×22.0	5.0 (9.00)		
552	"	J-59	54.0×52.0	12.0 (9.06)	須恵器片	
553	"	J-51	18.0×16.0	3.0 (8.89)		
554	"	J-52	16.0×13.0	6.0 (8.90)		
555	"	"	66.0×52.0	21.0 (8.83)		
556	"	"	42.0×38.0	6.5 (8.95)		
557	"	"	54.0×38.0	5.5 (9.00)		
558	"	"	22.0×20.0	5.5 (8.94)		
559	"	K-52	78.0×—	25.0 (8.47)		木片
560	"	K-53	20.0×20.0	4.0 (8.75)		
561	"	O-55	— ×22.0	2.0 (8.92)		

Pit 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			径 (長 × 短)	確認面よりの深さ (底部標高m)		
562	第8区	Q-52	15.0 × 14.0	8.5 (8.59)		
563	"	L-52	54.0 × —	15.0 (8.65)		
564	"	M-54	33.0 × 24.0	6.0 (8.94)		
565	"	"	18.0 × 13.0	8.0 (8.90)		
566	"	J-52	34.0 × 28.0	5.0 (8.99)		
567	"	"	66.0 × —	10.0 (8.93)		
568	"	N-53	84.0 × 53.0	19.5 (8.67)		
569	"	L-57	38.0 × —	15.0 (9.13)		
570	"	L-58	54.0 × 46.0	9.5 (9.24)		
571	"	L-58	76.0 × 62.0	9.0 (9.23)		
572	"	N-59	50.0 × —	14.0 (9.06)		
573	"	O-57	42.0 × 33.0	5.5 (9.15)		
574	"	"	32.0 × 24.0	21.5 (8.94)		
575	"	Q-61	26.0 × 19.0	5.0 (8.87)		
576	"	Q-60	40.0 × 30.0	4.5 (8.90)		
577	"	"	18.0 × 16.0	9.5 (8.86)		
578	"	P-65	16.0 × 16.0	8.5 (8.88)		
579	"	O-47	27.0 × 26.0	17.0 (8.97)		
580	"	J-54	48.0 × 44.0	17.0 (8.99)		
581	"	J-53	— × 60.0	9.5 (8.92)		
582	"	O-65	36.0 × 31.0	19.0 (8.77)		
583	"	"	16.0 × 16.0	5.0 (8.90)		
584	"	"	20.0 × 20.0	7.0 (8.88)		
585	"	"	26.0 × 24.0	12.0 (8.84)		
586	"	O-65	32.0 × 28.0	18.5 (8.76)		
587	"	P-65	40.0 × —	11.5 (8.83)		
588	"	Q-66	25.0 × 18.0	5.8 (9.08)		
589						
590						
591	第8区	P-65	36.0 × 34.0	15.0 (8.80)		
592	"	P-65	40.0 × 32.0	17.0 (8.76)		
593	"	L-69	68.0 × —	23.5 (8.61)		
594	"	P-64	42.0 × 40.0	5.5 (8.37)		

Pit 番号	地 区	グリット	規 模 (cm)		出 土 遺 物	備 考
			径 (長×短)	確認面よりの深さ (底部標高m)		
595	第8区	P-64	36.0×28.0	8.0 (8.88)		
596	"	J-61	107.0×83.0	49.5 (8.48)		
597	"	P-64	50.0×42.0	17.0 (8.80)		
598	"	P-65	39.0×34.0	25.5 (8.71)		
599	"	"	— ×38.0	19.5 (8.75)		
600	"	P-64	39.0×36.0	10.5 (8.87)		
601	"	O-64	54.0×43.0	27.5 (8.70)		
602	"	O-65 P-65	— ×50.0	20.0 (8.76)		
603	"	O-65	40.0×33.0	18.0 (8.79)		
604	"	"	— ×23.0	9.0 (8.89)		
605	"	O-64	58.0×47.0	35.0 (8.58)		
606	"	N-67	70.0×54.0	26.8 (8.66)		木端材
607	"	M-67	44.0×33.0	18.0 (8.76)		S B-14
608	"	M-67	46.0×32.0	8.5 (8.85)		S B-14
609	"	"	56.0×41.0	23.0 (8.72)		S B-14
610	"	"	55.0×40.0	12.5 (8.78)		S B-14
611	"	"	41.0×26.0	23.0 (8.68)		S B-14
612	"	"	47.0×31.0	24.5 (8.73)		S B-14
613	"	J-53	60.0×49.0	22.0 (8.98)		
	欠 番					
	欠 番					
	欠 番					
617	第8区	P-69	91.0×45.0	7.7 (8.92)		
618	"	J-61	46.0×35.0	16.0 (9.21)		
619	"	J-65	44.0×40.0	28.0 (8.96)		
620	"	"	40.0×33.0	30.5 (8.96)		
621	"	"	48.0×37.0	6.5 (9.2)		
622	第8区	K-65	38.0×29.0	24.5 (8.75)		
623	"	P-64	40.0×36.0	17.5 (8.76)		
624	第10区	M-75	16.0×14.0	35.0 (8.05)		

第4節 柱穴・その他の小穴 (Pit)

土橋遺跡では合計620のPitが確認されている。これらのPitは弥生時代後期・古墳時代初頭、奈良末～平安時代、中世、近世と各時期に渡っており、掘立柱建物跡の柱穴となるものPit列となるものなどその性格は多種である。形態も円形のもの、隅丸方形のもの、方形のもの、長方形のものなどで、礎板、柱根、礎石、土器、木器等を残すPitがある。

(→土橋遺跡検出Pit一覧表参照)

第5節 掘立柱建物跡 (SB)

SB1 第2区東寄り (I-68、J-68、I-69) は奈良末～平安時代の遺構群の中に位置している。西側はSD4に接しており新旧関係はSD4のセクション等より、SD4が埋没途中でSB1が建てられたと考えられる。本掘立柱建物跡は今回の調査で最初に検出された遺構で、柱穴内に黒灰色土が詰まっており遺構確認は比較的容易であった。建物は2間×2間 (4.00m×3.70m) の総柱建物で柱穴内には根固の石や木片が入っている遺構もある。建物の設計はたいへんしっかりしており柱間も等間隔になっているが、礎板、礎石を持たない簡易構造で短期的な、または季節的な性格を示している。柱穴掘方は長軸60cm×短軸42cmの隅丸長方形のプランで、その中で柱根が設計基準線に沿って配置されている。柱根は掘り方内に残されておらず、きれいに抜き取られている。

SB2 第2区中央やや西寄り (H-63、I-64) で、SK1の南側、SD2とSD11に挟まれるように位置する。切り合った他の遺構により柱穴をいくつか失っているため確定はできないが礎板を持つPitもある。

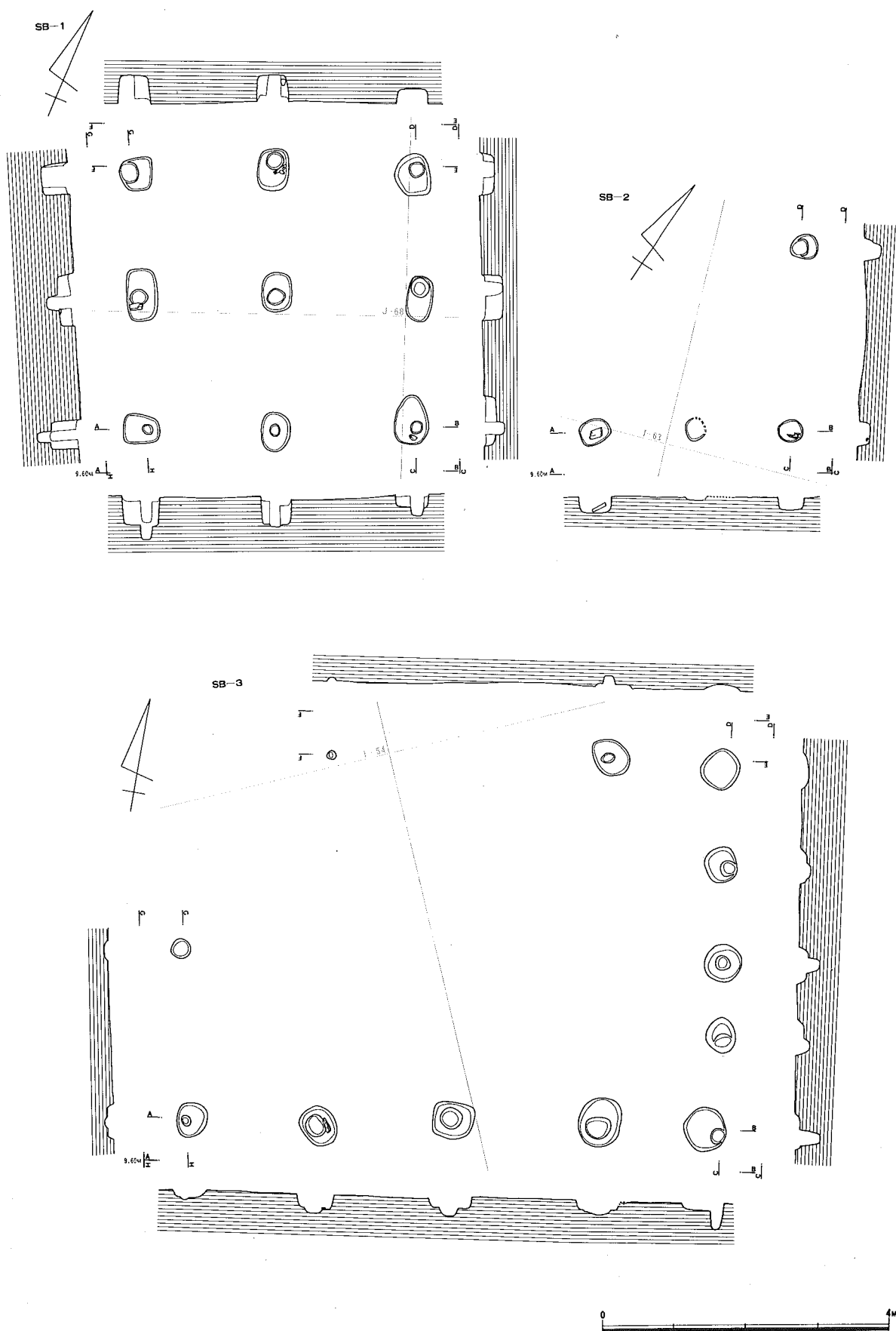
SB3 第3区のほぼ中央 (I-55、J-54) に位置し、土橋の集落一熊野神社から続いてくる微高地上の一角にある。SB3の東側には竪穴状遺構 (SI-1～4) と切り合うようにSD32、SD34、西側にはSB4と第4区にSD36が関連遺構として考えられる。調査区の制約から全体像がつかみにくいが、この一角も溝に囲まれた柱穴群の可能性はある。

建物は4間×4間 (7.44m×5.15m) の総柱の建物らしいが北西の柱穴は確認できなかった。ほとんどの柱穴に柱根跡が確認されており、柱根の根固めに木片が入っている柱穴もある。柱穴の規模、形態はまちまちで、柱間の間隔も一定していない。時期的には律令期とは考えにくくそれ以前の遺構であろう。

SB4 第3区の西側 (H-53・54、I-52・53・54、J-53) でSB3に隣接している。主軸方向はSB3、SB11、SB12、SB13などの微高地上に位置する掘立柱建物に近く、周囲の遺構の状況より古墳時代初期の柱穴群である。

建物は3間×2間 (6.50m×3.98m) の総柱建物跡である。柱穴の規模は平均35cmの隅丸長形であると思われるが柱根を抜き取った際に壁がくずれたのか不定形の柱穴が多い。主軸方位はやや東に振れてはいるが古墳時代の掘立柱建物群の範ちゅうに入と思う。

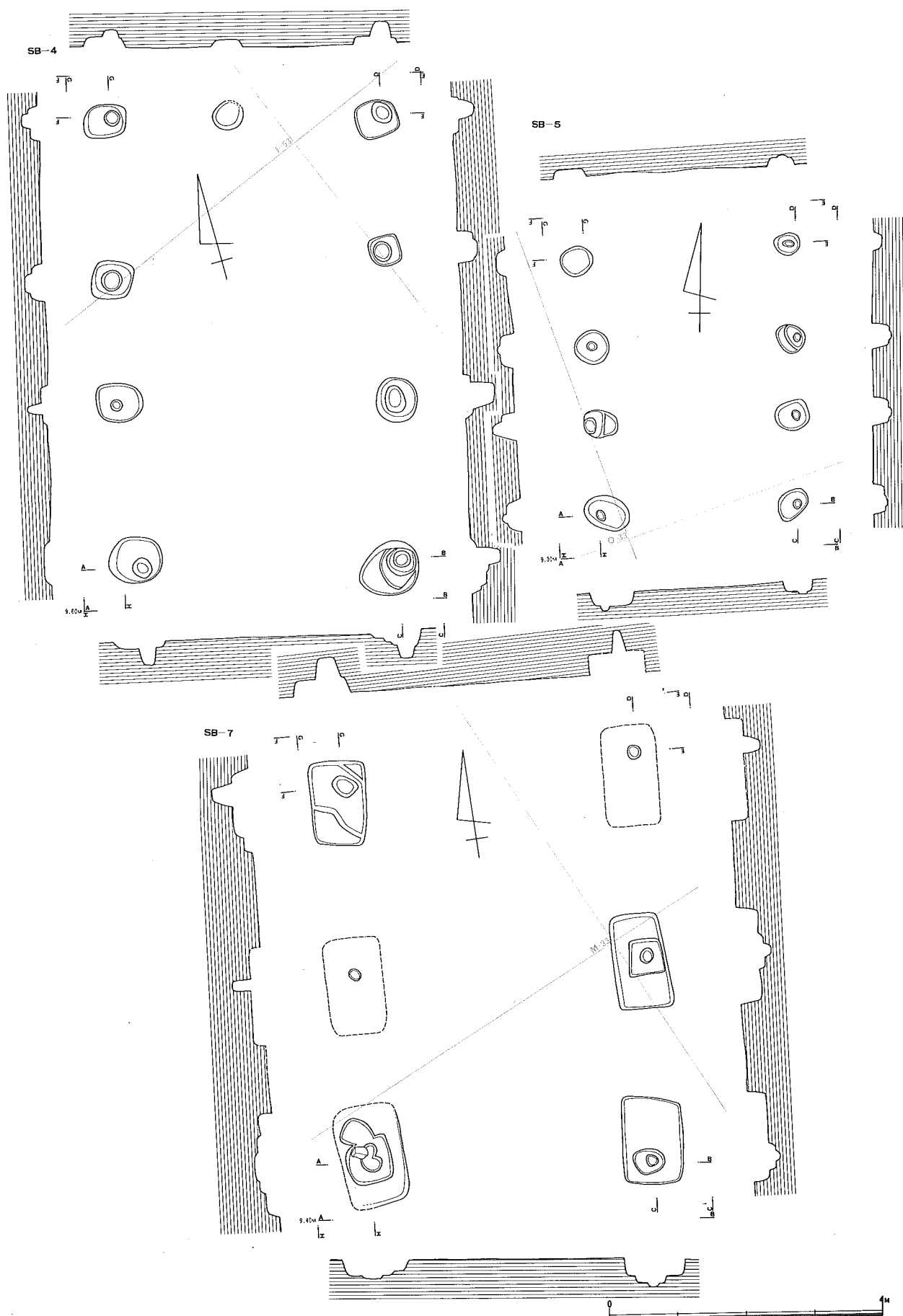
SB5 第7区西側 (N-33・34、O-34) の中世遺構が集中している地区に位置する。同時期で類似した性格を持つ建物跡としてはこの次にあげるSB6、SB9などがある。建物は3間×1間 (3.71m×2.91m) の小規模の遺構で、柱穴の掘方も平均直径50cmの小さなプランである。この周辺にはこれら掘立柱建物跡に確認できなかった小さな柱穴が散在している。SB5の東側には中世屋敷跡の堀 (SD85) や南側のSX2と呼ばれる井戸状遺



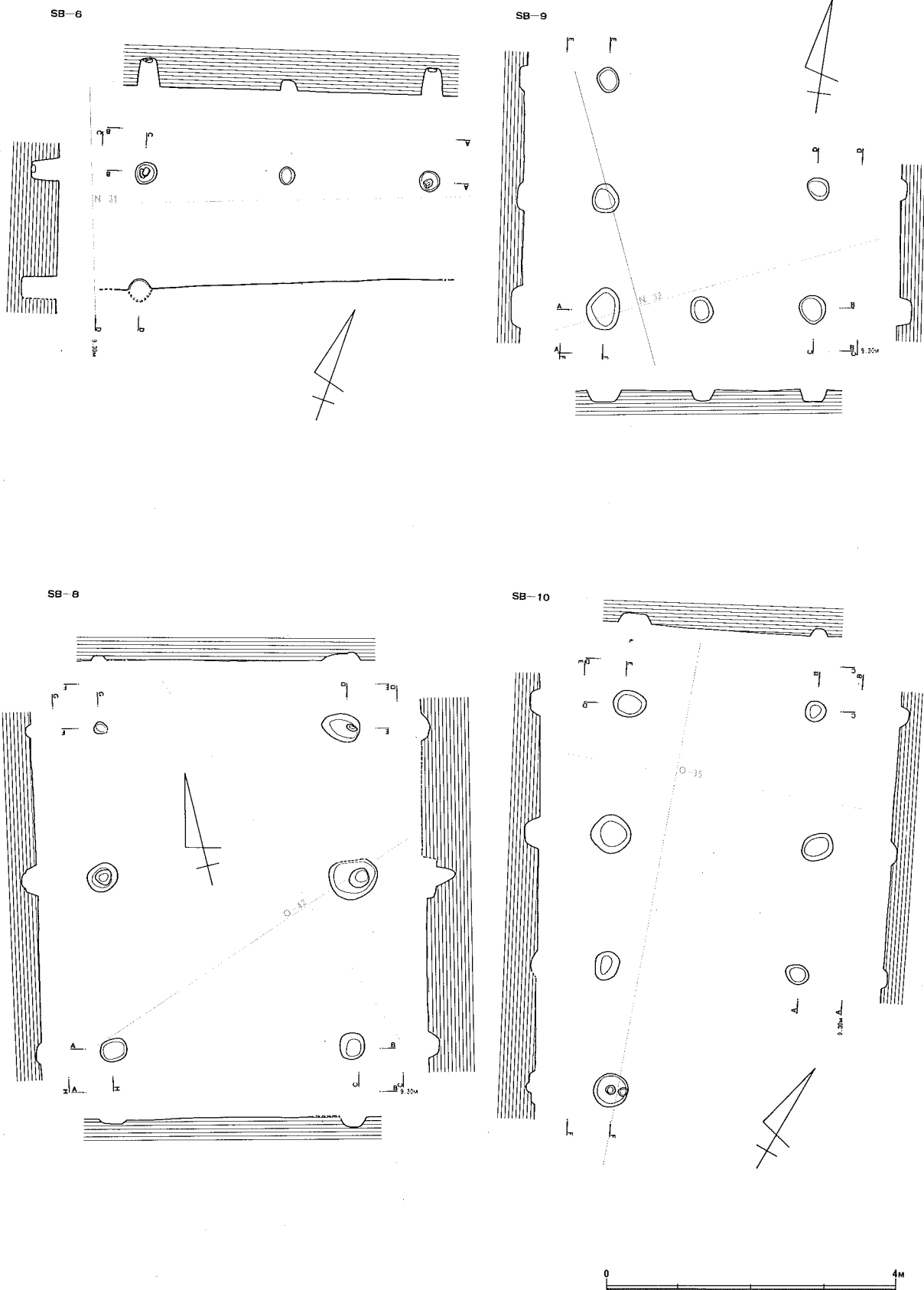
第33図 掘立柱建物跡〔SB〕実測図(1)

構に囲まれている。

- SB6 第7区西側の南限界（O-32、P-32）に位置する。遺構の南半分は調査区外のため、全体の規模は確認できない。形態より2間×2間の小さな掘立柱建物と思われる。柱穴掘方も小さく径約30cm程で木片を礎板がわりにしている柱穴もある。調査中に排水用の測溝で一部を失なった柱穴にも木片を重ねた礎板が入っていた。SB5と同じく中世の遺構ではないかと考えている。
- SB7 第7区西側（L-33・34、M-33・34）に位置するやや規模の大きな掘立柱建物跡である。遺構のほぼ中央をSD74・SD75の近世の溝跡が通り柱穴が失なわれているものもある。規模は2間×1間（6.00m×4.32m）で掘方の形態は隅丸長方形でかなり大形の建物が想定できる。掘方は長軸130cm、短軸88cmと大きく、掘方底部に柱根跡が残る。根固めの石の残る柱穴もある。柱穴の覆土内より弥生土器片が若干検出されているが時期決定の決めてとはなっていない。周囲に関連する遺構はない。
- SB8 第7区中央やや東寄り（N-42・43、O-42・43）に位置し、SD85のすぐ東側で中世の掘立柱建物跡群のSD5、SD6、SD9と主軸方向をほぼ同じくする。この掘立柱建物跡の内側にP380がある。この遺構は太田川の旧流路上に位置し地中30cm程で礫層に到達するためかなりの量の湧水があり井戸として十分機能していたと思われる。この掘立柱建物跡の南側にSK78とSK79がある。これは小さな遺構であるが常滑の大甕の底部がそれぞれ残っておりこの中世の井戸を持つ覆屋の側に2つの甕が据えられていたのであろう。この建物跡は2間×1間（4.42m×3.42m）の小さなもので、柱穴の掘方も貧弱であるため簡易的な性格の建物であろう。
- SB9 第7区西側（M-32・33、N-33）の中世遺構群の中に位置し、隣接して東側にSB5がある。建物は2間×2間（3.20m×2.92m）の小規模のもので、柱穴の掘方も貧弱で簡易的な建物であろう。
- SB10 第7区中央（N-35・36、O-35・36）のSD85の内側に位置している。この建物も小規模で3間×1間（5.33m×2.64m）が掘に沿うように建てられている。柱穴掘方も小さく、柱根、礎板等は残っていない。中世の遺構群に伴う遺構であろう。
- SB11 第8区西端（N-51・52、O-51・52、P-52）で一部農道下に入っているため未調査の部分がある。規模は2間×1間（5.10m×3.36m）と思われ比較的小さな遺構である。この遺構の柱穴をはじめSD102に囲まれた範囲の中には多数の柱穴と土壌が確認されている。そのため、ここにあげたSB11、SB12、SB13ほか何棟かの建替えがあったと思われる。主軸は周辺の掘立柱建物と同一方向であり古墳時代初頭と思われる。
- SB12 第8区西側（N-53・54、O-53・54）の古墳時代初頭の遺構群の中に位置している。建物は1間×2間（5.30m×5.26m）で主軸方向はSD102内の掘立柱建物跡と共通している。柱穴内は建築材を砕いた木片の礎板を持つもの、建築材を加工する時にでたと思われる削りくずの木端材を持つもの、根固めの木片をもつものなど特殊な柱穴がある。
- SB13 第8区西側の南端（P-53、Q-52・53・54）に位置している。建物は、2間×1間（4.48m×5.18m）と思われるが南側半分は用地外でいるため未調査である。柱穴掘方は比較的大きく径110cm前後あり、すべての柱穴内に木材加工が際出た木端材が入っていた。木端材は土壌底部にレンズ状に推積し、その一部が径20cm大で窪んでいた。この部分に柱根があったのであろう。このように柱穴内に木端材を持つ柱穴はPit447・449・463・

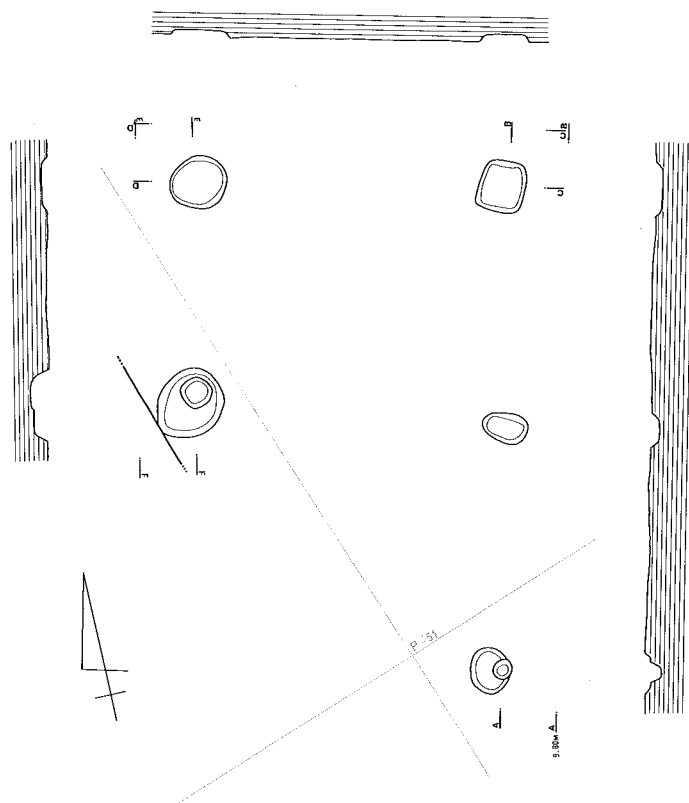


第34図 掘立柱建物跡〔S B〕実測図（2）

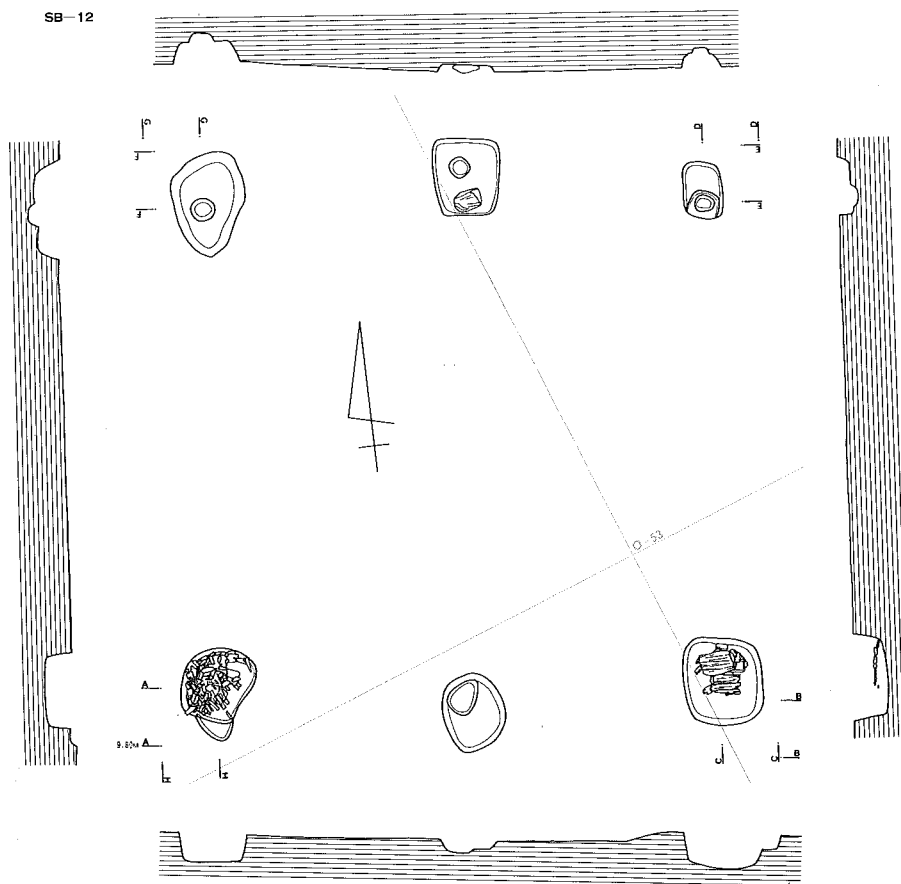


第35図 掘立柱建物跡〔SB〕実測図(3)

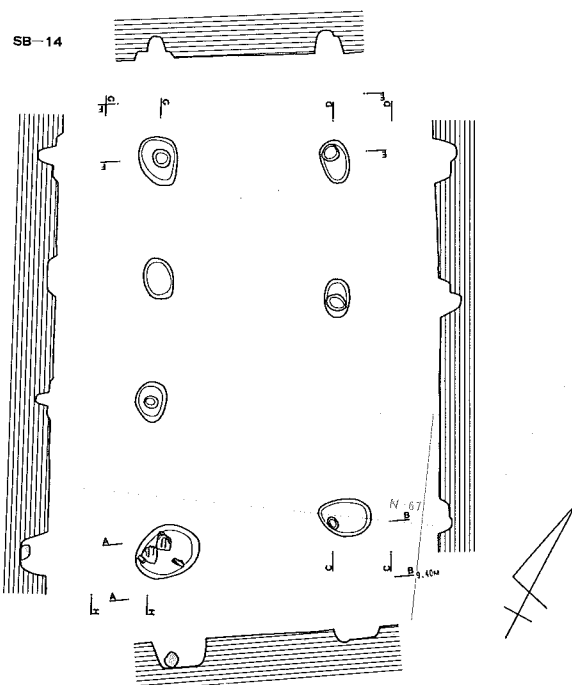
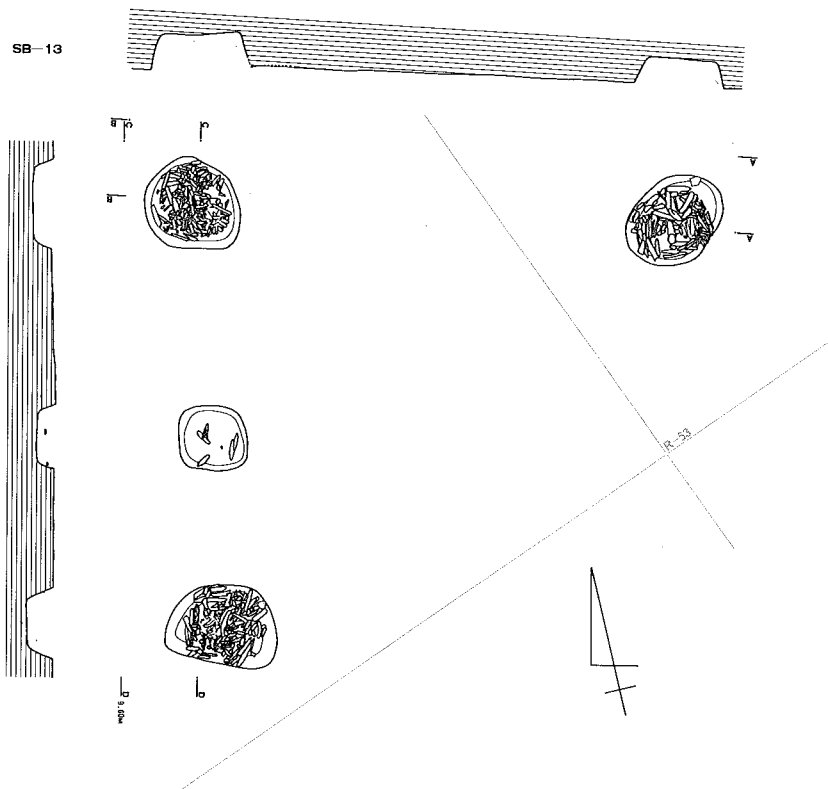
SB-11



SB-12



第36図 掘立柱建物跡〔SB〕実測図(4)



第37図 掘立柱建物跡〔SB〕実測図（5）

477・490・492・493・SK58がある。

- SB14 第8区東側(M-67、N-67)のSD125とSD128の間に位置している。規模は3間×1間と見られ、東側の柱穴1つは後世の攪乱のため失なわれている。南西の柱穴のみ礎板をもち、やや大きめの規模である。礎板は約25cmにつめた柱材を割って入れてある。

第6節 溝跡(SD)

- SD4 第2区中央やや東側で検出された溝跡である。SD7、SD8と切り合い覆土内よりやや古い時期の遺物を出土するが基本的には奈良末～平安時代にかけての遺構でSB1と関連をもつと思われる。溝は幅1.00m、深さ33cmで現在確認されている長さは10.30mである。覆土はほぼ黒褐色土で、遺物は上流から流されたように散在している。この溝は後の表面観察により土橋・熊野神社西脇まで続いておりこの周辺に掘立柱建物群の存在が推定できる。
- SD45 第4区西側(J-34)でSK11と重複して位置している。道路北側の細長い調査区を斜めに横切っているためその規模・形態は明らかではない。北側のセクションよりSK1より古く、深さは確認面より27cmの溝状遺構の一部であろう。
- SD89 第7区中央(N-39・49、O-40・41)のSD85の内側に位置する。遺構上部のほとんどを耕作によって失っており溝の底部がわずかに残るのみである。
- SD99 第7区東側(M-47・48、N-47・48)の中世遺構群の中に位置するカギ形に曲る溝状遺構である。覆土はかなり多量の炭化物を含む土で灰層も存在する。この遺構は幅1.60cm、深さ20cmの浅い遺構で山茶碗等の副葬品らしい遺物も出土する。火葬墓であろう。
- SD114 第8区西側(N-57、O-57・58)の茶畑が島畑状に残っていた高まりの端から検出された。両端を切断されているため正確な規模・形態は不明であるが、現在する幅60cm、深さ30cmがわかるのみである。
- SD118
- SD120 第8区中央に位置する幅1.00m、深さ75cmの規模をもつ溝跡である。第2区のSD2とは同一の溝で、覆土は黒褐色土である。この溝からは多量の土器を出土しているが溝内の中間層に上流から流されてきたように堆積している。土器の多量に堆積している層より下はほとんど遺物が入っていないやや砂質の土である。
- SD32他 第3区の中央に複雑に重複する遺構群である。第38図で見るとおりその一部は第8区北端まで一部がとどいている。関連する遺構はSD32、SD34、SD35、SI1、SI2、SI3、SI4、SK6、SK7である。

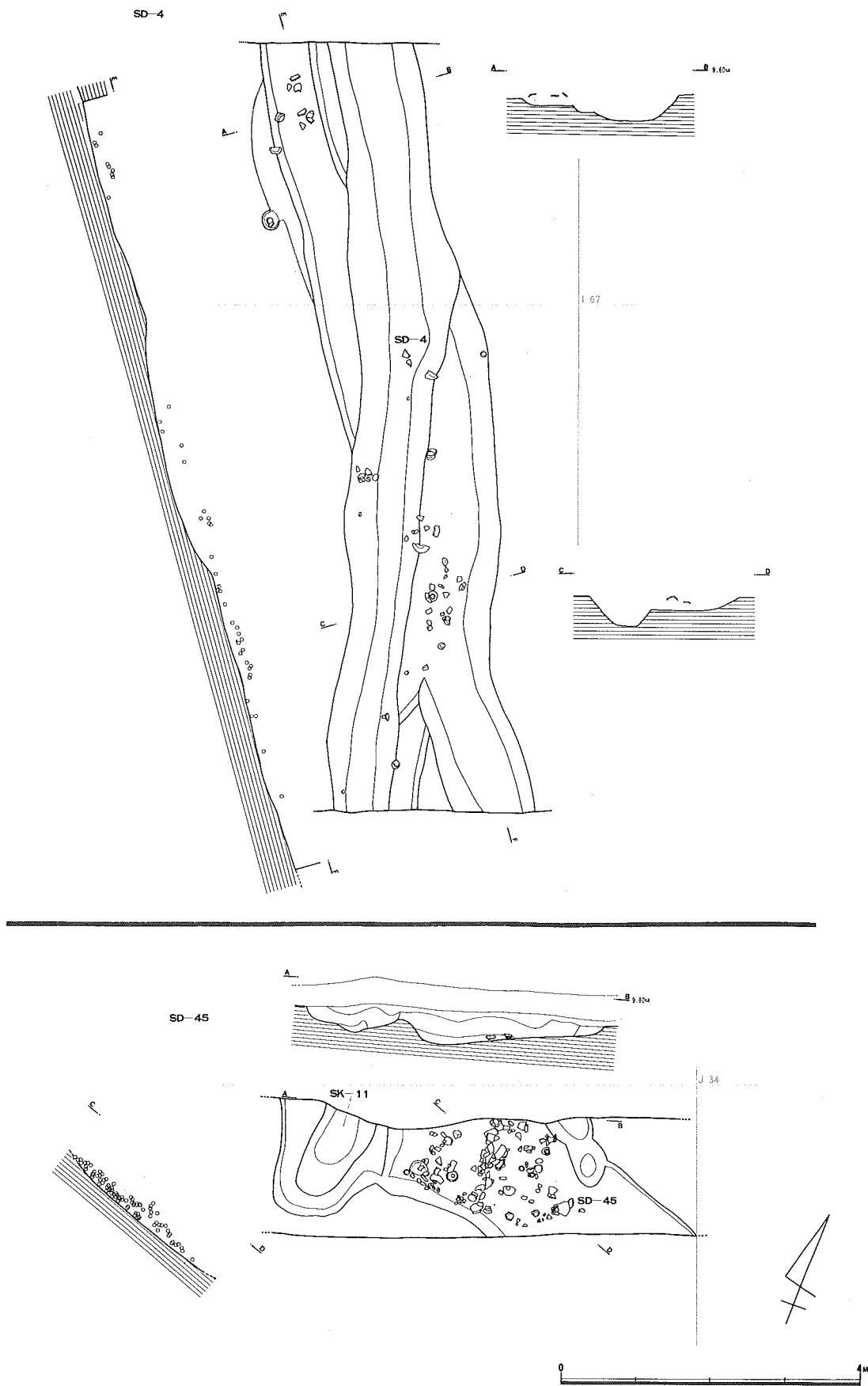
第7節 特殊な遺構

a. 環濠を持つ掘立柱建物跡群

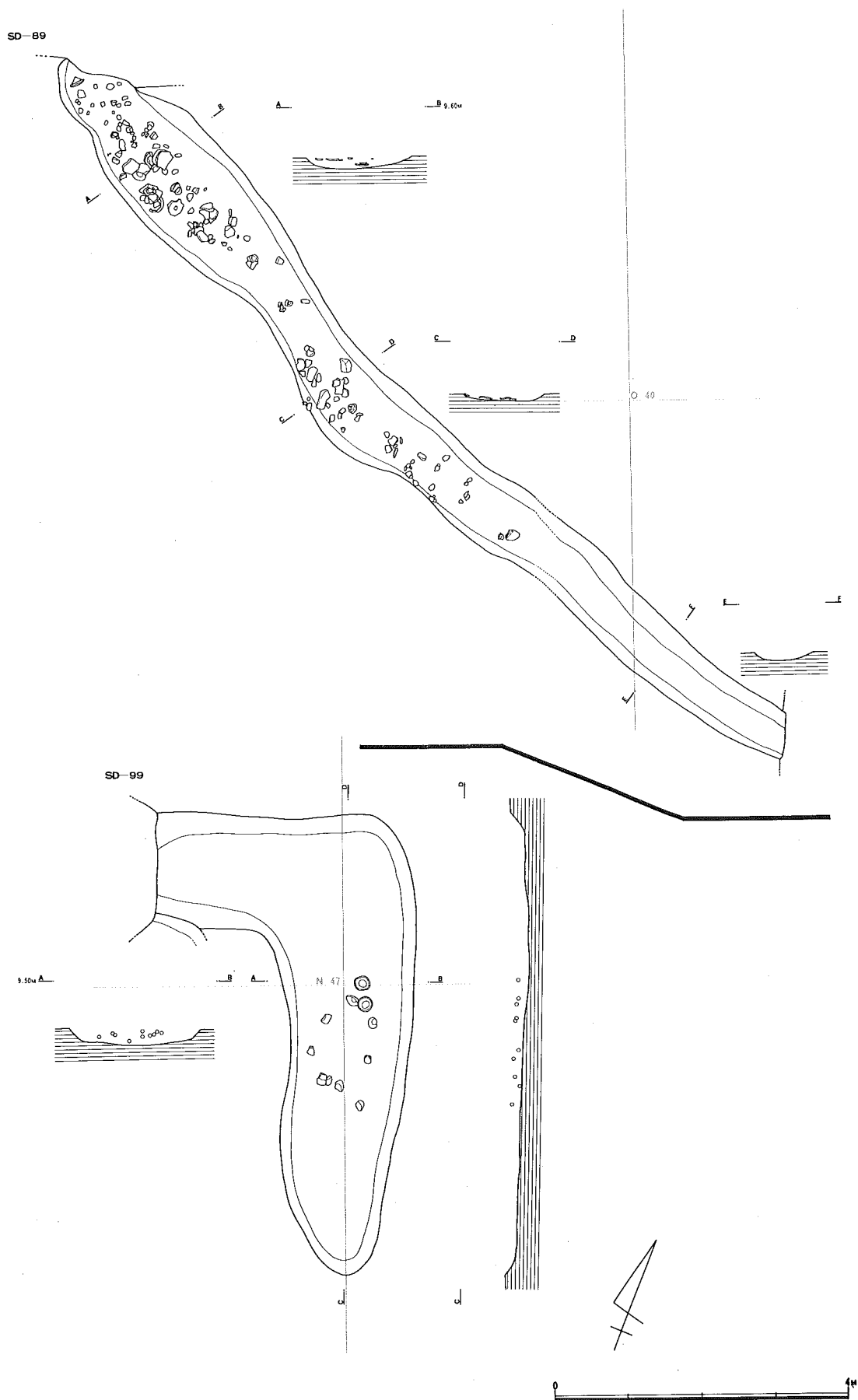
- SD102 土橋遺跡のほぼ中央、太田川の旧河道により形成された自然堤防から東の後背湿地へ移っていく場所に堆積したシルト層につくられた溝跡である。この溝跡はL-52グリットより始まり、大きく彎曲しながら南の調査区外へ延びている。西側は陸橋状の高まりを残して農道の下から南西方向へ溝が続きSD94へつながっているはずであるが、農道下とすぐ西側に江戸時代の池状の遺構と中世の溝跡SD96が造られこの環濠を破壊している。この周辺の水田もレベルをそろえるため約50cmの厚さで削平されており遺構・遺物もかなりの部分が失なわれている。そのため溝の規模は幅1.5m、深さ20～50cmと底部のみがわず



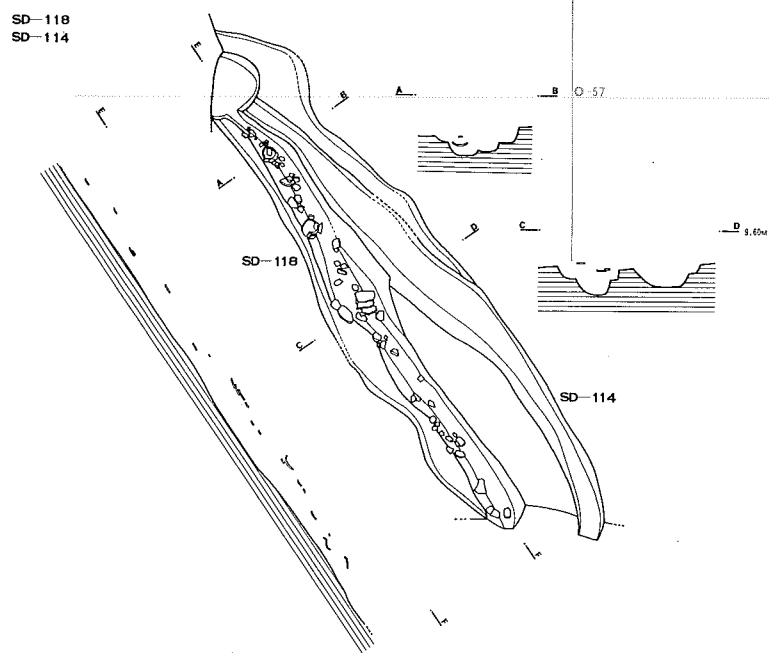
第41図 溝跡〔SD〕実測図(4)



第38図 溝跡〔SD〕実測図(1)



第39図 溝跡〔SD〕実測図(2)



第40図 溝跡〔SD〕実測図（3）

かに残るのみである。L-52グリットの陸橋状の部分は第3区の同時代遺構群と関連する可能性を示す重要な部分である。S D102の覆土からは多量の土師器が出土している。

SD94 第7区東側で中世の溝跡S D96や近世の攪乱により遺構の大部分を失っているが溝跡の位置、その主軸方向、出土遺物等からS D102との関連が十分に指摘できる。この溝跡の北東端は東側の農道下で終わっていると考えられる。出土遺物のほとんどは土師器である。

SD108 S D102の内側を巡る幅40cm、深さ12cmの小さな溝跡である。O-51付近ではS D102の影響を受けて、流れをやや西に方向を変えている。出土遺物はほとんどない。

SB11 P73の掘立柱建物跡の項参照。

SB12 P73の掘立柱建物跡の項参照。

SB13 P73の掘立柱建物跡の項参照。

その他、グループになるPit列になるPit・土壌等が数例見られるが確認できない。

北側の環濠を持つ掘立柱建物跡群は農道及び別時期の遺構により寸断されているため正確にその全容を知ることとはできない。関連する遺構は、S D36、S D105、S D32、S D34の溝跡が環濠状に巡ると思われ、S B3、S B4を主とする掘立柱建物跡が確認できる。

SD36 第4区東端に北西から回ってくる幅1.20m、深さ14cmの溝跡である。溝上部は削平され遺物もかなり失なわれている。

SD105 第8区北西隅に残る溝跡であるが、西側を江戸時代の池状遺構で、東側を中・近世の溝跡S D104で切られている。規模は幅1.60m、深さ46cm、現存長50.30mであるが溝上部もかなりの削平を受け失なわれている。

SD32 第8区北西から第3区中央を抜ける溝跡である。第8区では南側をS D104で切られ、第3区では堅穴状遺構によりかなりの部分を失っている。S D34はS D32に続く溝跡と思われるが確証はない。

SD34 第3区東側の堅穴状遺構と重複している幅1.00m、深さ19cmの溝跡である。北側でS D31と切り合っている。

SB3 P71の掘立柱建物跡の項参照。

SB4 P71の掘立柱建物跡の項参照。

その他、グループになるPit、列になるPit、土壌等が数例見られるが確認できない。

b. 中世屋敷跡（鎌倉時代）

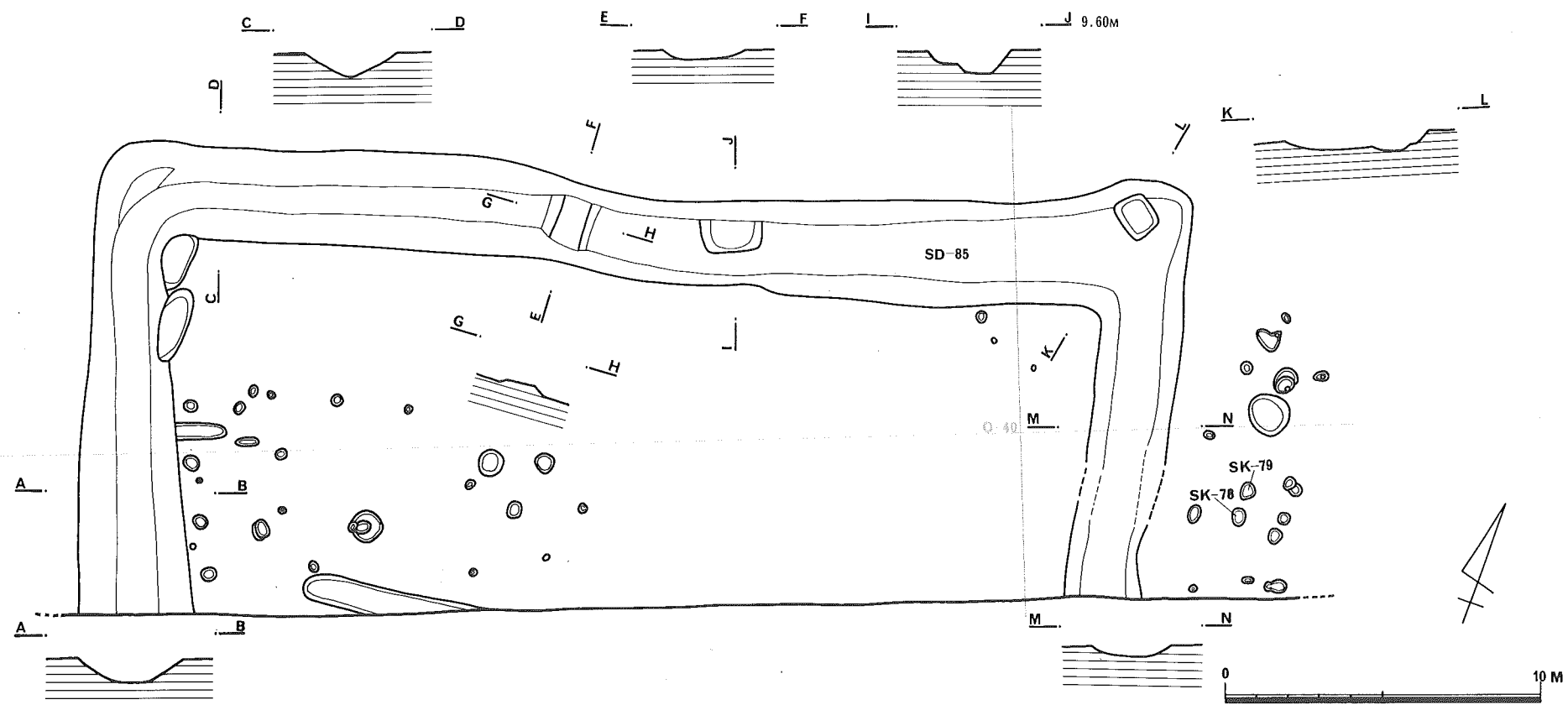
SD85 鎌倉時代の遺物を出土する中世屋敷の周囲を巡る堀跡である。堀内に2ヶ所S K50、S K51と方形プランの土壌を持ち、それ以外の遺構としてはS D85の北辺の堀内に陸橋状の高まりがある。この渡り口は常時水中に没していて外部からは堀の一部にしか見えないが実際は水面下数cmに高まりがあり堀を渡ることが可能である。堀の規模は一辺33m、幅3.00m、深68cm（平均値）でかなり大きな遺構であるが、南側は調査区外であるため全容をつかむことはできない。

SK78 中世屋敷跡の堀S D85の東側に集中しているPit群中に中世の大型の甕の底部破片を残

SK79 す土壌が2つ並んでいる。両方の土壌の土器は常滑の大甕の底部破片で遺構確認面が耕作土直下であるため上部は耕作によって削平されてしまったのだろう。この土器底部はS D85覆土内より出土した小破片と接合関係を持ち、その他S D85出土遺物との時期的なギャップはほとんどない。規模はS K78で長軸0.56m、短軸0.46m、深さ15cmで、S K79の直径0.52m、深さ10cmとほぼ類似した円形のプランをもつ。



第42図 環濠を持つ掘立柱建物跡群実測図



第43図 中世屋敷跡（鎌倉時代）実測図

SK32 S D85の西側に用地外に半分以上かかって検出された。事情により上層しか調査されていないが中世の山茶碗片を出土している。

SX2 S D85の西側に位置する井戸状の遺構である。大形の円形プランを持ち、径約4m、深さ1.4mで途中に段を残している。土層堆積は下記のとおりであった。

第1層 黒灰色粘土（褐色粒子を多量に含む。）

第2層 灰色粘土（第1層より白っぽく褐色粒子を含む。）

第3層 黒灰色粘土（炭化木片を少々含む。）

第4層 灰白色粘土（多少砂っぽい粘土。木片を少々含む。）

出土遺物としては土器片、木製品等があり、これらからS D85との関係が注目される。

Pit380 S D85の東側でS B 8の内に位置する径130cm、深さ91mの円形プランを持つ井戸状遺構である。底部は旧河道の礫層でとまっており湧水が絶えない。この井戸と覆屋のS B 8は関連があり、さらにS K 78・S K 79の4つの遺構により、この性格が示される。

SB5 本文P71の堀立柱建物跡の項参照。

SB6 本文P73の堀立柱建物跡の項参照。

SB8 本文P73の堀立柱建物跡の項参照。

SB9 本文P73の堀立柱建物跡の項参照。

SB10 本文P73の堀立柱建物跡の項参照。

SK41 中世土壌墓群はS D85から東へ約30m離れた一角にある。規模、形態等はまちまちであるが、炭化物を多量に含む覆土や山茶碗や木製の箸などの副葬品をもつ遺構である。代表的な土壌はS Kの項を参照されたい。

SK57 以上、各遺構ごとの解説を述べてきたが、第7区内中世遺構は当時の生活を十分復元することができる資料をそろえている。

この中世遺構群は大きく分けて四つの性格から成っている。

(1) 幅2m弱の堀（S D85）を中心にそれに付属する屋敷遺構。

(2) S B 5～S B 9の簡易な堀立柱建築物。これにはS X 2、S K 32等も付属する。

(3) S B 8、Pit380、S K 78、S K 79等の井戸跡をはじめとする水場関連の遺構群。

(4) S K 41～S K 57などの土壌墓群。火葬墓を含む遺構である。

c. 池状遺構（S X 1）

SX1 第6区中央（L-25・26、M-26・27・28、N-26・27・28、O-26・27・28）位置する池状遺構である。規模は長軸15.04m、短軸12.06m、深さ1.57mの比較的大きな落ち込みで遺構底部では礫層は露出しておらず湧水はまったく見られない。覆土は緑がかった粘性の強い土で、水がよどんで緑色の藻が繁茂している沼が徐々に埋没していった遺構である。覆土の下層はやや砂混りの粘土になってくるが緑色は変わらない。北側にもう1つ付属する直径4.40m、深さ26cmの井戸状の遺構がある。この遺構は池状遺構とわずか2.40mしか離れていないが最下部で旧河道跡の礫層にとどいており2インチ水中ポンプを常時入れておかないとオーバーフローしてしまうほどの水量である。池状遺構とこの井戸状遺構は幅2.00m、深さ59cmの溝で結ばれており、両者のほぼ中央に杭を三本溝に直交方向に打ち込まれていた。また池状遺構には直径14cm、長さ1.80mの杭に細竹をしがらみ状に編んだ施設が検出されている。この施設は大型の木杭を打ち込んだ後に枝葉をはらってない細竹を横に重ね、数mおきにこれをとめるように枝葉をはらった竹を打ってある。池状

遺構の底部は青みがかった砂質層で、ほぼ平坦になっており、そこから立ち上る壁はかなり急勾配で一度入るとなかなか脱出することは難しい斜面となっている。

この遺構と重複する溝状遺構は、S D51、S D52、S D53、S D54、S D60、S D61、S D66など多数あるが、S X 1 より古いものはS D60、新しいものはS D61、S D51、S D52などが確定している。S X 1 に伴う溝があるかどうかは不明である。

d. 近世杭列（江戸時代後期）

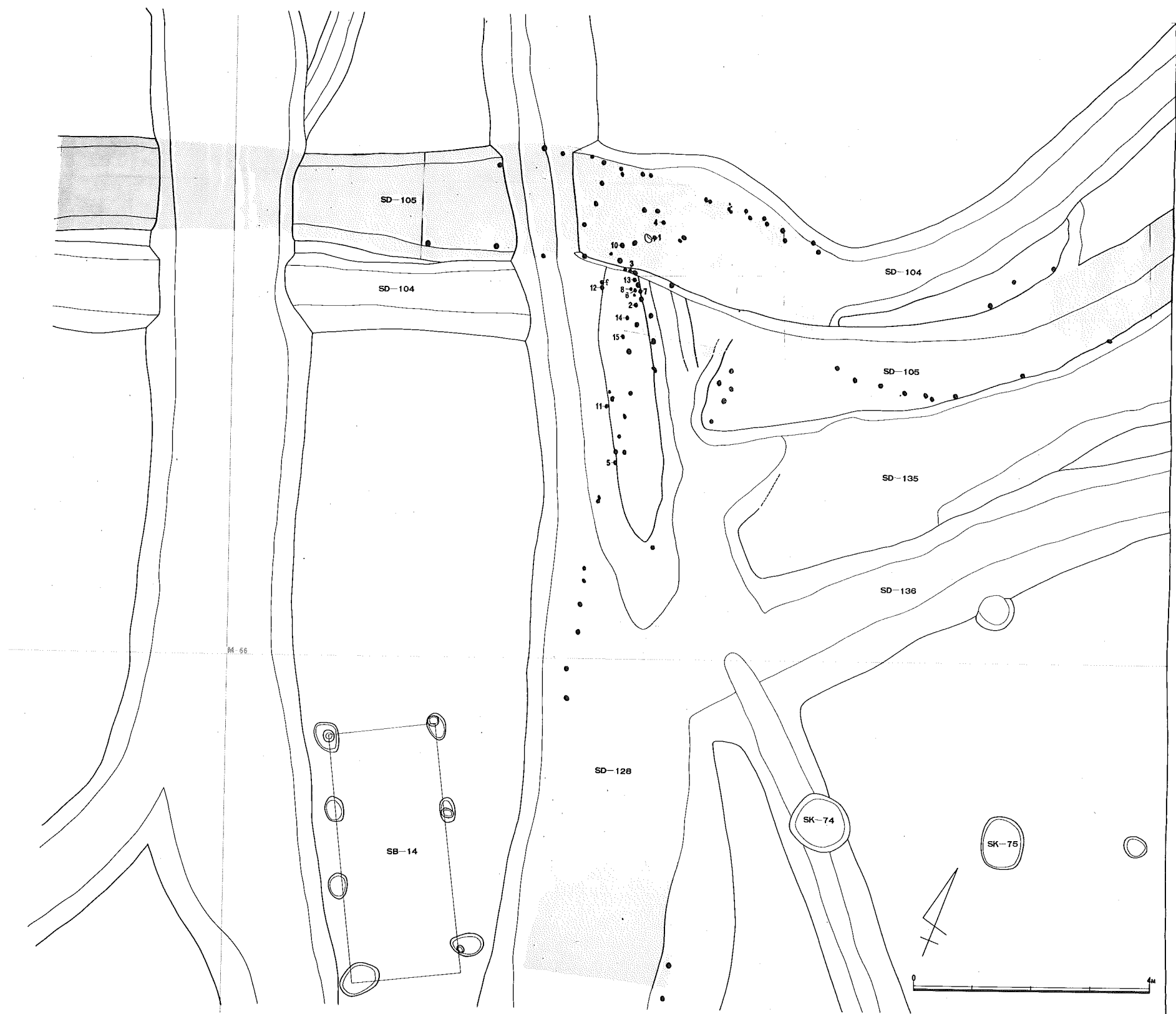
SD104 近世の溝に伴う杭列は遺跡内各所で検出されている。特に基盤層が砂層の地区から検出

SD128 された遺構や、他の遺構と重複している部分等に顕著に見られた。代表的な部分は第6区東側のS D50とS D51、第7区中央やや北寄りのS D74、S D75、第8区西側のS D104、S D105 等があげられる。

この項でとりあげる杭列は第8区東端のS D104、S D105、S D128 などが切り合う地区である。この地区は弥生時代後期、古墳時代、奈良末～平安時代、中世、近世の各時期の遺構が重複しておりこの辺は地形的要因であろう。ここの杭列はS D104 とS D128 に付属するものと思われ、古い溝の覆土で弱くなっている両岸を補強するためとS D104の水をS D128に導くための堰としての役割を果たしていたと思われる。杭は直径4 cm、長さ60cmの貧弱な材で、約30cm間隔で打ち込まれている。杭と杭の幅からこの溝幅は1.5 m前後と思われる細い溝幅である。第45図のとおり杭の打たれている位置はすべて古い遺構を切って溝をつくった部分である。また平行して打たれた杭列内に打たれた杭は板などで西へ向う水、南へ向う水を制御していたと考えている。この堰部分の杭の中に卒塔婆が14本打ち込まれていた。これは第45図で示したとおり一ヶ所に集中しており祭祀的な性格を持っている。



第44図 池状遺構〔SX〕実測図



第45図 近世杭列跡実測図

第4章 遺物

第1節 弥生土器、土師器

土橋遺跡の遺物の出土状態の特色としては他の遺構と切り合うことなく位置する土壌や溝状遺構がある。これは一般的には他の遺構と重複しないため遺物の新旧関係を問ううえでマイナス的要素である。しかし、いまだに弥生時代～古墳時代の個々の時期のセット関係が十分に把握されていない太田川流域では良好な一括資料といえる。

○ 弥生時代後期の一括遺物を出土する遺構

- S K 3 (No.16～No.27)
- S K 9 (No.32～No.38)
- S K 33 (No.64～No.70)
- S K 34 (No.71～No.73)
- S K 47 (No.85～No.95)
- S K 73 (No.113～No.119)
- S K 77 (No.143～No.173)
- S D 120 (No.513～No.542)

○ 古式土師器の一括遺物を出す遺構

- S K 1 (No. 1～No.15)
- S K 13 (No.47～No.60)
- S K 36 (No.74～No.81)
- S K 76 (No.120～No.142)
- S D 102 (No.403～No.434)

なお、これらの遺物の挿図の中には時期的に一段階新しく、または古くしたい遺物が入っている場合があったが本報告書ではこれを削除することなくのせている。報告者が各自の方法によって出土遺物を処理することはかまわないが、報告書本来の姿である事実をまずそのまま伝え、その後考察等によりこれを研究するという最近の傾向を本報告書も踏襲することとした。

また、個々の土器に関するコメントは本文で触れるにはあまりにも莫大で、繁雑になるため挿図と計測表により読み取っていただくこととした。一部の方々にはこの方法はご不満であろうがお許し願いたい。

壺形土器 まず、土橋遺跡出土の弥生土器の壺形土器よりその特色をおってみたい。壺形土器は弥生時代後期後半のものが多く、無花果形の胴部に大きくラッパ状に広く口縁部を持ち、口唇部は折り返し口縁のことが多い。肩部に段を持ち、この肩部と口縁部に文様を持つものが多い。胴部は一般的に最大径より上はハケ調整が、最大径より下はヨコミガキが施され底部は平底、ドーナツ底などで木葉痕を持つものが多い。

口縁部 このうち、壺形土器口縁部内側の文様は当遺跡の場合大きく分けて次の三種類に分類されることになるだろう。

- (1) 縄文を施したもの
- (2) 櫛状工具による刺突文

(3) 櫛状工具による扇形文

このうち、縄文を施したものの中には(a)縄文L R、(b)縄文R L、(c)結節縄文、(d)その他の文様と縄文を組合せたものがある。櫛状工具による刺突文には(a)1列に口縁内側を斜行に巡るもの(b)2列に羽状となって巡るもの、(c)3列にノコギリ歯状に巡るもの(d)同じく4列に巡るもの、(e)×××で巡るもの、(f)格子状に刺突文が巡るものなどがある。また櫛状工具による扇形文には(a)2列のもの、(b)3列のもの、(c)縄文+扇形文、(d)ハケ+扇形文などがある。その他文様をもたないものはナデ、またはハケで仕上げられている。

口 唇 部 次に壺形土器の口縁部を折り返したもの（正確には口縁部を折り返したのではなく、単純口縁の下部および外側に粘土帯を貼り付けている）その先端には文様帯を持つ場合がある。

(1) 縄文を施したもの

(2) 櫛状工具による刺突文

(3) ヘラ状工具によるキザミ

縄文を施したものでは縄文L Rが比較的に多い。櫛状工具による刺突文は羽状文、格子状文、X文字が一般的である。ヘラ状工具によるキザミの中には時々櫛状工具と思われるキザミも若干見られ今後注意すべきである。ほかには棒状浮文を貼り付けたものもある。

頸 部 壺形土器の頸部の調整はタテハケ、タテミガキ、ヨコミガキ、ヨコナデ等が主流である。

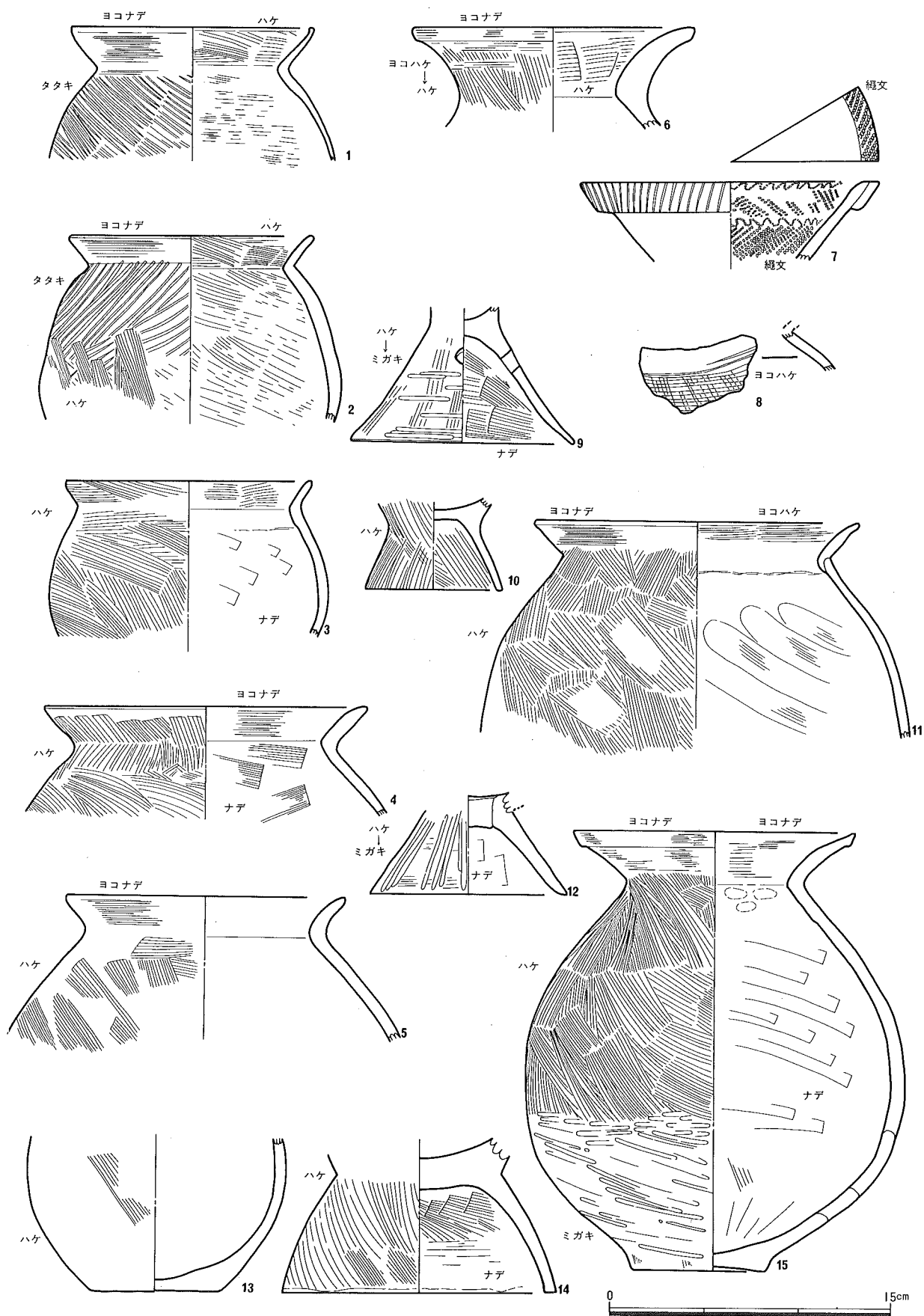
肩 部 壺形土器の肩部は、段のないもの、1段のもの、2段のものなどがあり段もわずかに残るものと明瞭に残っているものがある。文様帯の位置も肩部に集中しており、おおむね次のとおりである。

〔遺物番号〕

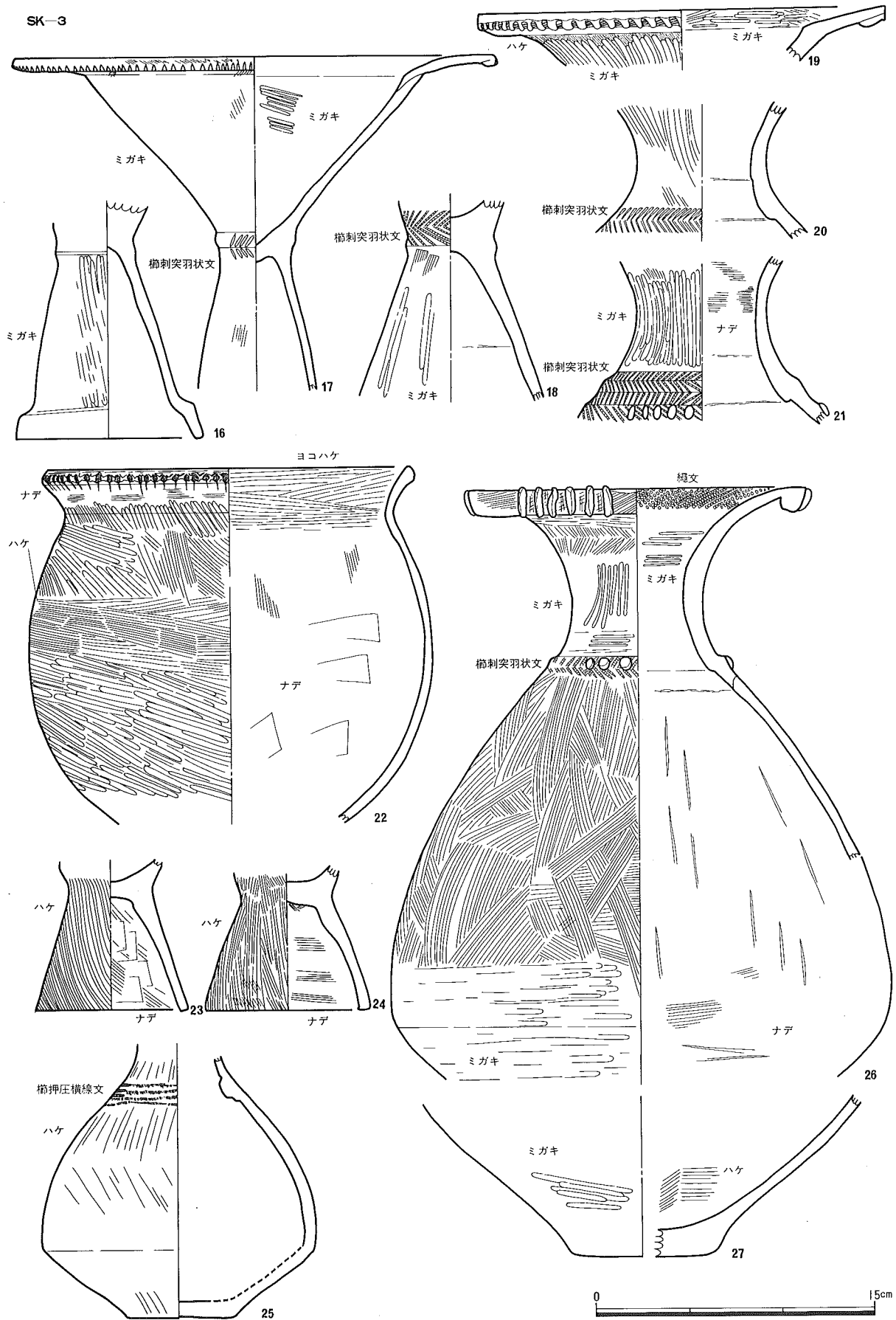
櫛刺突羽状文	20、35、91、143、144、149、150、151、175、517、576、623
櫛刺突羽状文+円形浮文	21、26、69、82、153、350、513
櫛押圧横線文	25、87、146
櫛斜行刺突文	145、148、162
櫛刺突羽状文+櫛押圧横線文	90、152、436、516
文様なし	154
櫛押圧横線文+円形浮文	86
結節縄文	581

以上のような結果から土橋遺跡の弥生後期壺形土器の肩部文様帯の主流は櫛状工具による刺突羽状文である。他の遺物から見ると櫛押圧横線文は櫛刺突羽状文よりやや古い傾向を示し、結節縄文は櫛刺突羽状文より遅れてでてくる傾向がある。

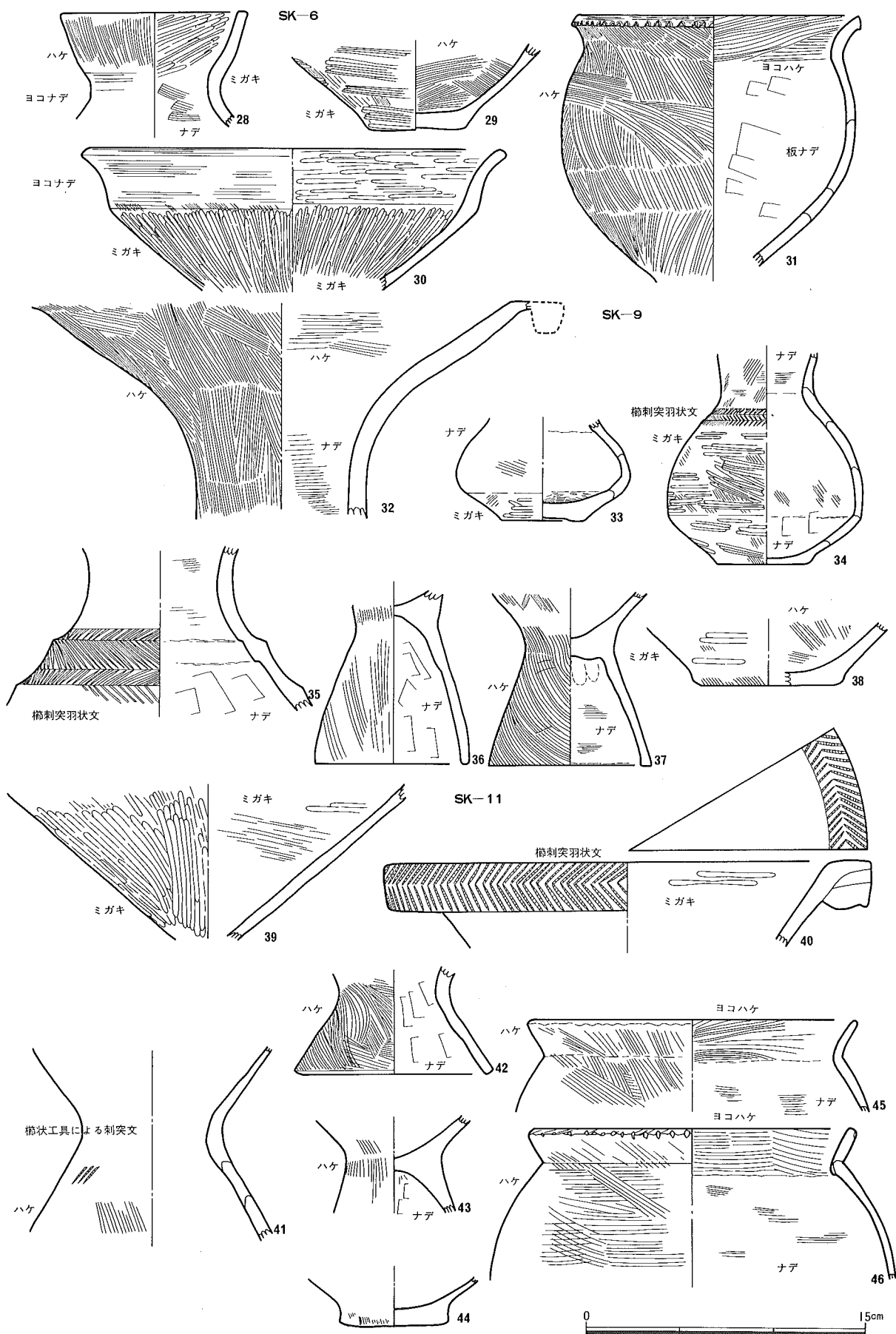
このように折り返し口縁をもつ弥生時代後期の壺形土器を中心に概要を記しているが、実際のところ土橋遺跡のこの時期の一括遺物のグループには受口状の口縁をもつ土器や、単純口縁の土器がたいへんに少ない事がこの遺物群の特徴であろう。そして、今回の出土遺物に限っての一般的特徴として折り返し口縁をもたない壺形土器の肩部文様帯には、ほとんど有段櫛刺突羽状文、または段をもたない櫛刺突羽状文が入ることがなく櫛横圧横線文等が施されているようである。口縁部に付く棒状浮文や、肩部文様帯に付く円形浮文と呼ばれる装飾の類は弥生時代の後期後半の最終末的な壺形土器には見られず、その一段階前の遺物に見られるのも注意すべき点であろう。また最終末的な壺形土器の頸部は当遺跡においてハケ・ミガキ?のあとヨコナデで仕上ることも付け加えておきたい。



第46図 土橋遺跡出土土器実測図(1)

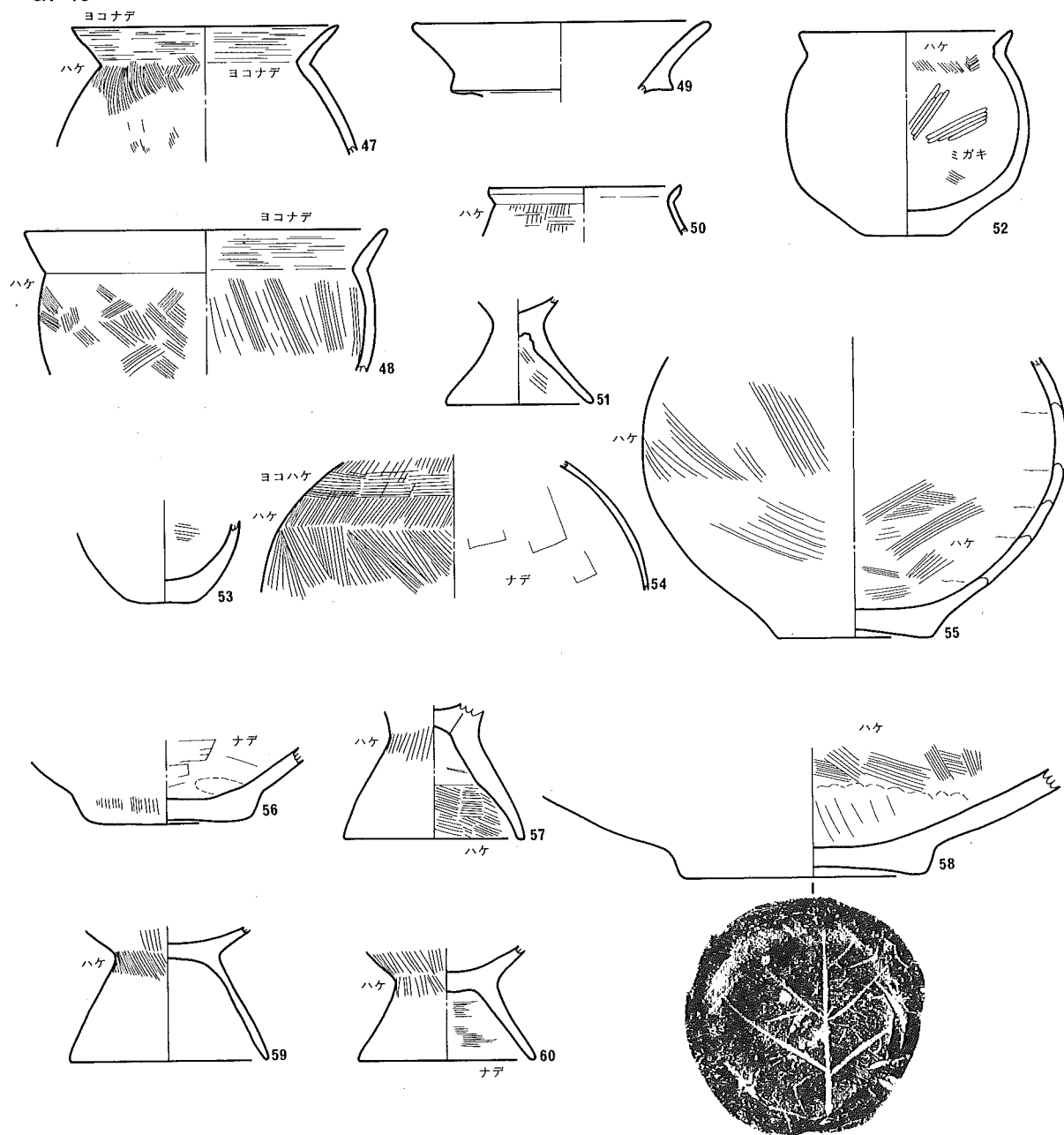


第47図 土橋遺跡出土土器実測図(2)

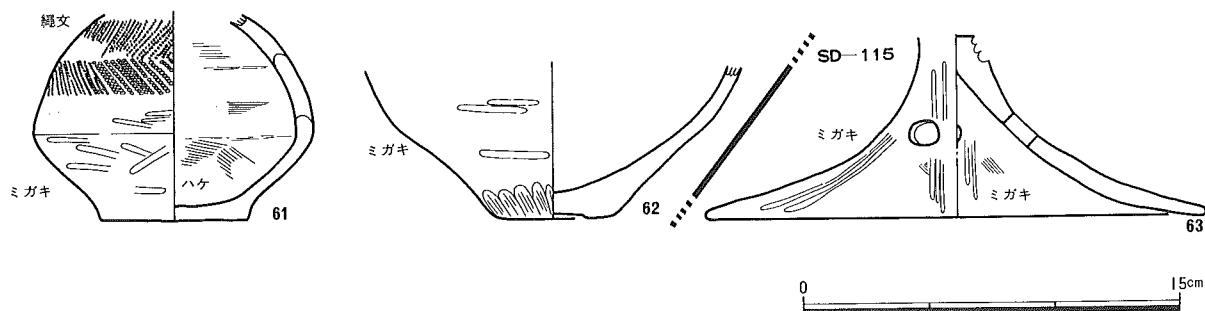


第48図 土橋遺跡出土土器実測図(3)

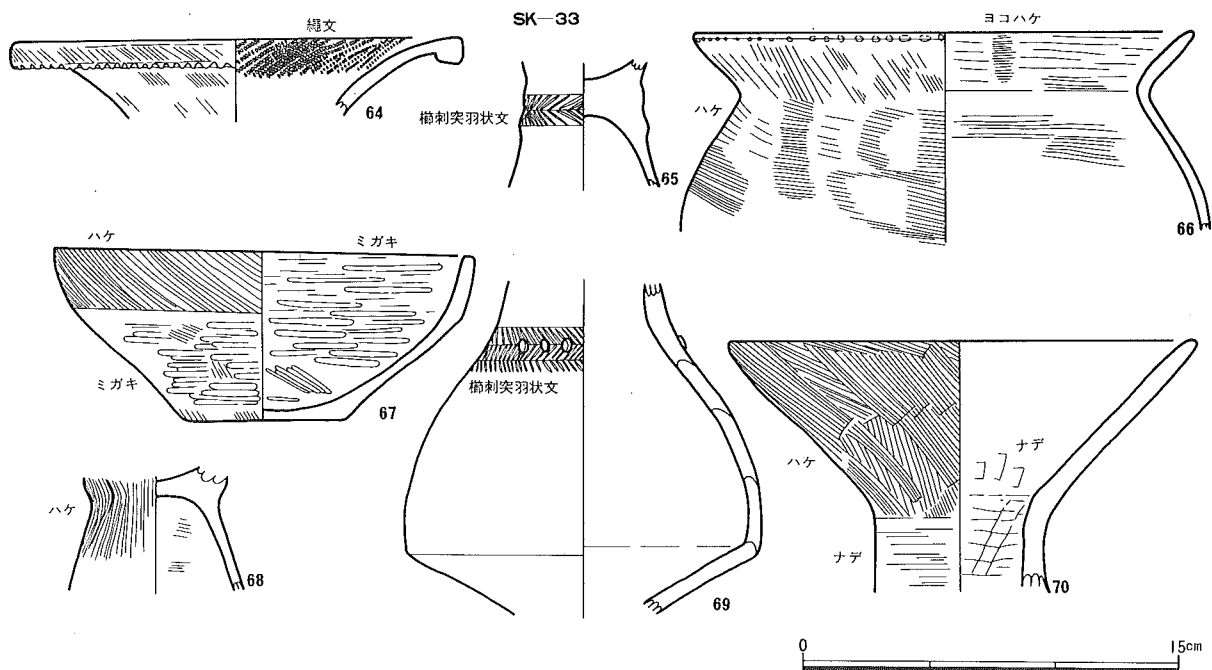
SK-13



SK-14



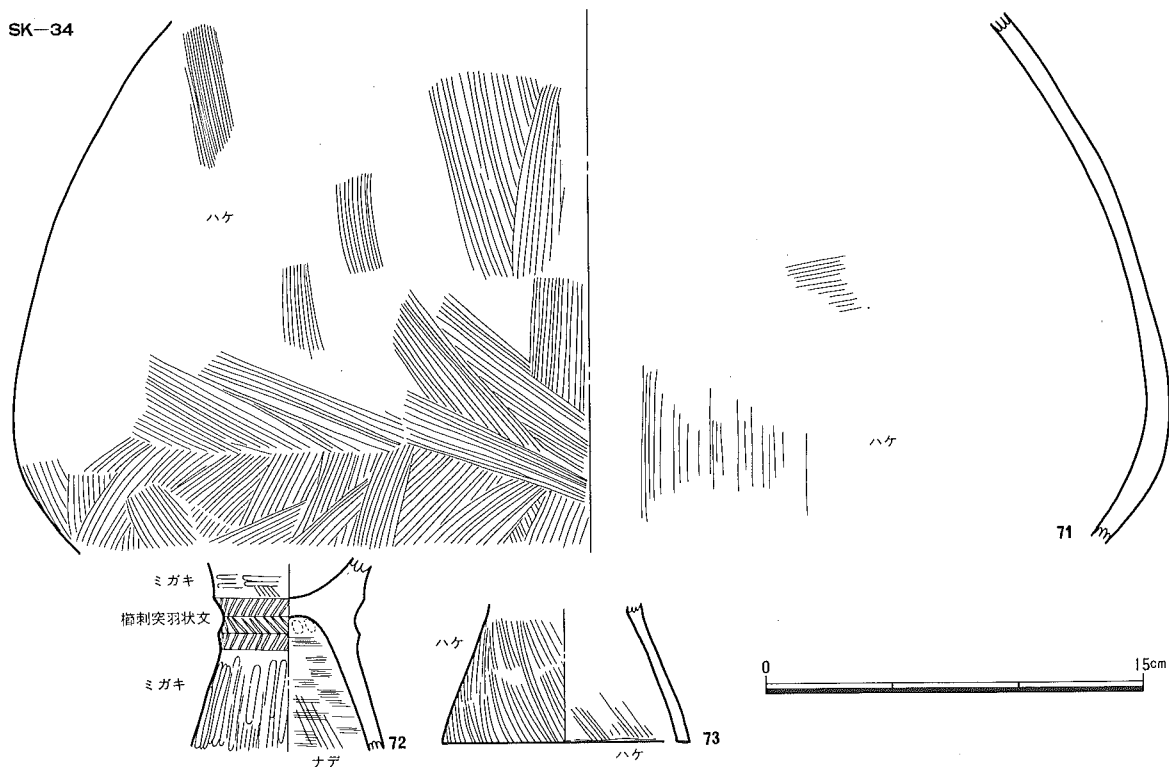
第49図 土橋遺跡出土土器実測図(4)



第50図 土橋遺跡出土土器実測図(5)

高 坏 弥生時代後期出土の高坏はかなりの数量が出土しているが、ほぼ完形のものがSK 77のNo.165で、坏部の残りの良いものはSK 3のNo.17、SD 2・120のNo.521、523、524ぐらいである。その他は坏部と脚部の接合部や脚部破片が多い。これらの高坏の特徴としては漏斗形の坏部にやや彎曲しながら斜め上に広がる口縁をもつ坏部と、下部に屈曲を残しながら直線的に広く脚部を有している。口唇部は一般的にヨコナデの後櫛状工具により細かなキザミ目が付けられている。坏部の内外面ともていねいにミガキが施されているのが普通である。接合部の処理としてはユビオサエまたはヨコナデによって断面三角形の凸帯を残す場合と櫛状工具による刺突羽状文、または櫛状工具による押圧横線文の文様帯を施す場合があるが、土橋遺跡の場合は櫛状工具による刺突羽状文が圧倒的である。脚部は屈曲による段より上部はハケ→ミガキで仕上げてあるが、脚端部は縄文や櫛状工具による刺突文、そしてハケにより仕上げられている。しかし文様のある場合は少なくハケまたはヨコナデが多い。脚部内面は巻き上げ痕が残リナデで簡単にととのえてある。また2点だけではあるが接合部の櫛刺突羽状文のかわりに縄文を施すものがある。(No.274、562) 例外的な資料としてはNo.88、No.398、No.532などがある。No.88は基本的には弥生時代後期後半の脚部であるが脚端部の四方に1cm角の切り込みが入れられている。切り込みの深さは4ヶ所とも同じであるが切り込みの幅は一定していない。No.398も脚端部がややまるみを帯び少し大型である。No.532は在地のものではない。たぶん西遠江からの搬入品であろうと思われる。No.274、No.562は坏部との接合部の文様帯を櫛刺突羽状文のかわりに縄文を施してある。共に溝跡内出土であるが共伴する壺形土器の口縁部内側は結節縄文が施され、No.274は共伴して出土する高坏の坏部は新しい要素を持っている。

土橋遺跡出土の高坏について以上のような要素を順にまとめていくと、断面三角形の凸帯をヨコナデ、ユビナデで仕上げた接合部の処理方法と櫛押圧横線文のものが櫛状工具による刺突文の文様帯の前を経て、弥生土器として最後の高坏が櫛刺突羽状文とオーバーラップする形で縄文を施したものがわずかに残るといいう形をとっている。しかし、土師器の範ちゅうに一部入るものも出ている例もある。



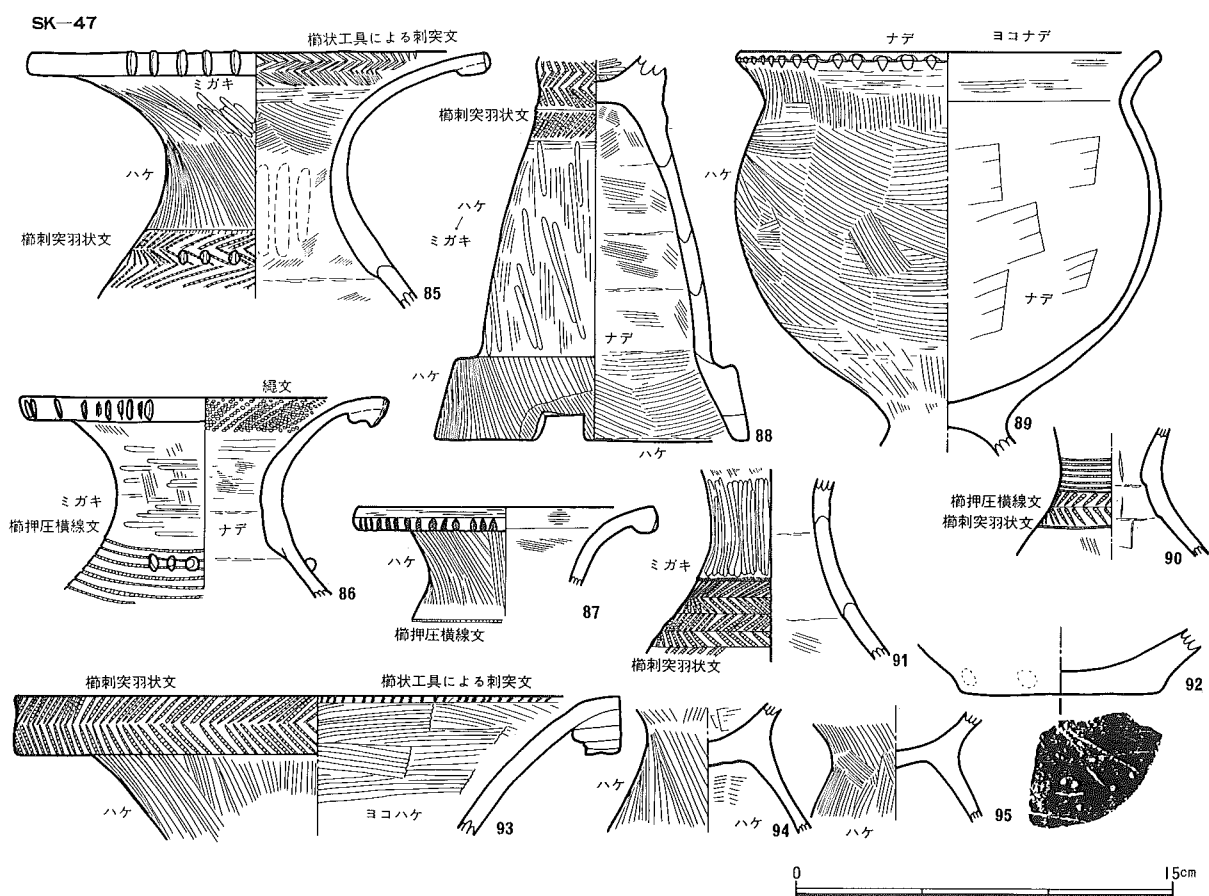
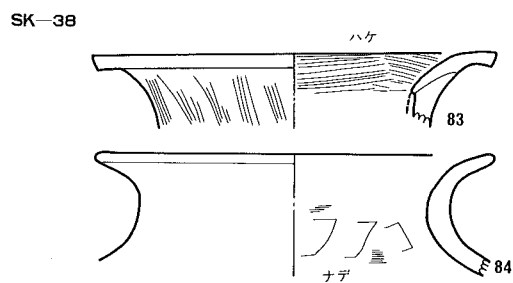
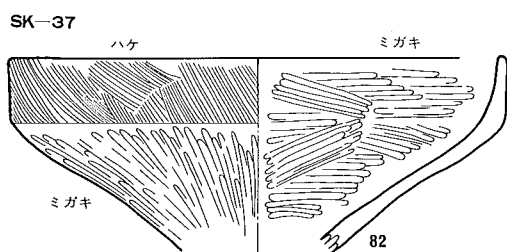
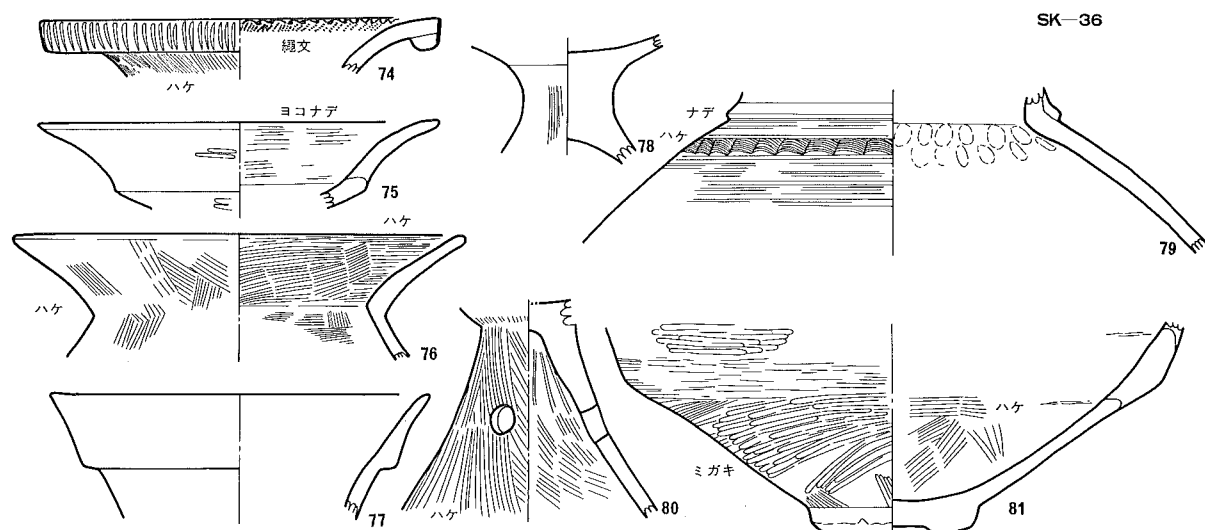
第51図 土橋遺跡出土土器実測図(6)

甕形土器 土橋遺跡の甕形土器は大きく分けて台の付くものと付かないものの2種類に分けられる。台のつく甕の典型的なものはSK77出土のNo.171の台付甕で、台の付かないものはSD2・120出土のNo.533がある。台付甕はゆるやかに開く口縁部には櫛状工具によるキザミが施され、ほぼ球形の胴部は上部をタテハケ、その下からはヨコハケになり、接合部から台部に掛けては再びタテハケとなっている。胴部内面はヨコハケ、台部内側もハケで調整されている。

甕形土器の口唇部は面取りがされているものと先端がとがったものがある。一般的には面取りしてあるがNo.168などは後者の例である。口唇部の櫛状工具によるキザミにもわずかに残るものから口縁部のかなり下方まで深く残るものまでさまざまである。No.168は表面の剥落がはげしく体部の調整が不明瞭であるが、かすかに残るハケメの痕跡から見ると、No.171と同じ形態であろう。

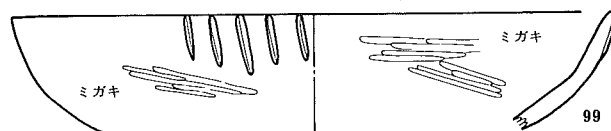
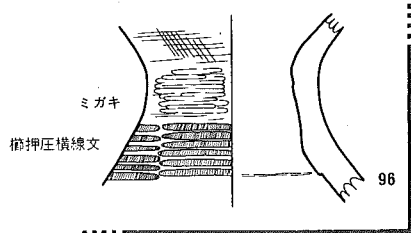
台付甕の胴部に施されるハケメは先に紹介した典型的な弥生時代後期の例の外に次のようなものがある。まず、No.535、No.536、No.537などのように一応ハケメが口縁部、胴部胴下半部と三つに分けられるがヨコハケが入らず、タテハケ、またはナナメハケで仕上げられている例である。また、No.31のようにヨコハケが胴の一部にしか入らないもの、No.624のように胴下半部の一部にヨコハケの入るもの、No.89のように口縁部の一部にヨコナデの入るもの、No.22のように部分的にハケ→ナデで仕上げられ、まるでミガキのように見えるものなどある。やや新しい要素としてNo.281のように口唇部にキザミを持たなくヨコナデで仕上げるものもあるがこの遺物の中で、ハケの方法によって時期差を考えるには少し難しいであろう。

台の付かない甕で完成のものはNo.533がある。口縁部に粘土帯を貼り断面三角形にし、胴部はハケ、胴下半部はミガキとなっている。

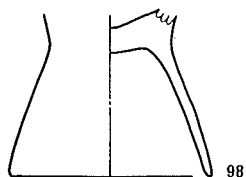
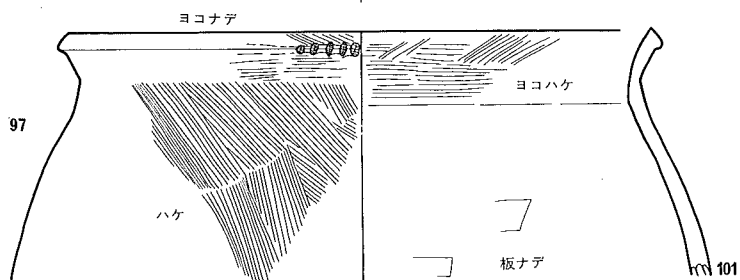
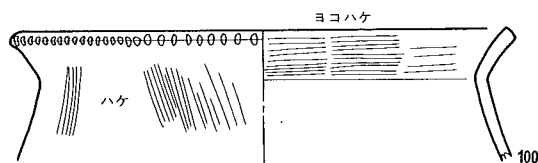
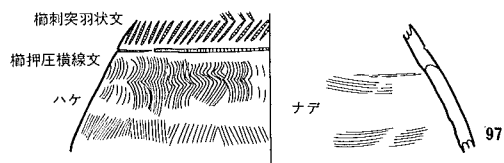


第52図 土橋遺跡出土土器実測図(7)

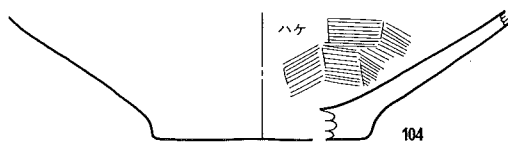
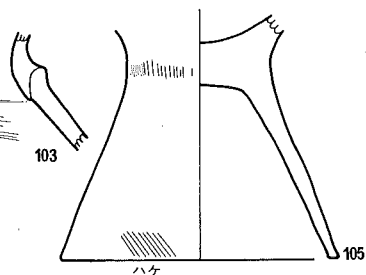
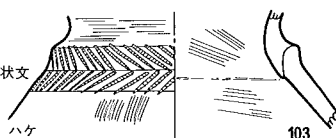
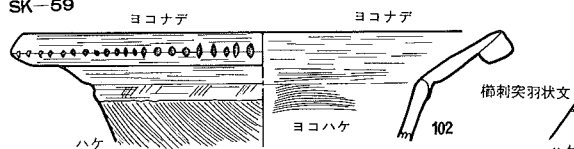
SK-41



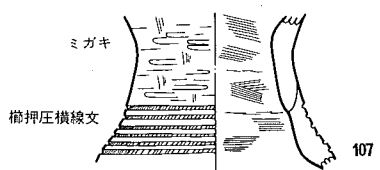
SK-55



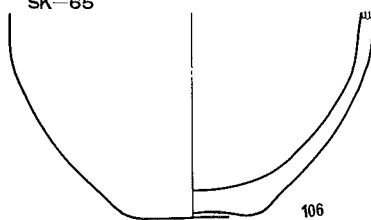
SK-59



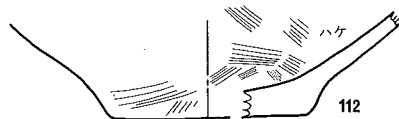
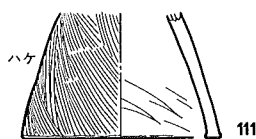
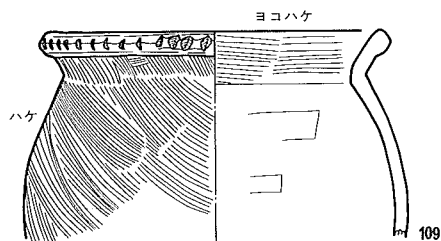
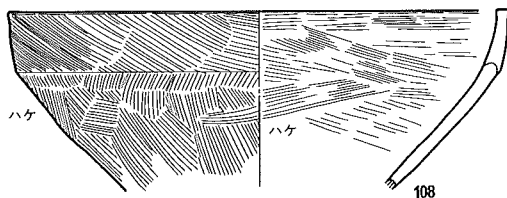
SK-66



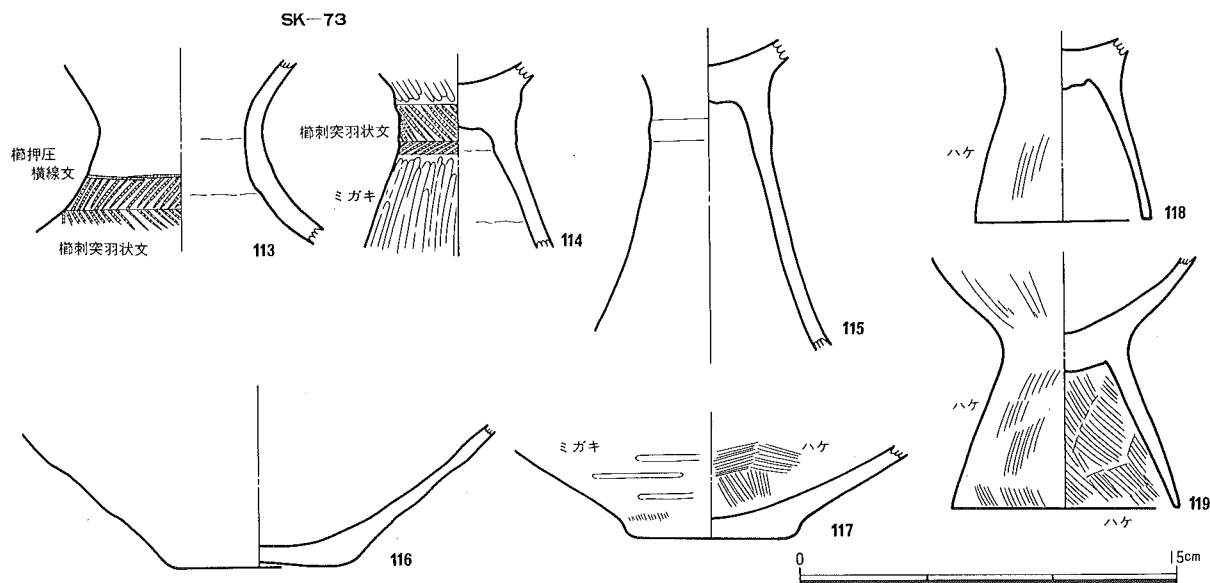
SK-65



SK-67



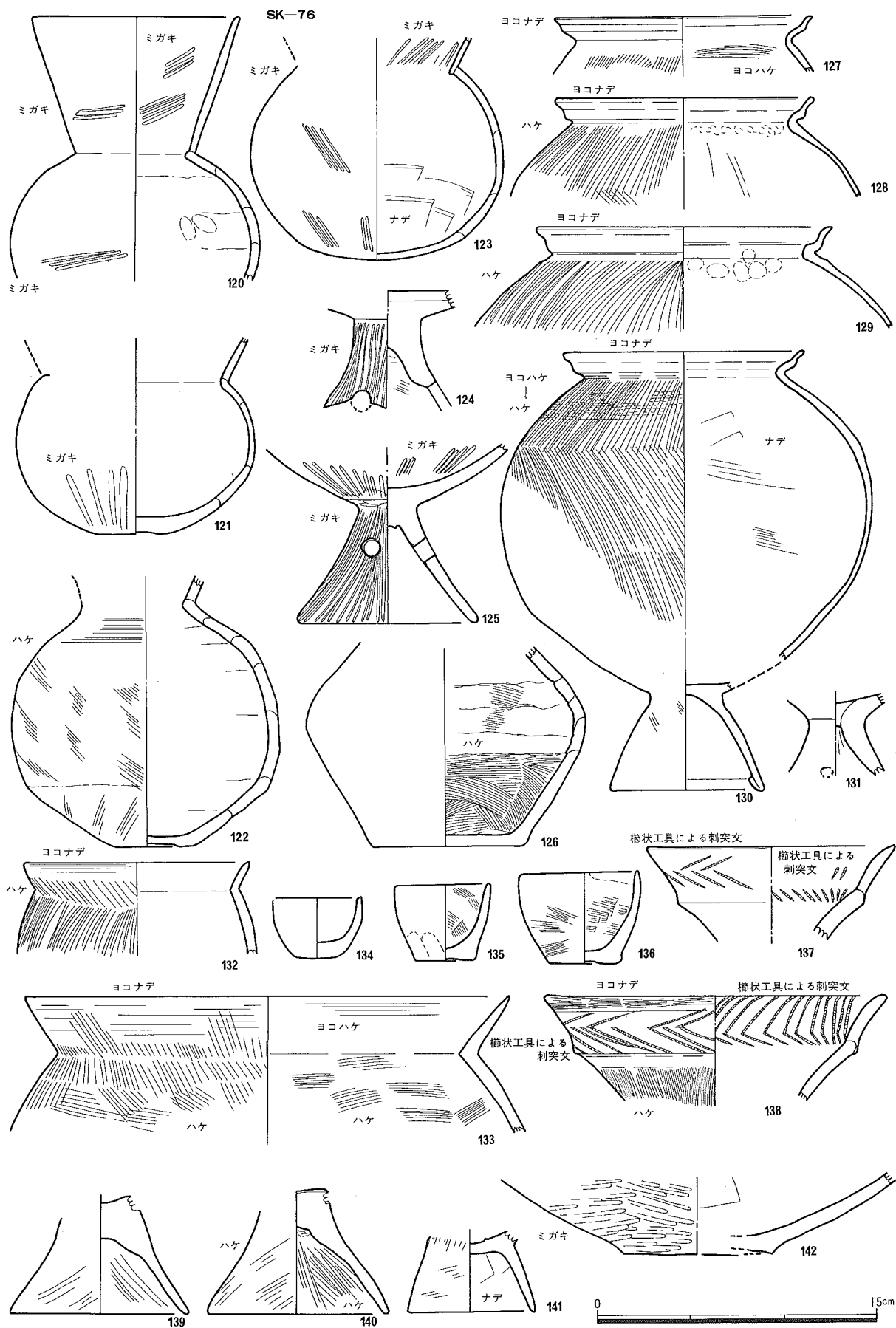
第53図 土橋遺跡出土土器実測図(8)



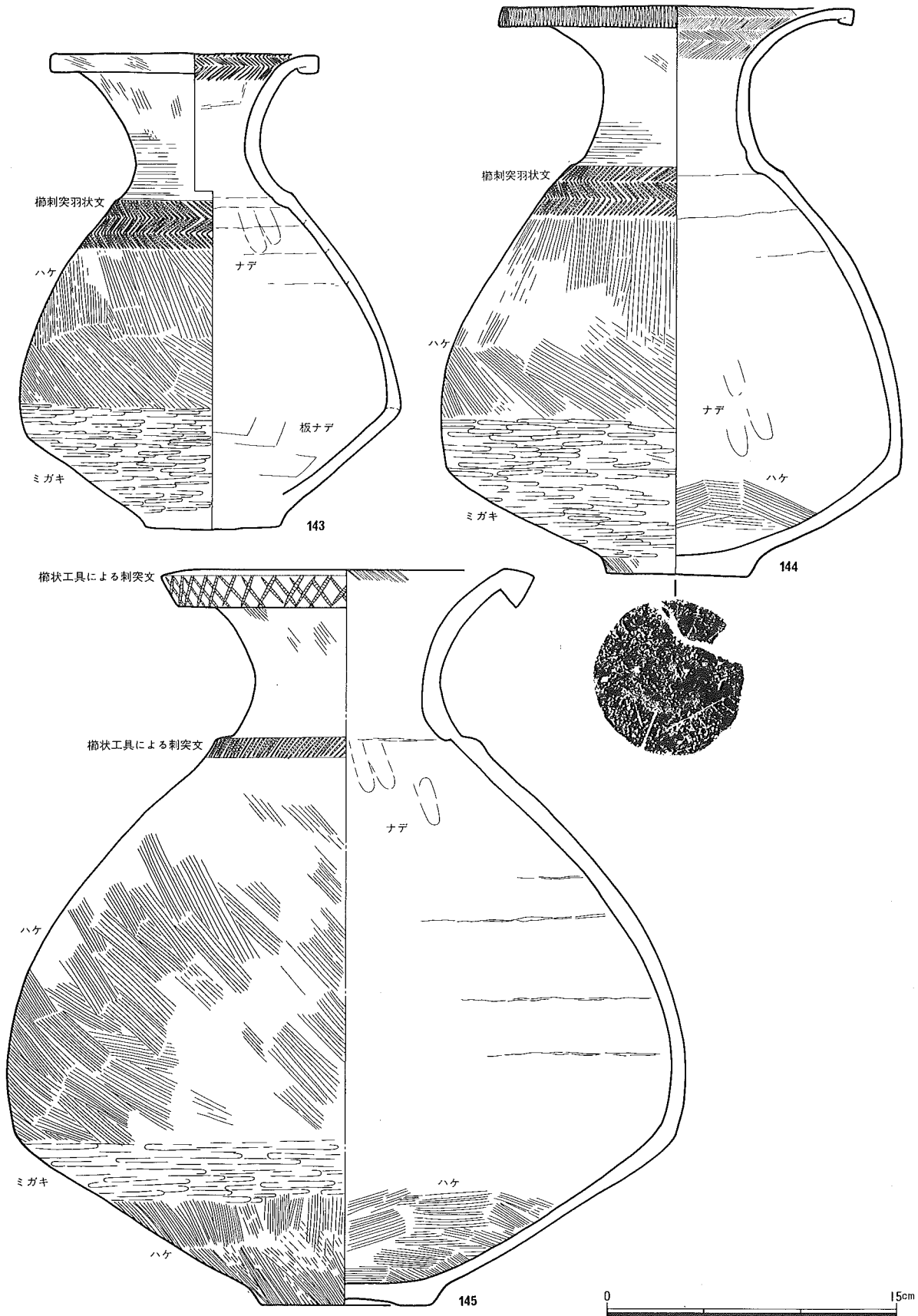
第54図 土橋遺跡出土土器実測図(9)

器種構成 壺・甕・高坏の器種構成は次のとおりである。計測には壺は底部、台付甕・高坏は接合部を基準にしてあるため実測図の土器数とは異なる場合がある。

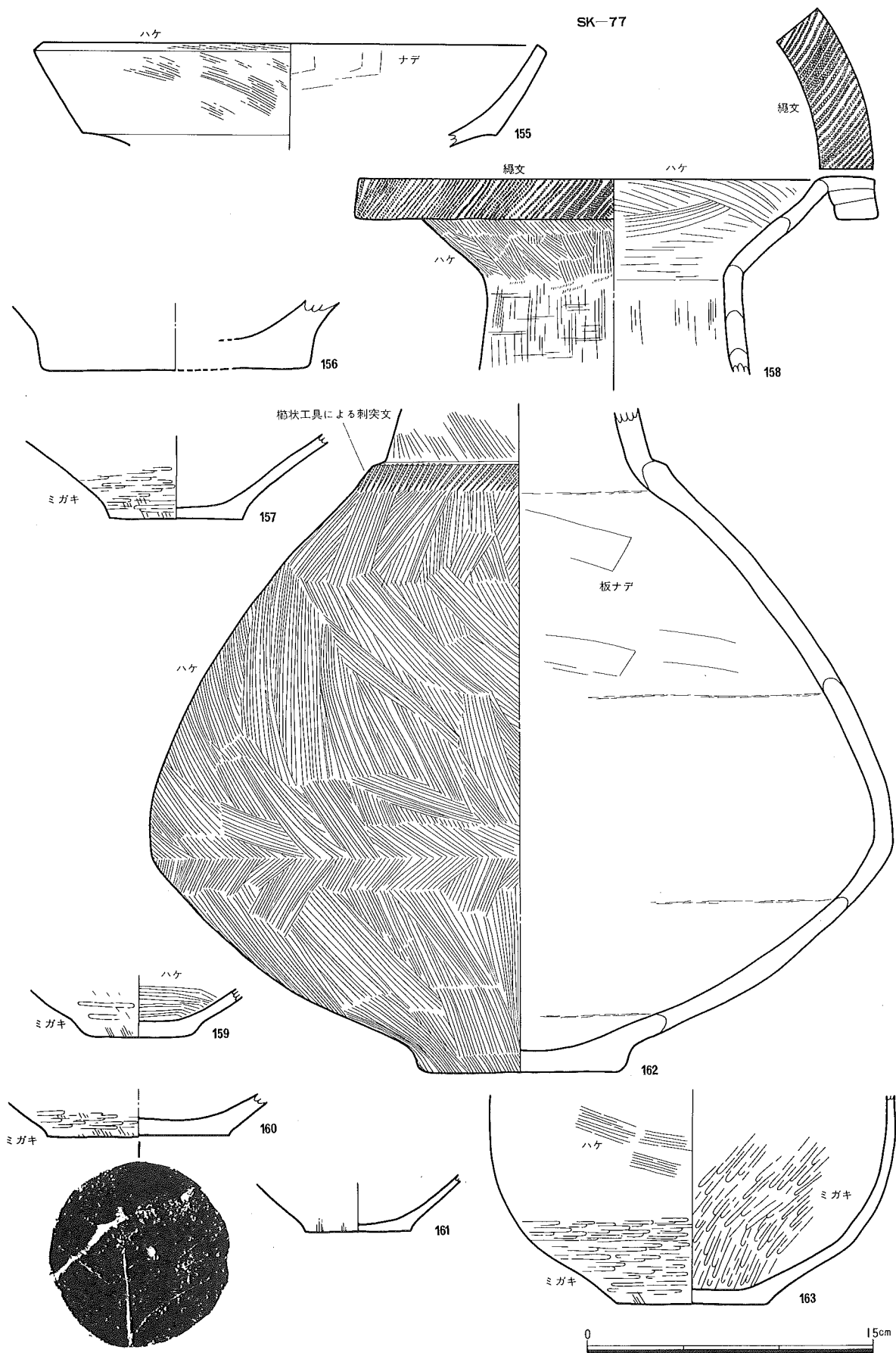
〔遺構名〕	〔壺〕	〔甕〕	〔高坏〕	〔合計〕
SK 3	4 (25%)	9 (56%)	3 (19%)	16
SK 6	12 (70%)	4 (24%)	1 (6%)	17
SK 9	9 (56%)	5 (31%)	2 (13%)	16
SK11	3 (75%)	0	1 (25%)	4
SK33	4 (57%)	2 (29%)	1 (14%)	7
SK34	1 (50%)	0	1 (50%)	2
SK47	1 (20%)	3 (60%)	1 (20%)	5
SK55	3 (100%)	0	0	3
SK59	2 (66%)	1 (33%)	0	3
SK67	1 (33%)	1 (33%)	1 (33%)	3
SK77	20 (69%)	7 (24%)	2 (7%)	29
土壌小計	60 (57%)	32 (31%)	13 (12%)	105
SD 2	7 (33%)	13 (62%)	1 (5%)	21
SD32	1 (50%)	0	1 (50%)	2
SD45	9 (45%)	10 (50%)	1 (5%)	20
SD93	9 (47%)	6 (32%)	4 (21%)	19
SD109	1 (33%)	2 (66%)	0	3
SD120	36 (62%)	12 (12%)	10 (17%)	58
SD134	2 (50%)	0	2 (50%)	4
溝跡小計	65 (51%)	43 (34%)	19 (15%)	127
合 計	125 (54%)	75 (32%)	32 (14%)	232



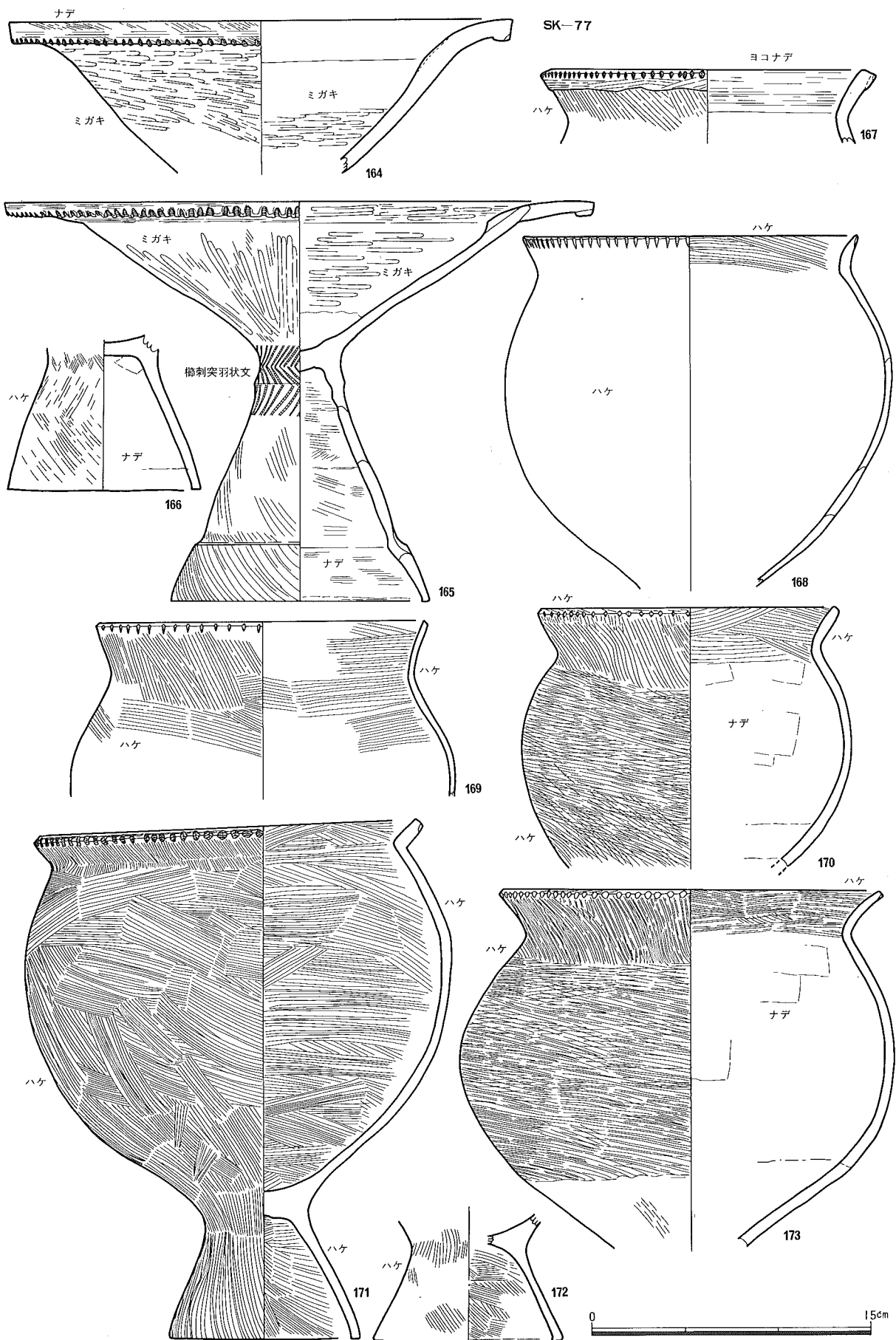
第55図 土橋遺跡出土土器実測図 (10)



第56図 土橋遺跡出土土器実測図 (11)



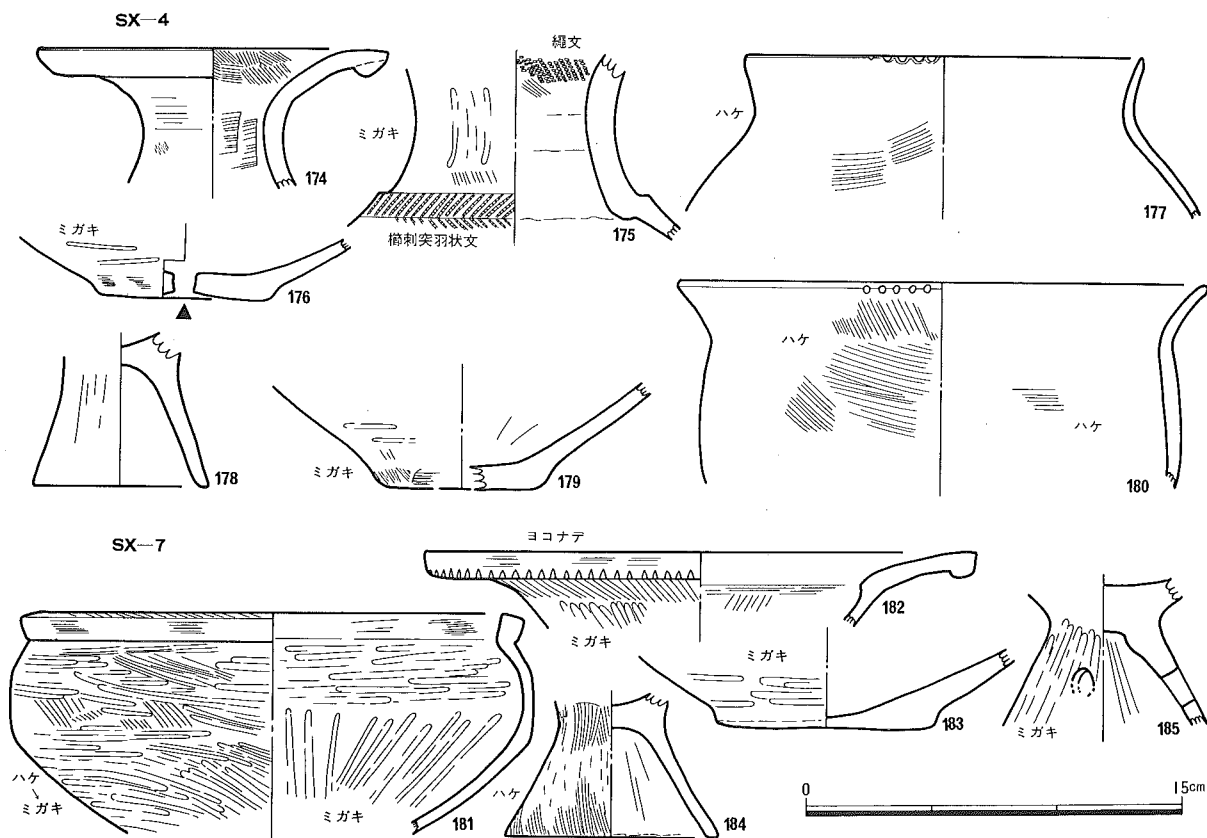
第58図 土橋遺跡出土土器実測図 (13)



第59図 土橋遺跡出土土器実測図 (14)

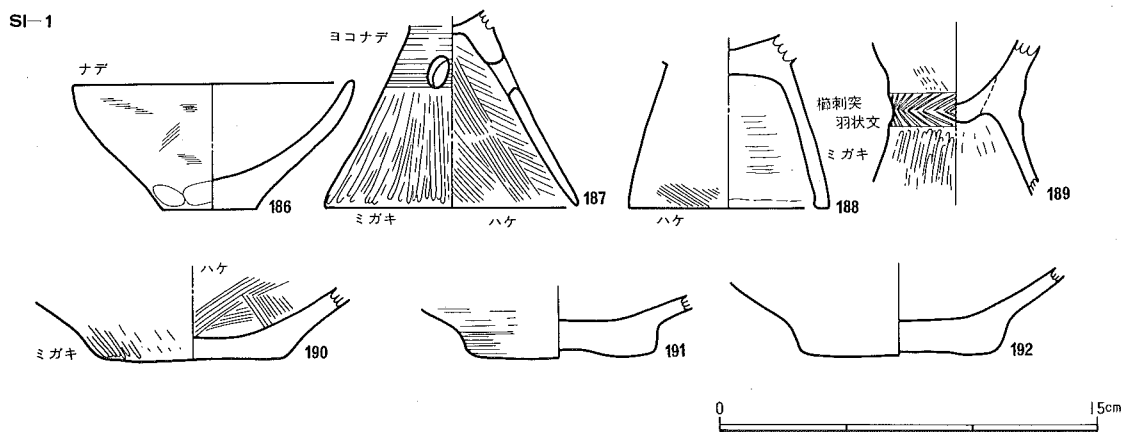
以上、弥生時代後期後半の遺物を中心に要点のみをコメントしたが、これらはいわゆる菊川式土器の範疇に入ってくる土器である。中遠地域での弥生土器は鈴木敏則氏や、柴田稔氏の資料等から見るとおおむね嶺田式→白岩式→二之宮式→菊川式と編年がなされている。しかし、この編年も個々の内容に至るといまだ研究者の中でも流動的部分が残されているため本遺跡資料は一般論の中で進めていきたい。本遺跡の遺構別の土器の流れは次のとおりである。

SK 3 壺形土器は基本的に折り返し口縁を持ち、頸部はタテハケ・タテミガキそして部分的に（接合部の都合によるものと思われるが）ヨコナデで仕上げられている。肩部文様帯は20、21、26など櫛状工具による刺突羽状文が施されいわゆる有段羽状の刺突文が多い、また肩部および口縁部には円形浮文・棒状浮文などを貼り付けるのも特色のうちである。胴部はハケで最大径よりやや上から底部にかけてはミガキである。26はやや長頸、長胴で二之宮式に近い形態である。25は肩部に櫛押圧横線文を施してあるが形態的には菊川式である。高坏は16のように接合部に櫛刺突羽状文を持たず三角形の突帯のみの二之宮式に近い土器である。17も接合部に櫛刺突羽状文を持ち18と同じ処理であるが坏部の形態には二之宮式の影響を受けている。台付甕は22が残りが良いが表面の調整は異色であるためここでは触れることを避けるが、胴部の形態的には菊川式の丸みを帯びた形である。26の口縁部の縄文は二之宮式の影響かと思われる。以上のような点からこの土壌の一括遺物を菊川式の古い段階にもっていき二之宮式の影響を持つ土器の存在の説明としたい。



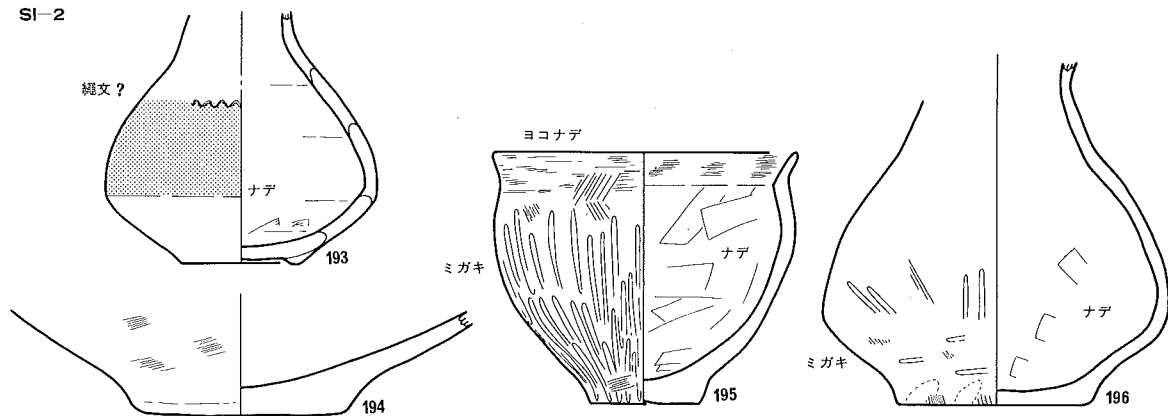
第60図 土橋遺跡出土土器実測図(15)

SK77 壺形土器は標準的な大きさのものと、やや大形のものの2種類がある。まず、標準的な大きさのものは折り返し口縁に短かく、やや太めの頸部を持ち肩部は小さな段と櫛状工具による刺突羽状文が基本的には3列施文されている。このグループの中の152、153等櫛押圧横線文や円形浮文を持つ土器はやや特異な例で、小さな破片を回転復元している遺物である。胴部は最大径より上はハケ、下部はミガキで仕上げられ底部に木葉痕をもつものもある。胴部最大径は一段階前のものよりかなり下がり一見して安定感のある形に変ってくるが、頸部・胴部が短くなったわりには底形は小さく用途的にはそれほど使い易くなったとは考え難いところである。これ以外に前段階にあたるSK3の壺形土器と異なるのは頸部の仕上げにタテハケ等の後ヨコナデを用いるのが異なっている。146、147等はこの一群の中でやや特別で、146は折り返し口縁を持たず、あまり口縁部の開かない短頸壺の類で肩部に櫛押圧横線文をわずかに残し古い段階の壺形土器の混入品であろう。147は注口を持つ壺形土器であるが著者の持つ資料の中では位置付けがやや難しいので今回は不明としておきたい。次にやや大型の土器が3点または4点共伴している。これらは145、154、158、162の遺物であるがこれらは標準的な大きさの土器とは形態・調整が異なる的が多いので追って考えたい。高坏は164、165の2点がある。165は菊川式の典型的な土器で、漏斗形の坏部にやや上向きかげんに開く口縁部に小さく折り返された口唇部を持ち坏部と台部の接合部分には若干の突帯とともに3列の櫛状工具による刺突羽状文が施されている。ゆるやかに開く台部は小さな段状の屈曲部をもちハケ→ナデ（ミガキ？）で仕上げられている。164も基本的には165に近い形であろうが、坏部のみをみると口縁部が短かく坏身がやや丸みを帯びてきており磐田市の御殿・二之宮遺跡で中島郁夫氏が述べている新しい段階の高坏に近い形態かもしれない。甕形土器も菊川式土器の典型的なもので、くの字に外反した口縁部には櫛状工具によるキザミ目を全周させている、胴部は球形に近く、171などは台形の安定した台部とのバランスが良くとれた土器である、外面のハケ調整もこの一群の特徴で、口縁部はタテハケ、胴上部からヨコハケで下部になるとナナメハケ、接合部から台部にかけてはタテハケとなっている。

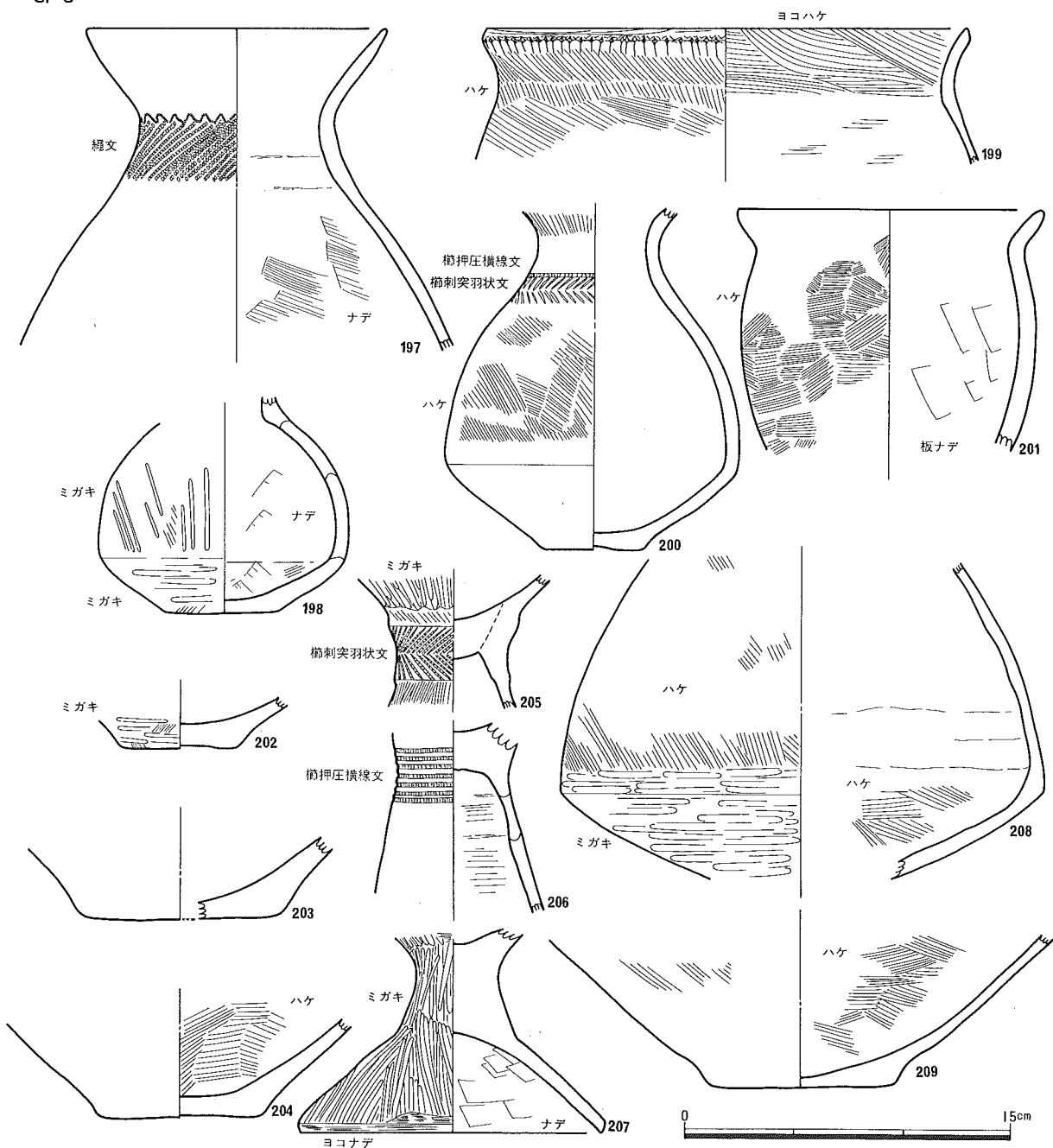


第61図 土橋遺跡出土土器実測図(16)

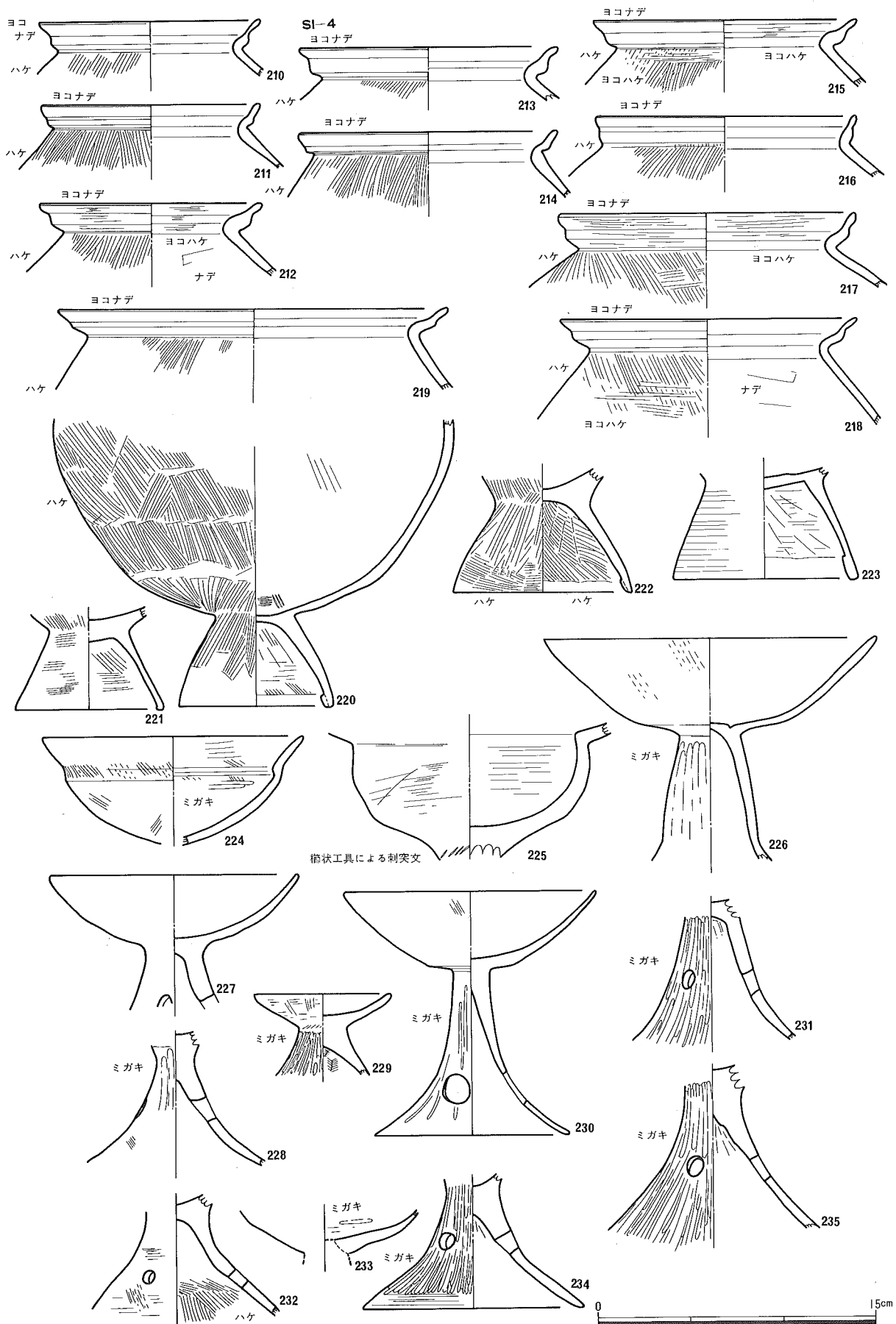
SI-2



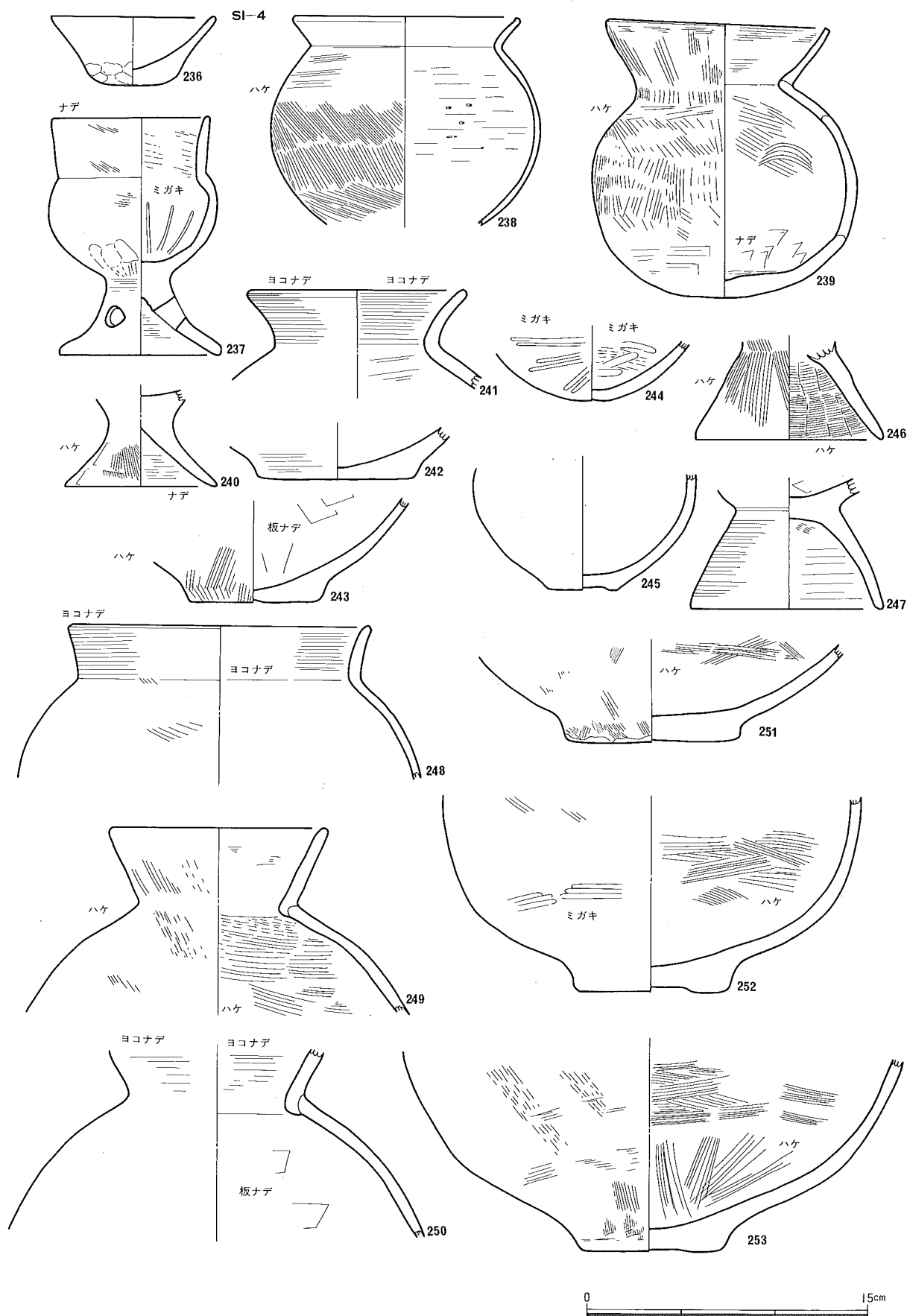
SI-3



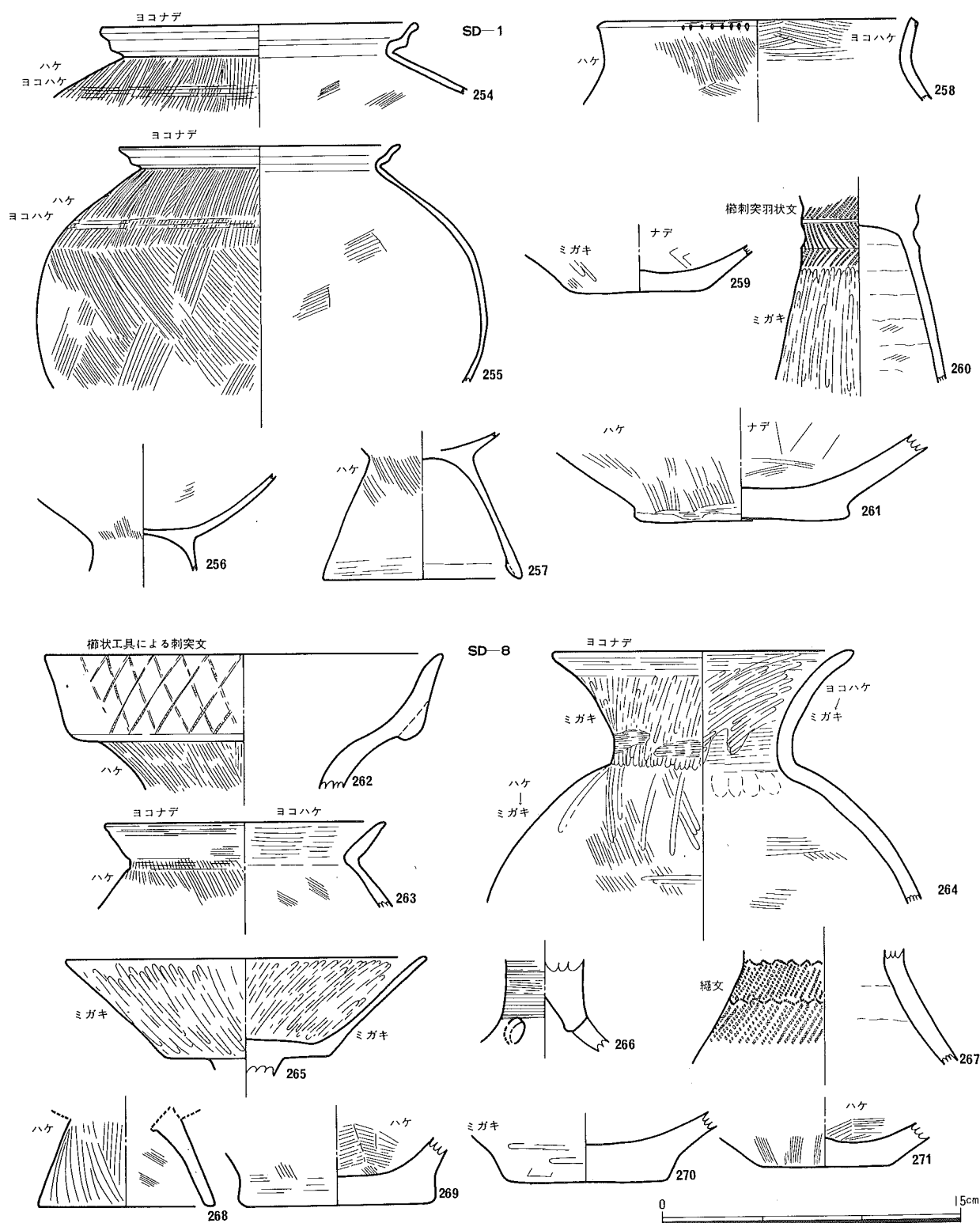
第62図 土橋遺跡出土土器実測図 (17)



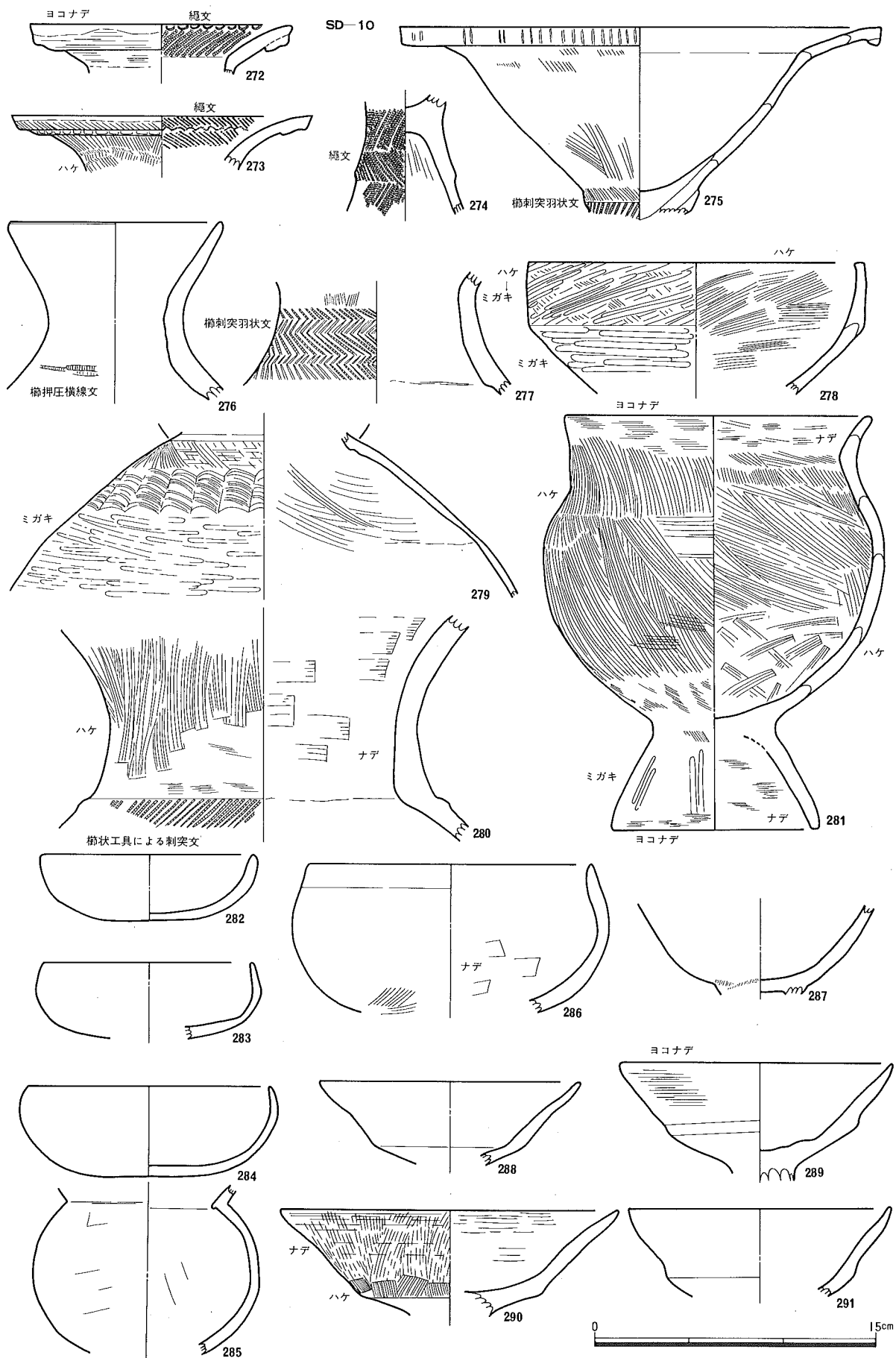
第63図 土橋遺跡出土土器実測図 (18)



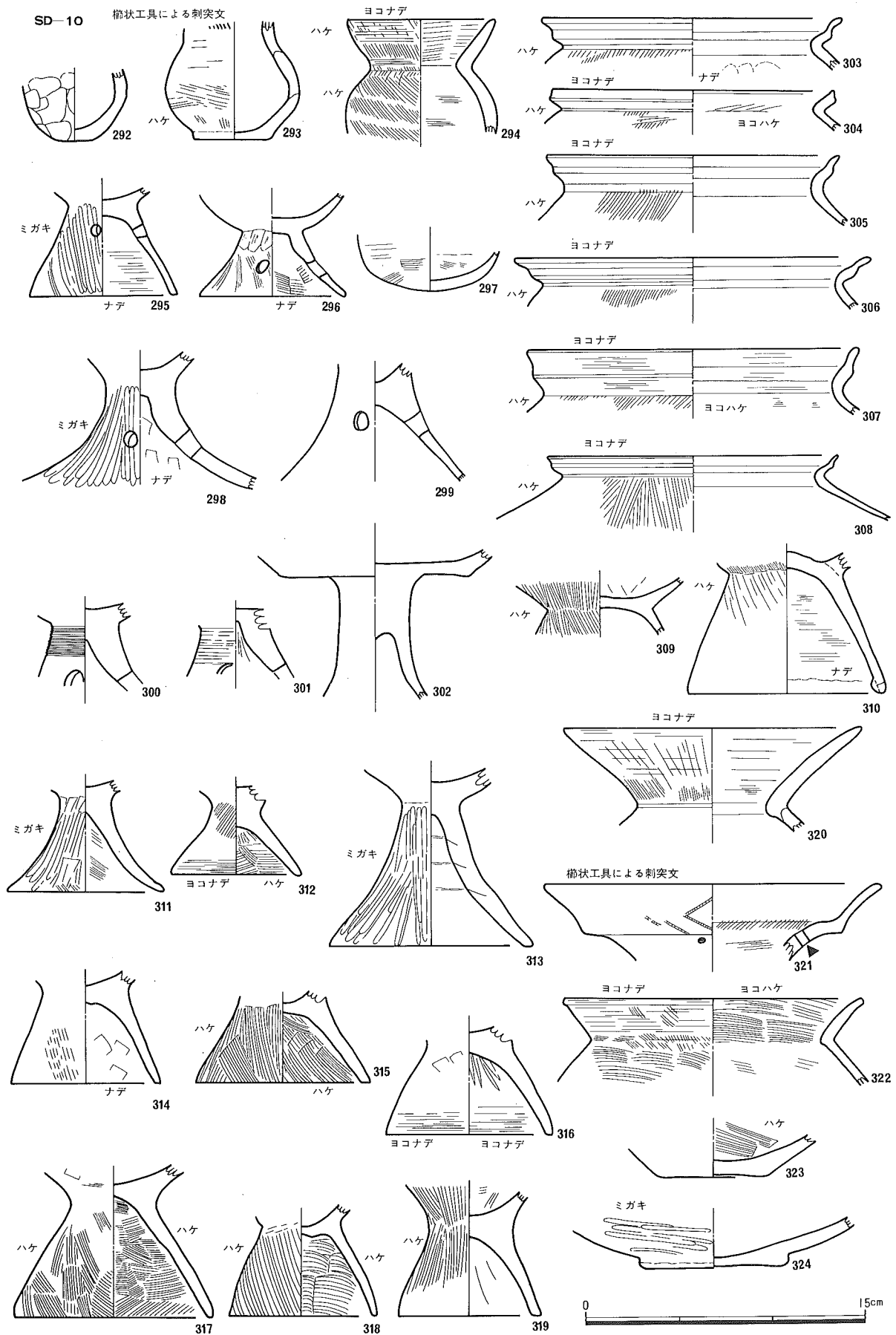
第64図 土橋遺跡出土土器実測図 (19)



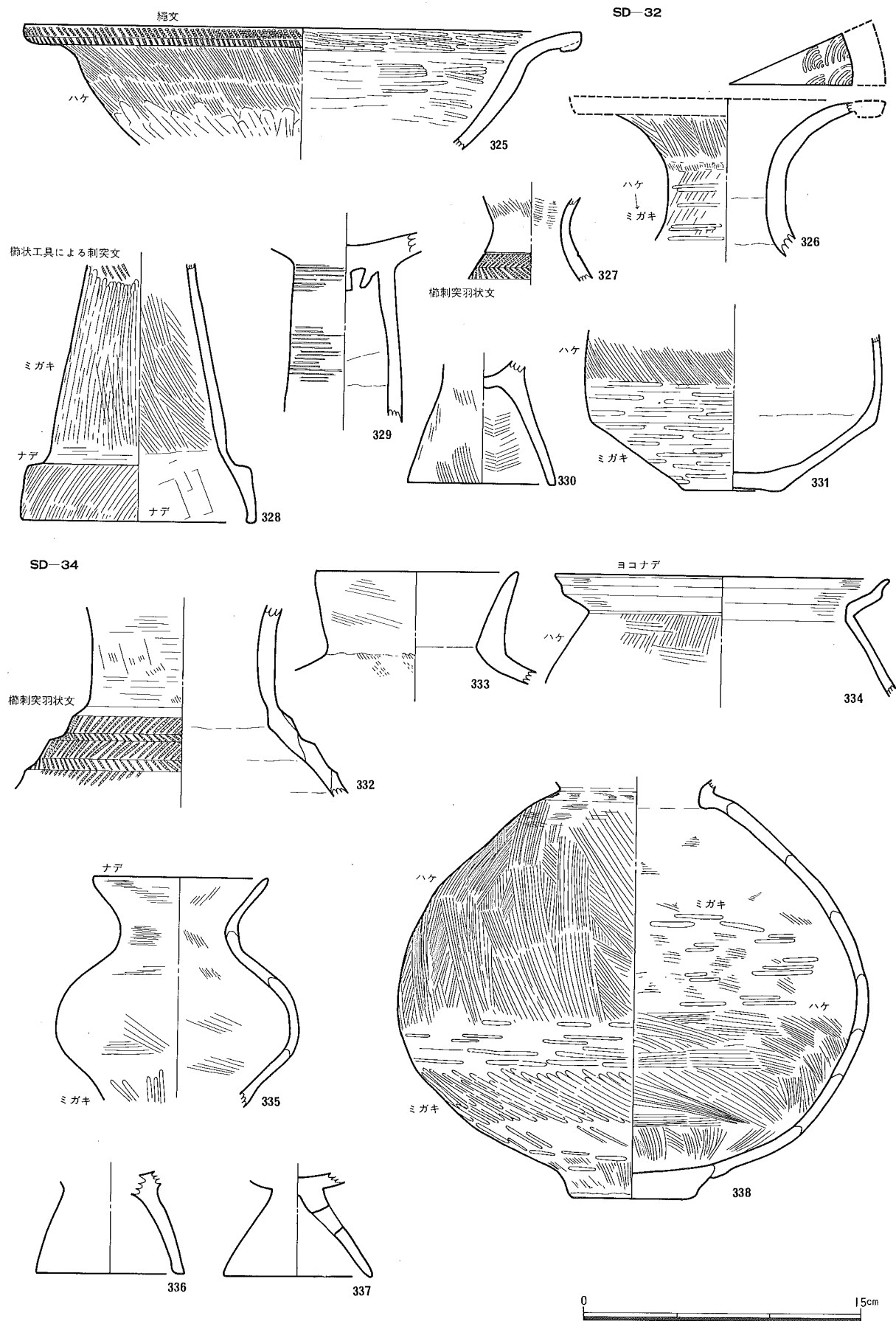
第65図 土橋遺跡出土土器実測図 (20)



第66図 土橋遺跡出土土器実測図 (21)

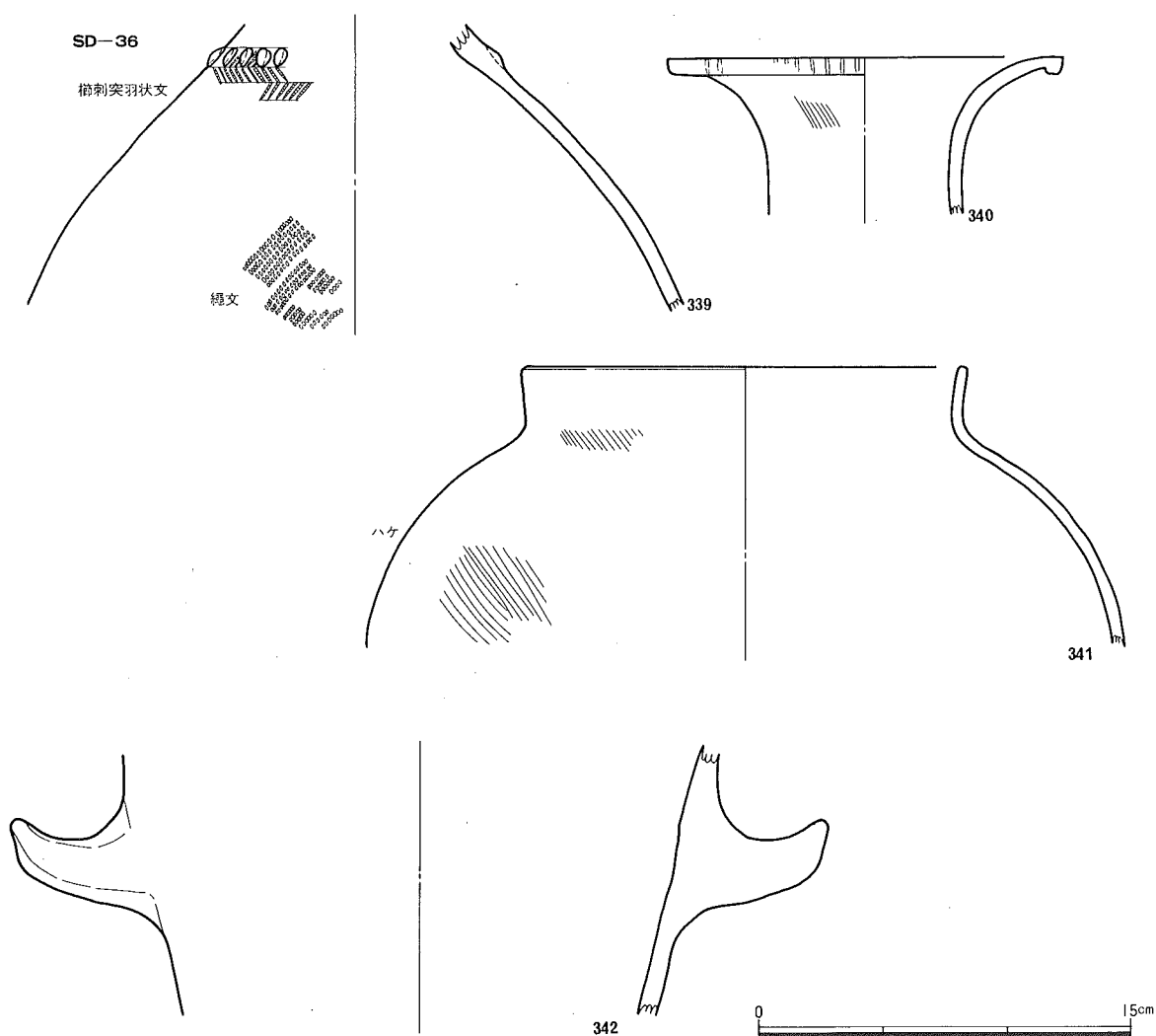


第67図 土橋遺跡出土土器実測図 (22)

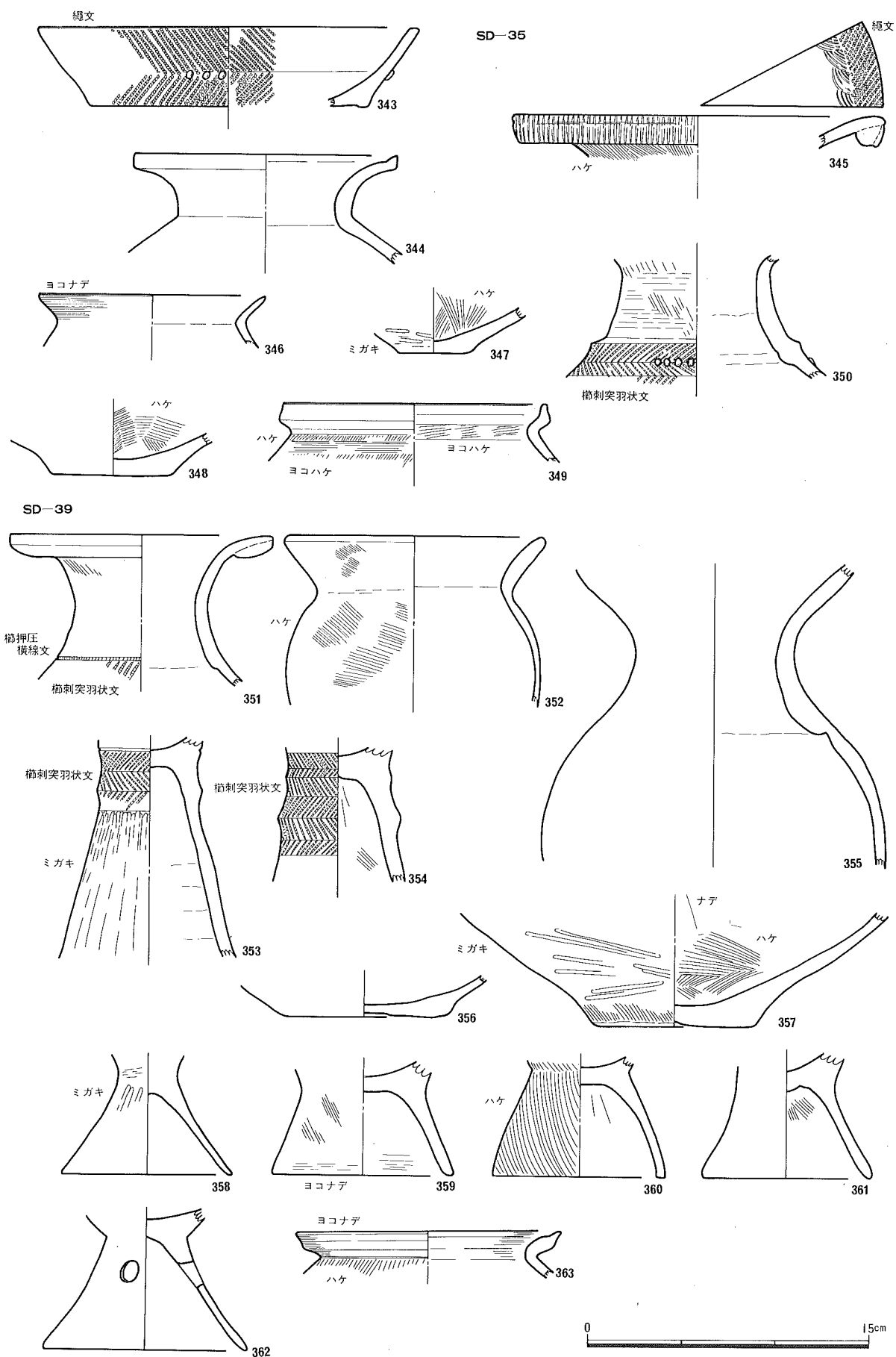


第68図 土橋遺跡出土土器実測図 (23)

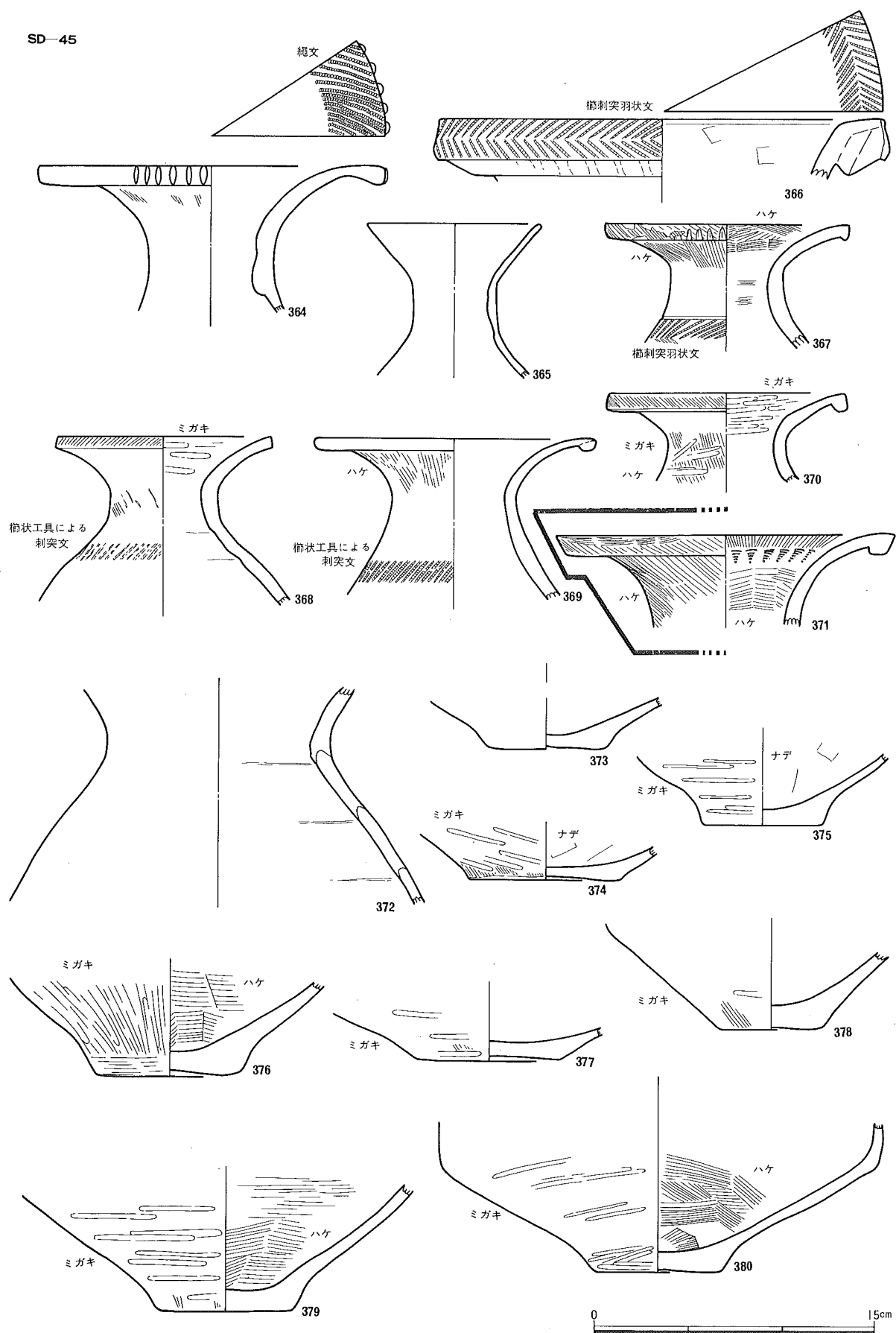
菊川式土器の新しい段階の一括遺物を出土する土壌は残念ながら発見されなかった。しかし、溝跡の中の出土品にこの時期の遺物が入っているので若干拾い出してみたい。一応候補として考えているのがS D125の中の576、577、578、579、581、562等の壺形土器を中心とした一群である。また、これに含まれるのが便宜的に分けたS D10の中にある272、273、274の一群で、いちばん菊川の新しい時期の高坏275も付近から出土している。これらの遺物から導びかれる特徴としては壺形土器の場合、前段階と比べて口縁部の外反する割合が小さく器厚がかなり厚い。さらには口縁部内側の文様帯はすべて結節縄文である点が大きく異なるのではないかと思う。S D125の土器を見ると口唇部にキザミを有するものの頸部はタテハケに、キザミを有しないものはハケ→ヨコナデとなっているように見える。肩部ははっきりと段の残った有段羽状刺突文が一般的で、581のように結節状文を施す例もある。高坏等については、やや丸みを帯びた坏部275に接合部に縄文を数列施したものが一般的であると思われるが、本遺跡での良好な出土品がなく今回は触れずにおきたい。台付甕については良好な資料がなくまったくわからない。なお、何回も述べるが溝跡出土の資料はどんなに精密に調査をしてもかならず混入品があるため、本遺跡も層位的に取り上げた資料ではあるがあくまでもここでは机上処理であることをお断りしておきたい。



第69図 土橋遺跡出土土器実測図(24)

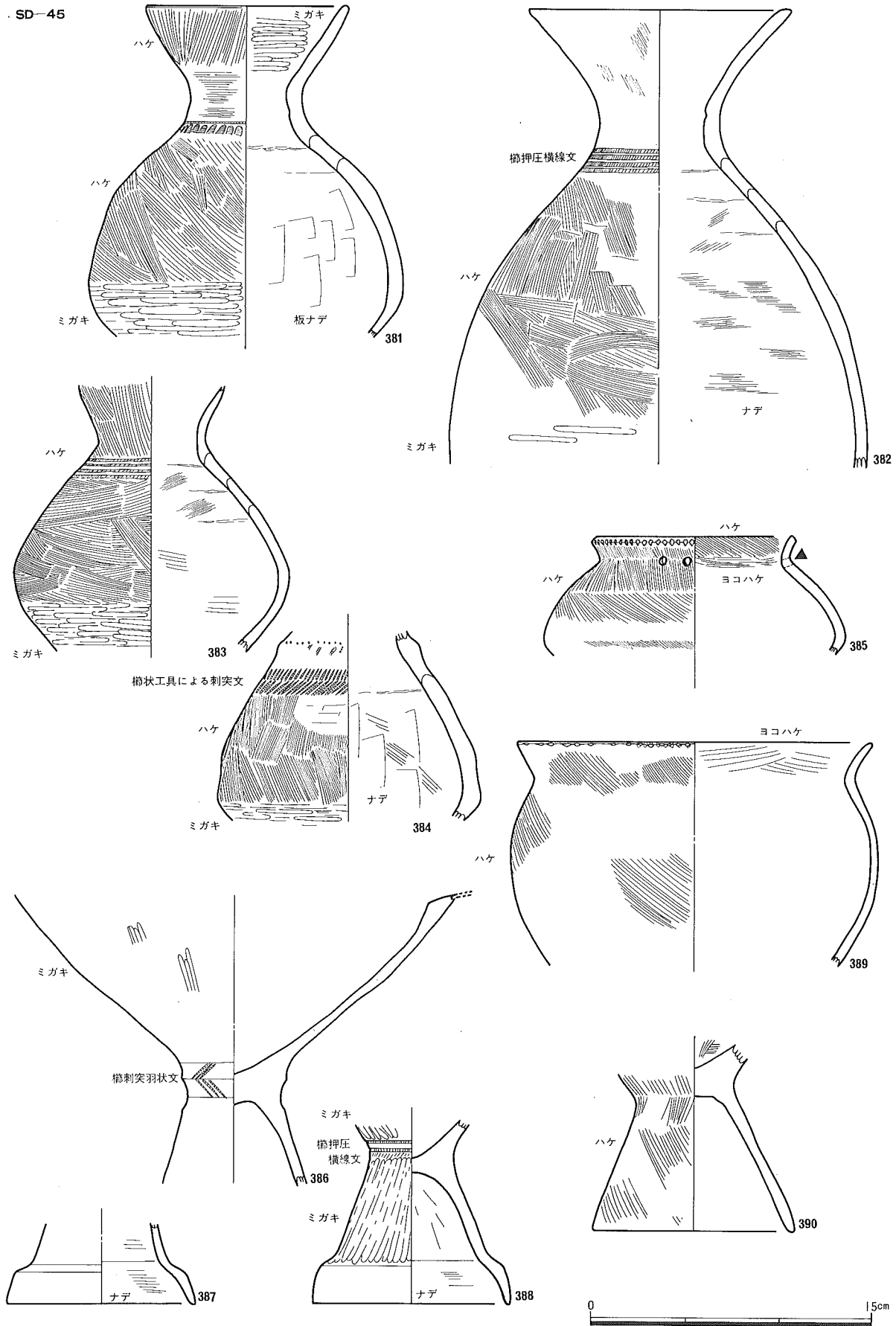


第70図 土橋遺跡出土土器実測図 (25)



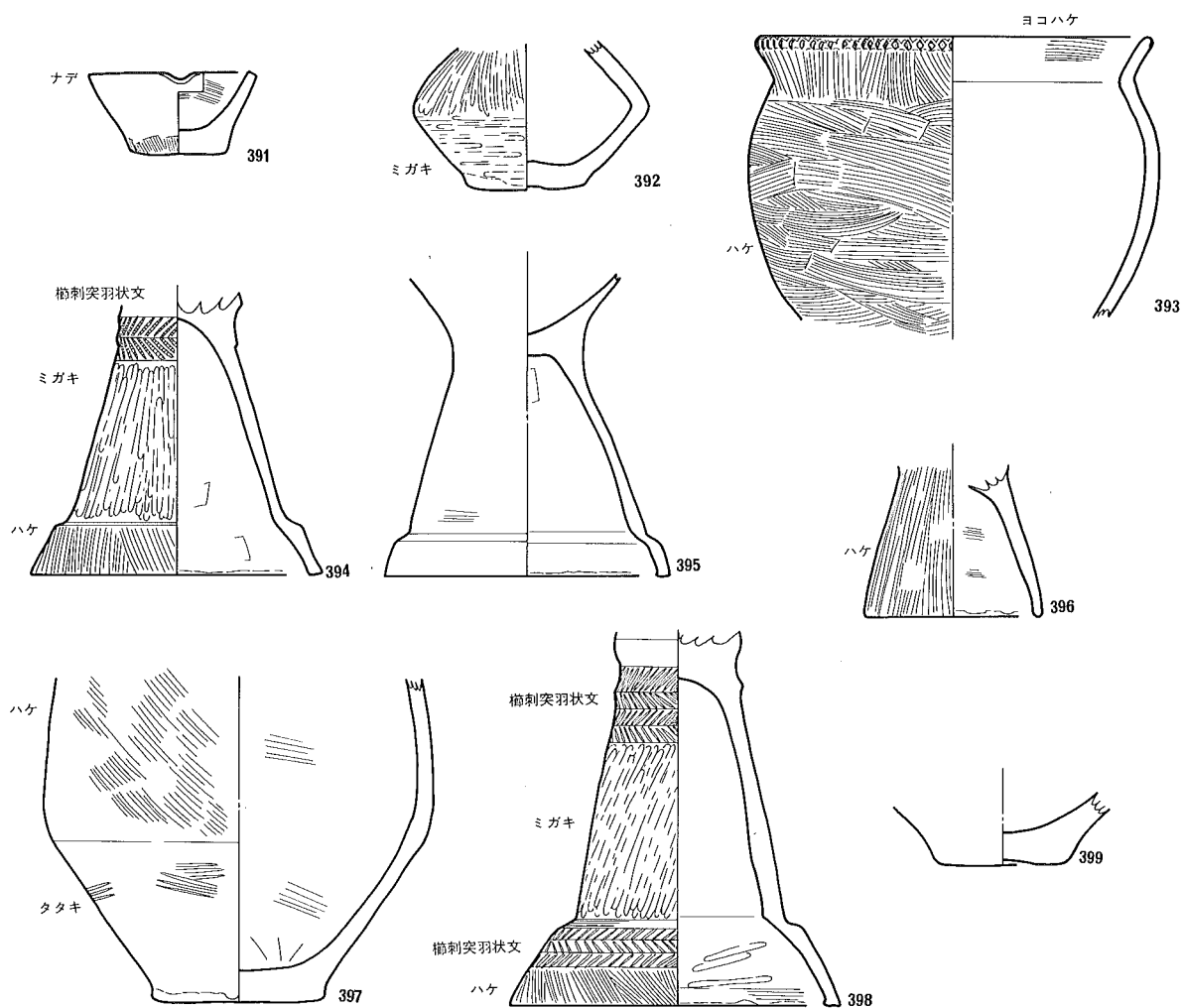
第71図 土橋遺跡出土土器実測図 (26)

SD-45

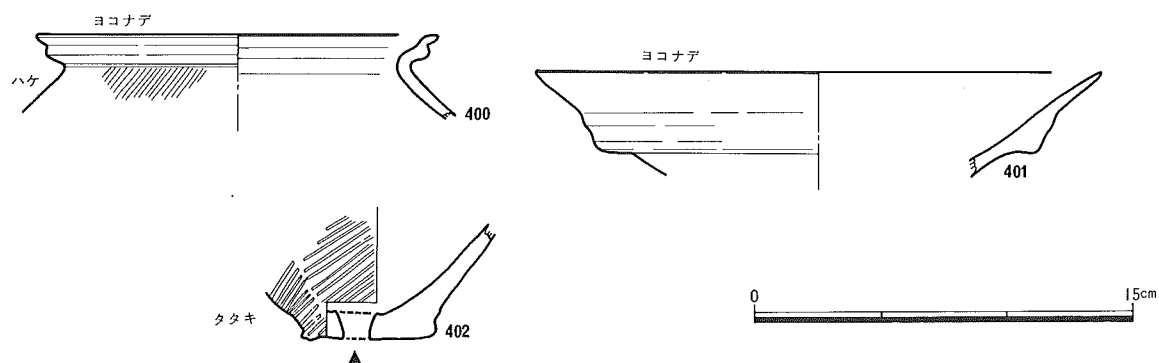


第72図 土橋遺跡出土土器実測図 (27)

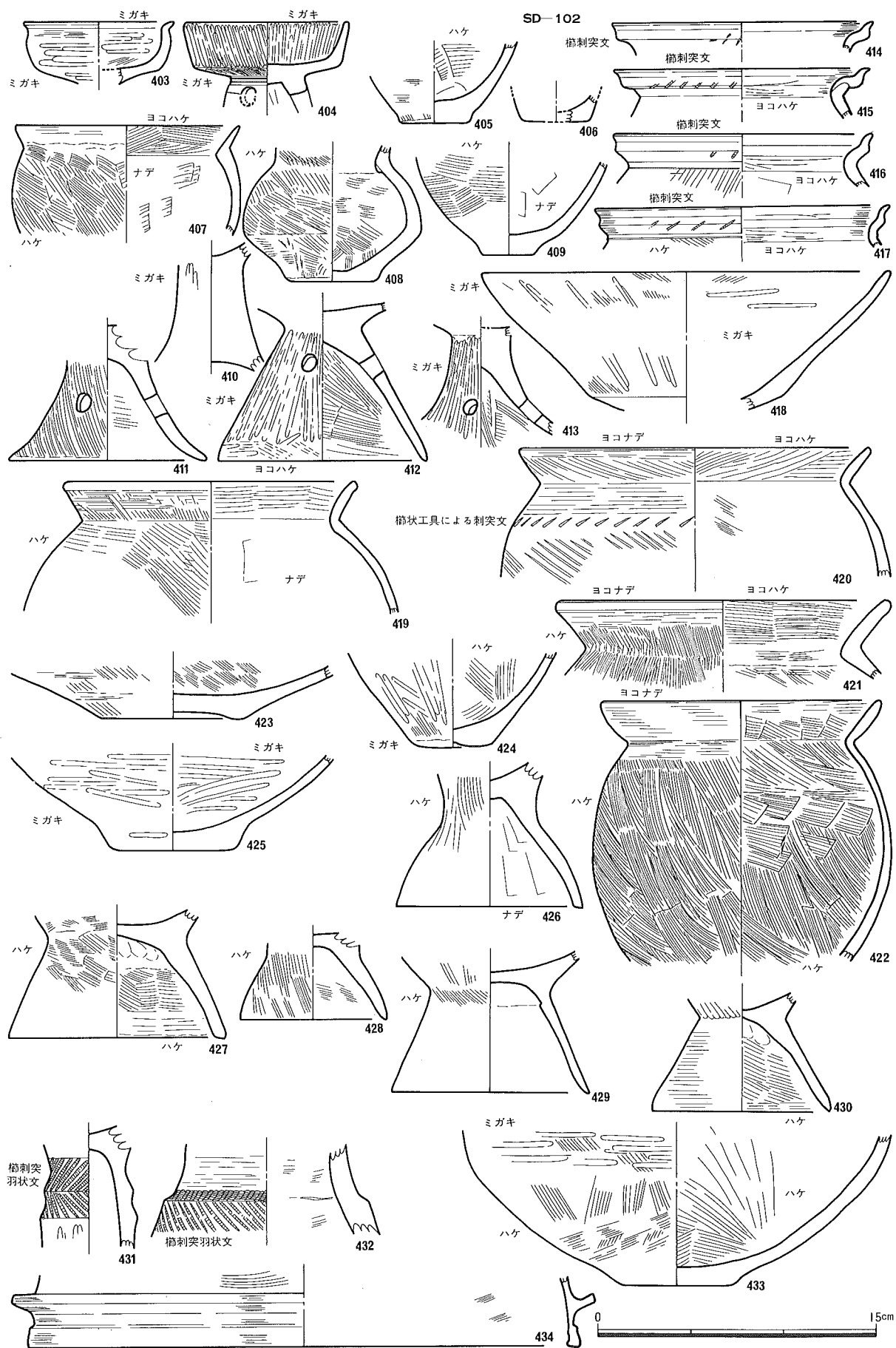
SD-93



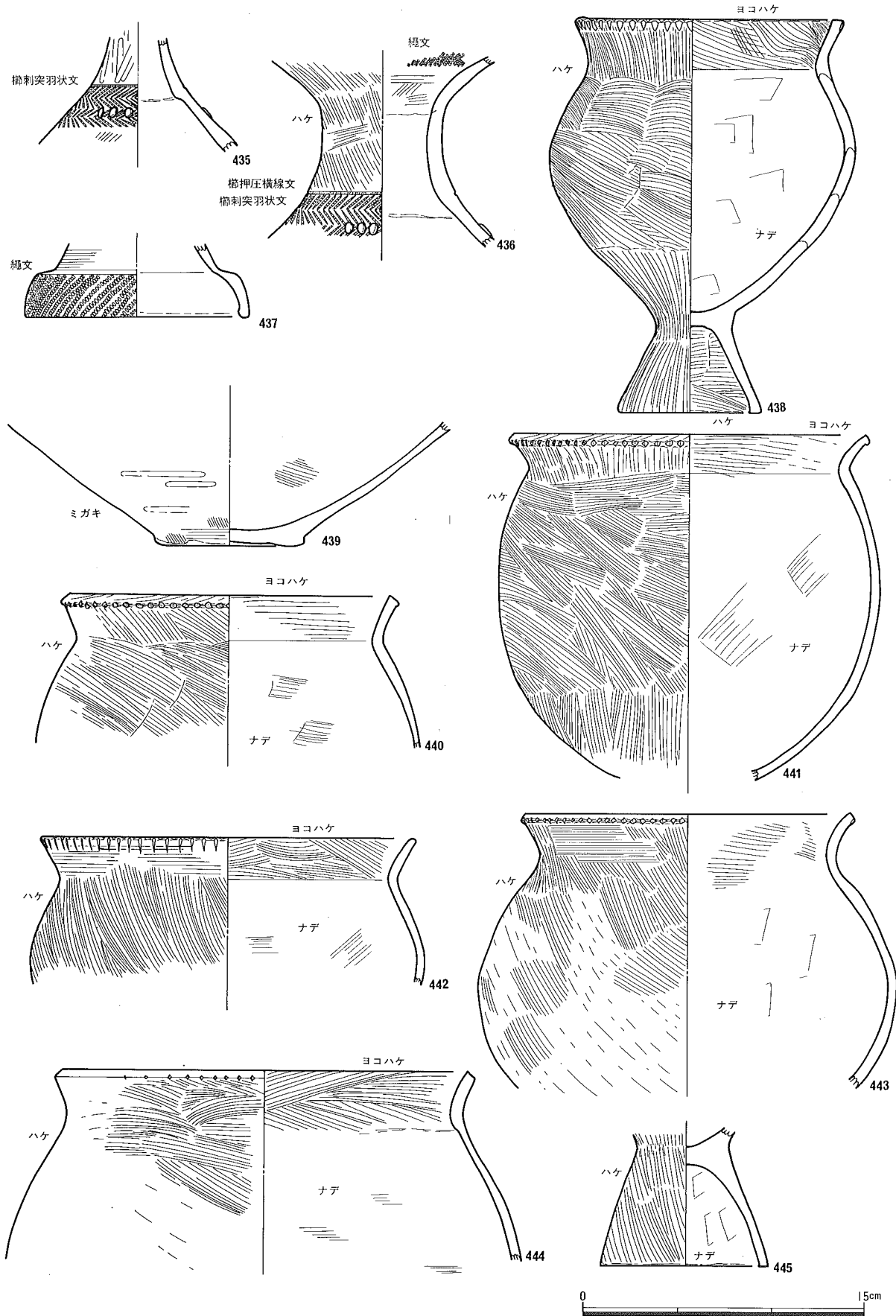
SD-94



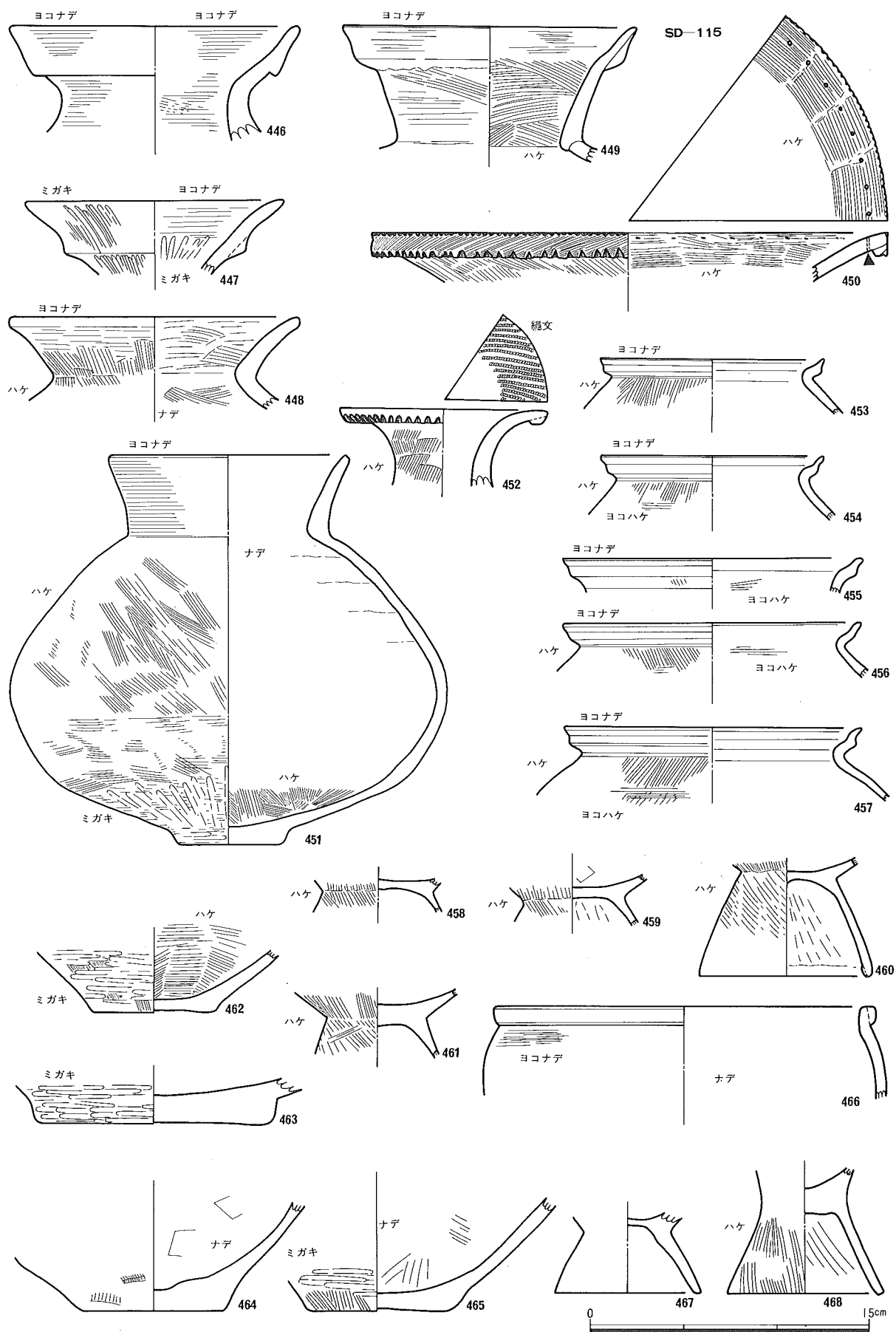
第73図 土橋遺跡出土土器実測図 (28)



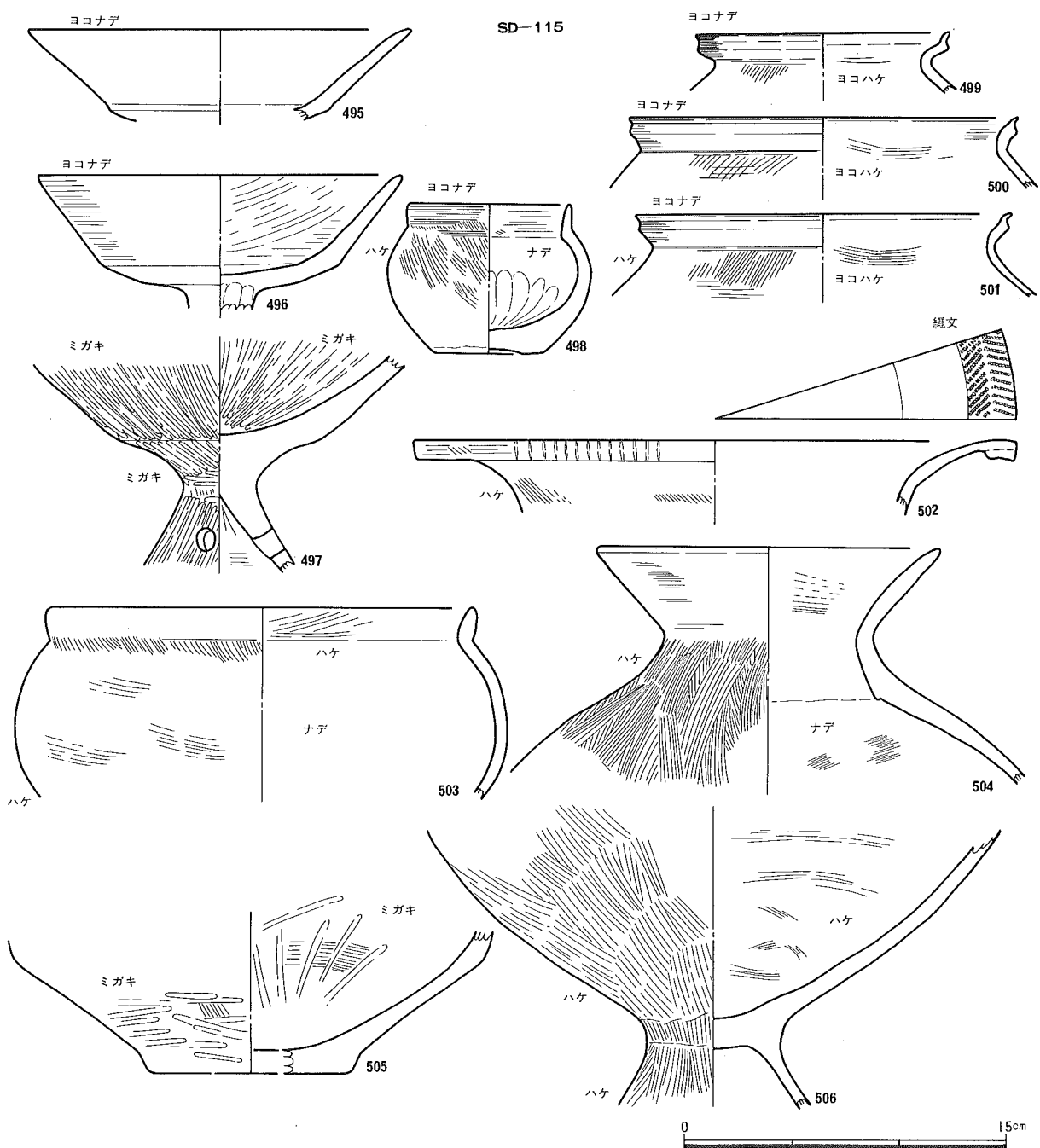
第74図 土橋遺跡出土土器実測図 (29)



第75図 土橋遺跡出土土器実測図(30)



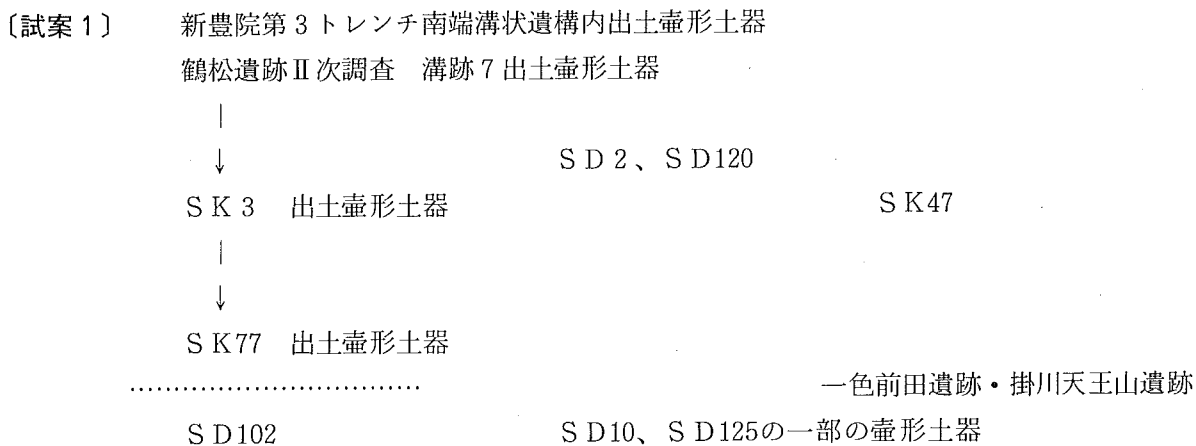
第76図 土橋遺跡出土土器実測図 (31)



第78図 土橋遺跡出土土器実測図(33)

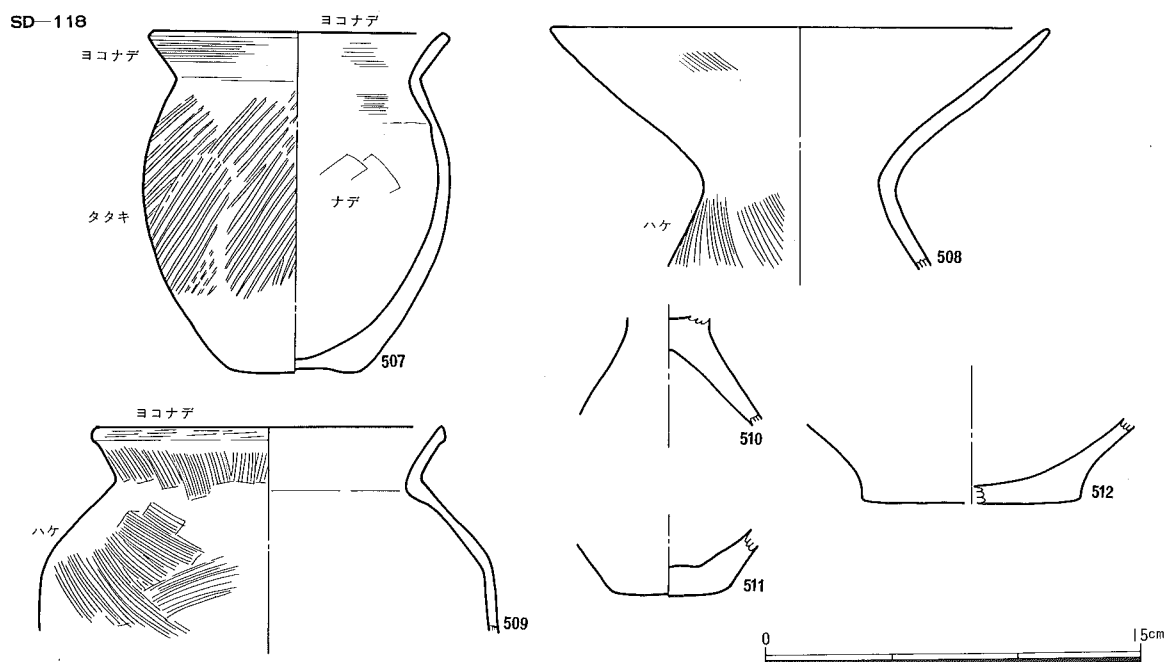
以上、土橋遺跡の遺物を3段階に分類してみた。やや大雑把な分類であったので近刊予定の鶴松遺跡関係の報告の中で改めて考えてみたい。この3分類に太田川流域の各遺跡の遺物を加えて、その中の壺形土器（折り返し口縁をもつ）の流れについてまとめた。

〔弥生時代後期折り返し口縁を持つ壺形土器の流れ〕

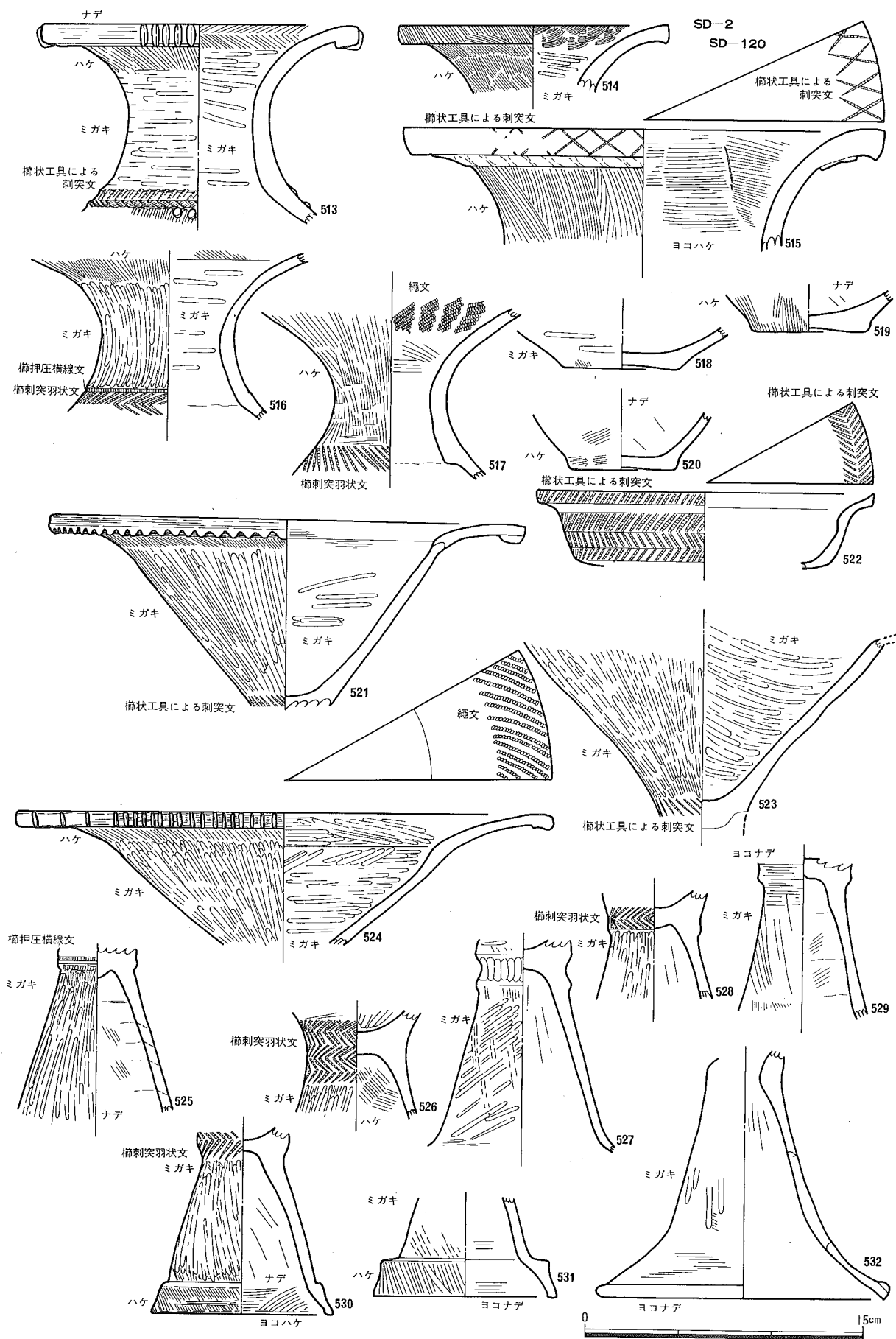


このうち、新豊院第3トレンチ南端溝状遺構内出土壺形土器については若干の疑問が残るが、鶴松遺跡Ⅱ次調査 溝跡7出土壺形土器は二之宮式の遺物であり、これに続く菊川式をS K 3→S K 77→一色前田遺跡2号住居址出土壺形土器という流れで押さえてみたい。

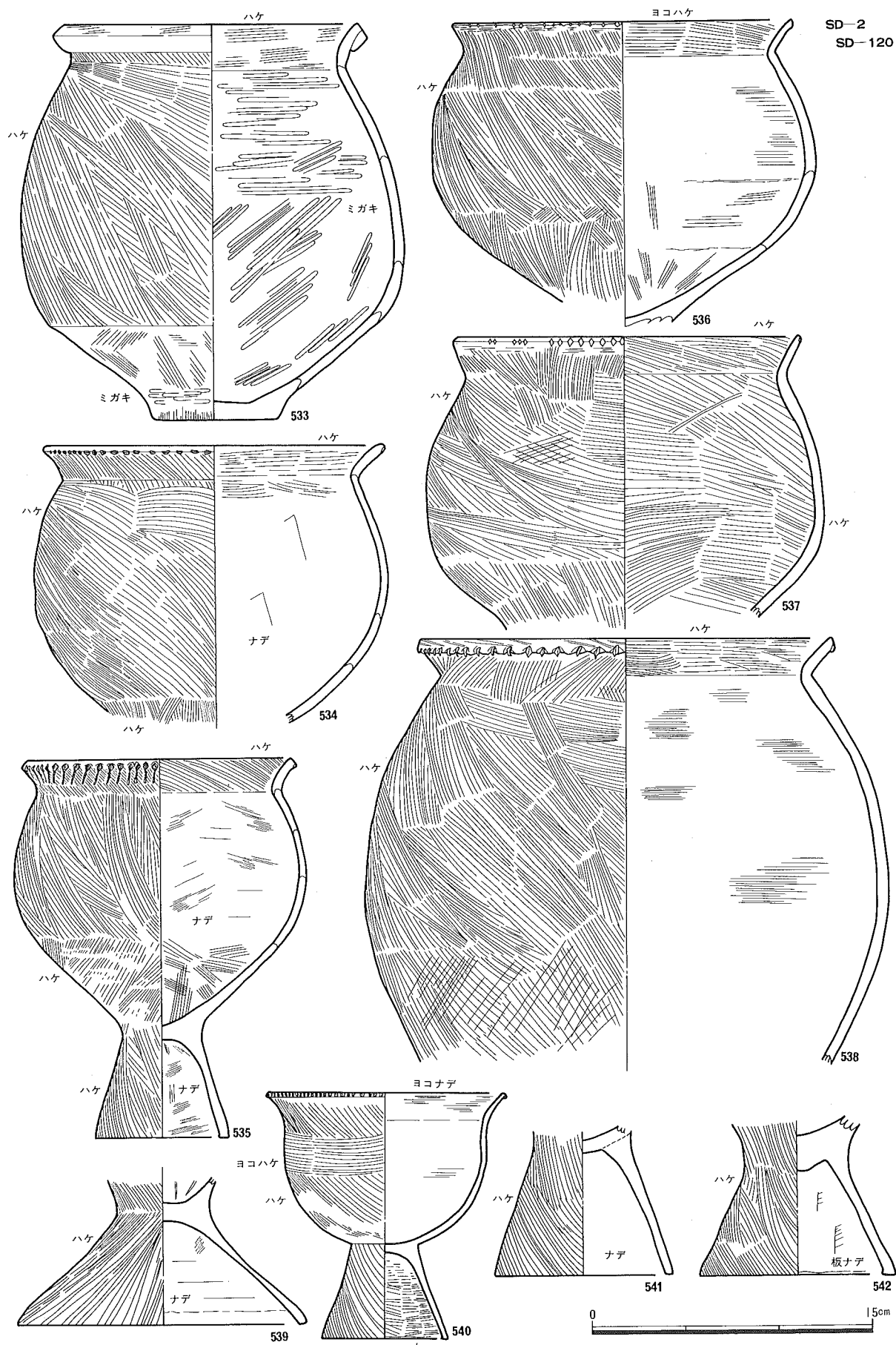
文様帯の主流が単節縄文→櫛状工具による刺突文→結節縄文という流れを想定しているが、研究者によってはこれを時期差と考えず地域差と考える例もあったとのことである。



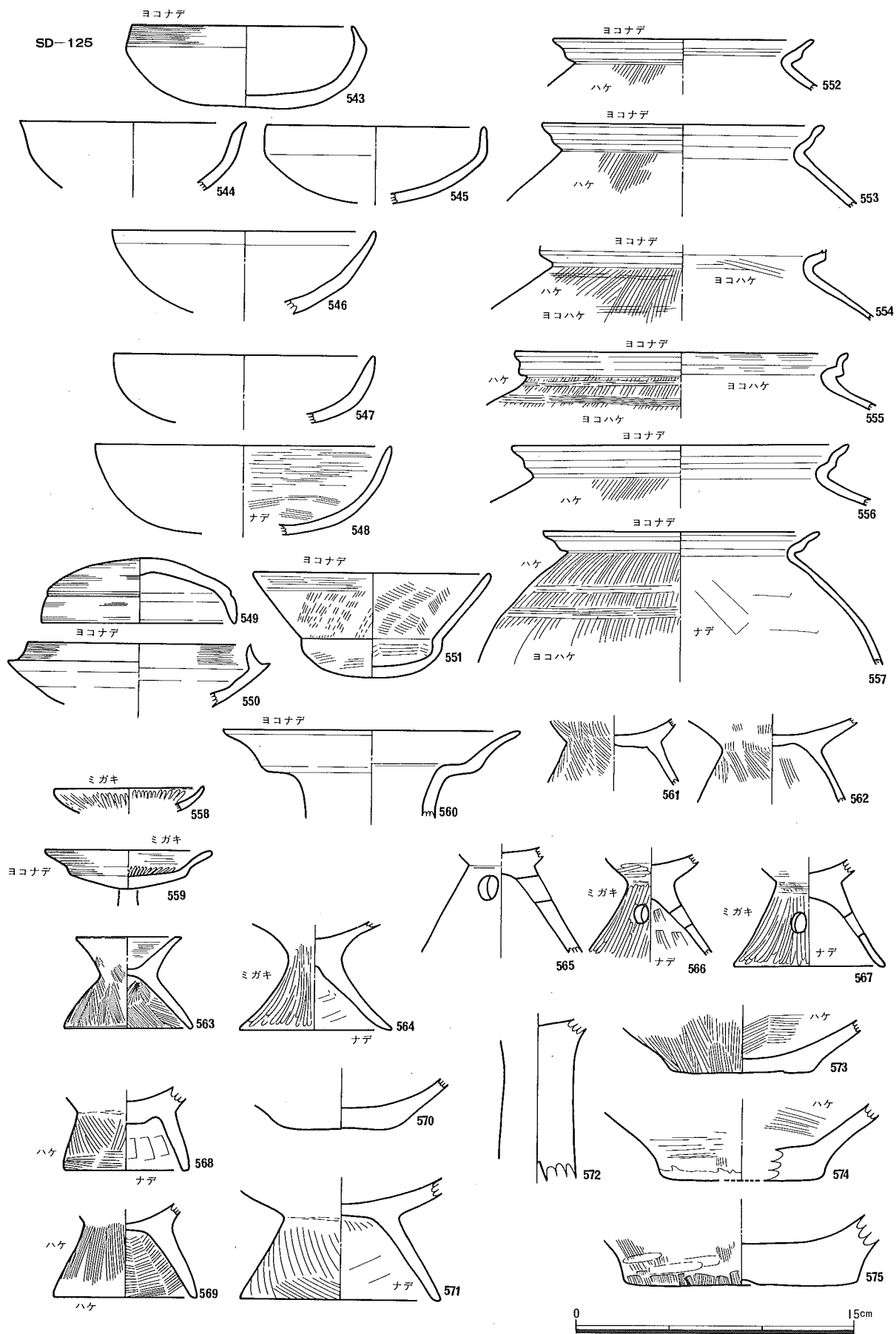
第79図 土橋遺跡出土土器実測図 (34)



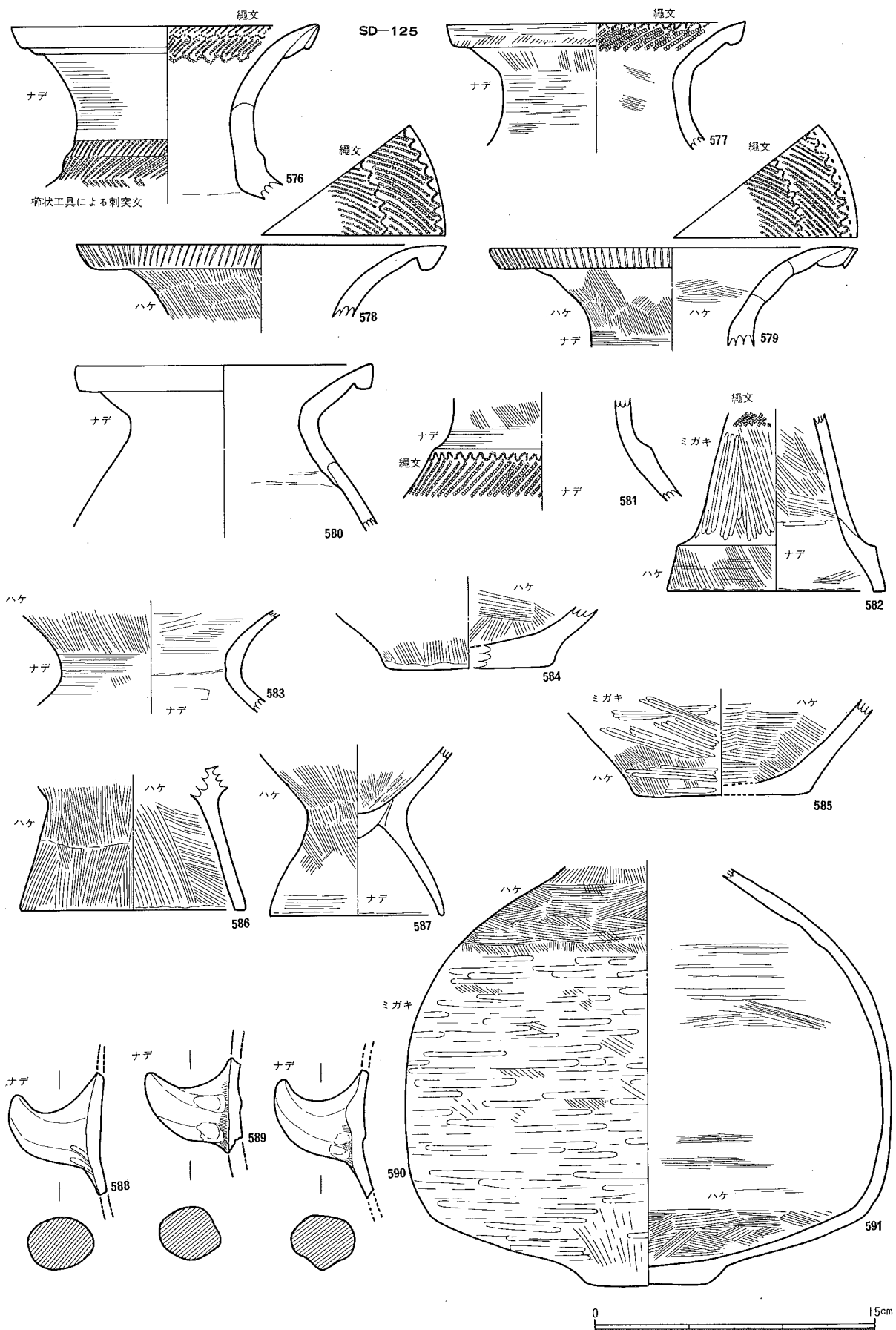
第80図 土橋遺跡出土土器実測図 (35)



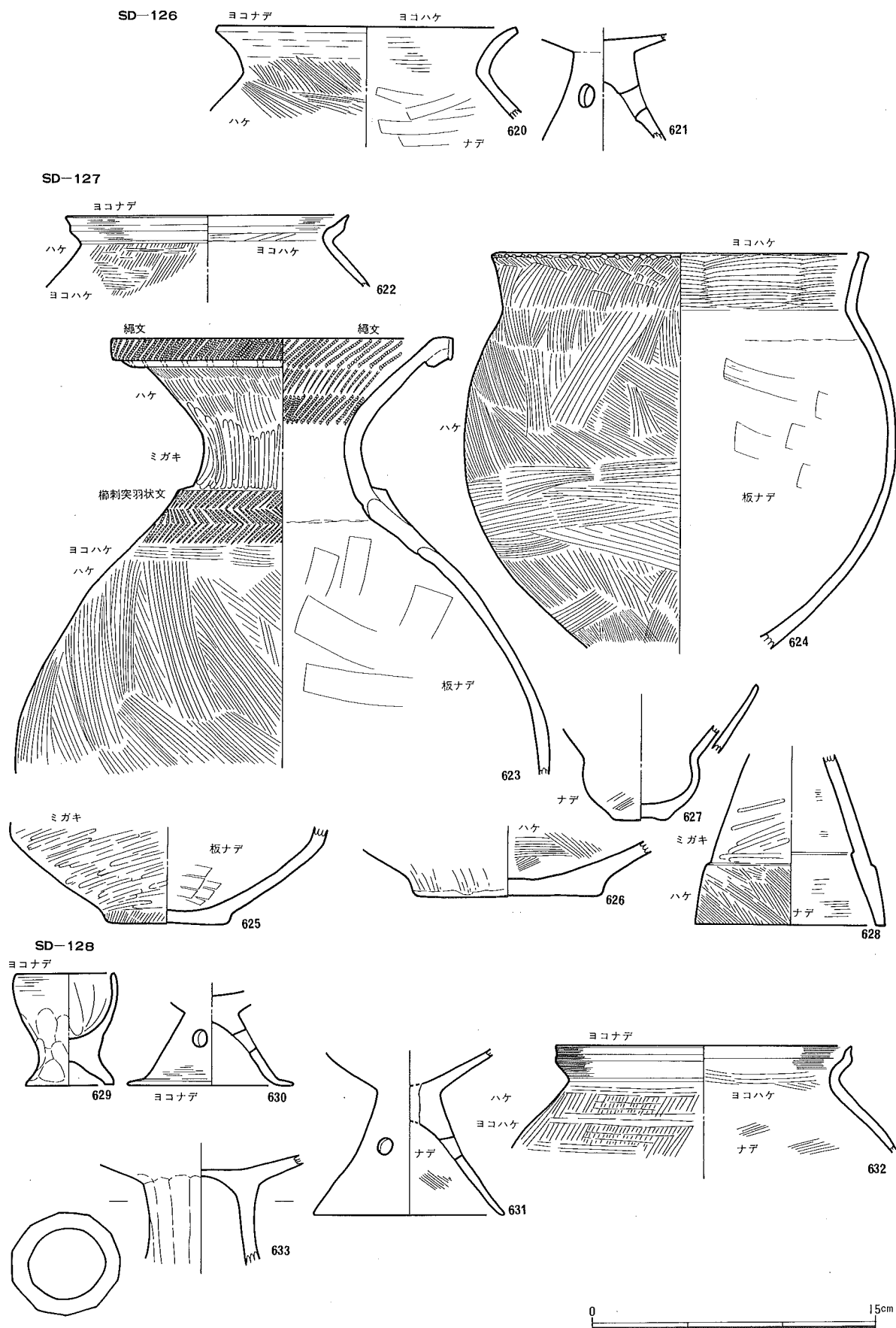
第81図 土橋遺跡出土土器実測図 (36)



第82図 土橋遺跡出土土器実測図 (37)



第83図 土橋遺跡出土土器実測図(38)



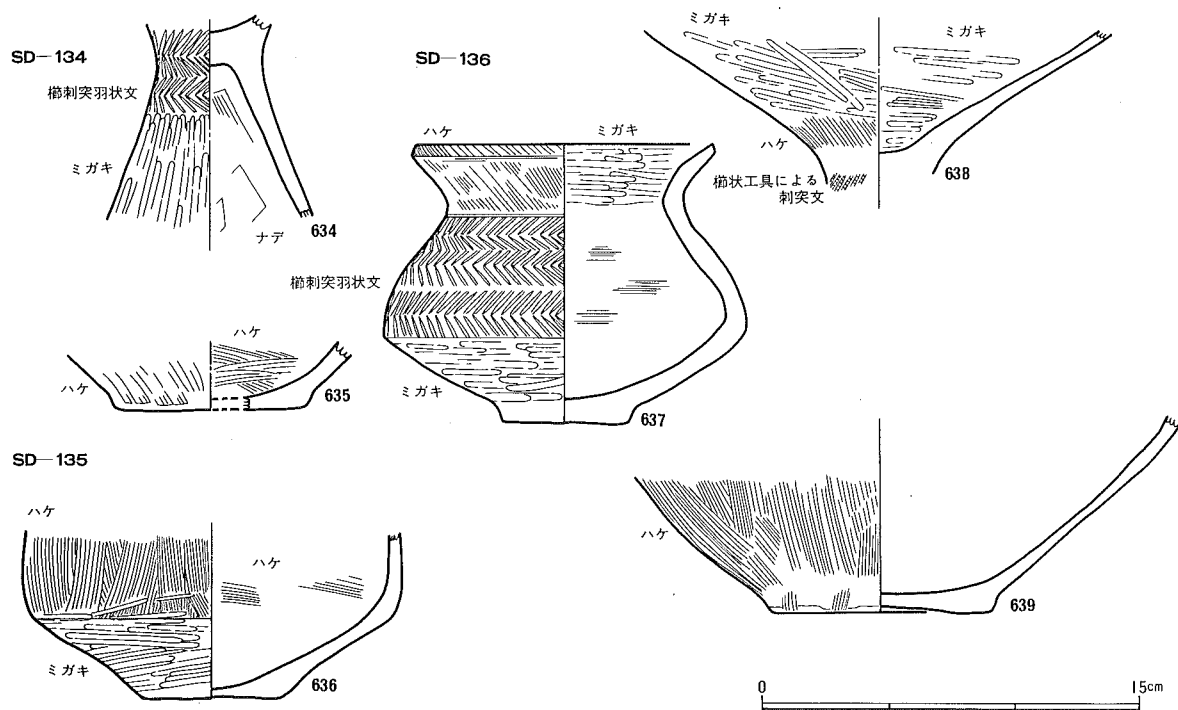
第85図 土橋遺跡出土土器実測図(40)

先に弥生土器について器種構成する割合について表にしてあるので、ここでは土師器を出土する遺構についても計測値を出してみた。

〔遺構名〕	〔壺〕	〔甕〕	〔高坏〕	〔合計〕
S K 1	6 (46%)	6 (46%)	1 (8%)	13
S K 13	9 (43%)	9 (43%)	3 (14%)	21
S K 36	4 (40%)	2 (20%)	4 (40%)	10
S K 76	16 (70%)	4 (17%)	3 (13%)	23
S I 4	16 (20%)	34 (43%)	29 (37%)	79
土壙小計	51 (35%)	55 (38%)	40 (27%)	146
S D 1	3 (38%)	4 (50%)	1 (12%)	8
S D 10	36 (33%)	56 (51%)	17 (16%)	109
S D 102	7 (9%)	61 (78%)	10 (13%)	78
S D 115	57 (53%)	34 (31%)	17 (16%)	108
S D 125	41 (38%)	44 (40%)	24 (22%)	109
S D 130	55 (48%)	34 (29%)	27 (23%)	116
溝跡小計	199 (38%)	233 (44%)	96 (18%)	528

合 計 250 (37%) 288 (43%) 136 (20%) 674

なお、土橋遺跡の土師器の数値の中には、高坏の例をとるとあきらかに菊川式の高坏が入っている遺構があった場合は（接合部などの小片である）それを除いて計算している。この土師器の頃になっても前時代の高坏を使うとは一応考えられないからである。



第86図 土橋遺跡出土土器実測図 (41)

土師器の計測表を参考にしながら古式土師器から、その代表的な遺物について述べていきたい。

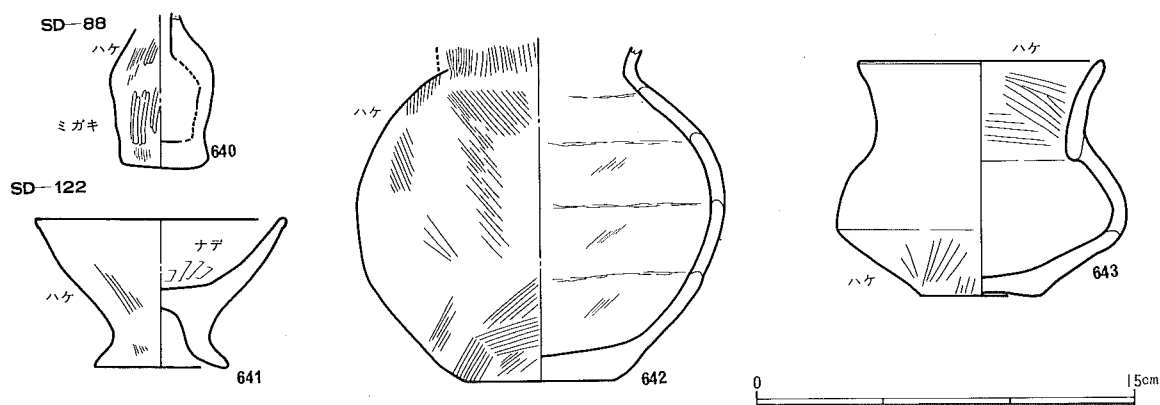
S 字 甕 まず、S字口縁台付甕（以下、S字甕）であるが次のヴァリエーションがある。

- (a) 口縁部のみの破片であるが、口径はやや小さく直っすぐ立ち上り先端はとがっている。口縁部外側には櫛状工具による刺突文が等間隔に巡っている。胴部破片はほとんど不明であるが、わずかにハケメを残すものもある。出土例はS D 102のNo.414、451、416、417の4点である。
- (b) 口縁部の立ち上りはやや外反ぎみになり外面の櫛状工具による刺突文はなくなっている。口縁部内側にはヨコナデの後にヨコハケが施されている。胴部はタテハケの後に肩部付近にヨコハケが入ってくる。出土例は215、217、456、500、501、304、554、555などがある。
- (c) 外反する口縁はやや薄手で大きく、口縁部内側はヨコナデのみでヨコハケを持たない。胴部はハケメが施され肩部にヨコハケを持つ。類例は218、254、255、457、557などである。特にS D 1は良好な資料を出土している。
- (d) 各地のS字甕の中で典型的な土器である。外反するS字口縁はやや受口状になり屈曲部もあまり段を意識しなくなっている。口縁内側と肩部にヨコハケを持たず、胴部はタテハケで調整されている。128、129等がそれである。
- (e) やや外反しやわらかなS字曲線を示す口縁を持ち球形の胴部はハケで仕上げてある。S K 76のNo.130に代表されるこの土器は肩部にヨコハケを施した後に再びタテハケを入れヨコハケを完全に消さないのが特徴となっている。

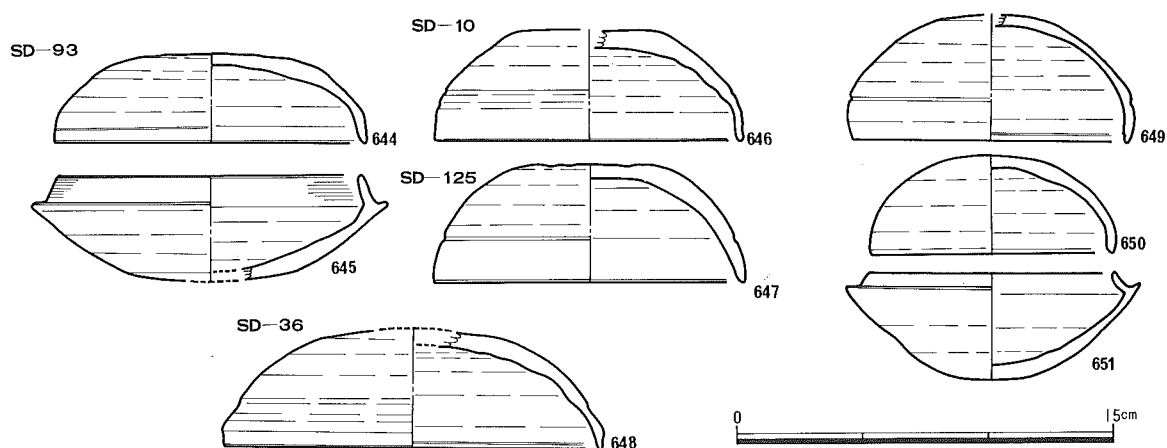
タタキ成形甕 土橋遺跡の遺物の中にはタタキ成形の甕（内面削り甕を含む）が数点見られる。S K 1の一括資料の中のNo.1、2がそれで、この土橋の遺物は甕の占める比重が大きい。402は底部穿孔のタタキ成形の土器である。その他には477、507、619等がある。

柳ヶ坪型壺 古式土師器のメルクマールとされる柳ヶ坪型の壺形土器の口縁部片が出土している。土橋の一括資料として注目されるS K 76のNo.137、138をはじめとして321、472、599、600など6点が出土している。

その他 小型器台、小形丸底埴は次の9点が出土している。まず器台は229、403、404、558、559、563、564などで、小形丸底埴は473、551、がある。



第87図 土橋遺跡出土土器実測図（42）

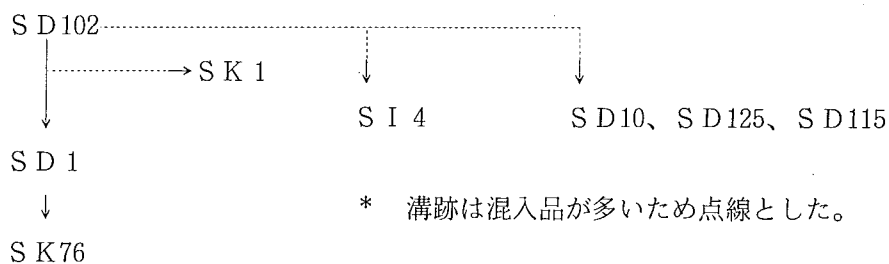


第88図 土橋遺跡出土土器実測図(43)

手づくね土器は、134、135、136、292、629、640、641等がある。

これらの遺物を使って遺構の大まかな流れを示すと次のとおりである。

〔試案2〕



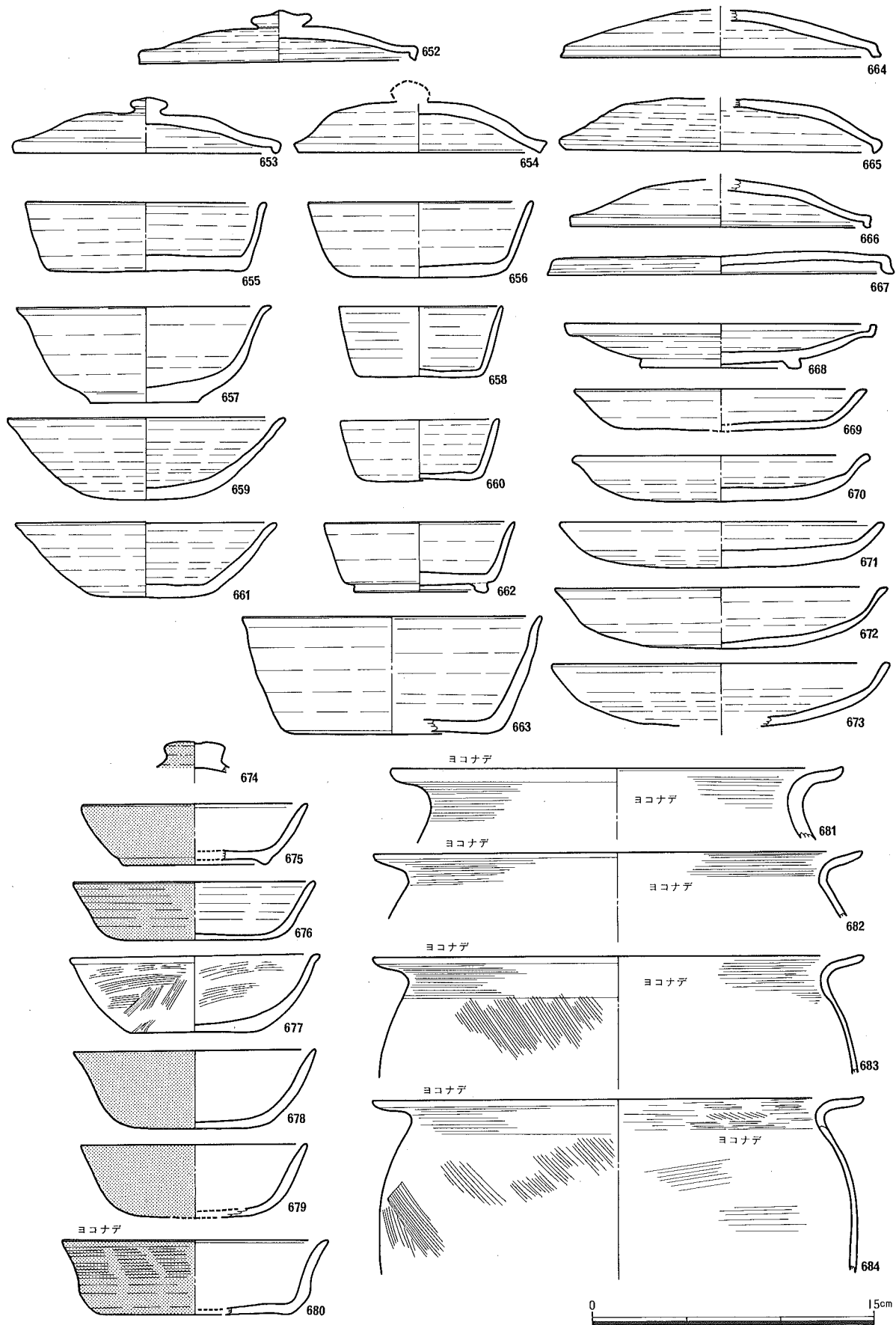
674～684の奈良末・平安時代の土師器については紙面の都合で計測表を参照していただきたい。なおスクリーントーンは丹などの赤色塗色である。実測図中の▲は意図的に穿った穴を示し、中心線が実線の土器は完形品を、一点鎖線は回転復元したことを表す。

第2節 須恵器

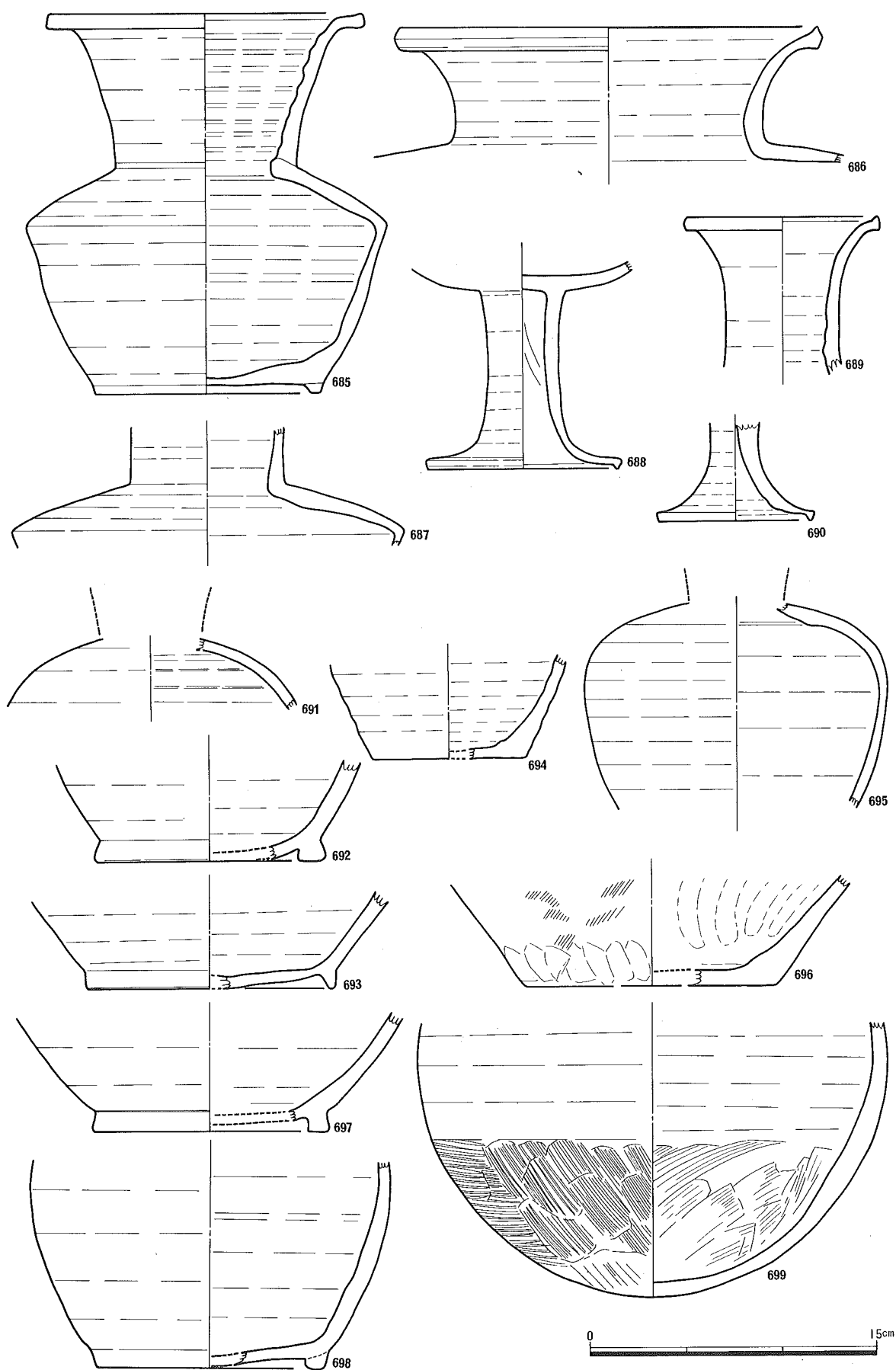
古墳時代・奈良時代・平安時代にわたっての遺物が出土している。とくにここで注目していただきたいのはSD 130出土の遺物である。SD 130は次の節に概要を述べた奈良末～平安時代にかけての墨書土器を出土する溝跡で、官衙的な傾向の土器が多い。遺物の個々の説明は出土土器計測表を参照にいただきたい。

古墳時代の須恵器は、溝跡を中心に出土しており时期的には遠考研編年の第Ⅲ期中葉からはじまり、第Ⅳ期前半の遺物が中心となっている。これらの溝跡の中には南関東という鬼高期の土師器坏身を出土する例もある。

奈良・平安時代の遺物は溝跡内の遺物は残りがいいが、包含層の遺物は攪乱のため小片が多い。坏身の中で回転糸切り痕を残すものはNo.657ぐらいで外にはあまり見られない。



第89図 土橋遺跡出土土器実測図(44)



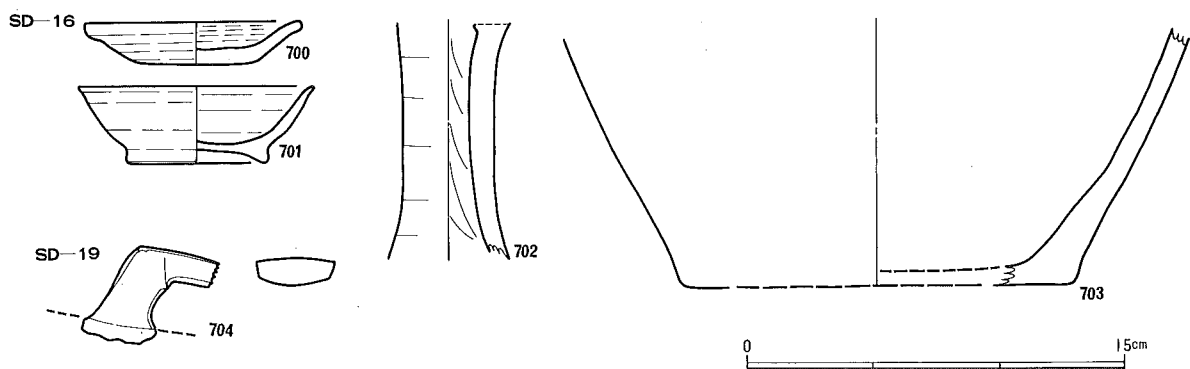
第90図 土橋遺跡出土土器実測図(45)

第3節 陶 質 土 器

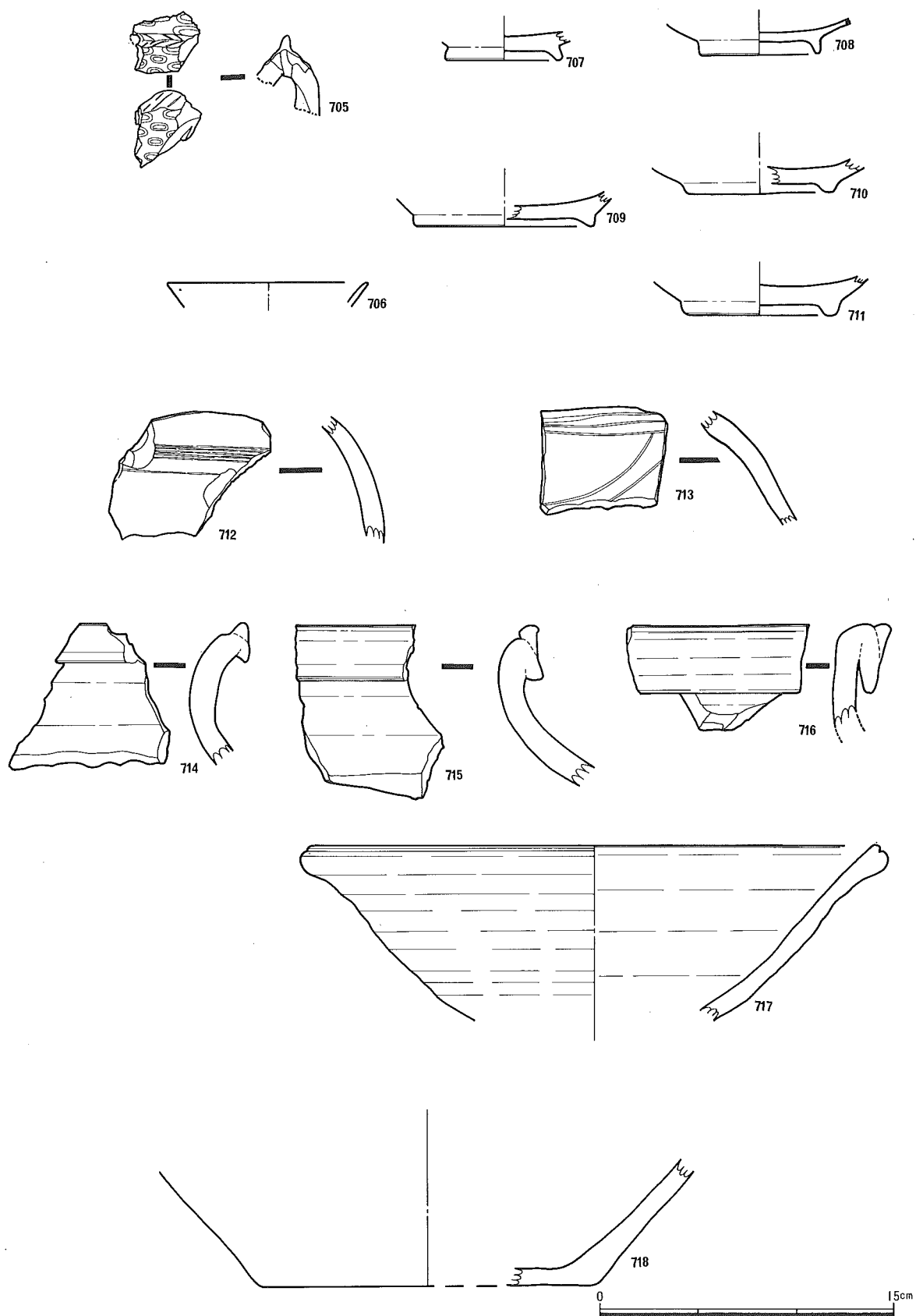
第7区を中心に中世遺構群が検出されているが遺物もほとんどがこの地区からの出土である。中心となるSD85は705～718の遺物を出土している。

705の水滴は瀬戸の灰釉で14世紀前半ごろのものと見られ「魚」の背の部分である。この時期の水滴は水鳥が圧倒的に多く魚の例は少ない。魚の水滴としては、名古屋市緑区鳴海町のNJ A-2号窯（N-N265号窯）から1点出土している。これは土橋の出土品とやや異なり、轆轤成形の円筒状の胴に直立する背ビレを付け、全面にウロコをヘラで刻してある、しかし、これは猿投窯中等でも類例はないとのことであった。706は白磁の小片である。実測図では口唇部がやや立ち上って表記してあるが14世紀ごろの小皿であろう。707～711は山茶碗の底部小片である。712は瀬戸の瓶子の肩部破片である。13世紀後半ごろであろう。713は渥美の蓮弁文壺の肩部小片で13世紀ごろのものであろう。714から716までは常滑の甕の口縁部である。13世紀後半から14世紀前半代のものである。717は瀬戸の鉢で13世紀後半から14世紀前半代の資料である。718は常滑の甕底部である。13世紀後半から14世紀前半のものである。これと同じ位置から瀬戸の片口鉢（13世紀後半から14世紀前半）が1点出土している。719と720は14世紀前半ぐらいと思われる常滑の大甕の破片である。これはそれぞれSK78とSK79から出土しているがSD85の覆土から出土した小片と接合関係をもつ。SK78とSK79は後藤建一氏の説からいくと蔵骨器墓とも考えられるが不明である。721～743は山茶碗とそれに共伴する遺物である。726は瀬戸の瓶子の把手の部分である。731は鉢の口縁部である。ほとんどの遺物が13世紀後半以降のものである。741は瀬戸の三耳壺の底部かもしれない。

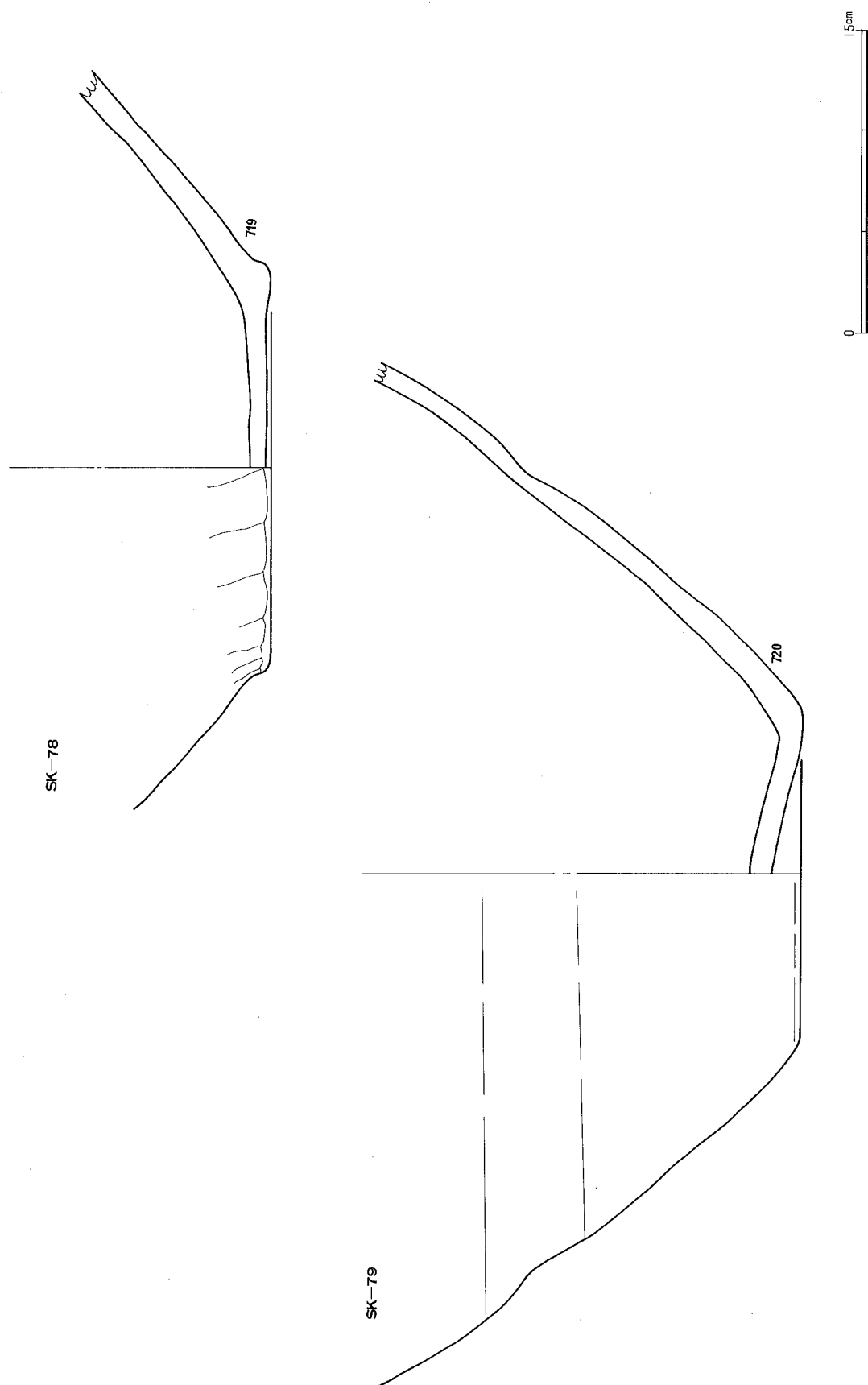
本文を書くにあたり愛知県陶磁資料館の柴垣勇夫氏、赤羽一郎氏、仲野泰裕氏には多くの助言をいただいた。また仲野氏には水滴関係の資料を送っていただきたいへんお世話になった。ここに記して感謝したい。



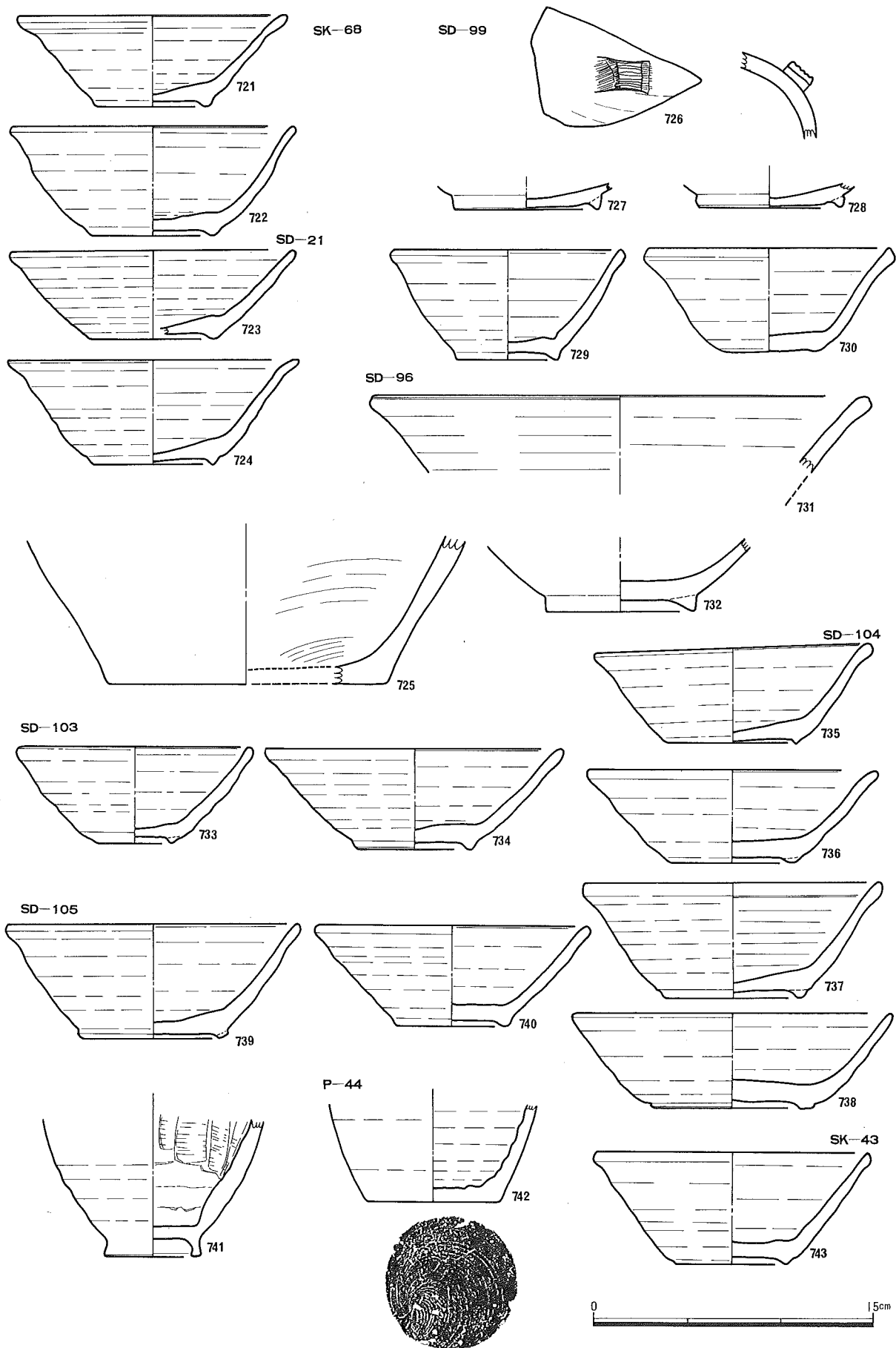
第91図 土橋遺跡出土土器実測図(46)



第92図 土橋遺跡出土土器実測図(47)



第93図 土橋遺跡出土土器実測図 (48)



第94図 土橋遺跡出土土器実測図 (49)

第3表 土橋遺跡出土土器計測表

() は回転復元による推定値

番号	挿図番号	登 録 号	出 土 位 置	器 種	法 量 (cm)				焼成	胎 土	色 調
					口径	器高	胴径	底径			
1	46	Y 451	S K 1	甕	(12.8)	—	—	—	良好	良	灰 黄 褐 色
2	"	Y 450	"	"	(13)	—	(16)	—	"	"	灰 白 色
3	"	Y 451	"	"	(13)	—	(14.8)	—	"	"	"
4	"	Y 448	"	"	(17)	—	—	—	良	砂粒やや混入	淡 赤 橙 色
5	"	Y 353	"	"	(14.7)	—	—	—	"	"	浅 黄 橙 色
6	"	Y 451	"	広 口 壺	(15)	—	—	—	"	"	"
7	"	"	"	"	(16)	—	—	—	"	"	"
8	"	Y 353	"	S 字 甕	—	—	—	—	良	砂粒やや混入	灰 白 色
9	"	Y 448	"	高 坏 の 脚	—	—	—	(12)	"	"	"
10	"	Y 354	"	台付甕の台	—	—	—	(7.3)	"	"	淡 橙 色
11	"	Y 450	"	甕	(17.2)	—	—	—	"	"	に ぶ い 橙 色
12	"	Y 354	"	台付甕の台	—	—	—	(10.5)	"	"	褐 灰 色
13	"	Y 480	"	壺	—	—	(13.5)	(6.8)	"	"	灰 白 色
14	"	Y 448	"	台付甕の台	—	—	—	(14.6)	"	"	明 褐 色
15	"	Y 451	"	広 口 壺	15	23.2	20	7.2	"	"	"
16	47	Y 428	S K 3	高 坏 の 脚	—	—	—	10	"	"	淡 橙 色
17	"	Y 545	"	高 坏	(25.7)	—	—	—	"	"	"
18	"	Y 428	"	高 坏 の 脚	—	—	—	—	不良	"	"
19	"	Y 478	"	壺	(21.9)	—	—	—	"	良	に ぶ い 黄 橙 色
20	"	Y 552	"	広 口 壺	—	—	—	—	"	砂粒やや混入	浅 黄 橙 色
21	"	Y 478	"	"	—	—	—	—	良	良	"
22	"	Y 548	"	台 付 甕	(19.4)	—	(21.5)	—	"	砂粒やや混入	灰 白 色
23	"	Y 547	"	台付甕の台	—	—	—	(8.2)	"	"	淡 黄 色
24	"	Y 478	"	"	—	—	—	(8.8)	"	"	橙 色
25	"	Y 546	"	小型広口壺	—	—	14.7	5.7	不良	"	淡 橙 色
26	"	Y 549	"	広 口 壺	18.2	—	26.9	—	良	"	"
27	"	Y 367	"	壺	—	—	—	(7.5)	"	"	に ぶ い 橙 色
28	48	Y 845	S K 6	受 口 壺	10	—	—	—	"	"	"
29	"	"	"	壺	—	—	—	5.1	"	"	明 褐 色
30	"	Y 493	"	高 坏	(22.2)	—	—	—	"	"	"
31	"	Y 493	"	台 付 甕	15	—	15.7	—	良	砂粒やや混入	浅 黄 橙 色
32	"	Y 628	S K 9	広 口 壺	—	—	—	—	不良	砂 多 含	灰 白 色
33	"	Y 632	"	小 型 壺	—	—	(9.5)	(4.5)	"	砂粒やや混入	"

番号	挿図番号	登録番号	出土位置	器種	法 量 (cm)				焼成	胎 土	色 調
					口径	器高	胴径	底径			
34	48	Y 621	SK 9	小 型 壺	—	—	(10.4)	(4.8)	不良	砂粒やや混入	灰 白 色
35	"	Y 624	"	広 口 壺	—	—	—	—	良	"	に ぶ い 橙 色
36	"	Y 616	"	台付甕の台	—	—	—	8.2	不良	"	明 褐 灰 色
37	"	Y 632	"	"	—	—	—	(8.8)	"	"	橙 色
38	"	Y 654	"	壺	—	—	—	(7.4)			
39	"	Y 667	SK11	高 坏	—	—	—	—	良	砂粒やや混入	浅 黄 橙 色
40	"	Y 667	"	広 口 壺	(26)	—	—	—	"	"	灰 白 色
41	"	Y 667	"	"	—	—	—	—	不良	砂 多 含	"
42	"	Y 817	"	台付甕の台	—	—	—	(10)	良	砂粒やや混入	明 褐 灰 色
43	"	Y 667	"	"	—	—	—	—	不良	"	に ぶ い 橙 色
44	"	Y 817	"	壺	—	—	—	(5.5)	良	砂 多 含	浅 黄 橙 色
45	"	Y 817	"	甕	(17.4)	—	—	—	"	砂粒やや混入	に ぶ い 黄 褐 色
46	"	Y 817	"	"	(17)	—	—	—	"	"	に ぶ い 黄 橙 色
47	49	Y 693	SK13	"	(12)	—	—	—	不良	"	橙 色
48	"	Y 703	"	"	(16.3)	—	—	—	良	"	浅 黄 橙 色
49	"	Y 710	"	小型広口壺	(13.2)	—	—	—			
50	"	Y 692	"	S 字 甕	(8.5)	—	—	—			
51	"	Y 697	"	高 坏	—	—	—	6.6	良	砂粒やや混入	赤 橙 色
52	"	Y 763	"	短 頸 壺	(9.6)	(9.1)	(10.9)	(3.6)	"	"	橙 色
53	"	Y 693	"	壺	—	—	—	(2.7)	"	良	浅 黄 橙 色
54	"	Y 703	"	S 字 甕	—	—	—	—	"	"	灰 白 色
55	"	Y 696	"	壺	—	—	(19)	(6.9)	"	砂粒やや混入	橙 色
56	"	Y 693	"	"	—	—	—	(6.5)	"	"	浅 黄 橙 色
57	"	Y 702	"	台付甕の台	—	—	—	(8.2)	"	"	淡 橙 色
58	"	Y 692	"	壺	—	—	—	(10.8)	"	"	橙 色
59	"	Y 702	"	台付甕の台	—	—	—	8.8	"	砂 多 含	浅 黄 橙 色
60	"	Y 692	"	"	—	—	—	(8)	"	砂粒やや混入	橙 色
61	"	Y 691	SK14	小 型 壺	—	—	(11)	(5.9)	"	"	灰 白 色
62	"	Y 691	"	壺	—	—	—	(4.5)	不良	"	淡 橙 色
63	"	Y 691	SD115	高 坏	—	—	—	(19.7)	良	"	橙 色
64	50	Y 256	SK33	広 口 壺	(17.7)	—	—	—	"	砂粒やや混入	浅 黄 橙 色
65	"	Y 257	"	高 坏	—	—	—	—	不良	"	橙 色
66	"	Y 350	"	甕	(19.8)	—	—	—	"	"	明 赤 褐 色

番号	挿図番号	登番	録号	出土位置	器種	法 量 (cm)				焼成	胎 土	色 調
						口径	器高	胴径	底径			
67	50	Y 352	S K33	鉢		16.7	6.7	—	6.3	良	砂粒やや混入	明 褐 灰 色
68	"	Y 354	"	台付甕の台		—	—	—	—	不良	"	灰 白 色
69	"	Y 353	"	小型広口壺		—	—	14.2	—	"	"	浅 黄 橙 色
70	"	Y 347	"	広 口 壺	(18.7)	—	—	—	—	良	砂 多 含	橙 色
71	51	Y 652	S K34	壺		—	—	(45.8)	—	不良	砂粒やや混入	淡 橙 色
72	"	Y 653	"	高 坏		—	—	—	—	良	"	浅 黄 橙 色
73	"	Y 651	"	台付甕の台		—	—	—	(9.9)	"	"	に ぶ い 橙 色
74	52	Y 472	S K36	小型広口壺	(15.8)	—	—	—	—	"	"	"
75	"	Y 472	"	高 坏	(15.8)	—	—	—	—	"	"	淡 橙 色
76	"	Y 488	"	甕	(17.7)	—	—	—	—	"	"	に ぶ い 黄 橙 色
77	"	Y 472	"	壺	(15)	—	—	—	—	"	"	淡 赤 橙 色
78	"	Y 472	"	高 坏		—	—	—	—	"	"	橙 色
79	"	Y 472	"	壺		—	—	—	—	"	"	に ぶ い 黄 橙 色
80	"	Y 488	"	高 坏		—	—	—	—	"	良	浅 黄 橙 色
81	"	Y 488	"	壺		—	—	—	(5.7)	"	砂粒やや混入	橙 色
82	"	Y 448	S K37	高 坏	(19.7)	—	—	—	—	"	"	浅 黄 橙 色
83	"	Y 485	S K38	広 口 壺	(16.1)	—	—	—	—	"	"	淡 橙 色
84	"	Y 600	"	"	(15.8)	—	—	—	—	"	良	浅 黄 橙 色
85	"	Y 363	S K47	"	(18.2)	—	—	—	—	"	砂粒やや混入	淡 橙 色
86	"	Y 357	"	"	(14.6)	—	—	—	—	"	"	淡 黄 橙 色
87	"	Y 362	"	小型広口壺	11.8	—	—	—	—	不良	"	"
88	"	Y 356	"	高 坏		—	—	—	12.5	良	"	に ぶ い 橙 色
89	"	Y 359	"	台 付 甕	16.6	—	—	16.9	—	"	"	淡 橙 色
90	"	Y 360	"	小 型 壺		—	—	—	—	"	"	浅 黄 橙 色
91	"	Y 361	"	"		—	—	—	—	"	"	に ぶ い 橙 色
92	"	Y 356	"	壺		—	—	—	(7.6)	"	"	浅 黄 橙 色
93	"	Y 368	"	広 口 壺	(24)	—	—	—	—	良好	"	"
94	"	Y 358	"	台付甕の台		—	—	—	—	良	"	"
95	"	Y 357	"	"		—	—	—	—	"	"	明 赤 褐 色
96	53	Y 667	S K41	壺		—	—	—	—	"	砂 多 含	に ぶ い 橙 色
97	"	Y 798	S K55	"		—	—	—	—	"	砂粒やや混入	灰 白 色
98	"	Y 798	"	台付甕の台		—	—	—	(8)	不良	"	橙 色
99	"	Y 797	"	高 坏	(24)	—	—	—	—	"	"	灰 白 色

番号	挿図番号	登録番号	出土位置	器種	法 量 (cm)				焼成	胎 土	色 調
					口径	器高	胴径	底径			
100	53	Y 797	S K55	甕	(19.5)	—	—	—	良	砂粒やや混入	淡 橙 色
101	"	Y 797	"	"	(23)	—	—	—	"	"	灰 白 色
102	"	Y1044	S K59	広 口 壺	(19)	—	—	—	"	"	にぶい黄橙色
103	"	Y1044	"	壺	—	—	—	—	"	"	黒 色
104	"	Y1044	"	"	—	—	—	(8.6)	"	砂 多 含	にぶい黄橙色
105	"	Y1044	"	台付甕の台	—	—	—	11	"	砂粒やや混入	にぶい 橙 色
106	"	Y 916	S K65	壺	—	—	—	5.5	不良	砂 多 含	浅 黄 橙 色
107	"	Y 928	S K66	"	—	—	—	—	良	砂粒やや混入	灰 黄 褐 色
108	"	Y 969	S K67	鉢	(19.8)	—	—	—	"	"	にぶい黄橙色
109	"	Y 986	"	甕	(13.2)	—	(15.2)	—	"	"	にぶい 橙 色
110	"	Y 990	"	高 坏	—	—	—	—	"	"	灰 白 色
111	"	Y 954	"	台 付 甕	—	—	—	(8)	"	"	"
112	"	Y 981	"	壺	—	—	—	(7.7)	"	"	"
113	54	Y 195	S K73	"	—	—	—	—	不良	"	浅 黄 橙 色
114	"	Y 186	"	高 坏	—	—	—	—	良	"	にぶい 橙 色
115	"	Y 193	"	"	—	—	—	—	不良	砂 多 含	浅 黄 橙 色
116	"	Y 193	"	壺	—	—	—	(7)	"	"	"
117	"	Y 197	"	"	—	—	—	(6.5)	良	"	"
118	"	Y 189	"	台付甕の台	—	—	—	(7)	不良	"	橙 色
119	"	Y 192	"	"	—	—	—	(9)	"	"	にぶい黄橙色
120	55	Y1174	S K76	小 型 壺	(11)	—	(13.4)	—	良好	良	灰 白 色
121	"	Y1186	"	"	—	—	(12.8)	(4)	良	"	淡 橙 色
122	"	Y1179	"	"	—	—	(14.2)	(4)	"	砂粒やや混入	にぶい黄橙色
123	"	Y1259	"	"	—	—	(13.5)	—	"	良	"
124	"	Y1283	"	高 坏	—	—	—	—	"	砂粒やや混入	橙 色
125	"	Y1291	"	"	—	—	—	(9.5)	"	"	"
126	"	Y1284	"	小 型 壺	—	—	15	8	"	"	"
127	"		"	S 字 甕	(13.8)	—	—	—	良好	精 選	灰 白 色
128	"	Y1181	"	"	(13.8)	—	—	—	"	良	"
129	"	Y1171	"	"	(16)	—	—	—	"	精 選	"
130	"	Y1292	"	"	(13)	23.6	(20)	(8.2)	"	"	"
131	"	Y1175	"	高 坏	—	—	—	—			
132	"	Y1259	"	甕	(12)	—	—	—	良	良	にぶい黄橙色

番号	挿図番号	登録番号	出土位置	器種	法 量 (cm)				焼成	胎 土	色 調
					口径	器高	胴径	底径			
133	55	Y1294	S K76	甕	(25.8)	—	—	—	良	砂粒やや混入	浅黄橙色
134	"	Y1180	"	手捏ね	4.8	3.3	—	2	"	"	にぶい黄橙色
135	"	Y1183	"	"	5.2	4	—	3	"	"	明褐灰色
136	"	Y1171	"	"	6.4	5.2	—	4	"	"	"
137	"	Y1185	"	柳ヶ坪型壺	(13.2)	—	—	—	良好	"	橙 色
138	"	Y1185	"	"	(18.2)	—	—	—	良	"	にぶい橙色
139	"	Y1182	"	台付甕の台	—	—	—	9.4	"	"	浅黄橙色
140	"	Y1277	"	"	—	—	—	9.5	"	"	にぶい橙色
141	"	Y1171	"	"	—	—	—	6.8	"	"	橙 色
142	"	"	"	壺	—	—	—	(7.9)			
143	56	Y 576	S K77	広口壺	14	24.5	19.7	6.8	良	砂粒やや混入	淡 橙 色
144	"	Y 671	"	"	18	29.5	23.7	7.4	"	"	"
145	"	Y 671	"	"	19.3	38	35	9	"	"	にぶい橙色
146	57	Y 588	"	"	12.2	—	—	—	"	"	淡 橙 色
147	"	Y 598	"	片口壺	18.8	—	—	—	"	"	淡赤橙色
148	"	Y 596	"	壺	—	—	—	—	"	"	淡 橙 色
149	"	Y 588	"	広口壺	—	—	—	—	"	"	"
150	"	Y 671	"	"	—	—	—	—	"	"	灰 白 色
151	"	Y 671	"	"	—	—	—	—	"	"	"
152	"	Y 671	"	"	—	—	—	—	"	"	"
153	"	Y 587	"	"	—	—	—	—	"	"	にぶい赤褐色
154	"	Y 577	"	"	17	39	36	9.3	"	"	橙 色
155	58	Y 671	"	"	25.7	—	—	—	"	砂多含	淡 橙 色
156	"	Y 599	"	壺	—	—	—	(14.1)	不良	"	にぶい黄橙色
157	"	Y 660	"	"	—	—	—	(7)	良	良	明褐灰色
158	"	Y 594	"	広口壺	(27)	—	—	—	"	砂多含	淡 橙 色
159	"	Y 489	"	壺	—	—	—	5	不良	"	"
160	"	Y 595	"	"	—	—	—	9.6	良	砂粒やや混入	"
161	"	Y 576	"	"	—	—	—	(5.5)	"	"	"
162	"	Y 671	"	広口壺	—	—	(39)	(10)	不良	"	"
163	"	Y 582	"	壺	—	—	—	(8)	"	砂多含	橙 色
164	59	Y 593	"	高 坏	(27)	—	—	—	"	砂粒やや混入	灰 白 色
165	"	Y 671	"	"	31.8	21.4	—	14	"	"	橙 色

番号	挿図番号	登番 録号	出土 位置	器 種	法 量 (cm)				焼成	胎 土	色 調
					口径	器高	胴径	底径			
166	59	Y 590	S K 77	台付甕の台	—	—	—	10.5	良	砂粒やや混入	淡 橙 色
167	"	Y 661	"	甕	16.7	—	—	—			
168	"	Y 579	"	台 付 甕	17.8	—	20.8	—	不良	砂 多 含	黄 橙 色
169	"	Y 588	"	"	17.4	—	—	—	良	"	淡 橙 色
170	"	Y 580	"	"	15.7	—	17.7	—	"	砂粒やや混入	"
171	"	Y 587	"	"	20.1	27.5	23	10.3	"	"	"
172	"	Y 675	"	台付甕の台	—	—	—	(10.1)	不良	"	"
173	"	Y 599	"	台 付 甕	20.2	—	23.4	—	"	"	"
174	60	Y 555	S X 4	小型広口壺	(13.8)	—	—	—	"	"	にぶい黄橙色
175	"	Y 569	"	広 口 壺	—	—	—	—	良	砂 多 含	淡 黄 色
176	"	Y 573	"	壺	—	—	—	6.6	不良	"	黄 橙 色
177	"	Y 564	"	甕	(15.7)	—	—	—	"	砂粒やや混入	"
178	"	Y 557	"	台付甕の台	—	—	—	7	"	砂 多 含	"
179	"	Y 556	"	壺	—	—	—	(6.1)	"	砂粒やや混入	"
180	"	Y 568	"	甕	(21)	—	—	—	"	"	浅 黄 橙 色
181	"	Y 825	S X 7	鉢	(19)	—	—	—	良	"	"
182	"	Y 857	"	広 口 壺	(22)	—	—	—	"	"	明 褐 灰 色
183	"	Y 857	"	壺	—	—	—	(8.6)	"	"	灰 白 色
184	"	Y 825	"	台付甕の台	—	—	—	(8.4)	"	"	灰 褐 色
185	"	Y 825	"	高 坏	—	—	—	—	"	"	灰 白 色
186	61	Y 465	S I 1	小 型 鉢	11.1	5	—	3.6	"	"	にぶい橙色
187	"	Y 438	"	高 坏	—	—	—	(10)	"	"	灰 白 色
188	"	Y 441	"	台付甕の台	—	—	—	(8)	不良	"	赤 橙 色
189	"	Y 463	"	高 坏	—	—	—	—	良	"	灰 白 色
190	"	Y 438	"	壺	—	—	—	(7.4)	"	"	"
191	"	Y 438	"	"	—	—	—	7	"	"	にぶい橙色
192	"	Y 441	"	"	—	—	—	7.4	"	"	浅 黄 橙 色
193	62	Y 472	S I 2	小 型 壺	—	—	10.8	4.8	不良	砂 多 含	灰 白 色
194	"	Y 472	"	壺	—	—	—	8	良	"	"
195	"	Y 467	"	鉢	12.2	10	12	4.4	"	砂粒やや混入	"
196	"	Y 570	"	小 型 壺	—	—	13.7	7.6	"	砂 多 含	明 褐 灰 色
197	"	Y 510	S I 3	広 口 壺	(13.8)	—	—	—	"	砂粒やや混入	"
198	"	Y 473	"	小 型 壺	—	—	11.7	5	"	"	庄 白 色

番号	挿図番号	登録番号	出土位置	器種	法 量 (cm)				焼成	胎 土	色 調	
					口径	器高	胴径	底径				
199	62	Y1043	S I 3	甕	(22)	—	—	—	良	砂粒やや混入	灰 白 色	
200	"	Y 882	"	小型広口壺	—	—	13.4	4.5	"	"	"	
201	"	Y 474	"	甕	(14)	—	(13.4)	—	"	砂 多 含	灰 褐 色	
202	"	Y 476	"	壺	—	—	—	5.3	"	砂粒やや混入	灰 白 色	
203	"	Y 476	"	"	—	—	—	(8.5)	"	"	"	
204	"	Y 474	"	"	—	—	—	(7.4)	"	"	"	
205	"	Y 474	"	高 坏	—	—	—	—	"	"	に ぶ い 橙 色	
206	"	Y 510	"	"	—	—	—	—	"	良	"	
207	"	Y 510	"	"	—	—	—	13.8	良好	砂粒やや混入	灰 黄 色	
208	"	Y 838	"	壺	—	—	(22)	—	不良	砂 多 含	褐 灰 色	
209	"	Y 475	"	"	—	—	—	7.9	良	砂粒やや混入	浅 黄 橙 色	
210	63	Y 506	S I 4	S 字 甕	(11.8)	—	—	—	良好	良	に ぶ い 黄 橙 色	
211	"	Y 530	"	"	(11.7)	—	—	—	"	"	灰 白 色	
212	"	Y 527	"	"	(11.9)	—	—	—	良	"	"	
213	"	Y 530	"	"	(13.9)	—	—	—	"	"	"	
214	"	Y 530	"	"	(13.8)	—	—	—	"	"	"	
215	"	Y 517	"	"	(14.1)	—	—	—	"	"	"	
216	"	Y 517	"	"	(13.9)	—	—	—	"	"	"	
217	"	Y 529	"	"	(15.8)	—	—	—	"	"	"	
218	"	Y 531	"	"	(15.8)	—	—	—	"	"	"	
219	"	Y 571	"	"	(20.9)	—	—	—	"	砂粒やや混入	"	
220	"	Y 540	"	"	—	—	(21.6)	(8.3)	"	良	灰 白 色	
221	"	Y 577	"	台付甕の台	—	—	—	(8)	"	砂 多 含	橙 色	
222	"	Y 544	"	"	—	—	—	(9.7)	"	砂粒やや混入	灰 白 色	
223	"	Y 540	"	"	—	—	—	(9.9)	"	"	"	
224	"	Y 531	"	鉢	(13.9)	—	—	—	"	"	"	
225	"	Y 580	S K76	高 坏	—	—	—	—	"	砂粒やや混入	"	
226	"	Y 526	S I 4	"	(17.8)	—	—	—	"	良	橙 色	
227	"	Y 487	"	"	(13.3)	—	—	—	"	砂 多 含	に ぶ い 橙 色	
228	"	Y 553	"	"	—	—	—	—	良好	良	"	
229	"	Y 579	"	器 台	(7.4)	—	—	—	"	"	灰 白 色	
230	"	Y 518	"	高 坏	(13.7)	13.2	—	(10.5)	"	"	淡 橙 色	
231	"	Y 579	"	"	—	—	—	—	良	砂粒やや混入	橙 色	

番号	挿図番号	登録番号	出土位置	器種	法量 (cm)				焼成	胎土	色調
					口径	器高	胴径	底径			
232	63	Y 541	S I 4	高 坏	—	—	—	—	良	砂粒やや混入	にぶい黄橙色
233	"	Y 540	"	"	—	—	—	—	"	良	淡 橙 色
234	"	Y 461	"	"	—	—	—	(11. 9)	良好	砂 多 含	"
235	"	Y 579	"	"	—	—	—	—	良	砂粒やや混入	灰 白 色
236	64	Y 543	"	手 捏 ね	(8. 8)	3. 7	—	(3)	"	"	"
237	"	Y 579	"	台 付 壺	8. 4	12. 7	9	8. 2	"	砂 多 含	淡 橙 色
238	"	Y 578	"	甕	(11. 7)	—	(14. 4)	—	"	良	灰 白 色
239	"	Y 583	"	壺	12. 1	14. 7	14. 2	—	"	砂粒やや混入	淡 橙 色
240	"	Y 577	"	器 台	—	—	—	(8. 1)	"	"	灰 白 色
241	"	Y 580	"	壺	(11. 4)	—	—	—	"	"	"
242	"	Y 531	"	"	—	—	—	8	"	"	にぶい黄橙色
243	"	Y 531	"	"	—	—	—	6. 8	"	"	灰 白 色
244	"	Y 540	"	"	—	—	—	2	"	"	にぶい黄橙色
245	"	Y 487	"	"	—	—	—	3. 6	"	砂 多 含	淡 黄 色
246	"	Y 578	"	台付甕の台	—	—	—	(10)	"	砂粒やや混入	にぶい 橙色
247	"	Y 579	"	"	—	—	—	(10. 1)	"	砂 多 含	浅 黄 橙 色
248	"	Y 539	"	甕	(16)	—	—	—	"	砂粒やや混入	灰 黄 褐 色
249	"	Y 515	"	広 口 壺	11. 2	—	—	—	"	"	淡 橙 色
250	"	Y 557	"	"	—	—	—	—			
251	"	Y 578	"	壺	—	—	—	9	良	砂粒やや混入	灰 白 色
252	"	Y 579	"	"	—	—	—	(7. 4)	"	砂 多 含	淡 橙 色
253	"	Y 582	"	"	—	—	(26. 2)	(7. 2)	"	"	"
254	65	Y 192	S D 1	S 字 甕	(15. 6)	—	—	—	"	良	灰 白 色
255	"	Y 187	"	"	(13. 8)	—	(22. 5)	—	"	砂粒やや混入	にぶい黄橙色
256	"	Y 189	"	"	—	—	—	—	"	良	"
257	"	Y 192	"	"	—	—	—	10	"	"	"
258	"	Y 45	"	甕	(15. 2)	—	—	—	"	砂粒やや混入	灰 黄 褐 色
259	"	Y 56	"	壺	—	—	—	(6. 6)	不良	砂 多 含	浅 黄 橙 色
260	"	Y 186	"	高 坏	—	—	—	—	良	砂粒やや混入	にぶい黄橙色
261	"	Y 45	"	壺	—	—	—	(10. 2)	"	砂 多 含	浅 黄 橙 色
262	"	Y 360	S D 8	広 口 壺	(20)	—	—	—	"	"	灰 白 色
263	"	Y 344	"	甕	(14)	—	—	—	"	砂粒やや混入	灰 黄 褐 色
264	"	Y 360	"	広 口 壺	(15)	—	—	—	"	"	にぶい黄橙色

番号	挿図番号	登録番号	出土位	器種	法量 (cm)				焼成	胎土	色調
					口径	器高	胴径	底径			
265	65	Y 360	S D 8	高 坏	(18)	—	—	—	良好	良	黄 褐 色
266	"	Y 355	"	"	—	—	—	—	良	砂粒やや混入	にぶい黄橙色
267	"	Y 344	"	壺	—	—	—	—	"	"	橙 色
268	"	Y 362	"	台付甕の台	—	—	—	(9)	"	"	褐 灰 色
269	"	Y 360	"	壺	—	—	—	(10)	"	"	灰 黄 褐 色
270	"	Y 355	"	"	—	—	—	8	"	砂 多 含	"
271	"	Y 355	"	"	—	—	—	(6.6)	"	砂粒やや混入	灰 褐 色
272	66	Y 357	S D 10	小型広口壺	(14)	—	—	—	良	良	"
273	"	Y 312	"	"	(16)	—	—	—	"	砂粒やや混入	"
274	"	Y 342	"	高 坏	—	—	—	—	"	"	淡 橙 色
275	"	Y 291	"	"	(25.5)	—	—	—	"	砂 多 含	"
276	"	Y 290	"	広 口 壺	(11.2)	—	—	—	"	"	灰 白 色
277	"	Y 311	"	"	—	—	—	—	"	砂粒やや混入	にぶい橙色
278	"	Y 311	"	鉢	(18)	—	—	—	"	"	明 褐 灰 色
279	"	Y 312	"	広 口 壺	—	—	—	—	"	"	浅 黄 橙 色
280	"	Y 223	"	"	—	—	—	—	"	砂 多 含	にぶい橙色
281	"	Y 333	"	台 付 甕	(16.3)	22	(18)	(11)	"	砂粒やや混入	"
282	"	Y 334	"	坏 身	(11.4)	3.5	—	(5)	"	"	橙 色
283	"	Y 308	"	"	(11)	—	—	—	"	"	"
284	"	Y 206	"	"	(13)	4.8	—	(6)	不良	砂 多 含	"
285	"	Y 311	"	壺	—	—	(12)	—	良	砂粒やや混入	にぶい橙色
286	"	Y 232	"	坏 身	(15)	—	—	—	"	"	橙 色
287	"	Y 206	"	高 坏	—	—	—	—	"	"	淡 橙 色
288	"		"	"	(13.8)	—	—	—	"	"	橙 色
289	"	Y 297	"	"	14.5	—	—	—	"	"	にぶい橙色
290	"	Y 206	"	"	(18)	—	—	—	"	"	橙 色
291	"	Y 232	"	"	(13.8)	—	—	—	"	"	にぶい橙色
292	67	X 3	"	手 捏 ね	—	—	—	2	"	"	灰 白 色
293	"	X 8	"	小 型 壺	—	—	7.2	4	"	"	"
294	"	Y 332	"	"	(8)	—	—	—	良好	良	"
295	"	Y 343	"	高 坏	—	—	—	(8)	"	"	にぶい橙色
296	"	Y 343	"	"	—	—	—	(7.8)	"	"	橙 色
297	"	Y 222	"	壺	—	—	—	—	良	"	褐 灰 色

番号	挿図番号	登録番号	出土位置	器種	法量 (cm)				焼成	胎土	色調
					口径	器高	胴径	底径			
298	67	Y 343	S D 10	高 坏	—	—	—	—	良	砂粒やや混入	淡 橙 色
299	"	Y 222	"	"	—	—	—	—	"	"	に ぶ い 橙 色
300	"	Y 330	"	"	—	—	—	—	"	"	に ぶ い 黄 橙 色
301	"	Y 330	"	"	—	—	—	—	"	砂 多 含	浅 黄 橙 色
302	"	Y 232	"	"	—	—	—	—	"	"	橙 色
303	"	Y 233	"	S 字 甕	(16)	—	—	—	良好	良	灰 白 色
304	"	Y 333	"	"	(15)	—	—	—	"	"	褐 灰 色
305	"	Y 311	"	"	(15. 5)	—	—	—	"	"	灰 白 色
306	"	Y 308	"	"	(19)	—	—	—	良	砂粒やや混入	明 褐 灰 色
307	"	Y 331	"	"	(17. 6)	—	—	—	"	"	淡 橙 色
308	"	Y 239	"	"	(15. 5)	—	—	—	"	"	灰 白 色
309	"	Y 341	"	S 字甕の台	—	—	—	—	"	"	褐 灰 色
310	"	Y 341	"	台付甕の台	—	—	—	10. 5	"	"	赤 灰 色
311	"	Y 331	"	器 台	—	—	—	(8. 4)	"	"	淡 赤 橙 色
312	"	Y 312	"	"	—	—	—	6. 8	"	良	に ぶ い 橙 色
313	"	Y 232	"	高 坏	—	—	—	11	"	砂 多 含	淡 赤 橙 色
314	"	Y 332	"	台付甕の台	—	—	—	(8)	"	"	灰 赤 色
315	"	Y 332	"	"	—	—	—	(9. 4)	"	"	"
316	"	Y 308	"	"	—	—	—	(9)	"	"	灰 白 色
317	"	Y 359	"	"	—	—	—	(10. 6)	"	"	橙 色
318	"	Y 343	"	"	—	—	—	8	"	"	褐 灰 色
319	"	Y 222	"	"	—	—	—	7. 8	不良	"	橙 色
320	"	Y 342	"	広 口 壺	(16)	—	—	—	良	砂粒やや混入	暗 赤 灰 色
321	"	Y 199	"	壺	(18)	—	—	—	"	"	浅 黄 橙 色
322	"	Y 223	"	甕	(16)	—	—	—	"	"	褐 灰 色
323	"	Y 315	"	壺	—	—	—	(5. 6)	"	"	に ぶ い 褐 色
324	"	Y 359	"	"	—	—	—	(7. 5)	"	"	橙 色
325	68	Y1058	S D 32	高 坏	(30)	—	—	—	"	"	に ぶ い 黄 橙 色
326	"	Y1054	"	広 口 壺	(17)	—	—	—	"	砂 多 含	灰 白 色
327	"	Y1048	"	小 型 壺	—	—	—	—	"	砂粒やや混入	に ぶ い 黄 橙 色
328	"	Y1059	"	高 坏	—	—	—	(12. 6)	"	砂 多 含	"
329	"	Y1055	"	"	—	—	—	—	良好	良	橙 色
330	"	Y1051	"	台付甕の台	—	—	—	(8)	良	砂粒やや混入	浅 黄 橙 色

番号	挿図番号	登 録 号	出 土 位 置	器 種	法 量 (cm)				焼成	胎 土	色 調
					口径	器高	胴径	底径			
331	68	Y 1056	S D 32	壺	—	—	(16)	(5.4)	良	砂粒やや混入	灰 褐 色
332	"	Y 426	S D 34	広 口 壺	—	—	—	—	"	"	灰 白 色
333	"	Y 445	"	壺	(11)	—	—	—	"	"	浅 黄 橙 色
334	"	Y 445	"	S 字 甕	(18)	—	—	—	"	"	黒 色
335	"	Y 446	"	小 型 壺	(9.4)	—	(13)	—	"	"	灰 白 色
336	"	Y 425	"	台付甕の台	—	—	—	(8)	"	"	にぶい 橙 色
337	"	Y 446	"	高 坏	—	—	—	(8)	"	"	橙 色
338	"	Y 445	"	壺	—	—	(25.2)	(6.8)	"	"	浅 黄 橙 色
339	69	Y 585	S D 36	広 口 壺	—	—	—	—	不良	"	淡 橙 色
340	"	Y 567	"	"	(16)	—	—	—	"	"	浅 黄 橙 色
341	"	Y 809	"	短 頸 壺	(17.6)	—	—	—	"	砂 多 含	灰 褐 色
342	"	Y 807	"	甗	—	—	—	—	"	砂粒やや混入	橙 色
343	70	Y 877	S D 35	広 口 壺	(20)	—	—	—	良	"	浅 黄 橙 色
344	"	Y 877	"	"	(13.9)	—	—	—	不良	"	黄 橙 色
345	"	Y 877	"	"	(19.6)	—	—	—	良	"	にぶい黄橙色
346	"	Y 843	"	甕	(12)	—	—	—	不良	"	にぶい 橙 色
347	"	Y 843	"	壺	—	—	—	(3.9)	良	"	明 褐 灰 色
348	"	Y 877	"	"	—	—	—	6.8	"	"	浅 黄 橙 色
349	"	Y 846	"	S 字 甕	(13.8)	—	—	—	不良	"	にぶい黄橙色
350	"	Y 1045	"	広 口 壺	—	—	—	—	"	砂 多 含	浅 黄 橙 色
351	"	Y 594	S D 39	"	(14)	—	—	—	"	砂粒やや混入	黄 橙 色
352	"	Y 816	"	甕	(14)	—	(13.5)	—	"	"	にぶい黄橙色
353	"	Y 668	"	高 坏	—	—	—	—	良	"	浅 黄 橙 色
354	"	Y 796	"	"	—	—	—	—	"	"	"
355	"	Y 792	"	壺	—	—	(18.2)	—	不良	砂 多 含	淡 橙 色
356	"	Y 792	"	"	—	—	—	8.6	"	砂粒やや混入	浅 黄 橙 色
357	"	Y 649	"	"	—	—	—	(8.6)	良	砂 多 含	灰 白 色
358	"	Y 796	"	器 台	—	—	—	9	"	砂粒やや混入	橙 色
359	"	Y 635	"	台付甕の台	—	—	—	(10)	"	"	"
360	"	Y 796	"	"	—	—	—	(9.2)	不良	"	浅 黄 橙 色
361	"	Y 650	"	"	—	—	—	9	"	砂 多 含	"
362	"	Y 650	"	高 坏	—	—	—	(11)	"	砂粒やや混入	"
363	"	Y 816	"	S 字 甕	(14)	—	—	—	"	"	橙 色

番号	挿図番号	登録番号	出土位置	器種	法 量 (cm)				焼成	胎 土	色 調
					口径	器高	胴径	底径			
364	71	Y 728	S D45	広 口 壺	(18.4)	—	—	—	良	砂 多 含	浅 黄 橙 色
365	"	Y 730	"	小 型 壺	9.1	—	—	—	不良	"	淡 橙 色
366	"	Y 789	"	広 口 壺	(23.5)	—	—	—	良	"	浅 黄 橙 色
367	"	Y 728	"	小型広口壺	(13)	—	—	—	"	砂粒やや混入	"
368	"	Y 726	"	"	(11.4)	—	—	—	"	砂 多 含	淡 赤 橙 色
369	"	Y 686	"	広 口 壺	(15)	—	—	—	"	"	灰 白 色
370	"	Y 770	"	小型広口壺	(12.5)	—	—	—	"	砂粒やや混入	"
371	"	Y 327	上 面	広 口 壺	(17.8)	—	—	—	"	"	黄 橙 色
372	"	Y 756	S D45	壺	—	—	—	—	不良	砂 多 含	淡 橙 色
373	"	Y 727	"	"	—	—	—	(6.2)	"	"	"
374	"	Y 772	"	"	—	—	—	8.2	良	砂粒やや混入	灰 白 色
375	"	Y 765	"	"	—	—	—	(6.4)	不良	砂 多 含	"
376	"	Y 740	"	"	—	—	—	7.8	良	"	浅 黄 橙 色
377	"	Y 732	"	"	—	—	—	7.1	"	"	淡 橙 色
378	"	Y 751	"	"	—	—	—	5.4	"	"	"
379	"	Y 747	"	"	—	—	—	7	"	砂粒やや混入	浅 黄 橙 色
380	"	Y 723	"	"	—	—	—	6.7	不良	砂 多 含	淡 橙 色
381	72	Y 771	"	"	(10.6)	—	(16.7)	—	良	砂粒やや混入	浅 黄 橙 色
382	"	Y 743	"	"	(13.8)	—	(22.4)	—	不良	砂 多 含	淡 橙 色
383	"	Y 733	"	"	—	—	(14.7)	—	"	"	に ぶ い 橙 色
384	"	Y 722	"	"	—	—	(14.1)	—	良	砂粒やや混入	淡 橙 色
385	"	Y 687	"	甕	(10.3)	—	(16)	—	"	"	橙 色
386	"	Y 790	"	高 坏	—	—	—	—	不良	"	淡 橙 色
387	"	Y 788	"	"	—	—	—	(10.1)	"	"	"
388	"	Y 790	"	"	—	—	—	(10.5)	"	砂 多 含	浅 黄 橙 色
389	"	Y 737	"	甕	(18.9)	—	—	—	"	"	灰 白 色
390	"	Y 744	"	台付甕の台	—	—	—	(10.8)	良	砂粒やや混入	橙 色
391	73	Y 743	S D93	片 口	(6.7)	3.3	—	3.8	"	"	に ぶ い 黄 橙 色
392	"	Y 742	"	小 型 壺	—	—	9.5	4.6	不良	砂 多 含	明 褐 灰 色
393	"	Y 745	"	甕	(15.4)	—	(16.4)	—	"	砂粒やや混入	橙 色
394	"	Y 694	"	高 坏	—	—	—	11.6	良	"	浅 黄 橙 色
395	"	Y 752	"	"	—	—	—	(11.4)	不良	"	橙 色
396	"	Y 712	"	台付甕の台	—	—	—	(7)	"	"	に ぶ い 橙 色

番号	挿図番号	登録番号	出土位置	器種	法量 (cm)				焼成	胎土	色調
					口径	器高	胴径	底径			
397	73	Y 746	S D93	甕	—	—	(15. 5)	(6. 8)	不良	砂多含	明赤褐色
398	"	Y 768	"	高 坏	—	—	—	13. 1	"	"	にぶい黄橙色
399	"	Y 728	"	壺	—	—	—	(5. 2)			
400	"	Y 650	S D94	S 字 甕	(15. 8)	—	—	—	良	砂粒やや混入	灰 白 色
401	"	Y 646	"	広口 壺	(22. 2)	—	—	—	"	砂多含	浅黄橙色
402	"	Y 646	"	甕(タタキ)	—	—	—	5	"	砂粒やや混入	にぶい黄橙色
403	74	Y 774	S D102	器 台	(8)	—	—	—	"	"	灰 白 色
404	"	Y 869	"	"	(8. 8)	—	—	—	"	"	"
405	"	Y 831	"	小 型 壺	—	—	—	3. 6	"	"	淡 橙 色
406	"	Y 869	"	小 型 鉢	—	—	—	(3. 5)	"	"	黒 色
407	"	Y 805	"	甕	(12)	—	—	—	"	"	灰 褐 色
408	"	Y 806	"	小 型 壺	—	—	(9. 6)	(4. 6)	"	"	橙 色
409	"	Y 825	"	"	—	—	—	2. 8	"	"	にぶい橙色
410	"	Y 806	"	高 坏	—	—	—	—	"	"	橙 色
411	"	Y 856	"	"	—	—	—	(10. 6)	"	"	"
412	"	Y 816	"	"	—	—	—	(11. 2)			
413	"	Y 805	"	"	—	—	—	—	良	砂粒やや混入	灰 白 色
414	"	Y 870	"	S 字 甕	(14)	—	—	—	"	良	"
415	"	Y 806	"	"	(13. 8)	—	—	—	"	"	"
416	"	Y 816	"	"	(13. 8)	—	—	—	"	"	褐 灰 色
417	"	Y 805	"	"	(15. 8)	—	—	—	"	"	明 褐 灰 色
418	"	Y 827	"	高 坏	(22)	—	—	—	"	砂粒やや混入	灰 白 色
419	"	Y 869	"	甕	(15. 8)	—	—	—	"	"	淡 橙 色
420	"	Y 806	"	"	(18. 8)	—	—	—	"	"	にぶい橙色
421	"	Y 816	"	"	(17. 6)	—	—	—	"	"	にぶい黄橙色
422	"	Y 806	"	"	(15)	—	(16)	—	"	"	灰 白 色
423	"	Y 816	"	壺	—	—	—	(7. 6)	"	"	明 褐 灰 色
424	"	Y 870	"	"	—	—	—	(4)	"	"	橙 色
425	"	Y 831	"	"	—	—	—	(6. 4)	"	"	灰 白 色
426	"	Y 831	"	台付甕の台	—	—	—	(10)	"	"	"
427	"	Y 805	"	"	—	—	—	(11. 6)	"	"	"
428	"	Y 805	"	"	—	—	—	(8)	"	"	"
429	"	Y 869	"	"	—	—	—	10. 5	不良	"	浅黄橙色

番号	挿図番号	登録番号	出土位置	器種	法量 (cm)				焼成	胎土	色調
					口径	器高	胴径	底径			
430	74	Y 870	S D 102	台付甕の台	—	—	—	(9. 5)	良	砂粒やや混入	橙 色
431	"	Y 856	"	高 坏	—	—	—	—	不良	砂 多 含	灰 白 色
432	"	Y 805	"	広 口 壺	—	—	—	—	良	"	明 褐 灰 色
433	"	Y 816	"	壺	—	—	—	(6)	"	"	"
434	"	Y 802	"	高 坏 ?	—	—	—	(29. 5)	"	"	灰 白 色
435	75	Y 955	S D 109	小 型 壺	—	—	—	—	"	"	灰 褐 色
436	"	Y 987	"	広 口 壺	—	—	—	—	"	"	淡 黄 橙 色
437	"	Y 1009	"	高 坏	—	—	—	(12)	不良	"	灰 白 色
438	"	Y 1011	Pit 477	台 付 甕	14	21	16. 2	7. 6	良	砂粒やや混入	淡 黄 橙 色
439	"	Y 988	S D 109	壺	—	—	—	(7. 4)	不良	"	淡 橙 色
440	"	Y 1012	"	甕	(17)	—	—	—	良	"	に ぶ い 橙 色
441	"	Y 927	"	台 付 甕	(18. 5)	—	(20. 1)	—	不良	"	に ぶ い 黄 橙 色
442	"	Y 1009	"	甕	(20)	—	—	—	良	"	淡 赤 橙 色
443	"	Y 1010	"	"	(17. 2)	—	(22. 3)	—	不良	砂 多 含	淡 橙 色
444	"	Y 962	"	"	(21. 5)	—	—	—	良	砂粒やや混入	淡 黄 橙 色
445	"	Y 1014	"	台付甕の台	—	—	—	9	"	"	橙 色
446	76	Y 944	S D 115	広 口 壺	(15. 4)	—	—	—	"	"	明 褐 灰 色
447	"	Y 1244	"	壺	(13. 5)	—	—	—	"	"	に ぶ い 黄 橙 色
448	"	Y 943	"	広 口 壺	(15. 3)	—	—	—	"	"	"
449	"	Y 1244	"	"	(15. 4)	—	—	—	"	"	"
450	"	Y 1250	"	"	(27. 5)	—	—	—	"	"	"
451	"	Y 958	"	壺	(12. 4)	20. 9	(23. 4)	(5. 5)	"	"	明 褐 灰 色
452	"	Y 1239	"	小型広口壺	(11)	—	—	—	"	砂 多 含	に ぶ い 橙 色
453	"	Y 1395	"	S 字 甕	(11. 8)	—	—	—	"	良	明 褐 灰 色
454	"	Y 1239	"	"	(11. 4)	—	—	—	"	"	に ぶ い 橙 色
455	"	Y 1317	"	"	(15. 4)	—	—	—	"	"	浅 黄 橙 色
456	"	Y 1240	"	"	(15. 4)	—	—	—	良好	"	灰 白 色
457	"	Y 1230	"	"	(15. 4)	—	—	—	良	砂粒やや混入	灰 黄 褐 色
458	"	Y 1170	"	S字甕の台	—	—	—	—	良好	良	灰 白 色
459	"	Y 1250	"	"	—	—	—	—	"	"	に ぶ い 橙 色
460	"	Y 1229	"	"	—	—	—	9	良	"	褐 灰 色
461	"	Y 958	"	"	—	—	—	—	良好	"	に ぶ い 橙 色
462	"	Y 1317	"	壺	—	—	—	6. 4	良	砂粒やや混入	に ぶ い 黄 橙 色

番号	挿図番号	登録番号	出土位置	器種	法 量 (cm)				焼成	胎 土	色 調
					口径	器高	胴径	底径			
463	76	Y 1395	S D115	壺	—	—	—	12.4	良	砂粒やや混入	にぶい黄橙色
464	"	Y 1239	"	"	—	—	—	7.6	"	"	灰 黄 褐 色
465	"	Y 1258	"	"	—	—	—	7.6	"	砂 多 含	明 褐 灰 色
466	"	Y 1317	"	短 頸 壺	(20)	—	—	—	"	良	にぶい黄橙色
467	"	Y 958	"	台付甕の台	—	—	—	(7.8)	"	"	にぶい 橙 色
468	"	Y 1002	"	"	—	—	—	(8.4)	"	砂粒やや混入	浅 黄 橙 色
469	77	Y 1317	"	鉢	(7.6)	5	—	(4)	"	"	灰 黄 橙 色
470	"	Y 1173	"	小 型 壺	6.4	7.6	8.2	3.4	不良	砂 多 含	浅 黄 橙 色
471	"	Y 958	"	鉢	—	—	—	3.7	良	良	明 褐 灰 色
472	"	Y 958	"	柳ヶ坪型壺	—	—	—	—	"	砂粒やや混入	にぶい褐色
473	"	Y 1396	"	小型丸底埴	(11.6)	—	—	—	良好	良	灰 褐 色
474	"	Y 1250	"	小型広口壺	8	10.5	8.4	3.5	良	砂粒やや混入	浅 黄 橙 色
475	"	Y 1233	"	台 付 壺	8.4	14.8	11.4	7.5	"	精 選	"
476	"	Y 944	"	小 型 壺	—	—	—	(5.2)	"	"	"
477	"	Y 1229	"	甕 (内面ケズリ)	(11.6)	—	—	—	良好	"	褐 灰 色
478	"	Y 1229	"	器 台	—	—	—	6.7	良	良	にぶい 橙 色
479	"	Y 944	"	高 坏	—	—	—	—	"	砂粒やや混入	"
480	"	Y 1250	"	"	—	—	—	(10.4)	"	良	にぶい黄橙色
481	"	Y 958	"	"	—	—	—	—	"	砂粒やや混入	橙 色
482	"	Y 1395	"	壺	—	—	—	3	"	良	灰 黄 褐 色
483	"	Y 1395	"	"	—	—	—	3.2	"	"	にぶい黄橙色
484	"	Y 1395	"	高 坏	—	—	—	(10)	"	砂粒やや混入	"
485	"	Y 944	"	"	—	—	—	(10.8)	"	"	明 褐 灰 色
486	"	Y 1396	"	"	—	—	—	(12)	"	"	にぶい黄橙色
487	"	Y 1258	"	"	—	—	—	9.7	"	"	にぶい 橙 色
488	"	Y 1239	"	甕	(15.6)	—	(16.6)	—	"	"	にぶい黄橙色
489	"	Y 1244	"	"	(20)	—	—	—	"	"	"
490	"	Y 1317	"	"	(19.6)	—	—	—	"	"	"
491	"	Y 1246	"	台付甕の台	—	—	—	(10)	"	"	"
492	"	Y 1230	"	"	—	—	—	(9.2)	"	"	灰 黄 褐 色
493	"	Y 1239	"	"	—	—	—	(7.4)	"	良	"
494	"	Y 1239	"	"	—	—	—	(9)	"	砂粒やや混入	"
495	78	Y 1237	"	高 坏	(17.6)	—	—	—	"	良	橙 色

番号	挿図番号	登録番号	出土位置	器種	法 量 (cm)				焼成	胎 土	色 調
					口径	器高	胴径	底径			
496	78	Y1170	S D115	高 坏	(17)	—	—	—	良	砂粒やや混入	橙 色
497	"	Y1317	"	"	—	—	—	—	"	砂 多 含	淡 橙 色
498	"	Y1229	"	壺	(7.6)	7	(9.5)	(5)	"	砂粒やや混入	灰 褐 色
499	"	Y1243	"	S 字 甕	(11.8)	—	—	—	"	"	橙 色
500	"	Y1395	"	"	(18)	—	—	—	"	"	"
501	"	Y1239	"	"	(17.2)	—	—	—	"	"	"
502	"	Y1004	"	広 口 壺	(28)	—	—	—	良	砂粒やや混入	淡 橙 色
503	"	Y1317	"	甕	(19.8)	—	—	—	"	"	にぶい 橙 色
504	"	Y1394	"	広 口 壺	(16)	—	—	—	"	"	灰 褐 色
505	"	Y1239	"	壺	—	—	—	(9.2)	"	砂 多 含	明 褐 灰 色
506	"	Y 943	"	台 付 甕	—	—	—	—	"	砂粒やや混入	灰 白 色
507	79	Y1119	S D118	甕	(11.5)	13.5	12.1	(5)	"	"	浅 黄 橙 色
508	"	Y1106	"	広 口 壺	(19.7)	—	—	—	不良	"	淡 橙 色
509	"	Y1116	"	甕	(13.6)	—	—	—	良	"	にぶい黄橙色
510	"	1111	"	台付甕の台	—	—	—	—	不良	砂 多 含	橙 色
511	"	Y1117	"	壺	—	—	—	(4.4)	良	砂粒やや混入	"
512	"	Y1107	"	"	—	—	—	(8.8)	不良	"	"
513	80	Y 970	S D120	広 口 壺	(17)	—	—	—	良	"	灰 黄 褐 色
514	"	Y 266	S D 2	小型広口壺	(14.5)	—	—	—	"	砂粒やや混入	黒 褐 色
515	"	Y 449	"	広 口 壺	(26)	—	—	—	"	砂 多 含	橙 色
516	"	Y 985	S D120	"	—	—	—	—	"	"	明 褐 橙 色
517	"	Y1333	"	"	—	—	—	—	"	砂粒やや混入	にぶい黄橙色
518	"	Y1255	"	壺	—	—	—	(6.2)	"	"	明 褐 色
519	"	Y1255	"	"	—	—	—	(6.2)	"	"	浅 黄 橙 色
520	"	Y 985	"	"	—	—	—	(5.6)	"	"	灰 白 色
521	"	Y 261	S D 2	高 坏	25.7	—	—	—	"	"	橙 色
522	"	Y 979	S D120	"	(18.1)	—	—	—	"	砂 多 含	灰 白 色
523	"	Y 979	"	高 坏	—	—	—	—	"	砂粒やや混入	にぶい褐色
524	"	Y 985	"	"	(28.8)	—	—	—	"	"	浅 黄 橙 色
525	"	Y1403	"	"	—	—	—	—	"	"	にぶい黄橙色
526	"	Y1368	"	"	—	—	—	—	"	"	灰 黄 褐 色
527	"	Y1403	"	"	—	—	—	—	"	"	浅 黄 橙 色
528	"	Y1234	"	"	—	—	—	—	"	良	"

番号	插图番号	登録番号	出土位置	器種	法量 (cm)				焼成	胎土	色調
					口径	器高	胴径	底径			
529	80	Y1363	S D120	高 坏	—	—	—	—	良	砂 多 含	にぶい黄褐色
530	"	Y 255	S D 2	"	—	—	—	(9.7)	"	砂粒やや混入	淡 橙 色
531	"	Y1361	S D120	"	—	—	—	(10)	"	"	橙 色
532	"	Y 259	S D 2	"	—	—	—	(15.2)	不良	"	"
533	81	Y1369	S D120	甕	(15.8)	21.1	(20.5)	(6.6)	"	砂 多 含	にぶい橙色
534	"	Y1378	"	"	18.3	—	18.8	—	"	砂粒やや混入	淡 橙 色
535	"	Y1376	"	台付甕	(14.8)	20.2	(15.5)	(7.2)	"	"	"
536	"	Y1372	"	"	18.3	—	20.5	—	"	砂 多 含	にぶい橙色
537	"	Y1382	"	甕	18.7	—	21	—	"	砂粒やや混入	浅 赤 橙 色
538	"	Y1270	"	"	21.9	—	28.1	—	良	"	浅 黄 色
539	"	Y1372	"	台付甕の台	—	—	—	(15.4)	不良	砂 多 含	淡 橙 色
540	"	Y 252	S D 2	甕	(12.9)	13.2	—	(6.8)	良	"	浅 黄 色
541	"		S D120	台付甕の台	—	—	—	(9.4)			
542	"	Y1378	"	"	—	—	—	(10.5)	不良	砂粒やや混入	にぶい橙色
543	82	Y1314	S D125	坏	12	4.4	—	5	良	"	橙 色
544	"	Y1232	"	"	(12)	—	—	—	"	良	"
545	"	Y1172	"	"	(12)	—	—	—	"	"	"
546	"	Y1399	"	"	(14)	—	—	—	"	砂粒やや混入	にぶい橙色
547	"	Y1253	"	"	(14)	—	—	—	"	"	橙 色
548	"	Y1253	"	"	(15.8)	—	—	—			
549	"	S 655	"	坏 蓋	—	3.5	—	10.4	良好	精 選	黒 灰 色
550	"	Y1253	"	坏 身	(12)	—	—	—	"	"	灰 黄 色
551	"	Y1195	"	埴	(12.6)	5.6	—	—	良	砂粒やや混入	にぶい黄橙色
552	"	Y1251	"	S 字 甕	(14)	—	—	—	良好	良	灰 褐 色
553	"	Y1201	"	"	(15.1)	—	—	—	"	"	明 褐 色
554	"	Y1253	"	"	—	—	—	—	"	"	褐 灰 色
555	"	Y1392	"	"	(17.8)	—	—	—	"	"	"
556	"	Y1308	"	"	(18)	—	—	—	"	"	明 褐 灰 色
557	"	1195	"	"	(14.8)	—	—	—	良	"	にぶい黄橙色
558	"	Y1253	"	器 台	(8)	—	—	—	"	"	褐 灰 色
559	"	Y1251	"	"	(9)	—	—	—	"	"	灰 褐 色
560	"	Y1253	"	広 口 壺	(16)	—	—	—	"	砂粒やや混入	にぶい橙色
561	"	Y1398	"	台付甕の台	—	—	—	—	"	"	"

番号	挿図番号	登録番号	出土位置	器種	法 量 (cm)				焼成	胎 土	色 調
					口径	器高	胴径	底径			
562	82	Y1397	S D125	台付甕の台	—	—	—	—	良好	良	褐 灰 色
563	"	Y1253	"	器 台	5.5	—	—	7	良	"	灰 褐 色
564	"	Y1309	"	"	—	—	—	(8.2)	"	"	褐 灰 色
565	"	Y1253	"	高 坏	—	—	—	—	"	砂粒やや混入	にぶい黄橙色
566	"	Y1251	"	"	—	—	—	—	"	"	灰 褐 色
567	"	Y1253	"	"	—	—	—	(8)	"	"	橙 色
568	"	Y1392	"	台付甕の台	—	—	—	(6.6)	"	"	灰 白 色
569	"	Y1235	"	"	—	—	—	7.6	"	"	褐 灰 色
570	"	Y1398	"	壺	—	—	—	6	"	"	灰 褐 色
571	"	Y1392	"	台付甕の台	—	—	—	(10.8)	"	"	にぶい黄橙色
572	"	Y1232	"	高 坏	—	—	—	—	"	砂 多 含	"
573	"	Y1252	"	壺	—	—	—	(7.4)	良	砂粒やや混入	褐 灰 色
574	"	Y1202	"	"	—	—	—	(8.6)	"	"	にぶい黄橙色
575	"	Y1251	"	"	—	—	—	(12.4)	"	"	灰 白 色
576	83		"	広 口 壺	16.5	—	—	—	"	"	"
577	"	Y1231	"	"	(16)	—	—	—	"	"	灰 黄 色
578	"	Y1398	"	"	(19.2)	—	—	—	"	"	灰 白 色
579	"	Y1238	"	"	(19.5)	—	—	—	"	"	にぶい黄橙色
580	"	Y1253	"	"	(15.8)	—	—	—	"	砂 多 含	淡 橙 色
581	"	Y1276	"	"	—	—	—	—	"	砂粒やや混入	浅 黄 橙 色
582	"	Y1232	"	高 坏	—	—	—	(11.6)	"	"	明 褐 灰 色
583	"	Y1269	"	広 口 壺	—	—	—	—			
584	"	Y1308	"	壺	—	—	—	(9)	良	砂粒やや混入	にぶい 橙 色
585	"	Y1253	"	"	—	—	—	(9.2)	"	"	淡 橙 色
586	"	Y1309	"	台 付 甕	—	—	—	(12)	"	"	灰 白 色
587	"	Y1172	"	"	—	—	—	(9.4)	"	"	"
588	"	Y1204	"	把 手	—	—	—	—	"	"	浅 黄 橙 色
589	"	Y1192	"	"	—	—	—	—	"	"	明 褐 灰 色
590	"	Y1309	"	"	—	—	—	—	"	"	"
591	"	Y1251	"	壺	—	—	(26)	(6.4)	"	"	灰 褐 色
592	84	Y1190	S D130	高 坏	—	—	—	—	"	"	褐 灰 色
593	"	Y1190	"	"	—	—	—	—	"	砂 多 含	灰 白 色
594	"	Y1190	"	広 口 壺	(15.8)	—	—	—	"	"	淡 赤 橙 色

番号	挿図番号	登録番号	出土位置	器種	法 量 (cm)				焼成	胎 土	色 調
					口径	器高	胴径	底径			
595	84	Y1315	S D130		(16)	—	—	—	良	砂粒やや混入	にぶい橙色
596	"	1110	"	広口壺	(15.7)	—	—	—	"	"	"
597	"	Y1276	"	壺	—	—	—	—	"	砂粒やや混入	橙 色
598	"	Y1298	"	高 坏	—	—	—	—	"	"	褐 灰 色
599	"	Y1190	"	柳ヶ坪型壺	(17)	—	—	—	"	"	にぶい橙色
600	"	Y1091	"	"	—	—	—	—	"	"	赤 橙 色
601	"	Y1276	"	高 坏	—	—	—	—	"	"	にぶい橙色
602	"	Y1315	"	台付甕の台	—	—	—	10.2	"	砂 多 含	灰 褐 色
603	"	Y1315	"	S字甕の台	(14.4)	—	—	—	良好	良	にぶい黄橙色
604	"	Y1236	"	"	(11.8)	—	—	—	良	"	"
605	"	Y1260	"	"	(13.6)	—	—	—	"	"	"
606	"	Y1315	"	"	(14)	—	—	—	"	"	灰 黄 褐 色
607	"	Y1276	"	"	(15.2)	—	—	—	良好	"	灰 白 色
608	"	Y1315	"	"	(14.6)	—	—	—	良	"	"
609	"	Y1264	"	"	(15)	—	—	—	"	砂粒やや混入	"
610	"	Y1315	"	"	(15.8)	—	—	—			
611	"	Y1264	"	"	(17.8)	—	—	—	良	良	灰 白 色
612	"	Y1190	"	"	(20.6)	—	—	—	良好	砂粒やや混入	"
613	"	Y1190	"	鉢	(15.2)	8.9	(16.3)	—	良	"	褐 灰 色
614	"	Y1190	"	甕	(18)	—	—	—	"	"	浅 黄 橙 色
615	"	Y1260	S D130	器 台	—	—	—	(9.4)	"	"	橙 色
616	"	Y1190	"	坏	14	6.8	—	—	"	"	淡 橙 色
617	"	Y1190	"	"	11.4	4.7	—	—	"	"	浅 黄 橙 色
618	"	Y1257	"	鉢	—	—	—	(7)	"	良	橙 色
619	"	Y1190	"	甕	(13)	—	(13)	—	良好	"	灰 黄 色
620	85	Y1226	S D126	"	(15.8)	—	—	—	良	"	灰 褐 色
621	"	Y1228	"	高 坏	—	—	—	—	"	"	橙 色
622	"	Y1432	S D127	S 字 甕	(14.8)	—	—	—	"	"	灰 褐 色
623	"	Y1433	"	広口壺	(18)	—	(28.2)	—	"	"	浅 黄 橙 色
624	"	Y1433	"	甕	(19.8)	—	(22.8)	—	"	"	灰 褐 色
625	"	Y1433	"	壺	—	—	—	(6)	"	"	にぶい黄橙色
626	"	Y1433	"	"	—	—	—	(9.4)	"	"	灰 褐 色
627	"	Y1421	"	埴	—	—	—	(3)	"	"	明 褐 灰 色

番号	挿図番号	登録番号	出土位置	器種	法 量 (cm)				焼成	胎 土	色 調
					口径	器高	胴径	底径			
628	85	Y 1433	S D 127	高 坏	—	—	—	(10)	良	砂粒やや混入	褐 灰 色
629	"	Y 1434	S D 128	手 捏 ね	5. 2	6	—	4. 8	"	"	"
630	"	Y 1420	"	器 台	—	—	—	(8. 8)	"	良	橙 色
631	"	Y 1412	"	高 坏	—	—	—	10	"	砂粒やや混入	にぶい赤橙色
632	"	Y 1412	"	S 字 甕	(15. 6)	—	—	—	"	良	橙 色
633	"	Y 1210	"	高 坏	—	—	—	—			
634	86	Y 1422	S D 134	"	—	—	—	—	良	砂粒やや混入	明 褐 灰 色
635	"	Y 1422	"	壺	—	—	—	(7. 2)	"	"	褐 灰 色
636	"	Y 1410	S D 135	"	—	—	—	(5. 4)	"	砂 多 含	灰 白 色
637	"	Y 1435	S D 136	広 口 壺	11. 7	11	14. 2	5	"	砂粒やや混入	にぶい橙色
638	"	Y 1418	"	高 坏	—	—	—	—	"	"	"
639	"	Y 1435	"	甕	—	—	—	8. 6	"	"	"
640	87	Y 362	S D 88	手 捏 ね	—	—	(4. 2)	(3. 2)	"	"	浅 黄 橙 色
641	"	Y 1332	S D 122	"	(9. 8)	5. 9	—	(5. 2)	"	"	橙 色
642	"	Y 805	表 採	壺	—	—	(14. 5)	(6)	不良	"	灰 白 色
643	"	Y 497	"	小型広口壺	9. 6	9. 3	11. 4	4. 8	"	"	浅 黄 橙 色
644	88		S D 93	坏 蓋	(12. 3)	3. 5	—	—			
645	"	S 393	"	坏 身	(12. 2)	4. 2	—	—	良好	精 選	灰 色
646	"	S 180	S D 10	坏 蓋	(12. 2)	4. 5	—	—	"	"	"
647	"	S 648	S D 125	"	(12. 3)	4. 7	—	—	良	良	白 灰 色
648	"	S 211	S D 36	"	(15)	4. 8	—	—	良好	精 選	黒 色
649	"	S 175	表 土	"	(10. 8)	5	—	—	"	"	灰 色
650	"	S 46		"	9. 6	4	—	—	"	"	"
651	"	S 206	上 面	坏 身	9. 6	4. 3	—	—	"	"	"
652	89	S 626	耕 作 下	坏 蓋	14. 6	2. 7	—	—	"	"	"
653	"	S 670	S D 130	"	14	3	—	—	"	"	白 灰 色
654	"	S 51	S D 4	"	13	3. 8	—	—	"	"	灰 色
655	"	S 21	"	坏 身	(12. 6)	3. 7	—	(10. 5)	"	"	"
656	"	S 141	"	"	(12)	4	—	(7. 5)	"	"	白 灰 色
657	"	S 154	"	"	13. 4	5. 2	—	5. 6	"	"	灰 色
658	"	S 140	"	"	8. 6	3. 8	—	6. 8	"	"	"
659	"	S 52	"	"	14. 5	4. 4	—	—	"	"	"
660	"	S 673	S D 130	"	(8. 6)	3. 3	—	(6. 5)	"	"	"

番号	挿図番号	登録番号	出土位置	器種	法 量 (cm)				焼成	胎 土	色 調
					口径	器高	胴径	底径			
661	89	S 657	S D130	坏 身	13.5	4	—	5.5	良好	精 選	灰 色
662	"	S 160	S D 4	"	10	3.7	—	7	"	"	"
663	"	S 670	S D130	"	(15.6)	6.2	—	(11)	"	"	暗 灰 色
664	"	S 665	"	坏 蓋	(17)	—	—	—	"	"	灰 色
665	"	S 123	S D 4	"	(16.5)	—	—	—	"	"	"
666	"	S 14	S D 1	"	(16)	—	—	—	"	"	"
667	"	S 665	S D130	蓋	18.4	1	—	—	"	"	"
668	"	S 21	S D 4	皿	(16.5)	2.4	—	(8.6)	"	"	灰 白 色
669	"	S 21	"	"	(15.5)	2.2	—	(11)	"	"	"
670	"	S 52	"	"	(15.5)	2.5	—	(10)	"	"	灰 色
671	"	S 151	"	"	(17)	2.5	—	—	"	"	"
672	"	S 139	"	"	(17.5)	3.3	—	(8)	"	"	"
673	"	S 152	"	"	(18)	—	—	—	"	"	"
674	"	Y1275	S D130	つまみ	—	—	—	—	良	良	赤 色
675	"	Y1306	"	坏	(12)	3.2	—	(7.6)	"	"	浅 黄 橙 色
676	"	Y1276	"	"	(12.6)	3.1	—	(9)	"	"	赤 色
677	"	S 177	S D 4	"	13	4	—	6.6	良好	精 選	灰 色
678	"	Y1275	S D130	"	12.6	4.2	—	6	良	良	赤 色
679	"	Y1194	"	"	(12)	3.9	—	6	"	"	"
680	"	Y1318	"	"	(14)	4	—	(10)	"	"	"
681	"	Y1261	"	甕	(24)	—	—	—	"	"	黄 橙 色
682	"	Y1275	"	"	(25.8)	—	—	—	"	"	に ぶ い 橙 色
683	"	Y1304	"	"	(26)	—	—	—	"	"	に ぶ い 黄 橙 色
684	"	Y1304	"	"	(26)	—	—	—	"	"	"
685	90	S 665	"	広 口 壺	(16.3)	19.8	(18.7)	(11.8)	良好	精 選	灰 色
686	"	S 675	"	甕	(21.7)	—	—	—	"	"	"
687	"	S 670	"	壺	—	—	—	—	"	"	オリーブ灰色
688	"	S 665	"	脚 付 盤	—	—	—	9.9	"	"	灰 色
689	"	S 21	S D 4	長 頸 壺	(9.9)	—	—	—	"	"	暗オリーブ灰色
690	"	S 629	S D125	高 坏	—	—	—	(7.9)	"	"	灰 白 色
691	"	S 610	S D130	壺	—	—	—	—	"	"	灰 色
692	"	S 41	S D 7	"	—	—	—	(11.8)	"	"	"
693	"	S 665	S D130	"	—	—	—	(12.9)	"	"	灰オリーブ色

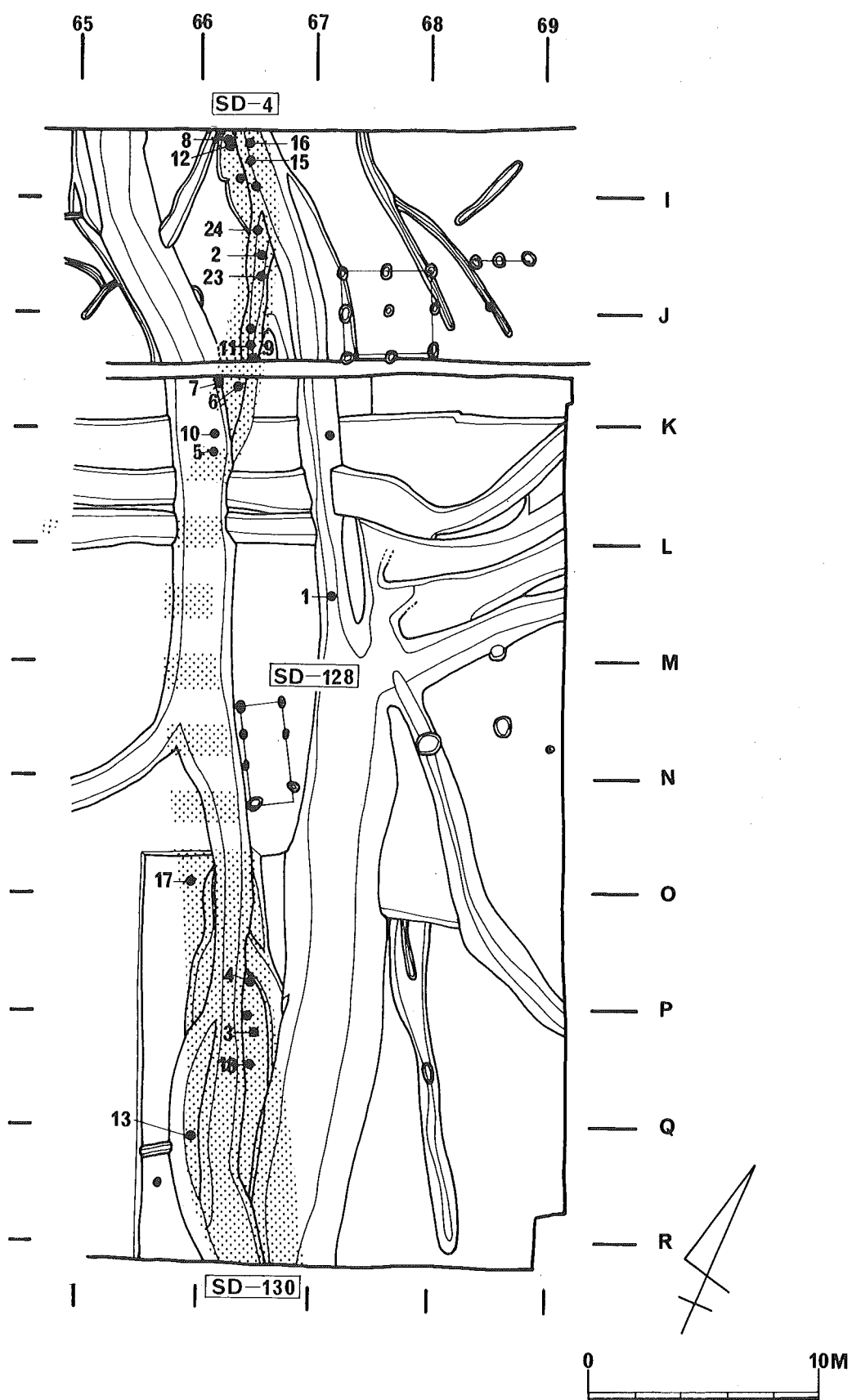
番号	挿図番号	登番 録号	出位 土置	器種	法 量 (cm)				焼成	胎 土	色 調
					口径	器高	胴径	底径			
694	90	S 21	S D 4	壺	—	—	—	(8)	良好	精 選	灰 白 色
695	"	S 664	S D 130	"	—	—	(15. 8)	—	"	"	"
696	"	S 135	S D 4	甕	—	—	—	(13)	"	"	灰 色
697	"	S 142	"	壺	—	—	—	(12. 3)	"	"	グリー ン 色
698	"	S 64	"	"	—	—	—	(11. 9)	"	"	灰 色
699	"	S 680	S D 130	"	—	—	(24. 4)	—	"	"	灰 白 色
700	91	S 88	S D 16	灯 明 皿	8. 5	1. 8	—	4. 6	良	砂粒やや混入	"
701	"	S 90	"	小 皿	9. 2	3. 1	—	5. 5	良好	精 選	灰 色
702	"	S 95	"	高 坏	—	—	—	—	"	"	"
703	"	S 90	"	甕	—	—	—	(15. 5)	"	"	"
704	"	S 99	S D 19	平 瓶	—	—	—	—	"	"	淡 緑 色
705	92	C 128	S D 85	水 滴	—	—	—	—	"	"	モスグリー ン 色
706	"	C 122	"	白 磁 皿	10. 2	—	—	—	"	"	白 色
707	"	S 254	"	山 茶 碗	—	—	—	5. 9	"	"	白 灰 色
708	"	S 228	"	"	—	—	—	6	"	"	"
709	"	S 228	"	"	—	—	—	(9)	"	"	"
710	"	S 226	"	"	—	—	—	(7. 5)	"	"	"
711	"	S 234	"	"	—	—	—	7. 7	"	"	"
712	"	C 122	"	瓶 子	—	—	—	—	"	"	淡 緑 色
713	"	S 257	"	壺	—	—	—	—	"	"	に ぶ い 緑 色
714	"	C 128	"	甕	—	—	—	—	"	"	灰 赤 色
715	"	C 130	"	"	—	—	—	—	"	"	灰 白 色
716	"	C 137	"	"	—	—	—	—	"	"	褐 灰 色
717	"	C 125	"	片 口 鉢	(28. 6)	—	—	—	"	"	灰 白 色
718	"	C 135	"	甕	—	—	—	(17. 2)	"	"	褐 灰 色
719	93	C 246	S K 78	"	—	—	—	(19. 6)	"	"	"
720	"	C 247	S K 79	"	—	—	—	(16)	"	"	暗 赤 褐 色
721	94	S 476	S K 68	山 茶 碗	(14. 3)	4. 9	—	(6. 2)	"	"	灰 白 色
722	"	S 476	"	"	(15)	5. 9	—	(6. 7)	"	"	"
723	"	S 118	S D 21	"	(15. 2)	4. 8	—	(6. 8)	"	良	"
724	"	S 118	"	"	(15. 4)	5. 6	—	(5. 5)	"	精 選	"
725	"	S 117	"	甕	—	—	—	(15)	"	"	"
726	"	S 362	S D 99	多 耳 壺	—	—	—	—	"	"	淡 緑

番号	挿図番号	登 録 番 号	出 土 位 置	器 種	法 量 (cm)				焼成	胎 土	色 調
					口径	器高	胴径	底径			
727	94	S 388	S D99	山 茶 碗	—	—	—	(7.8)	良好	精 選	灰 色
728	"	S 388	"	"	—	—	—	7.7			
729	"	S 390	"	"	(12.1)	5.9	—	(5.5)	良好	砂粒やや混入	灰 白 色
730	"	S 391	"	"	(13.8)	5.6	—	(5.2)	"	"	"
731	"	S 355	S D96	片 口 鉢	(26.4)	—	—	—	"	精 選	"
732	"	S 357	"	鉢	—	—	—	(8)	"	"	"
733	"	S 439	S D103	山 茶 碗	(12.5)	5.2	—	(4.2)	"	砂粒やや混入	"
734	"	S 437	"	"	(15.9)	5.4	—	(6)	"	良	灰 色
735	"	S 406	S D104	"	(14.6)	5.1	—	(7)	"	砂粒やや混入	"
736	"	S 472	"	"	(15.3)	5	—	(6.8)	"	良	"
737	"	S 525	"	"	(15.7)	6.2	—	(7.4)	"	"	灰 白 色
738	"	S 406	"	"	(17)	5.1	—	(8.5)	"	砂粒やや混入	"
739	"	S 477	S D105	"	(15.4)	5.1	—	(7.5)	"	精 選	"
740	"	S 431	"	"	(14.5)	5.4	—	(6)	"	砂粒やや混入	灰 色
741	"	S 412	"	壺	—	—	—	(5.2)	"	精 選	灰 白 色
742	"	S 137	P 44		—	—	—	(7.2)	"	"	"
743	"	S 339	S K43	山 茶 碗	(14.4)	6	—	(6)	"	砂粒やや混入	"

色調は『新版 標準土色帖』による。

参考文献・引用文献

- 袋井市教育委員会 『土橋遺跡—第1次調査—』 1982
- 袋井市教育委員会 『土橋遺跡—第2次調査—』 1983
- 袋井市教育委員会 『玉越遺跡』 1984
- 袋井市教育委員会 『鶴松遺跡』 1982
- 袋井市教育委員会 『春岡一号墓』 1979
- 袋井市教育委員会 『鶴松古墳群・機ヶ谷古墳群』 1982
- 袋井市教育委員会他 『袋井市徳光遺跡発掘調査概報』 1968
- 袋井市役所 『袋井市史—通史編—』 1983
- 磐田市教育委員会 『磐田市竹之内原古墳調査記録報告』 1973
- 磐田市教育委員会 『新豊院山遺跡（A—2・3地点）』 1980
- 磐田市教育委員会 『新豊院山墳墓群』 1982
- 磐田市教育委員会 『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告Ⅰ』 1981
- 磐田市教育委員会 『野際遺跡発掘調査概報』 1982
- 磐田市教育委員会 『野際遺跡』 1984
- 磐田市教育委員会 『磐田古墳時代遺跡地名表』 1982
- 浅羽町教育委員会 『青木遺跡・馬場第1遺跡・西立遺跡』 1982
- 浅羽町教育委員会 『青木、馬場第1・第2遺跡』 1984
- 菊川町教育委員会 『三沢西原遺跡』 1984
- 細江町教育委員会 『川久保遺跡ほか、発掘調査概報』 1982
- 舞阪町教育委員会 『浜名湖弁天島湖底遺跡』 1984
- 掛川市教育委員会 『掛川市天王山遺跡発掘調査報告書』 1968
- 雄踏町教育委員会 『長者平遺跡・鹿小路遺跡発掘調査報告書』 1978
- 豊田町教育委員会 『加茂東原遺跡第2次発掘調査概報』 1984
- 焼津市教育委員会 『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』 1984
- 浜松市教育委員会 『伊場遺跡遺物編3』 1982
- 浜松市教育委員会 『浜松市天王中野遺跡発掘調査報告書』 1981
- 浜松市教育委員会 『椿野遺跡』 1982
- 沼津市教育委員会 『八兵衛洞遺跡群発掘調査報告書』 1981
- 三島市教育委員会 『中島下舞台遺跡』 1983
- 檀原考古学研究所 『纏向』 1976
- 八王子市櫛田遺跡調査会 『神谷原Ⅲ』 1982
- 八王子市郷土資料館 『三～四世紀の東国』 1983
- 高崎市教育委員会 『元島名將軍塚古墳』 1981
- 鳥羽市教育委員会 『おばたけ遺跡発掘調査報告』 1982
- 安達厚三・木下正史 「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻2号 1974
- 大 参 義 一 「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論文集（史学）』 1968
- 大 参 義 一 「S字状口縁土器考」『いちのみや考古』No.13—宮考古学会 1967
- 鈴 木 敏 則 「二之宮式土器について」『森町考古18』
- 袋井市教育委員会 『坂尻遺跡—第1次調査—』
- 袋井市教育委員会 『坂尻遺跡—第2次調査—』
- 袋井市教育委員会 『坂尻遺跡—第3次調査—』
- 藤枝市教育委員会 『志太郡衙跡（御子ヶ谷遺跡・秋合遺跡）』 1981
- 浜松市教育委員会 『伊場遺跡遺物編2』 1980
- 可美村教育委員会 『城山遺跡調査報告書』 1981
- 静岡県教育委員会 『静岡県歴史の道報告書』 1980



第95図 墨書土器出土地点分布図

第4節 墨書土器—奈良末～平安時代を中心に—

土橋遺跡出土墨書土器の総点数は約70点で、このうち奈良時代末～平安時代の土器は第4表のとおり27点、山茶碗等は30点である。その他13点は墨痕がわずかに残るのみで実測図は割愛した。奈良時代末～平安時代の土器は赤外線テレビカメラを使用して文字の確定または推定できた土器である。

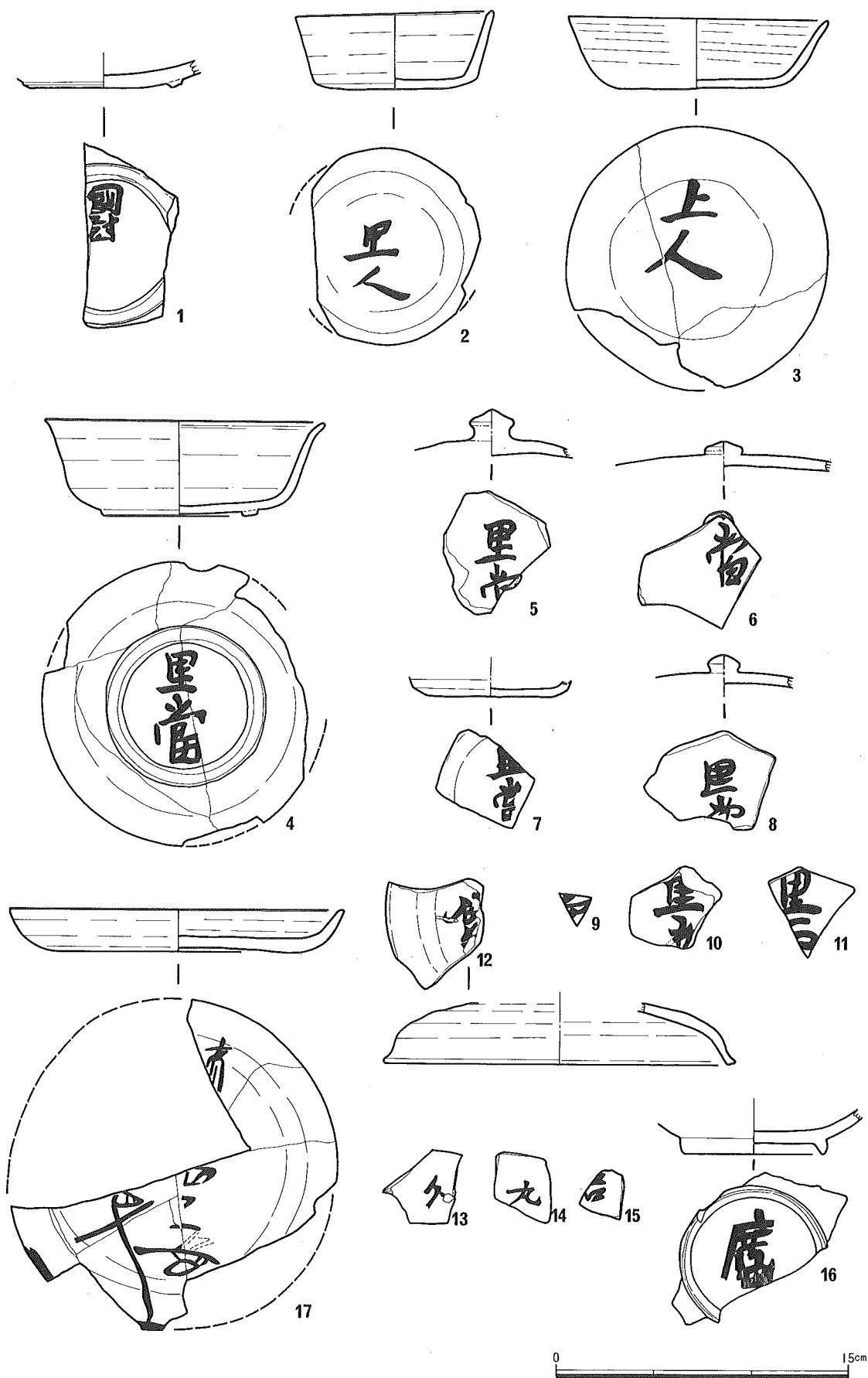
1. 國厨 出土例としては、栃木・下野国府跡の政庁脇の住居跡S I—O16の覆土より2点出土している。このことから、国府に設けられた給食施設＝国厨で使用された土器と考えることができる。また「國」という文字の出土例も国府関連遺跡が圧倒的に多く、秋田・秋田城、栃木・下野国庁、下野国分尼寺、鳥取・伯耆国庁、島根・出雲国庁、鹿児島・薩摩国庁などである。「厨」の文字は全国の官衙遺跡から出土している。「厨」一文字は、(秋田) 払田棚、秋田城、藤木(宮城) 多賀城(福島) 清水台(静岡) 御幸町、伊場(奈良) 西隆寺、平城宮(福岡) 大宰府(島根) 出雲国府などがある。その他遺跡別に見ていくと〔秋田・秋田城〕官厨、官厨舎、政厨、厨上、厨酒、厨舎、〔秋田・脇本〕主厨、〔宮城・伊治城〕城厨〔静岡・伊場〕布知厨、布智厨、下厨南〔静岡・御子ヶ谷〕志厨、志厨上、志太厨、益厨、口厨〔静岡・郡〕益厨〔静岡・坂尻〕×野厨、佐野厨家〔石川・寺家〕宮厨、司厨〔奈良・平城宮〕民厨、海厨、兵厨などが代表的である。これらは大まかに次のように分類できる。

- (1) 官衙内の施設＋厨……………政厨、主厨、城厨
- (2) 郡名 ＋厨……………布智厨、志太厨、益厨、佐野厨家
- (3) 官衙の性格 ＋厨……………宮厨、司厨

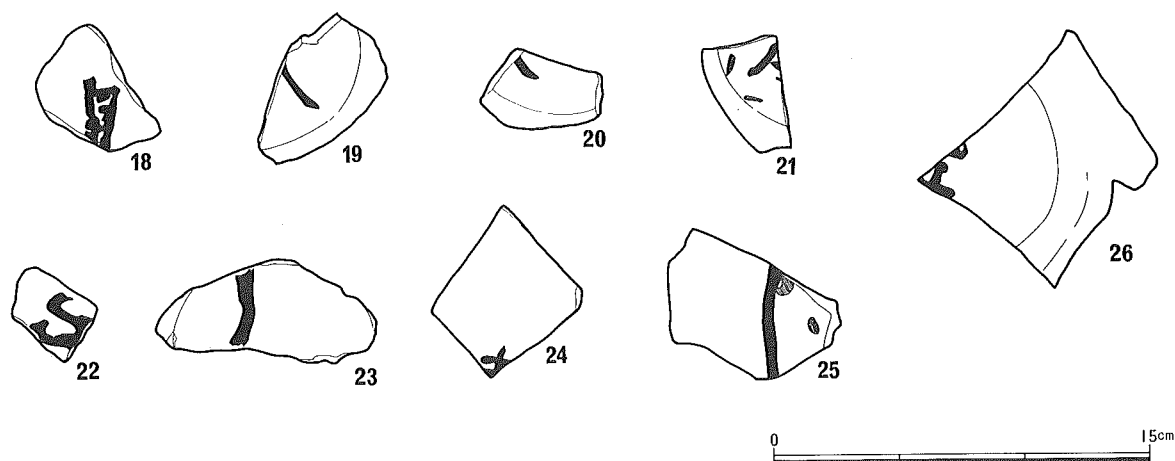
さきに述べた下野国府では最近の調査で「国府氷」などの墨書が出土し「國厨」の国が国府を示すことをさらに確実とした。これは分類の(3)にあてはまり国府の厨の土器ということをはほぼ決定したと思う。

土器は須恵器の高台付坏の底部破片で文字にもわずかに欠損した部分がある。口縁部についてはまったく不明であるが、底部の調整は回転糸切りの後中心部三分の一を残してヘラ削りされ、断面偏平な長方形の高台を貼り付けてある。全体の形態はあくまでも推定であるが4と類似したものと考えていいだろう。内側は表面が摩耗し墨痕が残っているところから転用硯となったものであろう。

2. 里人 意味不明。出土例不詳。「里」の文字を使った墨書土器は全国的に少ない。出土例としては「里」一文字は(秋田) 脇本(千葉) 清戸などが、「里万」は(福島) 津金上、「里権」は(秋田) 脇本とわずかである。
3. 上人 意味不明。出土例としては(奈良) 平城宮、(静岡) 御子ヶ谷等がある。「上」「人」の単独の文字出土例は多い。この「上人」に対する語として「下人給」(秋田) 秋田城の下人になるのであろうか。また別の考えとして、「役所へ参上した人」の意もあるのではないかと指摘を受けた。
- 4～10 意味不明。出土例不詳。上記の「里人」もそうであるが実際「里」の文字がこの時期まで残ることが問題であろう。出土点数も7点と多くこの遺跡の性格を考えるうえで重要である。下級の役職名のようなものかもしれない。
11. 里□ 第96図のとおり欠損部分があり「正」の文字は推測の域をでないが、この図より考えら



第96図 土橋遺跡出土墨書土器実測図(1)



第97図 土橋遺跡出土墨書土器実測図(2)

〔里正〕カ れる他の文字もすくない。また时期的な差をどう考えるかも問題であろう。

12. □□ 二字とも欠損が多く推測の域をでない。

〔館□〕カ

13. 久 出土例としては(奈良)平城宮等がある。「久」一文字の持つ意味は不明であるが、地名、郷名として考えると土橋遺跡周辺には遠江国山名郡の郷名として『和名抄』に久努郷がある。このことから「久」の文字が久努の略として考えることができるが、郷名の最初の一文字を記した墨書土器の例としては、駿河国志太郡衙の御子ヶ谷遺跡・秋合遺跡で「刑」の文字を記した墨書土器を多数出土し、『和名抄』に登場する志太郡刑部郷との関連を指摘している例がある。しかし土橋遺跡の場合は出土点数が少なく遺跡の性格も不明な点が多いことから積極的にこれを当てはめることはひかえたい。

14. 丸 各地に出土例がある。

15. ×呂 人名。麻呂と思われる。

16. 廣 灰釉陶器の底部にある。各地に出土例がある。

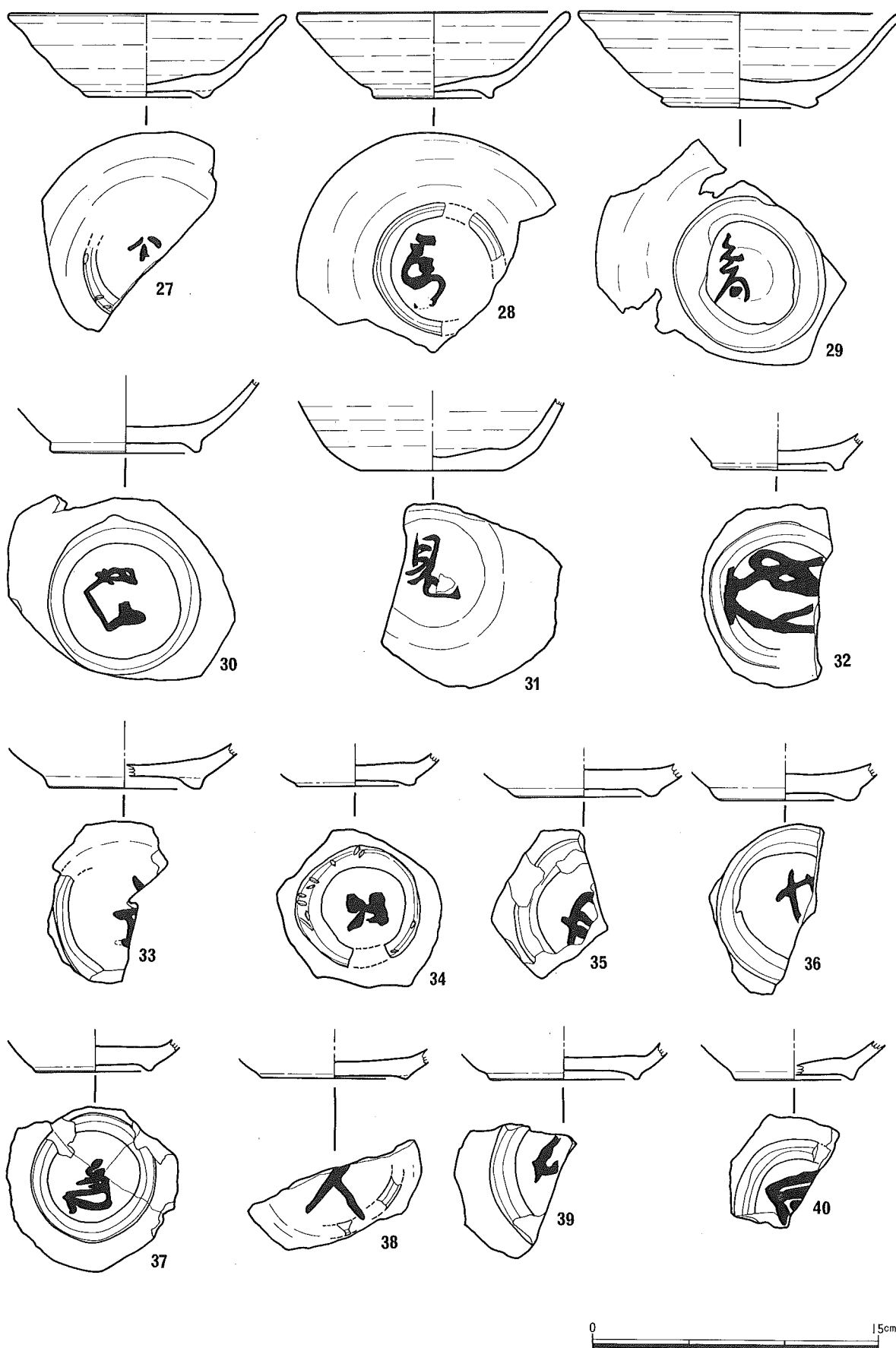
17. □□ 意味不明。人面墨書かもしれない。

以上、比較的意味をつかみやすいものについて記した。その中の土器については第4表を参照されたい。これらの資料より、土橋遺跡の奈良末～平安時代の遺構群が官衙的性格を持ち遠江国府となんらかの関連をもつことを示唆している。ところで現在まで遠江国府は隣の磐田市に推定地をもち、遠江国分寺が1951年に石田茂作氏によって発掘調査されている。国府は残念ながら磐田市の市街地の中で調査をすることは不可能に近く位置は特定されていないが、国分寺建立の詔により国府と国分寺の位置はある一定距離に規定されているため国分寺周辺に存在することは確実である。またこの周辺で調査された御殿・二之宮遺跡は遠江国各地の郷名を記した木簡を多数出土していることから国府関連の遺跡とされている。

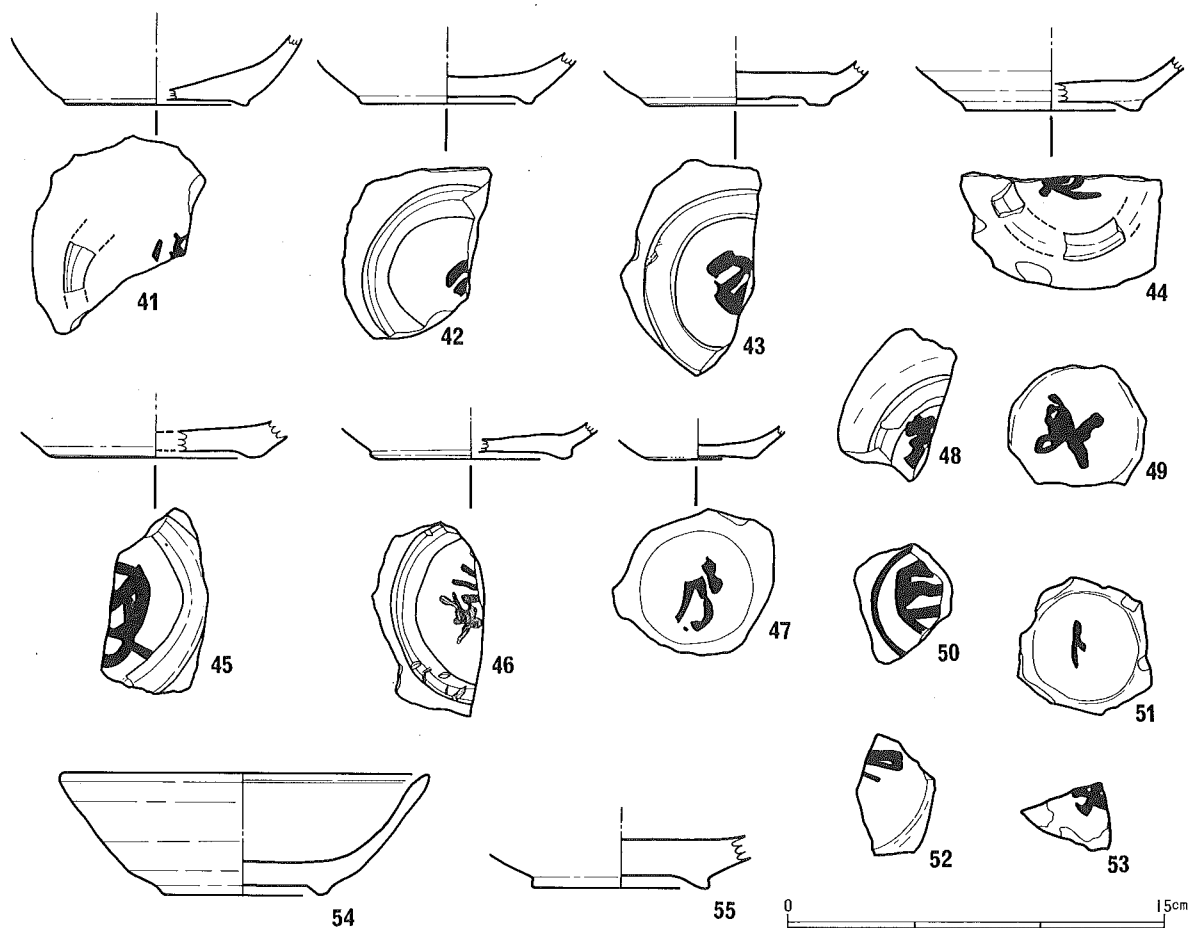
これらのことから磐田原台地上に位置する遠江国府と、台地を東におりた太田川の仲積平野上に位置する土橋遺跡とは約6km離れていることになるが、この離れた土橋の地になぜ墨書土器が出土するかは問題となるが、基本的には次の2つの考え方になるであろう。

〔古代交通路の中での土橋〕

土橋遺跡は南北に細長く続く旧河道上の微高地上に位置するために低湿な太田川の後背



第98図 土橋遺跡出土墨書土器実測図(3)



第99図 土橋遺跡出土墨書土器実測図（4）

湿地の中でもわずかに残る乾燥地である、さらに遺跡の南約1kmには東海道が通っており図版2でもわかるとおり簡単に見通せる距離である。古代の道として考えられるのは、この東海道と太田川の自然堤防上を通り袋井市山梨→周智郡森町へ抜ける道が知られている。これ以外に最近の遺跡調査の出土遺物を見ていくと東海道から磐田市玉越―袋井市土橋―徳光―鶴松―鶴田―川田―山梨へ続く古代・中世の集落を続ぶ道が確実に存在していたと考えられる。さらにこの道は土橋で東へ分かれ宇刈川を渡って鷺単の山沿いを通り村松の低湿地では油山川の自然堤防を通り菅ヶ谷・不入斗では再び山裾を通り北原川の坂尻遺跡方へ通る間道も存在していると考えている。このように土橋は各交通路を十分に把握できる場所を占地しており官営の交通管理をする施設、または地元勢力の交通監視施設の存在が十分に推測できる条件である。

〔水田経営と土橋〕

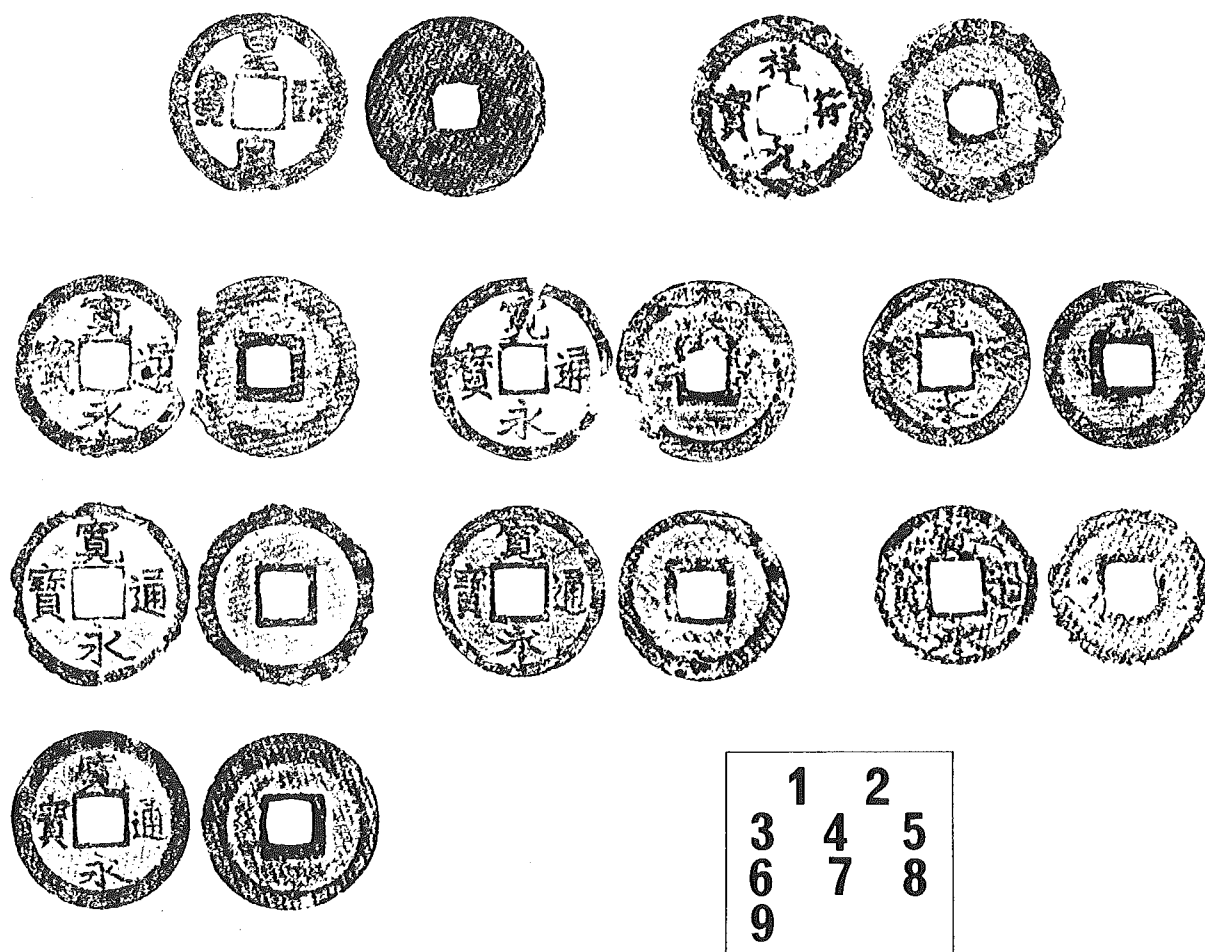
土橋遺跡の位置する太田川流域は肥沃な平野が広がり、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡が爆発的に増加する。これは稲作がこの地に入り、さらに安定した水田経営ができるようになったものと考えられる。これは磐田原台地東端の古墳群や、春岡一号墓をはじめとする墳墓の構築で見られる土木技術は水田を営むために必要不可欠な用排水の設置などの大規模な灌漑技術を下地としてできたものである。このように古くから豊かな水田は何回となく太田川の氾濫を受けながらも脈々と営まれ、奈良～平安時代になっても

第4表 土橋遺跡出土墨書土器一覽表(1)

番号	積文	グリット	遺構名ほか	登録番号	備考
1	國 厨	L-68	S D 128	S 630	須恵器高台付坏底部
2	里 人	I-67	S D 4	S 124	須恵器坏身底部
3	上 人	P-67	S D 130	Y 1275	土師器坏身底部
4	里 當	O-67	S D 130	S 685	須恵器高台付坏底部
5	里 □	K-67	S D 130	S 653	須恵器坏蓋内側〔里當〕カ
6	□ 當	J-67	遺耕上面	S 660	須恵器坏蓋内側〔里當〕カ
7	□ 當	J-67	S D 4	S 677	須恵器坏身底部〔里當〕カ
8	里 □	H-67	S D 4	S 38	須恵器坏蓋内側〔里當〕カ
9	× □	J-67	S D 4	S 66	須恵器坏身底部〔里當〕カ
10	里 □	K-67	遺構上面	S 592	須恵器坏身底部〔里當〕カ
11	里 □	J-67	S D 4	S 125	須恵器坏身底部〔里正〕カ
12	□ ×	H-67	S D 4	S 51	須恵器皿〔館×〕カ
13	久	Q-66	遺構上面	S 623	須恵器坏身底部
14	丸		S D 4	S 32	須恵器坏身底部
15	× 呂	H-67	S D 4	S 51	須恵器坏身底部〔麻呂〕カ
16	廣	H-67	S D 4	S 52	灰釉陶器高台付坏底部
17	□□□	N-66	S D 130	S 659	須恵器皿底部 一人面墨書一
18	□	P-67	S D 130	Y 1275	土師器坏身底部
19	× □	H-67	S D 4	S 42	須恵器坏身底部〔×人〕カ
20	× □	K-63	耕作土下	S 523	須恵器坏身底部〔×人〕カ
21	□	H-67	S D 4	S 41	須恵器坏身底部
22	□	H-67	S D 4	S 52	須恵器坏身底部
23	□	I-67	S D 4	S 61	須恵器坏身底部
24	□	I-67	S D 4	S 122	須恵器坏身底部
25	□	二一北東	S D 4	S 39	須恵器坏身底部
26	□	二一北東	S D 4	S 37	須恵器坏身底部
27	□	K-68	耕作土下	S 625	須恵器坏身底部
28	□	M-42	S K-39	S 315	須恵器高台付坏底部 内面一硯一
29	□	I-62	S D 21	S 117	山茶碗底部 内面一硯一
30	□	I-62	S D 21	S 117	山茶碗底部
31	□	L-39	S D 75	X 15	須恵器坏底部
32	□	L-46	S D 75	X 32	灰釉陶器底部
33	□	M-39	S D 85	X 39	須恵器坏底部

番号	積 文	グリット	遺構名ほか	登録番号	備 考
34	□	L-47	S D 99	X 37	山茶碗底部 内面—墨痕—
35	□	N-47	S D 99	X 34	山茶碗底部
36	□	L-53	S D 103	X 44	須恵器坏底部
37	□	K-52	S D 104	S 408	山茶碗底部
38	□	K-54	S D 104	X 43	須恵器坏底部
39	□	K-58	S D 104	S 472	山茶碗底部 内面上部自然釉付着
40	□	K-58	S D 104	S 472	山茶碗底部
41	+	K-58	S D 104	S 472	山茶碗底部
42	+	K-66	S D 104	S 634	山茶碗底部
43	□	K-58	S D 104	X 50	山茶碗底部
44	+	M-26		S 19	山茶碗底部
45	□	へ-14	Ⅱ 層	S 27	山茶碗底部
46	□	ト-1	Ⅱ 層	S 16	山茶碗底部
47	□		表 採	S 52	山茶碗底部
48	□		耕 作 土	S 458	山茶碗底部
49	□		耕 作 土	S 350	山茶碗底部
50	□	L-56	表 採	S 379	須恵器坏身底部 内面—墨痕—
51	□	へ-A	Ⅱ 層	S 744	山茶碗底部
52	□	へ-B	Ⅱ 層	S 740	山茶碗底部
53	□	へ-B	Ⅱ 層	S 740	山茶碗底部
54	□	ト-A	Ⅱ 層	S 728	山茶碗底部
55	□		表 採	S 749	灯明皿底部
56	□		表 採	S 750	須恵器坏身底部
57	木□		表 採	S 751	灯明皿底部
58		L-42	耕 作 土	S 288	山茶碗 内面—硯—
59		K-63	耕 作 土	S 523	山茶碗 内面—硯—

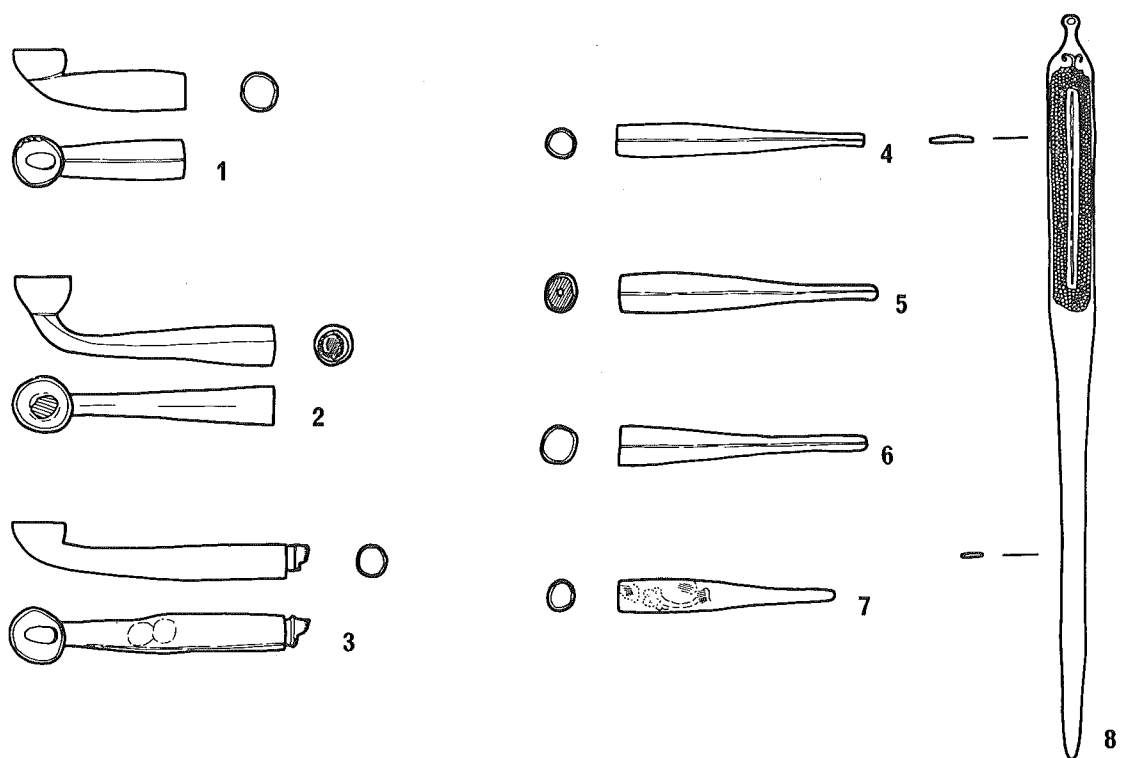
重要な経済基盤となっていることは変わらなかったと思われる。遠江国内で条里制遺構が確実に残っている地域は藤岡鎌二郎氏の『古代日本の交通路』によるとこの太田川流域でさらには国鉄東海道本線より北の部分であると述べられている。このことについて、原秀三郎氏は『袋井市史』の中で戦前の地籍図・土地宝典などを引用してこれを補足している。このことから律令期にはかなり整った管理体制のもと水田が営まれており、この流域が遠江国内で指折りの穀倉地帯であったことを推測させるに十分な条件である。



第 100 図 土橋遺跡出土遺物実測図（1）

第 5 表 土橋遺跡出土銭貨一覧表

番号	名 称	初 鑄 年 次		グリット	遺構名ほか	登録番号	備 考
1	皇宋通宝	1039	寶 元 元 年	M-22~M-25	S D104 表採	B 10	宋銭
2	祥符元寶	1008	大中祥符元年		表 採	B 20	宋銭
3	寛永通寶	1636	寛 永 13 年		盛 土	B 1	
4	寛永通寶	1636	寛 永 13 年		遺構面直上	B 2	
5	寛永通寶	1636	寛 永 13 年	0-64	S D 74	B 3	
6	寛永通寶	1636	寛 永 13 年		S D 99	B 7	
7	寛永通寶	1636	寛 永 13 年		耕 作 土 下	B 11	
8	寛永通寶	1636	寛 永 13 年		表 採	B 16	
9	寛永通寶	1636	寛 永 13 年		表 採	B 19	



第 101 図 土橋遺跡出土遺物実測図（2）

第 6 表 土橋遺跡出土金属製品一覧表

番号	名 称	グリット	遺構名ほか	登録番号	備 考
1	煙 管	M-54	S D 102	B 9	雁首
2	煙 管	O-42	Pit 394	B 5	雁首、羅宇残存
3	煙 管	K-52	耕作土下	B 8	雁首、羅宇残存
4	煙 管		耕 作 土	B 6	吸口
5	煙 管	L-42	耕作土下	B 4	吸口
6	煙 管	ト-A	II 層	B 18	吸口
7	煙 管	L-60	S X 8	B 12	吸口
8	簪	ト-A	II 層	B 15	

第5節 銭貨・金属製品

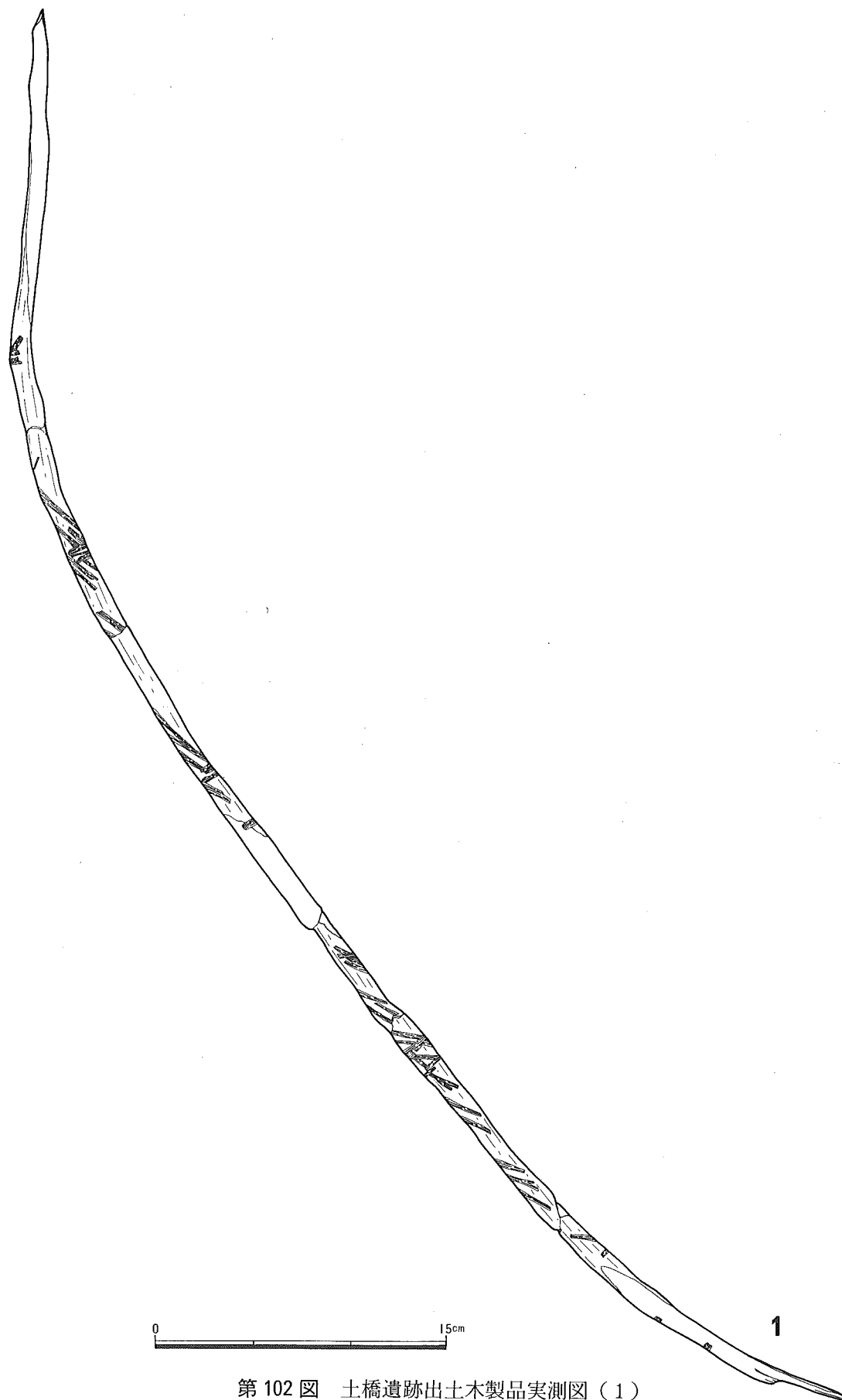
1・2は宋銭で中世遺構群より出土している。3～9は寛永通宝で江戸時代溝跡から出土している。

金属製品は煙管と簪である。1～3は雁首、4～7は吸口である。煙管は初期のものは首部も吸口も大きく湾曲しているが、時代が下るにしたがって湾曲が小さくなりやがてはまっすぐになっていく。火皿も徐々に小型化し、その形も椀形からやや角ばった形になっていく。これは小泉弘氏によると煙草の葉の刻み方が細かくなることと携帯に便利ようと変ったことであり、さらには煙管の製作技術の向上があるとのことである。

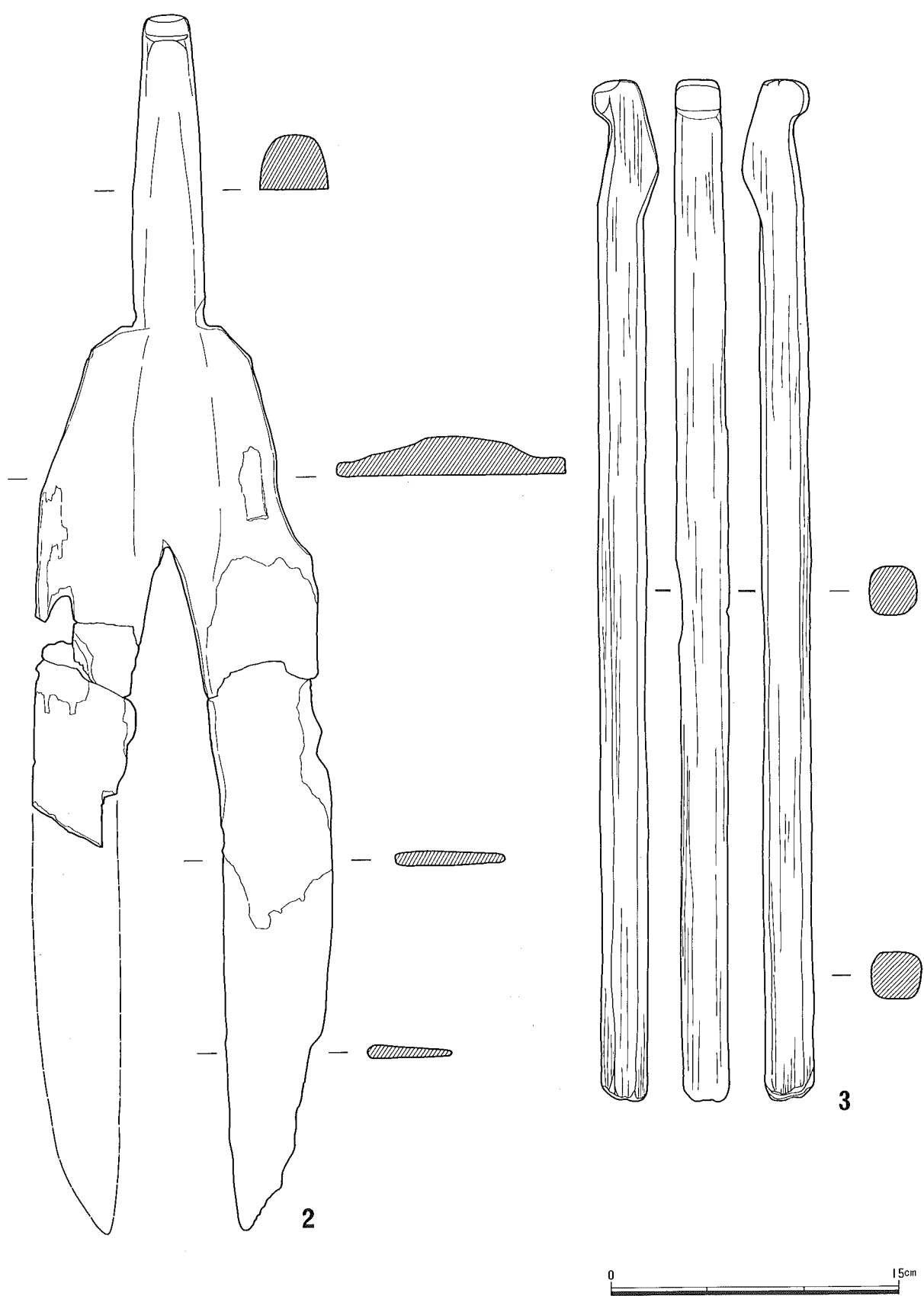
簪としたが刀装具として刀の鐔に装着した筭は銅製品が多いということから8は筭かもしれない。

第6節 木 製 品

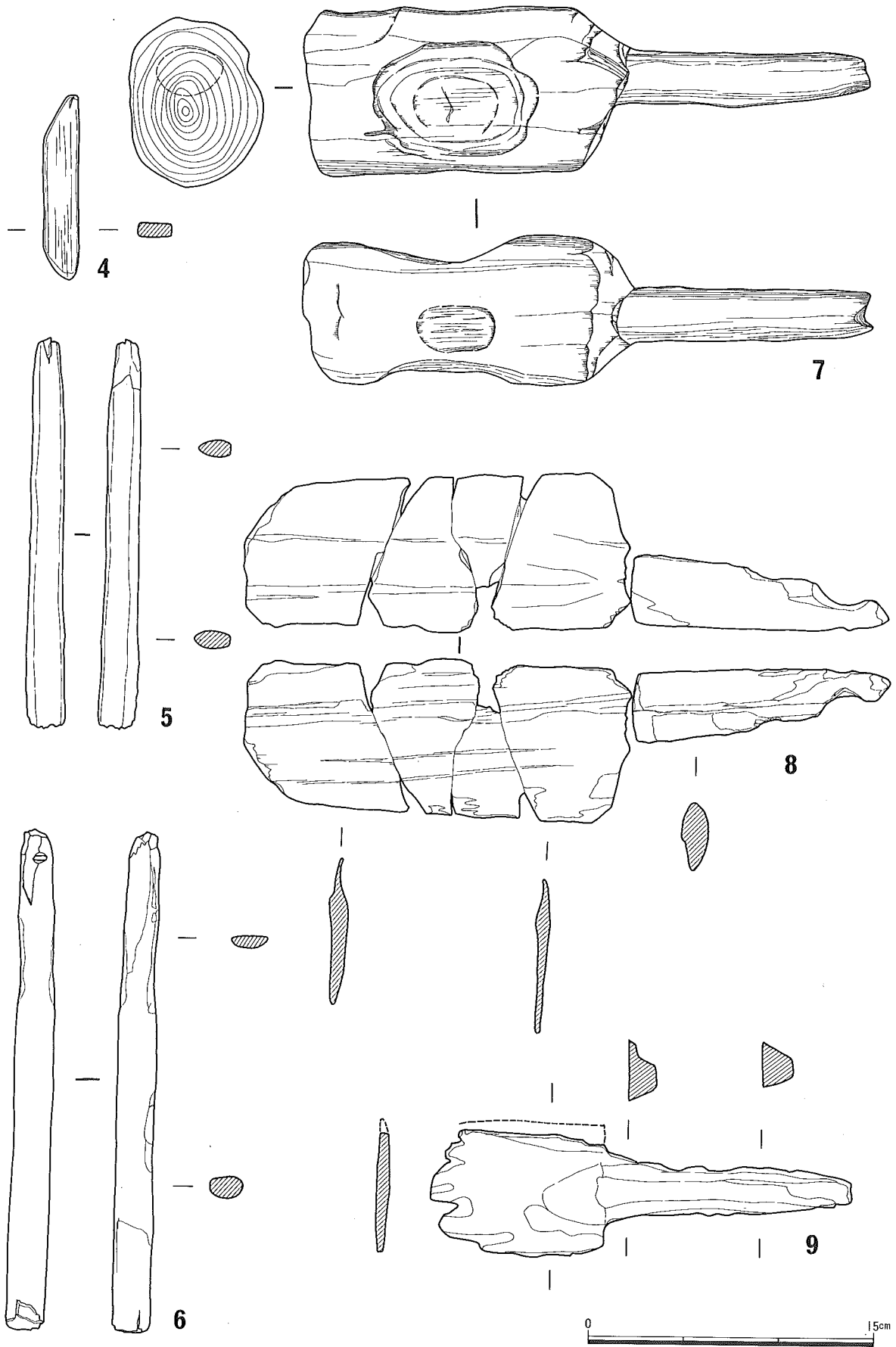
1の丸木弓は彎曲した弓で断面のまるい弓幹全体に樹皮が巻きつけてある。弓弭のつくりはへら状に削っており樹皮はこの削った上にも巻きつけてある。全体に細身・小ぶりで実際に使用されたとは考えられない。古式土師器を伴った土壌内に小さく折り重なるように入っていた。丸木弓の県内の代表的出土例としては、韭山町・山木遺跡、静岡市・登呂遺跡、浜松市・伊場遺跡などがある。2は着柄式の二叉鋏である。片歯の先端が欠損しているが全体によく残っている。一部が焼けて炭化している。出土例としては、二叉鋏使用方法を明らかにした藤枝市・宮塚遺跡、同じく上敷田川の丁遺跡、磐田市二之宮遺跡がある。3は木製農具の柄であるが何に装着されたかは不明である。7はヨコヅチである。これについては今回同時に刊行された『坂尻遺跡』の中で渡辺誠氏が考察されている。この中で渡辺氏は民俗学的な分析を応用してヨコヅチを①ワラ打ち用、②豆打ち用、③キヌタとしての用途、④綿打ち用、⑤工具としての用途、⑥人形の首にみたてる転用と6類に大別し土橋のヨコヅチについては形態差・重量等から豆打ち用、または工具的用途ではないかと推定されている。土橋のヨコヅチの容積は930mlで材質ヒノキの気乾比重は0.44であるから、その重量は409gとしている。蛇足ではあるがヨコヅチの用途はこれ以外にも多種多様であり、たとえば、山間部の棚田の畦畔の杭を打つのに用いたり、東南アジアではクレークに住むフナ・コイ等の魚をつかました後失神させるのにヨコヅチで魚の頭をたたいたりする例もある。8・9は共に柄を持つへら状の木器であるが用途は不明である。11・12は着柄式の農具の柄の装着部であろう。15は編錘状の木器であるが用途は不明である。17～22は中近世の下駄である。17は露地下駄や庭下駄と呼ばれ近距離の移動に使用された18は連齒下駄の一種で江戸末期には駒下駄とも呼ばれた。歯が台尻に接するほど使用されている。19は陰卵下駄と呼ばれる差歯下駄で柄が表に表われない種類である。20は穴をあけてない下駄で台表には畳表が貼られこれに緒が結ばれていたと思われる。21は陰卵下駄である。22は庭下駄で茶席などで用いられた。23～35は曲物の杵と底板、留める木針などである。江戸時代後半の遺物である。36・37は江戸時代後半の櫛である。50は中世屋敷跡から出土した斎串である。51は中世土壌墓より出土したハシである。



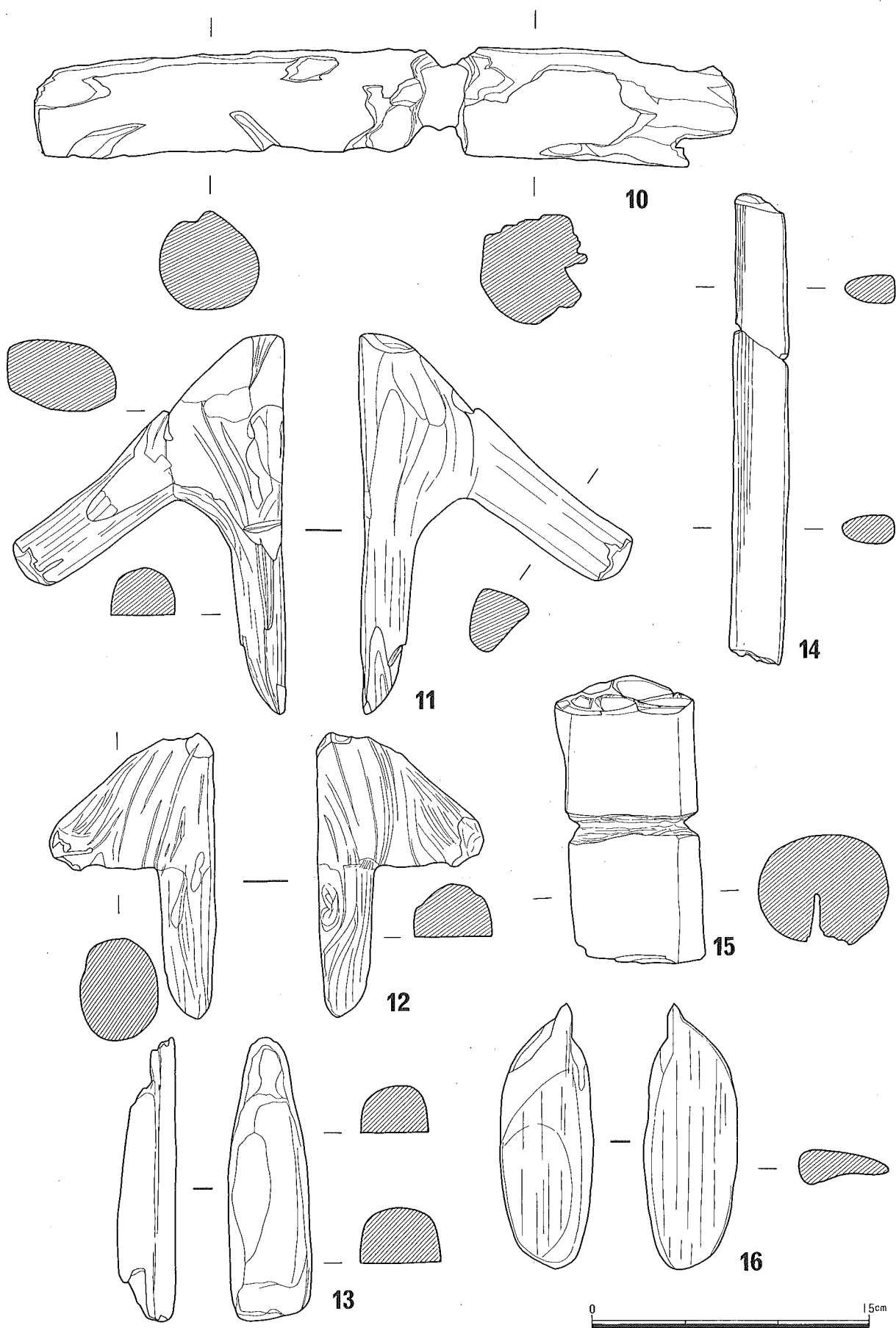
第 102 図 土橋遺跡出土木製品実測図（1）



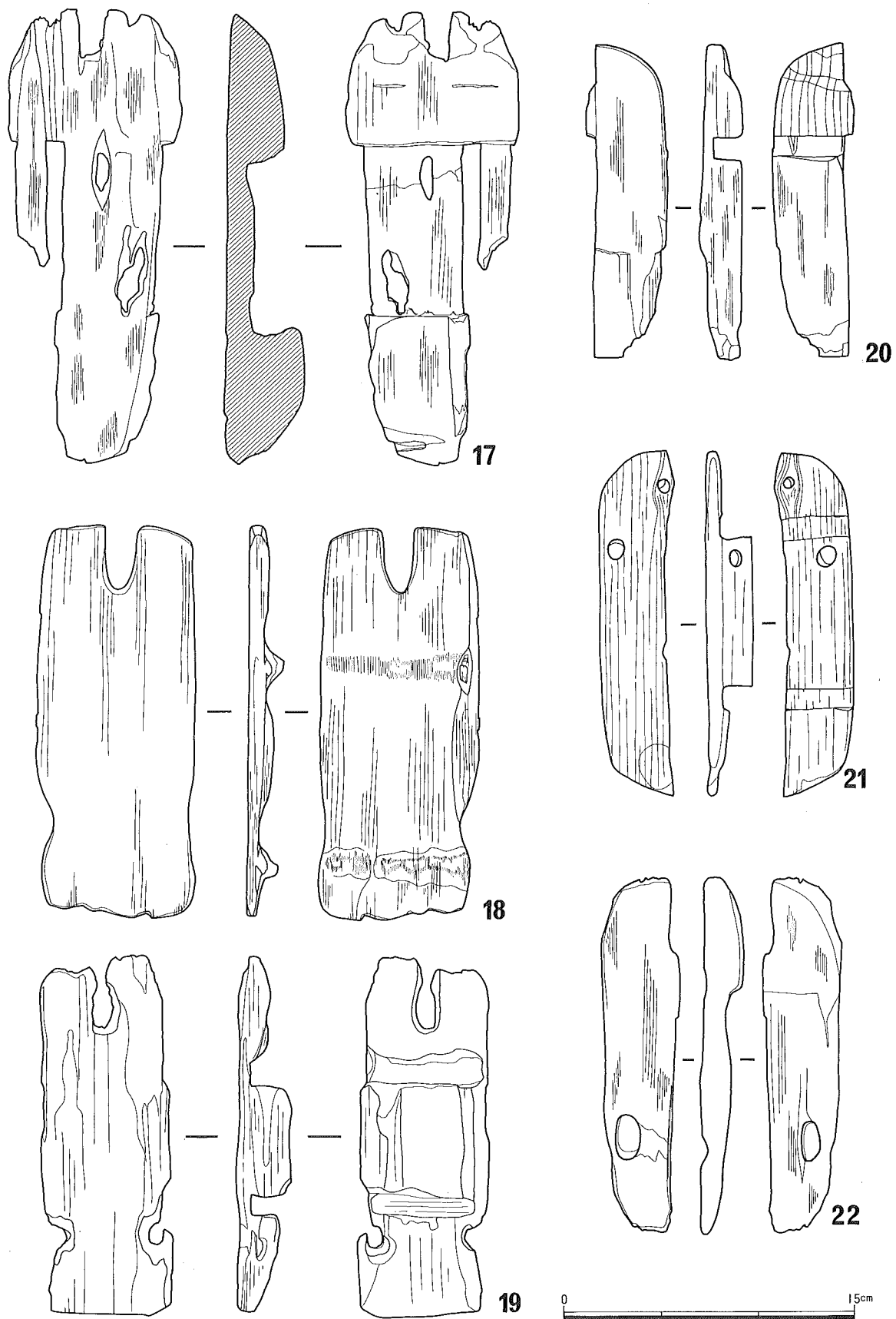
第 103 図 土橋遺跡出土木製品実測図（2）



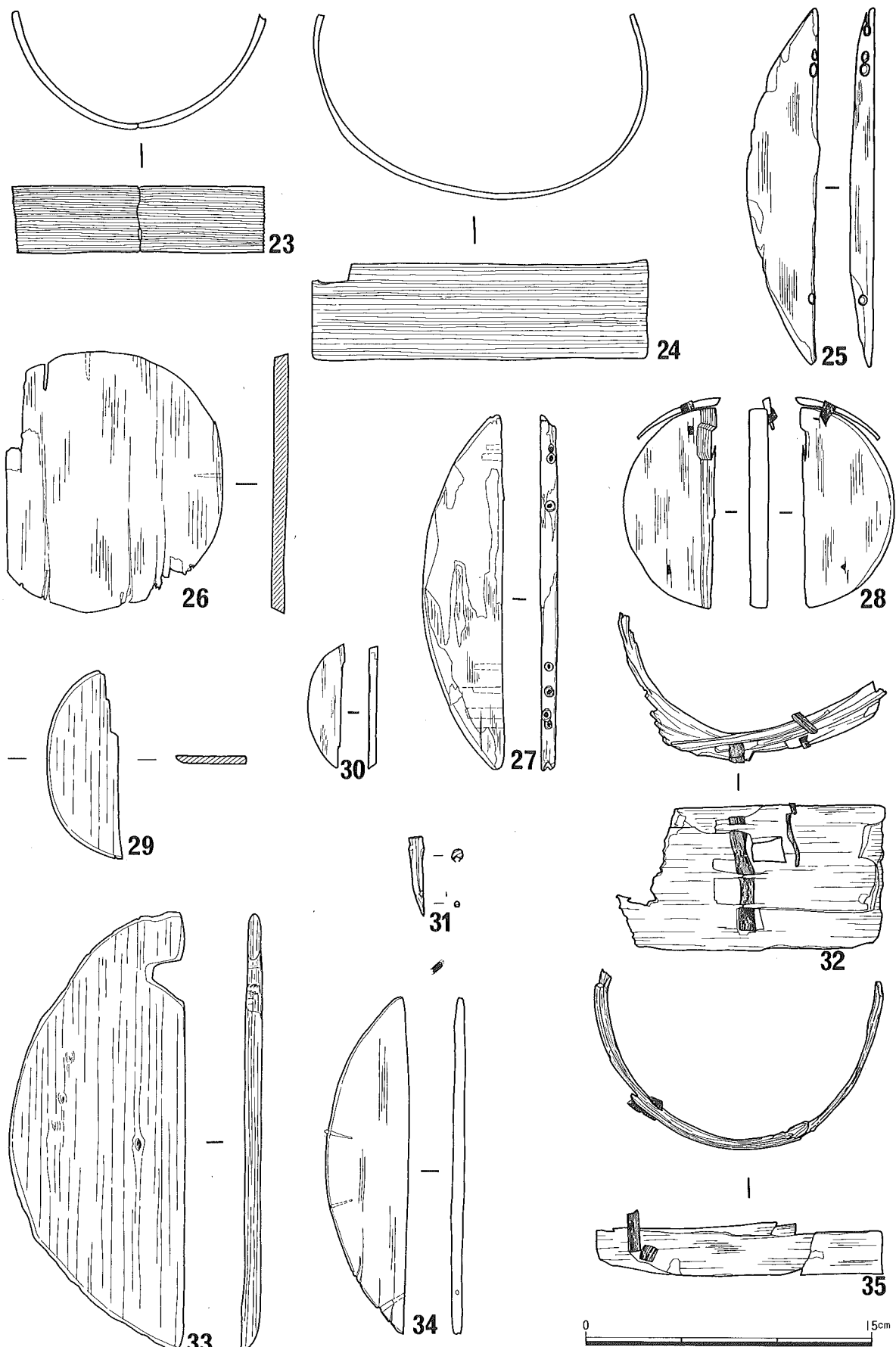
第104図 土橋遺跡出土木製品実測図(3)



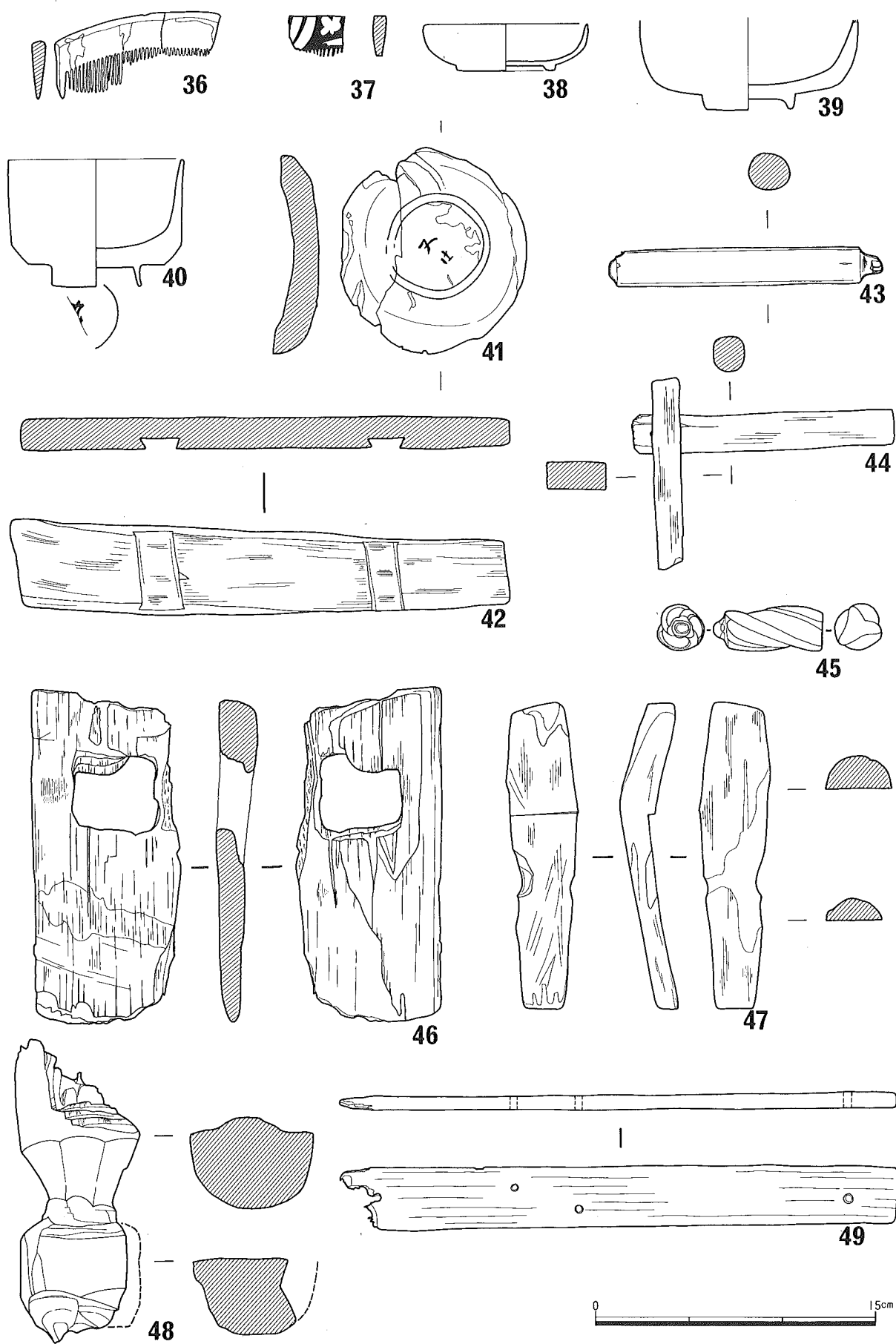
第 105 図 土橋遺跡出土木製品実測図（4）



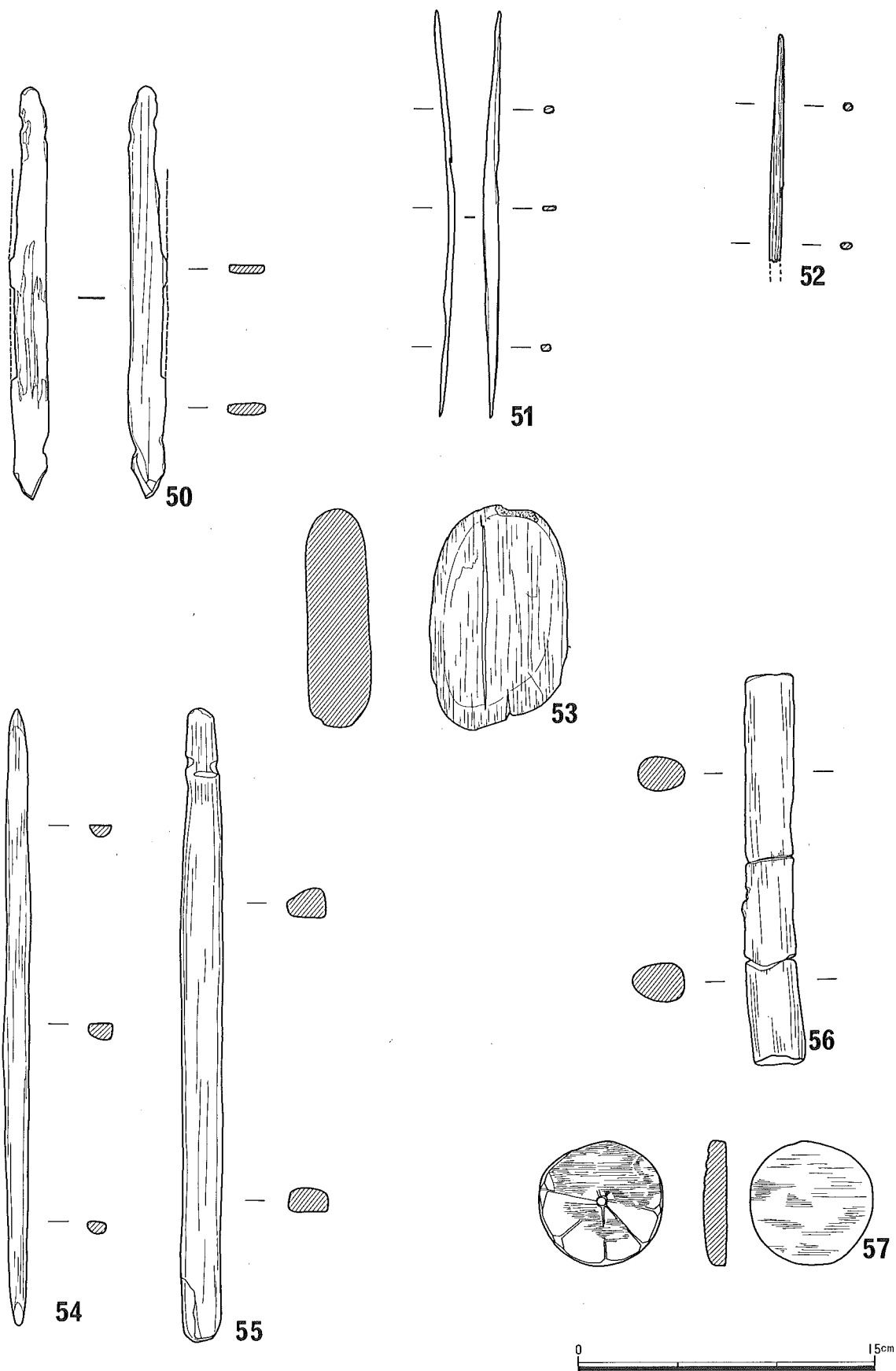
第 106 図 土橋遺跡出土木製品実測図（5）



第107図 土橋遺跡出土木製品実測図(6)



第108図 土橋遺跡出土木製品実測図(7)



第109図 土橋遺跡出土木製品実測図(8)

第7表 土橋遺跡出土木製品実測図対照表

遺物 番号	遺 物 名	法 量(cm)	出 土 地 点			挿図 番号	図版 番号	備 考
			地 区	グリット	遺構ほか			
1	丸 木 弓	全 長 82.2 幅 1.1	第 8 区	L-61	S K 77	102	75	
2	着柄式二又鍬	全 長 63.5 刃部長 35.7	第 4 区	J-30	S K 13	103	76	
3	木製農具の柄	現存長 53.2 幅 2.5	第 8 区	Q-59	S K 66	"	"	
4	不 明 木 製 品		第 3 区	H-57	S I 4	104		
5	先端加工木製品	現存長 20.4 幅 1.7	"	"	"	"	76	
6	"	現存長 26.2 幅 1.9	"	"	"	"	"	
7	ヨ コ ゾ チ	全 長 29.7	第 7 区	O-41	S K 36	"	77	
8	ヘラ状木製品	全 長 34	第 8 区	N-46	S D 115	"	"	
9	スコップ状木製品	現存長 22	第 4 区	J-49	S K 9	"	76	
10	中央部加工 木製製品	全 長 38	第 8 区	L-52	S D 102	105	78	
11	着柄式二又鍬 の 柄 先		第 4 区	J-30	S K 13	"	"	
12	"		"	"	"	"	"	
13	着柄式二又鍬 の 装 着 部	現存長 15.3	第 3 区	J-56	S K 6	"	"	
14	木製農具の柄	現存長 25.5	第 8 区	P-61	S D 115	"	"	
15	編 鐘	全 長 15.5 幅 7.5	"	"	"	"	"	
16	不 明 木 製 品	全 長 14.4	第 4 区	J-30	S K 13	"	"	
17	下 駄	全 長 23.3 幅 9.0	第 6 区	N-27	S X 1	106	79	
18	"	全 長 20.2 幅 8.2	第 7 区	K-48	S X 5	"	"	
19	"	全 長 18.7 幅 6.7	第 2 区	H-76	S D 22	"	"	
20	"	全 長 16.2	第 8 区	L-68	S D 128	"	"	
21	"	全 長 17.8	"	"	"	"	"	
22	"	全 長 18.3	"	K-68	S D 105	"	"	
23	曲 物 の 杵	高 さ 3.5	"	"	"	107		
24	"	高 さ 5.0	"	"	"	"		
25	曲 物 の 底 板		——	——	表 採	"	78	
26	"	直 径 13.6	第 7 区	O-33	S X 2	"	"	
27	"		第 8 区	J-57	耕作土下	"	"	
28	"	直 径 10.5	第 6 区	N-27	S X 1	"	"	
29	"		第 8 区	K-58	S D 104	"	"	

遺物 番号	遺 物 名	法 量(cm)	出 土 地 点			挿図 番号	図版 番号	備 考
			地 区	グリット	遺構ほか			
30	曲 物 の 底 板		——	——	一 括	107	78	
31	曲物の底板を枠 に留める木くぎ	全 長 4.2	第 7 区	O-33	S X 2	"	"	
32	曲 物 の 枠	高 さ 7.1	第 6 区	N-27	S X 1	"	"	
33	曲 物 の 底 板		第 7 区	K-50	S X 6	"	"	
34	"		第 7 区	O-33	S X 2	"	"	
35	曲 物 の 枠		第 6 区	N-27	S X 1	"	80	
36	櫛		"	"	"	108	"	
37	"		第 8 区	K-65	S D 105	"	"	
38	椀	口 径 8.8 高 さ 2.5	第 2 区	H-76	S D 22	"	"	
39	"	口 径 11.7 高 さ 4.8	第 6 区	N-27	S X 1	"	"	
40	"	口 径 9.4 高 さ 6.8	第 8 区	L-68	S D 128	"	"	
41	"		第 7 区	K-48	S X 5	"	"	
42	組 板	全 長 26.4	第 8 区	K-67	S D 105	"	"	
43	木製器具の部品	全 長 14.5 幅 2.0	第 6 区	N-27	S X 1	"	"	
44	"		"	"	"	"	"	
45	"	全 長 5.8 幅 2.3	"	"	"	"	"	
46	くさび形木製品	全 長 17.8 幅 7.8	第 7 区	K-48	S X 5	"	"	
47	不 明 木 製 品	全 長 16.4 幅 3.7	第 2 区	H-76	S D 22	"	"	
48	柱 根 か ?		——	——	表 採	"	"	
49	穴 あ き の 板	現存長 29.7	第 8 区	K-58	S D 104	"	"	
50	斎 串	現存長 20.8	第 7 区	N-35	S D 85	109	"	
51	箸	全 長 20.6 幅 0.7	"	N-47	S K 43	"	"	
52	"	現存長 11.4	"	N-43	耕作土下	"	"	
53	不 明 木 製 品	全 長 11.0	"	M-44	S X 3	"	"	
54	"	全 長 31.2 幅 1.2	"	O-33	S X 2	"	"	
55	"	全 長 32.0 幅 2.2	"	M-44	S X 3	"	"	
56	木製農具の柄	現存長 19.8 幅 2.4	"	"	"	"	"	
57	不 明 木 製 品	直 径 6.2 厚 さ 1.2	"	P-47	S D 97	"	"	

第7節 卒塔婆（民俗事例）

第8区の溝跡S D104、S D128の杭列に打ち込まれた卒塔婆で考古資料とともに民俗学的に貴重な資料になるであろう。釈文は第8表を参照していただきたいが、この中で、卒塔婆の年代を知り得るものが2本ある。No.4は寶永七年（1710）寅正月廿九日の記述があり、またNo.14は正徳四年（1714）□月廿日と共に江戸時代の中期の年代である。このうち経文の記されているものは般若心経の中の観音經の一節で「具一切功德……」と経文の後半の部分から始まっている。もう一例は「大日本國東海道……」で始まり主の素姓を述べている卒塔婆がある。これらの卒塔婆は皮付の生木の片面を削ったところへ墨書してあり本来の長さは約1m程あったと思われる。枝葉ははらい落された木である。木の材質や太さ等はまちまちである。

卒塔婆は供養のために墓の後方に立てる、上部を三角に尖らせた板か角柱で梵字や経文などが記されている。木材質はスギ・マツ・モミ・ヒノキの針葉樹からシイ・クリ・ヤナギなどの落葉樹まで種類は多く、またこのように最終の年忌に墓に枝葉の生木の卒塔婆を立てるのは全国的な風習のようである。このようなトムライアゲの塔婆は、いずれも墓地に、石塔の前か後にたてられる場合が多いようであるが、土橋遺跡のように墓地以外の場合もわずかにある、山梨県の中道町左右口では家の墓地にはたてないで、道の辻などの万霊塔のところにとてる例がある。この他にも村の出入口の道の傍にとてる例もあるようである。

他の民俗事例を見ると雨乞いがある。一般的に雨乞いは馬や牛の首を切って池や沼に沈めたりしたが、美作久米郡の仏教寺の竜王祠では細字で般若心経を写した雨乞祈願札がある。現存するものは文化8、10年、安政2年、明治37年、大正7年、昭和14、30年の7枚であるが、これらには1字ごとに雨の字を挿入してあり写経により雨を得ようとしたものであろう。残念ながら土橋遺跡の場合は雨の字が見当らない。

川施餓鬼あるいは流灌頂の例も考えておく必要があるだろう。これは産褥中に死んだ女性を供養するために行なわれるが、愛知県豊橋地方では産婦が死ぬと、洗い晒しといって小川の傍の道端に棚を設け塔婆をまつたりした。同じく愛知県北設楽郡設楽町の田峯では、塔婆に水に向けて塔婆の字が消えぬうちは浮ばれぬといわれていた。滋賀県野洲町の南桜では、難産で母と子が一緒に死んだ場合に限って、川の中に卒塔婆をたてたという事例が残っている。これらは一般的な、小川などの水辺に4本の竹や板塔婆を立て、経文や念仏を書いた布を張り、そこを通る人に水をかけてもらうという流灌頂の事例とはやや異なる。また、これらの場合の文字は「南無妙法蓮華經……」か「安産……」の記入例が多いところが土橋遺跡の場合と違っている。

犬供養も同じように塔婆をたてて供養する。これは、犬が難産で死ぬと周囲の人間のお産も重いといわれ、女性たちが集まって犬供養をする事例である。そのためにはまず犬卒塔婆を作る。これはY字型の二股の木の枝の上端の部分を削り「為汝（如）是畜生……」や「為諸人安産……」などと書き全員で鉦を叩きながら村境や辻を歩き安産を祈る行事であり、年中行事化している地域もある。土橋の出土例と比べると形態的に異なり、また内容も同一とは言えない。

もう1例考えられることとしては民俗事例ではなく、たんに用水の土どめの杭として使

用されたという場合である。土橋遺跡では調査された全域の江戸時代溝跡に何らかの形で木製の杭が使用されているが卒塔婆が混じっているところはこの地区のみであった。さらにこれは第45図でわかるとおりSD104とSD128の分岐点となって杭の打ち方から見ると板をおいて流れを変える簡単な堰が設けられていたと思われる。卒塔婆はこの杭と杭の間に打ち込まれており水の流れを制御する杭としては不必要といってもいい位置であった。これはまた仏教信仰の薄れていない当時に卒塔婆をただ杭として用水に打つということとは考え難いことと思える。

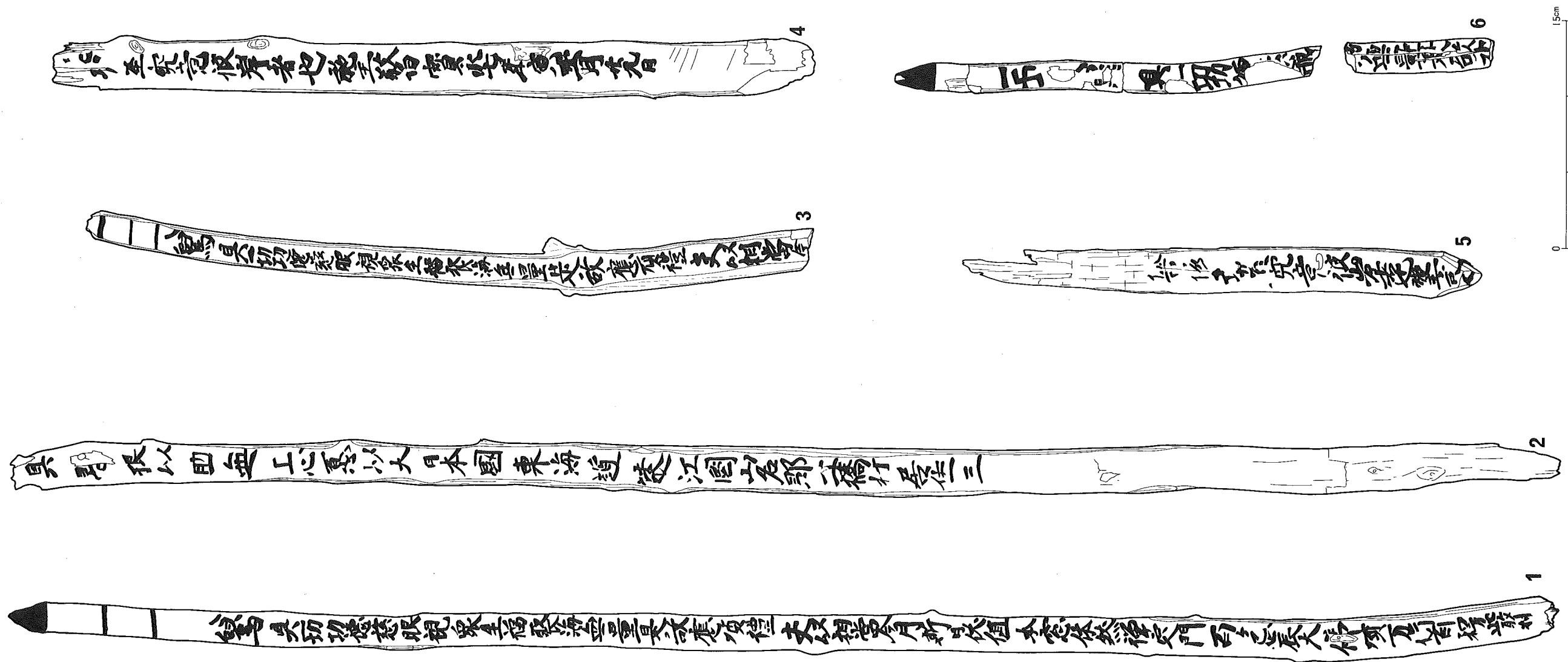
以上、民俗学的に考えられる事例を上げてみたがどの事例も適合しない部分を持っていた。そこで、この卒塔婆を書いた人物について若干触れてみると、まず土橋の集落の中には寺が2つあったことが古図から知ることができる。1つは、土橋・熊野神社の東にあった正脇寺で、もう1つは集落対にあった王泉寺である。現在は2寺とも廃寺となっているが出土地点と正脇寺は直線で150mの距離である、かつては土橋の集落から木原の集落へ続く道が用水沿に通っていたと思われることから正脇寺の住職の筆による可能性がいちばん大きいと考えられる。

卒塔婆に記載されている正徳四年(1714)と寶永七年(1710)の年号は卒塔婆が作られた年代と考えるのが当然であるが、この江戸時代中期の社会状況が、この用水の堰で祭祠を行なった一因と考えたい。

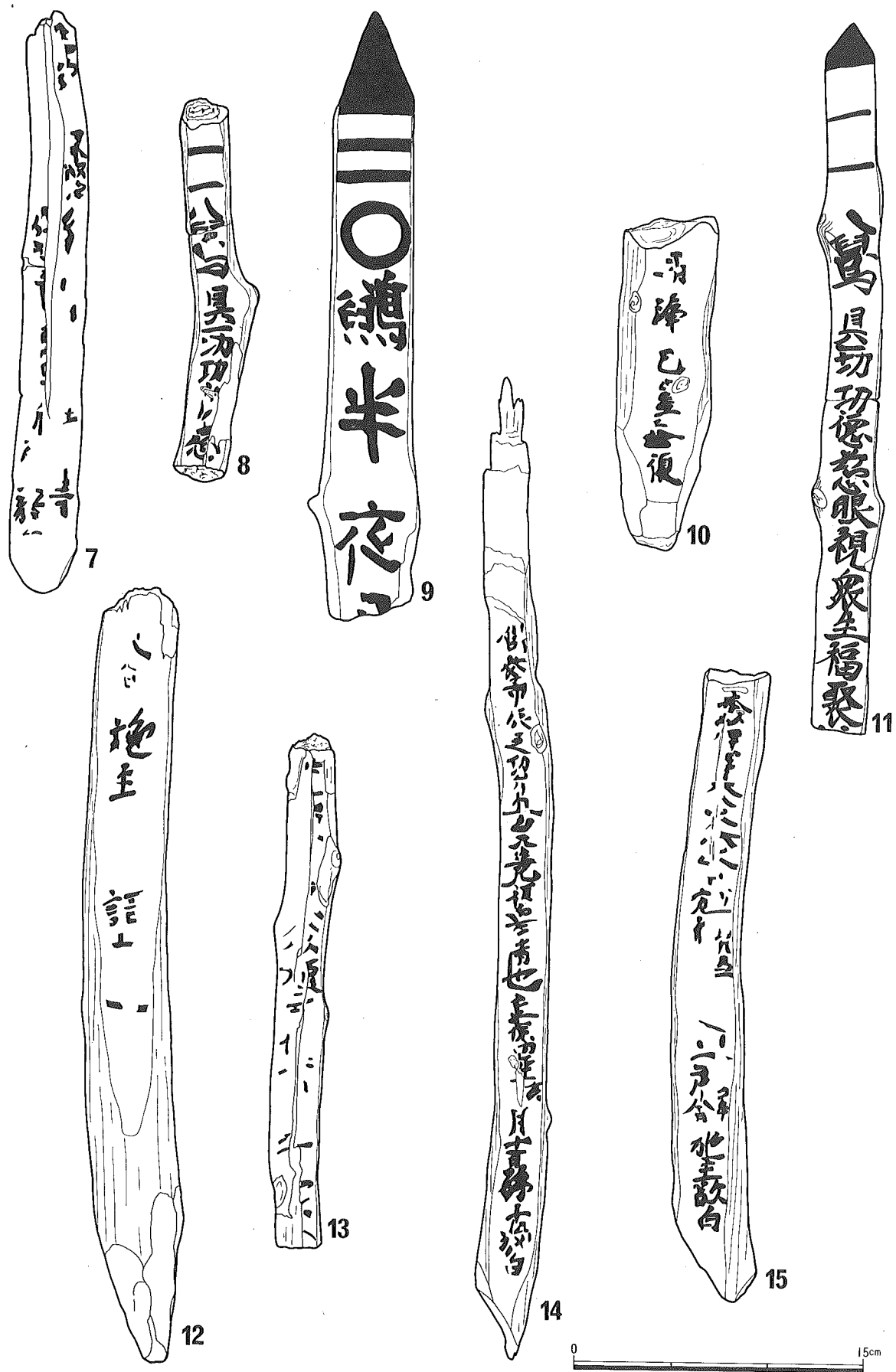
本文を書くに当たって大村和男氏(静岡市立登呂博物館)から多大なご教示と資料の提供を得た。ここに記して感謝したい。

〔参 考 文 献〕

- 1985 『日本民俗文化大系10 家と女性』 小学館
- 1963 『美作の民俗』 吉川弘文館
- 1982 『雨乞習俗の研究』 法政大学出版局
- 『日本の俗信』 弘文堂
- 1973 『日本の民俗 静岡』 第一法規



第 110 図 土橋遺跡出土民俗事例関連遺物実測図（1）



第 111 図 土橋遺跡出土民俗事例関連遺物実測図 (2)

第8表 土橋遺跡出土卒塔婆釈文一覽表

[illegible]

第8節 動物遺体

早稲田大学考古学研究室 金子浩昌

(a) 土橋遺跡弥生期土壌(SK80)内出土のイヌの遺体

本土壌内から出土したイヌの骨は、保存が極めて悪く、埋葬時の姿勢はもちろん、四脚の位置すら確認できない程に腐植の進行しているものであった。しかし、弥生期の資料は縄文期に比べて著しく少ないことが、本邦全体を通じていえるので、この意味からは貴重な一例といえよう。以下、残存した資料について判明し得る範囲の状態を説明しておく。

標本

〔下顎骨・左〕

一応は骨の形を留めていた唯一の骨であるが、骨体部分と枝骨部分の一部をのこすのみである。骨表面の腐植は著しく、計測などには耐えない。P₄、M₁が残植していたが、これも、一部にエナメル質がのこるのみであり、さらにまた腐植の過程で歯冠部が異常に膨らみ、これまた計測には耐えない。しかし、残存する部位で計測すると次のような大きさである。

第9表 土橋弥生犬計測表

101	下顎骨全長(1)	128+	id—goc
102	下顎骨全長(2)	129+	id—cp
103	下顎枝高	—	gov—kr
104	下顎枝幅	—	最小値
105	下顎体高	25.5±	M ₁ 後部
106	下顎体高	18.5±	P ₂ とP ₃ の間
107	下顎体厚	11.4	M ₁ 中央
108	咬筋窩深	8.5	下顎枝幅位

歯牙はP₄、M₁があるが既述のように全くその形をとどめていない。M₁の原錐 prd (protoconid) 部分が割れてのこっていた。その巾は7.9mmを計測した。

上述の計測値から元の下顎骨の大きさを推定すると、この下顎骨の体高のかなり高いことが予測され、これに見合う下顎骨の全長は128 (id~goc)、129 (id~cp) よりも大きくなるのではなかとと思われる。さらにM₁の原錐の大きさから推定されるM₁の大きさは21.0mmを越えるものではないかと思われる。

この下顎骨は、かつて長谷部言人博士の分類された中型犬に属するものである。この中型犬は縄文犬としては大きい方であって、雄であることが関東地方の例では多い。本遺跡のイヌもおそらく雄ではなかったかと推測している。

〔四肢骨・椎骨〕

小さく折れた断片が10数片出土している。椎骨では軸椎があり、四肢骨では上腕骨、橈骨、寛骨の一部がのこされているようである。ただ著しい腐植のために左右の確認や大きさを計測することはできなかった。

以上弥生期に属すると思われるイヌの埋存、形質について述べたが、おそらくこれは土壌内に埋葬されたものであろう。しかし埋葬の姿勢等は明らかにすることはできなかった。大きさは縄文犬にみ

る中型になるもので、この時期の犬としては大きい方である。

(b) 土橋遺跡池状遺構(SX1)出土のイヌ遺骸について

本イヌ遺骸の出土状況については、別稿で詳しくふれられているように、江戸時代末につくられた灌漑小施設内に水没した状態で発見されるという特殊なものであった。筆者のこれまでに扱ったイヌの遺骸でも、こうした状態の確認されたのは初めてのことであって、イヌ自体の形質のことはもちろんであるが、この施設の当時の状況を推察するための間接的な資料を提供するものといえよう。

〔埋没姿勢〕

イヌの遺骸は深さ1.6mと推定される堀の壁ぎわの直下に、頭部を壁に付けるようにし、身体を堀側にのばすようにして埋没していた。そして、全体が仰向けの姿勢であって、おそらく腹側が上になっていたものと推測される。従って、頭部も全く仰向けの状態で、かつ頭部を右側に折るような形になっていた。

前肢は身体を仰向けにしながらかつ右へ倒れるように向けており、写真にみる肩甲骨と上腕・桡・尺骨は左側のものがみえているのである。肩関節を曲げ、肘関節も強く曲げている。

後肢は、寛骨が左右とも完全な形で腹面を示し、左右の大腿骨もそれに伴って、左右に開く形となり、股関節は90°まで曲げられ、膝関節も強く曲げられていた。

要するに身体を仰向けにして、四肢は強く曲げられ、首はほぼのび、頭部は仰向けのまま首ののびる線より90°以上右に傾いた姿勢ということになる。このような不自然な姿勢は、このイヌが死んだときの当初の姿勢ではなく、死後に動いているのではなかろうか。あるいはまた当初からこのイヌがこれに近い姿勢であったとすればそれは、このような姿勢で何かに包み、この堀に沈められたということが考えられるのである。

〔頭蓋骨〕

左側の上顎歯列の部分と頬骨と、その周囲を失ってはいるが、右側半分の保存は比較的良好であったために全体をうかがうことができる。頭蓋は大きく、いわゆる大形犬に近い。頬骨弓の中は狭く、吻部も細く、全体に丸味の少ない形となっている。鼻骨の凹みは6.5mmとやや深く、ストップ(額の段)が目につく顔付きであったろう。頭頂骨中央には、高さ9.0mmに達する矢状稜が発達しており、側頭筋の強かったことを思わせる。陰茎骨は採集されていない。

歯牙は犬歯とP¹を失うが、P¹は早くに脱け落ちていたもののようであるが、犬歯は死後脱落したと思われる。犬歯歯槽内には硬く砂土がつまっているところをみると、犬歯の脱け落ちは早かったものと思われる。切歯の咬耗は著しく、I^{1,2}はその大部分を失い、I³も歯冠の半ばに達している。9才以上の年令であろう。これに対して臼歯の咬耗は僅かで、P₃以下P₄の最尖部で僅かに咬耗がみられる他は殆ど磨耗していない。

〔下顎骨〕

左右ともによく保存されていた。歯も切歯の一部脱け落ち、M₃の脱け落ちなどいずれも発掘時のものであるらしい。切歯は上顎の場合同様に咬耗が強く、犬歯もまた強い咬耗である。上顎犬歯との咬耗で右側の犬歯は遠心面を大きくえぐられ磨滅している。左上顎犬歯はさらに磨滅し、歯冠の半ばを失っている。臼歯の磨滅は上顎同様に軽度で、右側では咬頭に磨滅ある歯をみない。

上述したように下顎骨は体高高く頑丈な感じのするものであるが、頬側面は全体にやや扁平な感じをもつものである。

下顎枝は上方でやや細まる感じ。咬節窩の深さはやや深い。この咬節窩の下縁部が鋭く段をつくって深まる。

〔脊柱・四肢骨〕

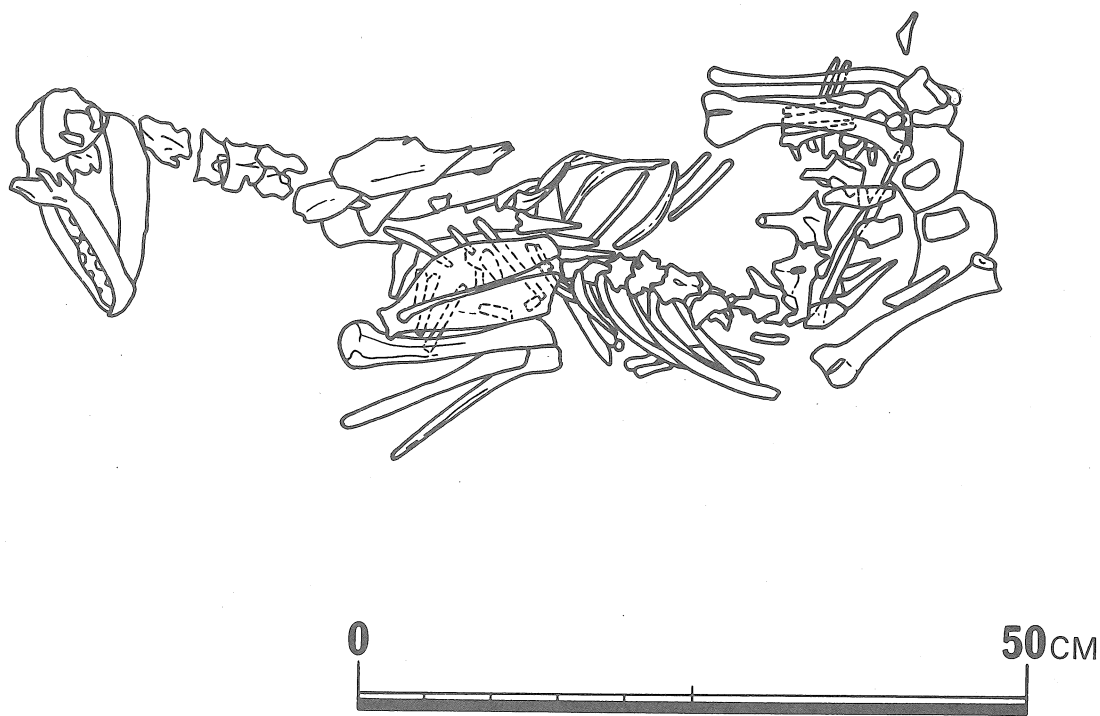
主要骨はほぼのこっていた。肩甲骨のみ右側のが大破していた。前肢、後肢ともに、頭蓋の大きさに応じた長さを持つものと考えられる。

形質については、当時のイヌの骨格上の変異が大きく一概にいけないが、長さの割にはやや細い骨体である。しかし、これよりもさらに細い骨体の四肢をもつ個体もあり、雌雄差や生育の環境による変異なのであろう。

〔土橋遺跡近世犬の特徴〕

改めてのべるまでもなく、本邦におけるイヌの飼育はすでに縄文時代にみられ、当時おそらく各集落毎に数頭のもものが飼育されていたのであろう。ここ袋井市の大畑縄文貝塚からいわゆる縄文犬の遺体が出土している。縄文犬は、頭蓋の大きさでみて、頭蓋全長163mm（雄）、152mm（雌）程度の大きさが普通である。この大きさは現在の柴犬の大きさにほぼ一致するもので、頭蓋、四肢骨の形質からみて、おそらく石器時代のイヌもその姿は柴犬に似たものであったと思われる。ただ、顔付きの上で現在普通に柴犬といっているものは、額のところにかなり強い段がつく。この額段が縄文犬では弱く、目から鼻先になだらかな傾斜でのびる。体高は現在の柴犬で39cm位、石器時代犬もおそらく40cm前後であったろう。

このような縄文犬と比べると、ここ土橋で出土した近世犬は、はるかに大きく、現在の秋田犬に近い大形犬である。このような大形犬が縄文時代以後どのような経緯で飼われるようになるか、まだ不明の点が多い。縄文文化期以後、弥生期に至って、にわかにイヌの大形化が一部地区でみられることは資料的に確かめられており、そうしたイヌが奈良時代の近畿地方に飼われている証拠があるが、それが全国的にどのようにひろがるのか、あるいはそれと縄文犬がどのような関係にあるのか、まだ明らかにされていない。筆者がこれまで見てきた中世から近世犬にも、このような大形犬は稀のようである。本資料は大形犬出現の歴史を探る上での貴重な資料と云えよう。



第 112 図 池状遺構〔SX〕出土イヌ遺体実測図

第10表 土橋近世犬計測表

項 目					計 測 値	計 測 点	齋藤	項 目					計 測 値	齋藤
1	頭 骨 最 大 長	192.3	i－Pr	1	桡 骨 L R									
2	基 底 全 長	178.0	Pr－㉔	—	1	最 大 長	153.7	153.6						
3	頭 骨 基 底 長	169.2	Pr－ba	3	2	上 端 最 大 幅	17.0	—						
4	硬 口 蓋 長	—	Pr－Sta	86	3	中 央 最 小 幅	12.3	12.4						
5	硬口蓋最大幅	33.0×2	(骨で計測)	—	4	下 端 最 大 幅	23.1	23.0						
6	頭 蓋 幅 (1)	53.3	eu－eu	35	尺 骨									
7	頬 骨 弓 幅	52.4×2	zy－zy	8	1	最 大 長	—	—						
8	両 耳 幅	33.0×2	au－au	36	2	肘 突 部 最 小 径	23.0±	—						
9	脳 頭 蓋 長	104.0	n－i	9	3	関 節 長	21.0±	—						
10	頭 蓋 高 (1)	57.0	ho－br	152	骨 盤									
11	バジオン・プレグマ高	60.5	ba－br	61	1	寛 骨 長	—	147.5						
12	最 小 前 頭 幅	32.0	ft－ft	40	2	腸 骨 最 小 幅	20.5	20.5						
13	前頭頬骨突起端幅	46.0	ect－ect	41	3	寛 骨 臼 最 大 長	20.2	20.2						
14	後 頭 最 大 高	50.0	i－ba	148	大 腿 骨									
15	後 頭 三 角 幅	32.0×2	ot－ot	144	1	全 長	168.5	168.4						
16	最 小 眼 窩 間 幅	34.4		42	2	最 小 横 径	14.0	14.0						
17	顔 長	95.4	Pr－n	33	3	下 端 最 大 幅	31.0	30.0						
18	吻 長 (1)	71.3	Pr.－O.o.	64	脛 骨									
19	吻 長 (2)	57.4	Pr－if	65	1	最 大 長	—	167.0						
20	吻 幅(犬歯部)	39.0	㉚－㉚	46	2	上 端 最 大 幅	34.5	34.0						
21	吻 高	—	n－	162	3	下 端 最 大 幅	—	21.9						
22	鼻 骨 凹 陷 深	6.5		73	踵 骨									
下 顎 骨 L R					1	最 大 長	—	41.7						
101	下 顎 骨 全 長 (1)	138.8 137.8	id－goc											
102	下 顎 骨 全 長 (2)	142.0	id－cp											
103	下 顎 枝 高	55.0 56.0	gov－kr											
104	下 顎 枝 幅	29.0 24.8	最小値											
105	下 顎 体 高	24.0 24.7	M1後部											
106	下 顎 体 高	23.0 23.0	P ₂ とP ₃ の間											
107	下 顎 体 厚	11.4 12.0	M1中央											
108	咬 筋 窩 深	9.7 9.4	下顎枝幅位											
肩 甲 骨 L R														
1	全 長	132.6	—											
2	関 節 窩 幅	17.4	—											
3	関 節 窩 長	27.0	—			右		左						
4	頸 部 最 小 幅	24.6	—			近遠心径	頬 舌 径	近遠心径	頬 舌 径					
上 腕 骨						C	—	—	—	—				
1	全 長	157.5	—			P4	18.5(外側)	10.0	— (外側)	—				
2	上 端 最 大 幅	26.0	—			M1	11.5	15.0(Max)	—	— (Max)				
3	骨 幹 最 小 幅	13.0	13.5			C	12.0	6.7	—	6.8				
4	下 端 最 大 幅	31.3	—			M1	20.0(Max)	8.7(近心)	21.0(Max)	8.5(近心)				

齊藤：齊藤弘吉“犬科動物骨格計測法”1963

第5章 まとめにかえて

広大な調査区で検出されたすべての事実を漏らさず報告するには時間的な余裕も、報告書の紙面も調査員の能力も、すべてにわたって不足しており、情熱を傾けて調査を応援して下さった作業員の皆さんや多くの学生諸君にたいへん申し訳けないことをしたと悔いてやみません。しかし、調査員の使命として、残されたわずかな期日に全力を尽してたとえ1つでも回答を引き出して本報告書を刊行しなければいけないと、ここにまとめにかえていくつかの問題点を提起いたします。

203ページに付図として掲載した「太田川中流域後期弥生土器の壺形土器分類と併行資料一覧表」は今回の土橋遺跡の発掘調査によって得られた資料に周辺の資料を加えたものです。ここでは紙面も残り少ないことから今回調査の結果を生して弥生時代後期の土器について若干触れてみたい。

1. 鶴松遺跡（第2次調査）溝7の黒色土第3層より出土した遺物である。一部を欠損しているが口縁部から底部まで残っている。長胴・長頸で胴部最大径も上にあり肩部にハケで横押圧線が一周し、胴部はナナメハケ→ナデの後ハケ状工具で条痕のように3列の文様をかなり下部まで施している。胴部最大径より下はハケ→ナデ（一見ミガキのようにも見える）で仕上げられ底部は小さく、細長い頸部の幅とほぼ同じ径である。底部はやや上げ底になっている。
2. 新豊院山遺跡第3トレンチ南端溝状遺構内出土。胴部の調整が報告書では記述されておらず、はっきりしないが、全体のプロポーシオンから第1類の中に含めてある。
3. 鶴松遺跡（第2次調査）溝7の黒色土第3層の土器集中地点より出土している。底部を欠損しているが1よりさらに細身のプロポーシオンで折り返し口縁をもち肩部はわずかな隆起帯を巡らせた上に櫛状工具により小さな刺突中を施してある。全体の調整はタテハケの後、口縁部のウラの一部を除いて全面にヘラミガキが施されているようである。1、3は二之宮遺跡の古手の遺物の中に類例があったようである。
4. 上記3の壺と同じ溝7の黒色土第3層土器集中地点出土である。特徴としては、口縁部は折り返しが大きく櫛状工具により深いキザミ目が巡らされている。胴部は口径よりあまり広がることなく、かなり上に位置する最大径をすぎるといっきに細くつぼまっていく。調整は、外面はハケで仕上げられているが口縁部付近のタテハケが口縁部のウラまで入っておらず、全体に軽く仕上げられている。内面は口縁部内側と底周辺にハケが残されているが胴部内側あたりはナデ等で消されている。内面は、外面に比べハケメが深くなっている。
5. この土器は鶴松遺跡（第1次調査）のおり出土したものを鈴木敏則氏が整理し発表したものである。この土器は、縄文が多用され口縁部内側、口唇部、胴部に施されていることと口縁部に棒状浮文を、肩部に円形浮文をそれぞれ貼りつけてあることである。この土器も長胴、長頸で古手の様相を示している。胴部文様帯が肩部のみならず胴部最大径上までおよんでいる。
6. 鶴松遺跡（第1次調査）溝内出土。口縁部を欠損している。この土器は縄文の文様帯が上ってかなり狭い範囲になっているのが特徴である。
7. 8. この高坏までが鈴木氏の発表資料である。両方とも外面全体にミガキを施し、接合部には断面三角形の突帯を巡らすのみで文様をもたない。
9. 10. 11. 12は本報告にある土橋遺跡SK3の土壌内出土の一括遺物である。
13. 14. 15. 16も本報告にある土橋遺跡SK77出土の一括遺物である。
17. 18は袋井市一色前田遺跡の2号住居跡、3号住居跡からそれぞれ出土している。この遺跡は、弥生時代後期後半の高地性集落で4軒の住居跡とこれに付属する遺構からなっている。出土状況

から長期に渡って営なまれた可能性は少ないようである。文様は結節縄文が中心となっている。

19は土橋遺跡の溝跡S D10より出土している。二之宮遺跡のI—2期に類例がある。

これら第1類～第5類の壺形土器の特色は次のとおりである。

細首、長頸、長胴は1類から3類までで4類、5類とは対象的である。口縁部内側の文様は、ハケにより羽状を意識している1類、縄文LRを用いた2・3類、はっきりとハケで羽状文を施し、櫛刺突羽状文を残す場合もある4類、結節縄文を施す5類となっている。肩部文様帯はヨコハケにより区画した1類、櫛押圧横線文に円形浮文を貼り付けた2類、櫛刺突羽状文に円形浮文を施した3類、浮文がなくなり櫛刺突羽状文の文様帯が広がった4類、さらに4類より広い櫛刺突羽状文を持つ5類となっている。頸部の調整についても1～3類はハケ→ミガキで仕上げられているが4・5類は最終調整にヨコナデを施している。胴部の調整はどうか。1類は条痕のようなハケで、2類は縄文で、3類は装飾を意識したハケがそれぞれ施されている。これに対して4・5類は胴上部ハケ、下部ミガキとシンプルである。

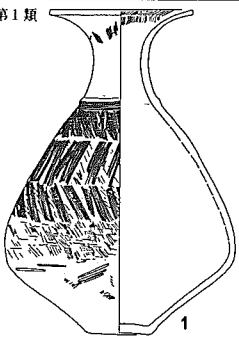
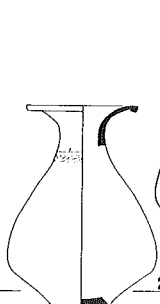
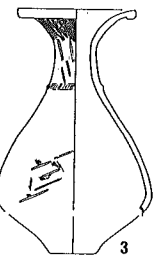
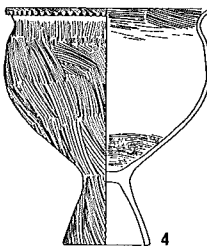
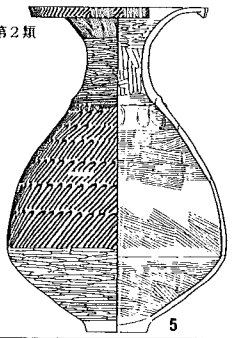
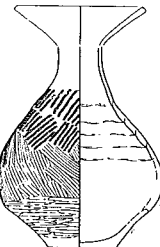
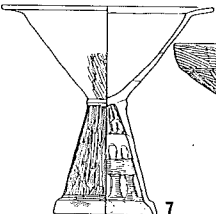
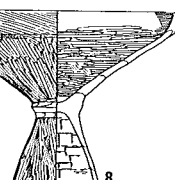
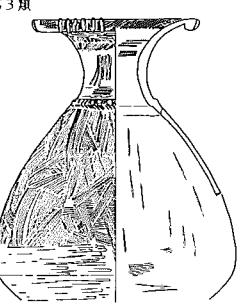
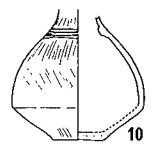
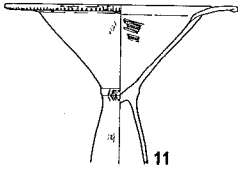
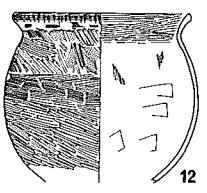
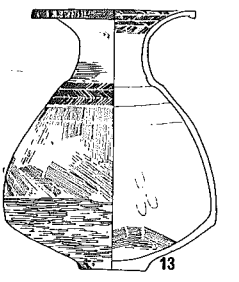
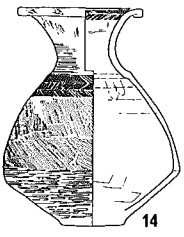
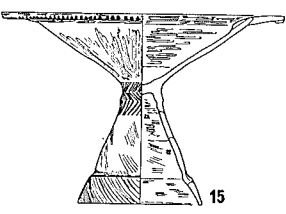
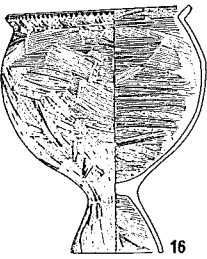
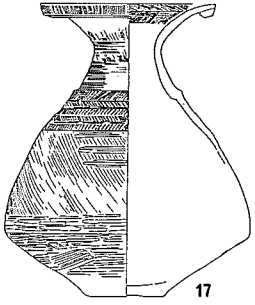
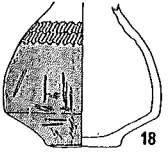
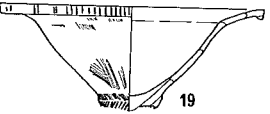
以上、壺形土器を5類に抽出してみたが実際遺構からはどうであろうか。まず、鶴松遺跡の溝跡では1類、2類が出るし、11の高坏が混入することもある、また9の円形、棒状浮文と13の土器が混在する遺構もある。しかし、その中で第3類（土橋遺跡SK3）第4類（同SK77）の示す割合は大きい。この表では完形品、またはそれに近い資料のみを使用したためややちぐはぐな部分もあったが、今後現在出土品整理中の遺物を加えて完全なものへと導びきたい。この表作成にあたっては鈴木敏則氏の「二之宮式土器について」と中島郁夫氏の『御殿・二之宮遺跡』を参考にさせていただいたが土橋遺跡の遺物出土状態に固執するあまり曲解した部分があるかもしれない。編年的な問題については別の機会に改めて再考してみたい。

本報告書編集にあたっては多くの方々にお世話になった。とくに弥生土器、古式土師器については中島郁夫氏（磐田市役所）、鈴木敏則氏（浜松市博物館）に助言、資料提供をうけた。律令期の遺物については墨書土器釈文を岸俊男氏（檀原考古学研究所長）、森浩一氏（同志社大学教授）、辰己和弘氏（同志社大学講師）からご教示を得ることができ、墨書解読用の赤外線テレビカメラの使用については向坂鋼二氏（浜松市博物館館長）、小木香氏（浜松市博物館学芸員）に便宜を計っていただいた。また文字資料の集収にあたっては、小松正夫氏（秋田城跡発掘調査事務所）、田熊清彦氏（栃木県文化振興事業団）、広江耕史氏（島根県教育庁文化課）ほか多くの方々の手を煩わせた。陶磁器関係については愛知県陶磁資料館の各氏に、また民俗資料関係については大村和男氏（静岡市立登呂博物館）にお世話になった。また特別調査員として原稿執筆をお願いした加藤芳朗氏（静岡大学教授）、金子浩昌氏（早稲田大学考古学研究室）にも編集の遅れからたびたびご迷惑をかけた。この場をお借りしておわびをするとともに、皆さまのご協力に厚くお礼申しあげたい。

今回の土橋遺跡の調査のような大規模な発掘は袋井市にとっては初めてのことであった。そんな私たちを積極的に指導して下さい、円滑な調査が行えるよう尽力して下さいました寺田義昭氏（現、静岡県教育委員会文化課）と、現地の調査員として焼けつきそうな猛暑の中も、小雪混りの西風の吹きつける厳寒の中でも忍耐強く調査を遂行して下さいました山本宏司氏（現、静岡市立美和中学校教諭）のご努力により無事報告書の刊行にこぎつけることができた。文末ながら、ここに明記して感謝したい。

（袋井市教育委員会 永井義博）

[付図 1]

太田川中流域後期弥生土器の壺形土器分類と併行資料一覧表		
	基本となる壺形土器	併行する資料 (壺・甕・高坏)
後 期 前 半	第1類 	  
	第2類 	  
	第3類 	  
後 期 後 半	第4類 	  
	第5類 	 

一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)
埋蔵文化財発掘調査報告書

土 橋 遺 跡

—基礎資料編—

1985年3月30日

編 集 静岡県袋井市教育委員会 ©

袋井市国本3070-1

TEL 05384(3)2111

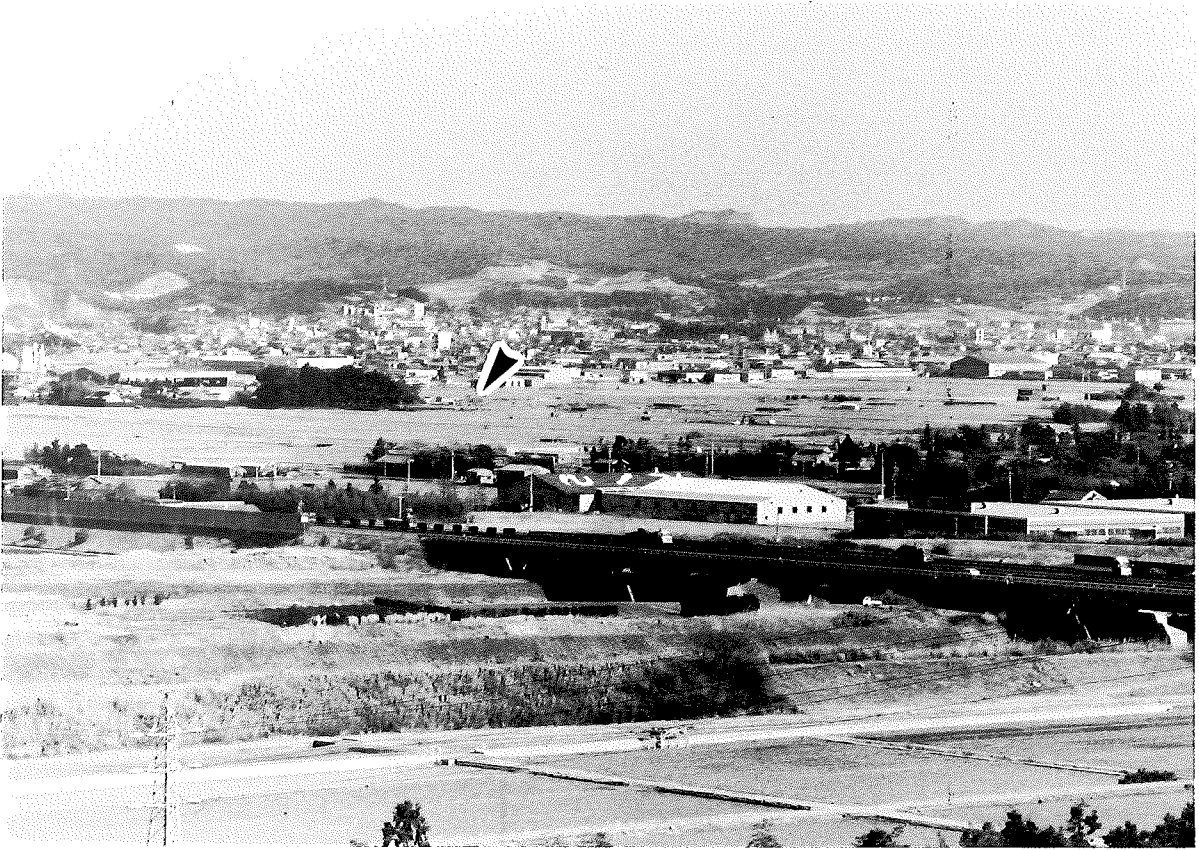
印刷所 株式会社 開 明 堂

浜松市中沢町1番1号

版 圖 真 寫



土橋遺跡周辺航空写真



A. 土橋遺跡遠景（磐田原台地より）



B. 土橋遺跡遠景（木原・旧東海道より）

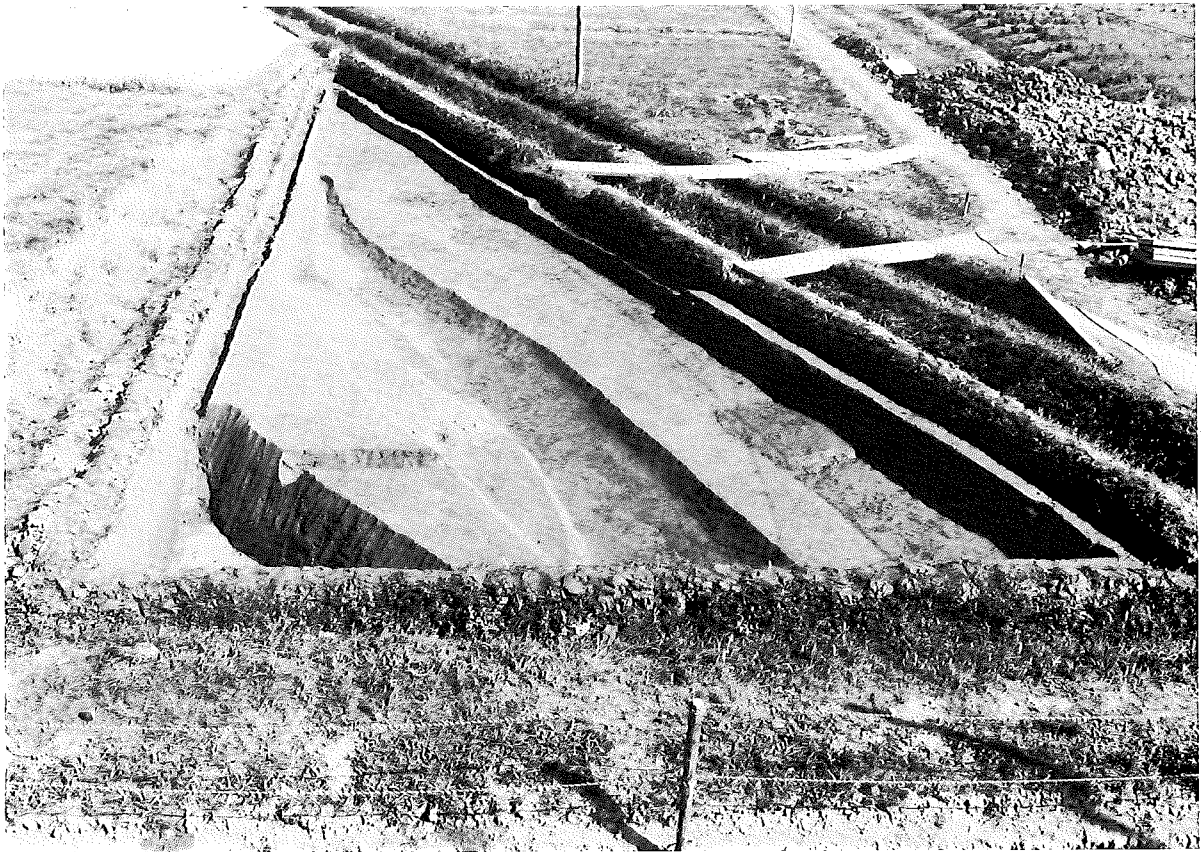
図版 3



A. 土橋遺跡近景（東より）



B. 土橋遺跡近景（蟹田川より）

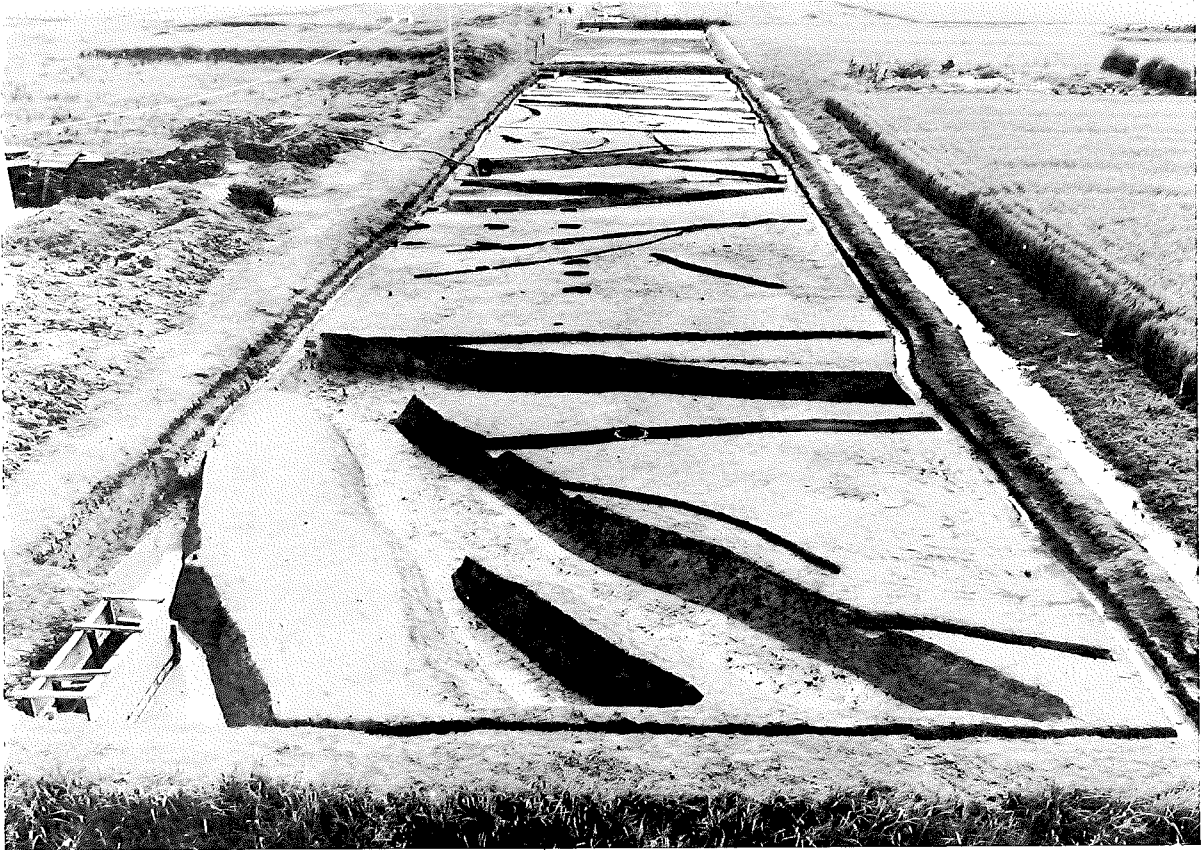


A. 第1区検出溝跡（西より）

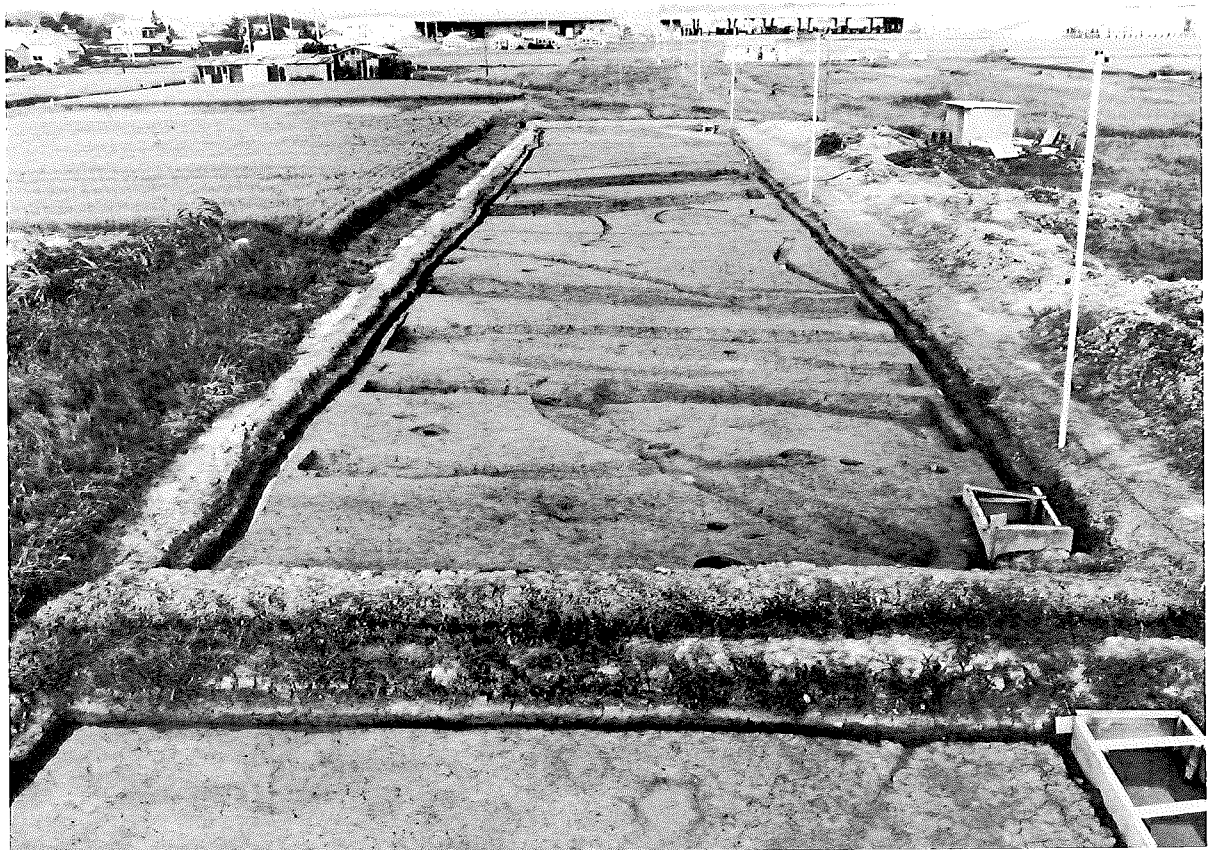


B. 第1区検出溝跡（東より）

図版 5



A. 第2区遺構全景（東より）



B. 第2区遺構全景（西より）

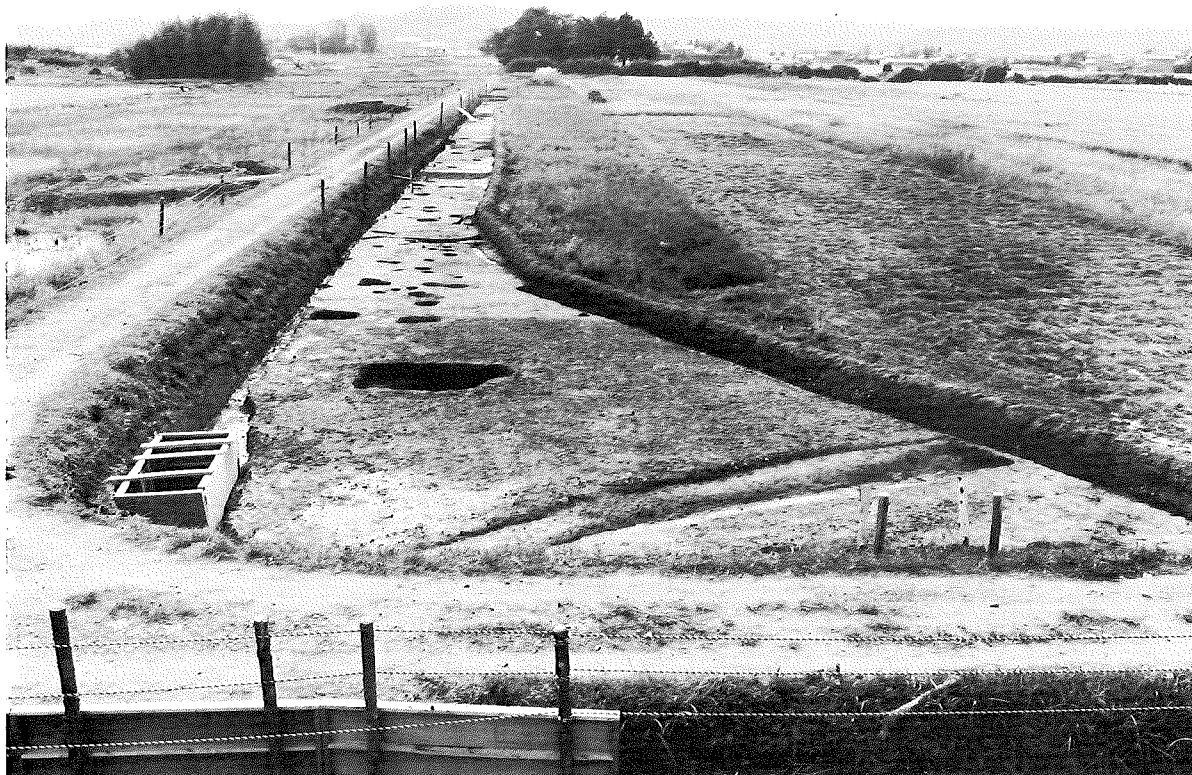


A. 第3区遺構全景（西より）



B. 第3区遺構全景（東より）

図版 7



A. 第4区遺構全景（東より）



B. 第4区遺構全景（西側）



A. 第5区遺構全景（東より）



B. 第5区遺構全景（西より）

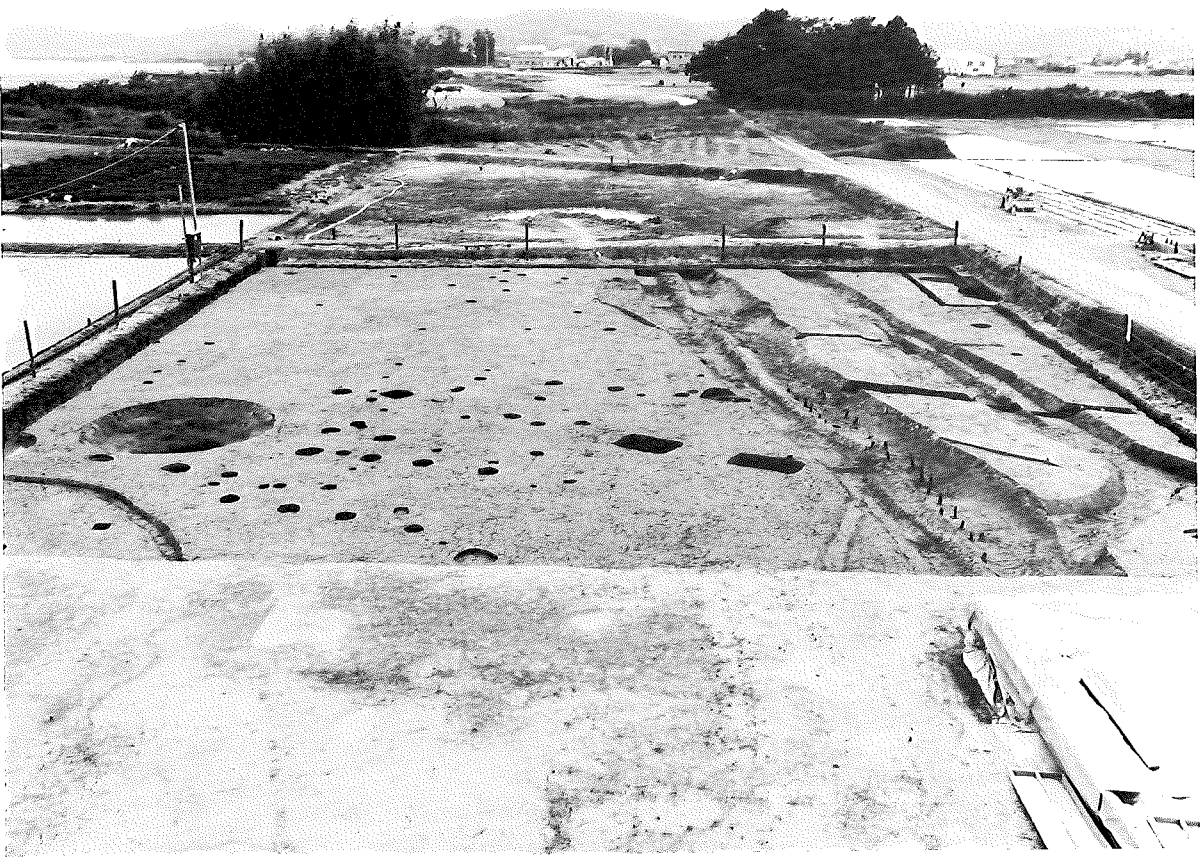
図版 9



A. 第6区遺構全景（北より）



B. 第6区遺構全景（西より）



A. 第7区遺構全景（西側部分）



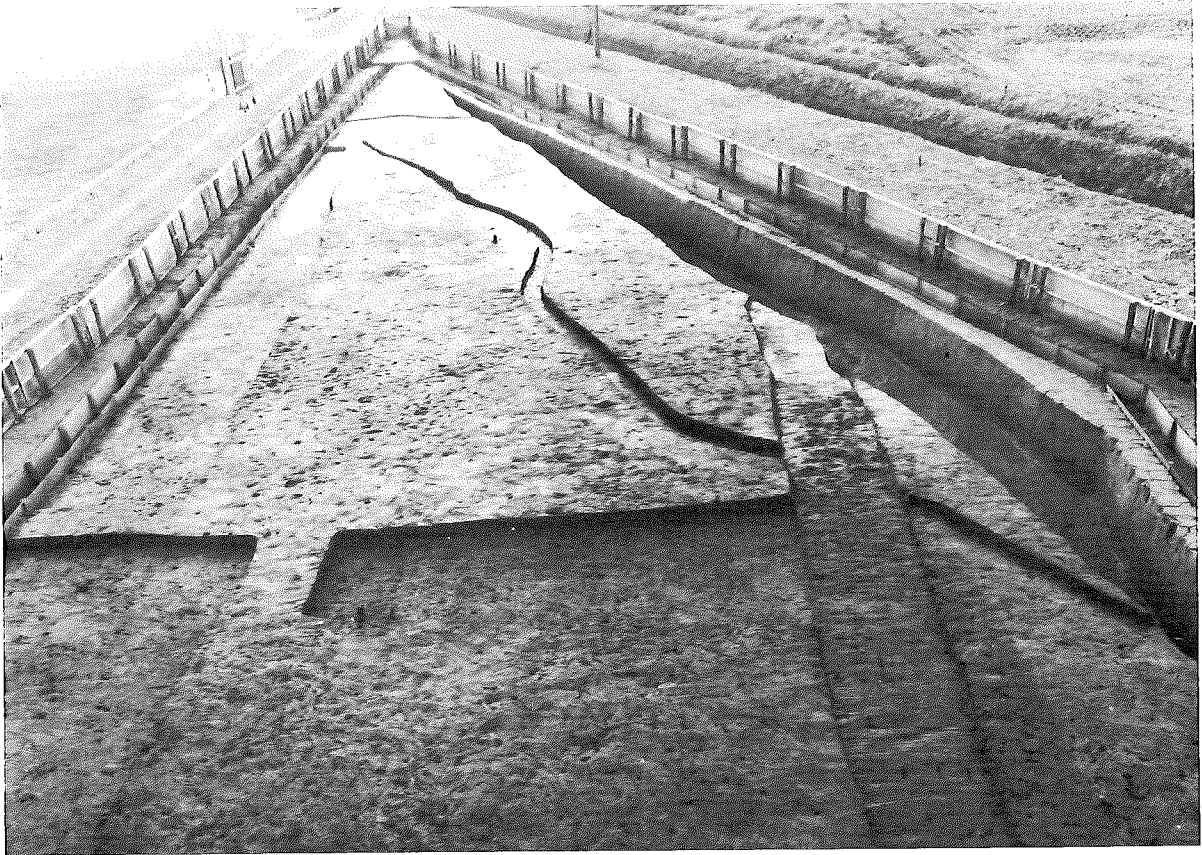
B. 第7区遺構全景（東より）



A. 第8区遺構全景（西側部分）



B. 第8区遺構全景（東より）



A. 第9区遺構全景（東より）



B. 第10区遺構全景（東より）



A. 第12区遺構全景（東より）



B. 第12区遺構全景（西より）



A. SK3全景（南より）

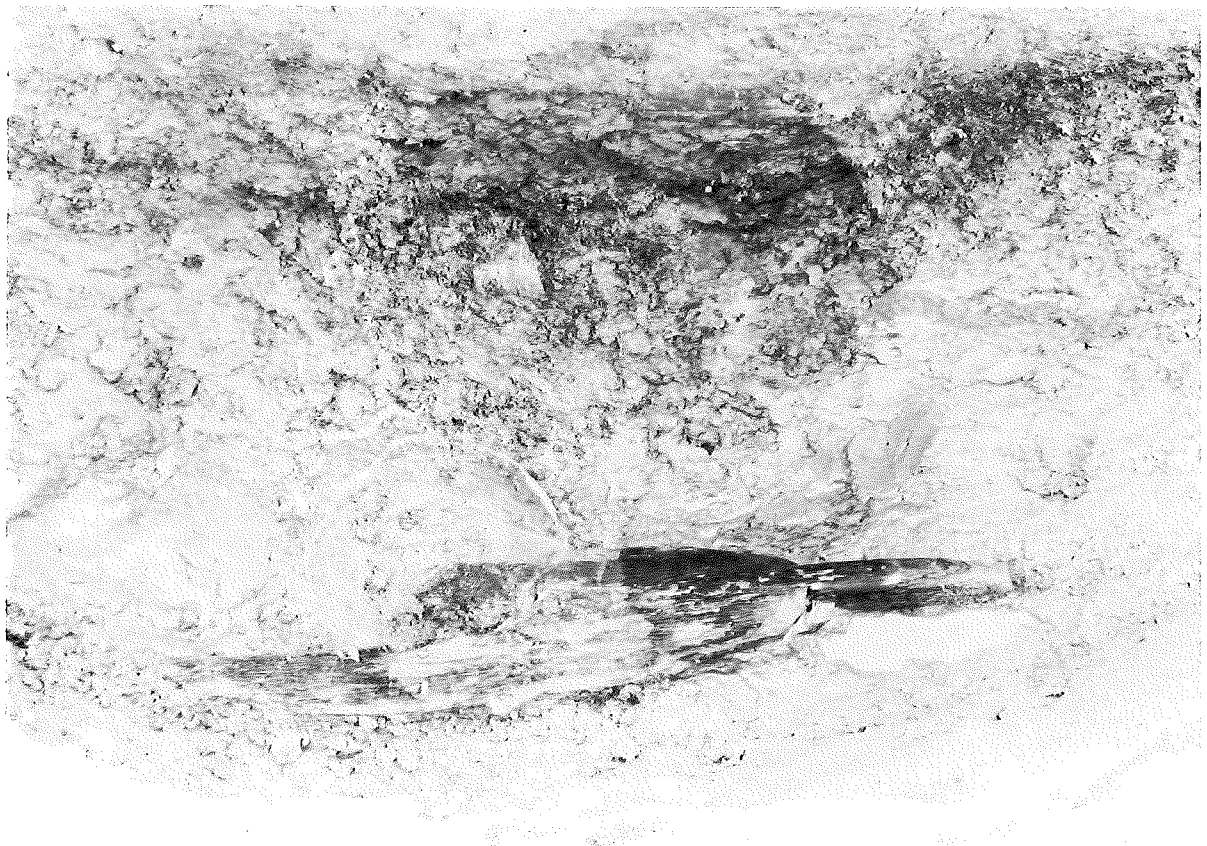


B. SK3土層推積状況

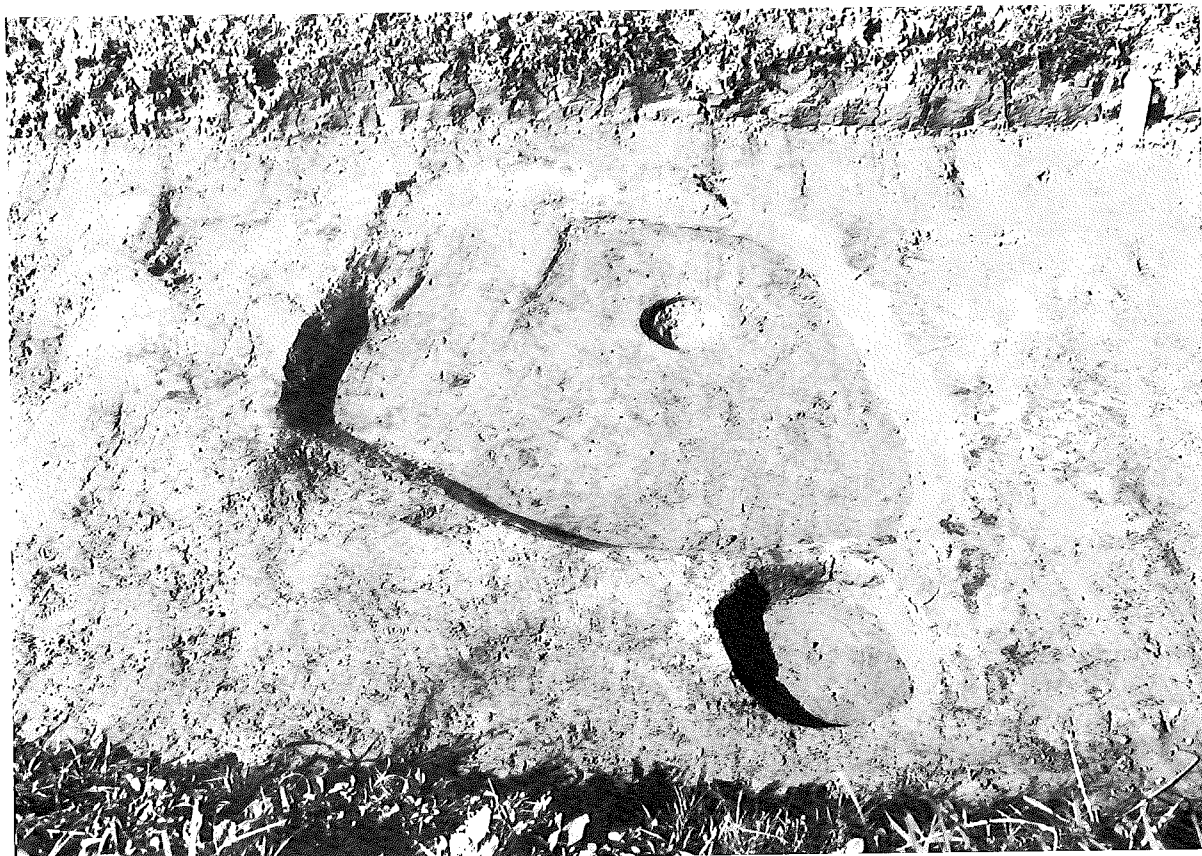
図版15



A. S K13全景（北より）



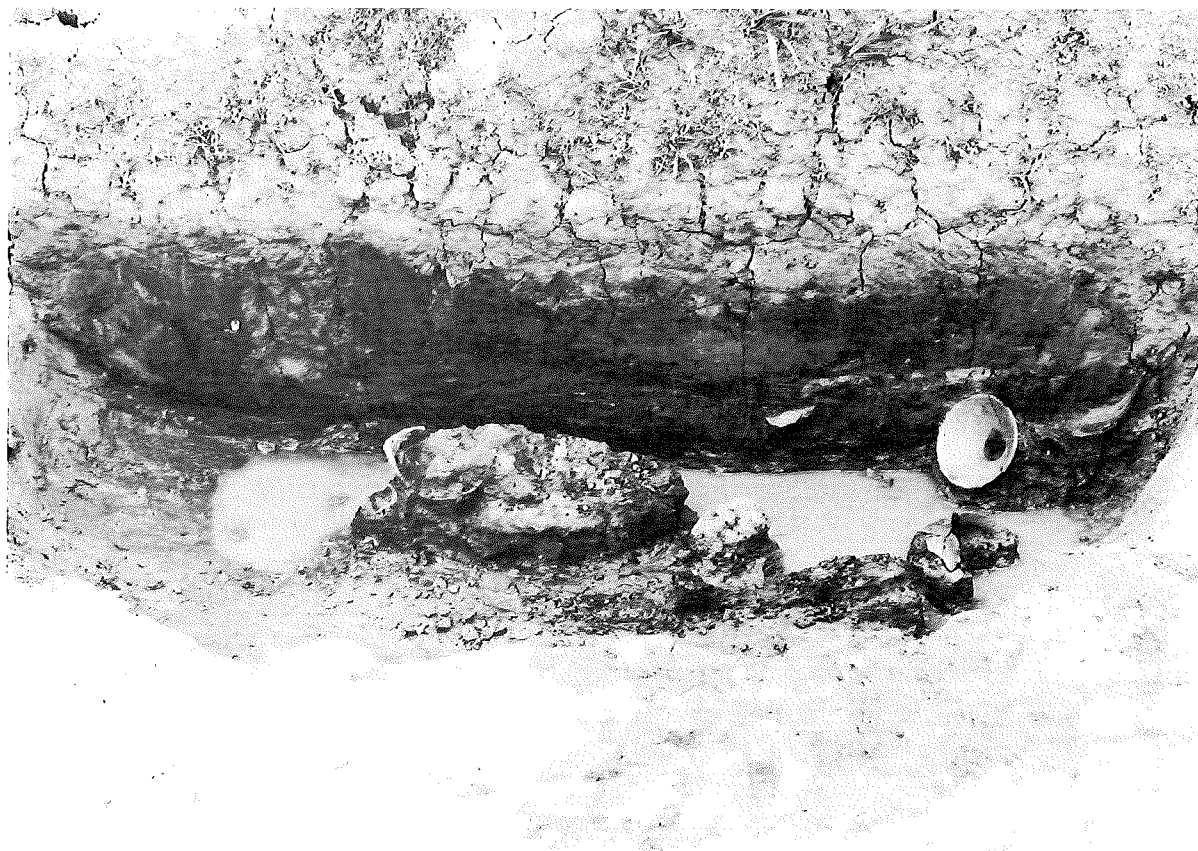
B. S K13着柄式二又鍬出土状態



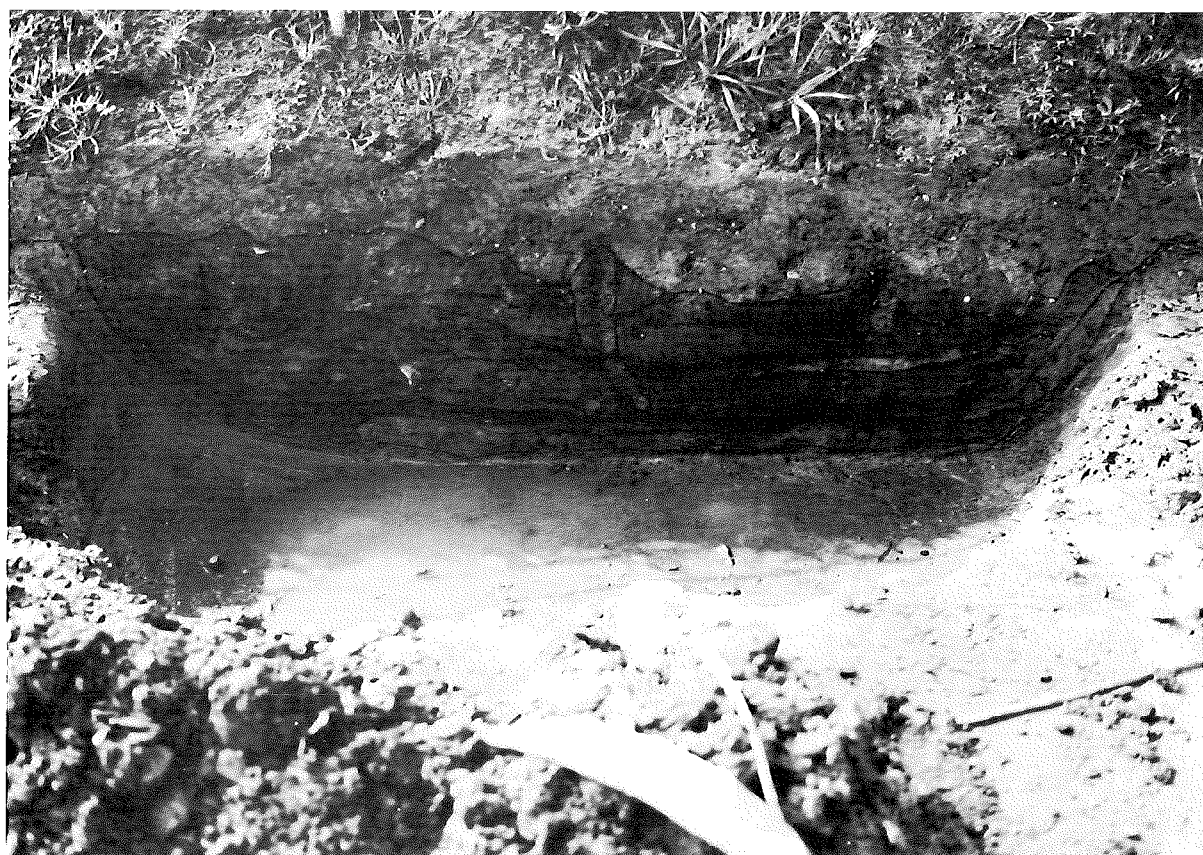
A. S K14全景 (南より)



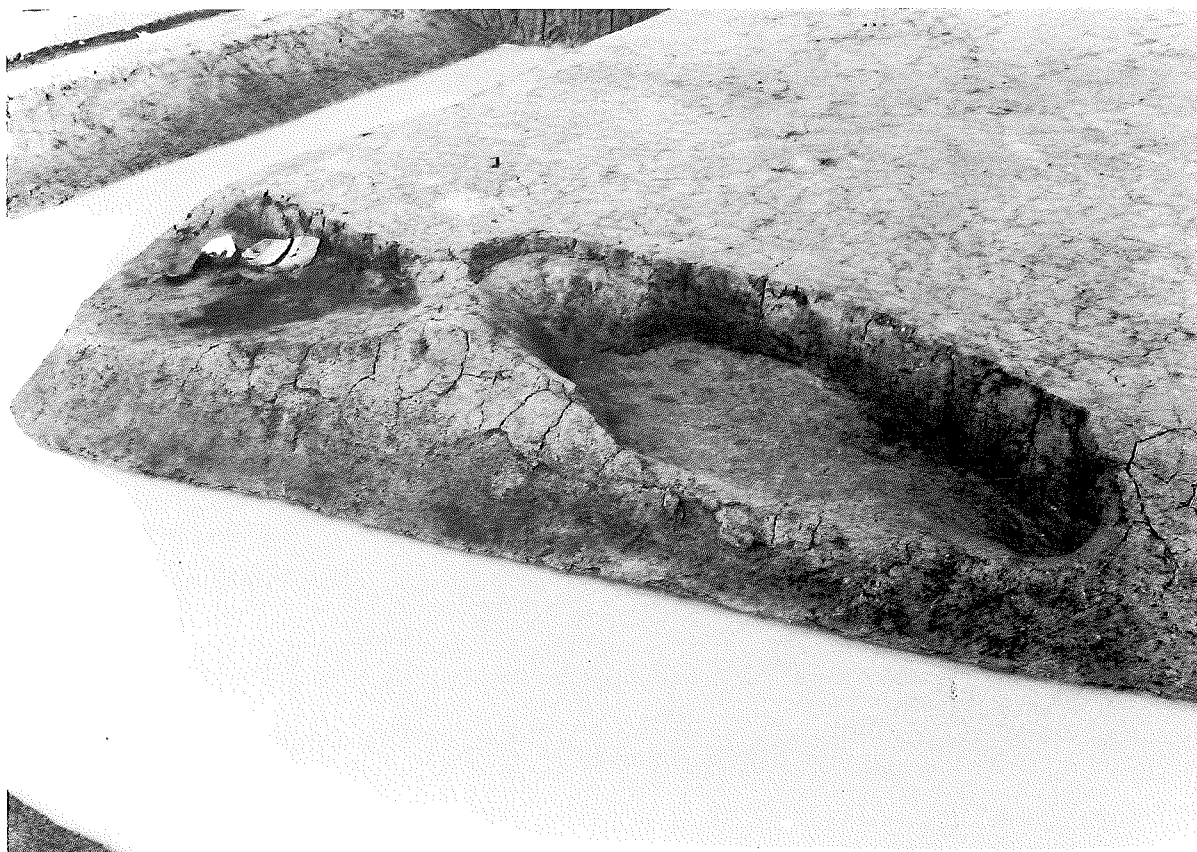
B. S K15全景 (南より)



A. S K 33遺物出土状態



B. S K 33全景 (南より)



A. S K 34、S K 35全景（西より）

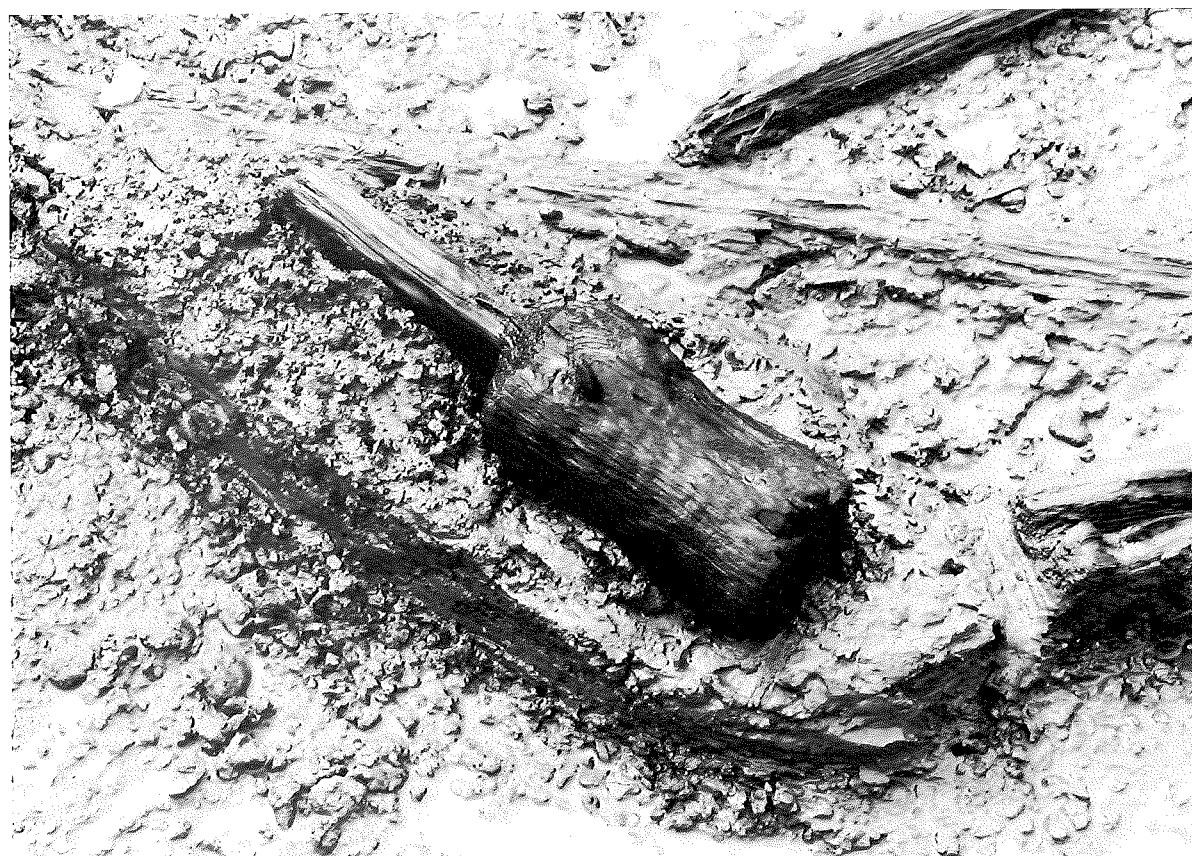


B. S K 34遺物出土状態

図版19



A. S K36全景（南より）



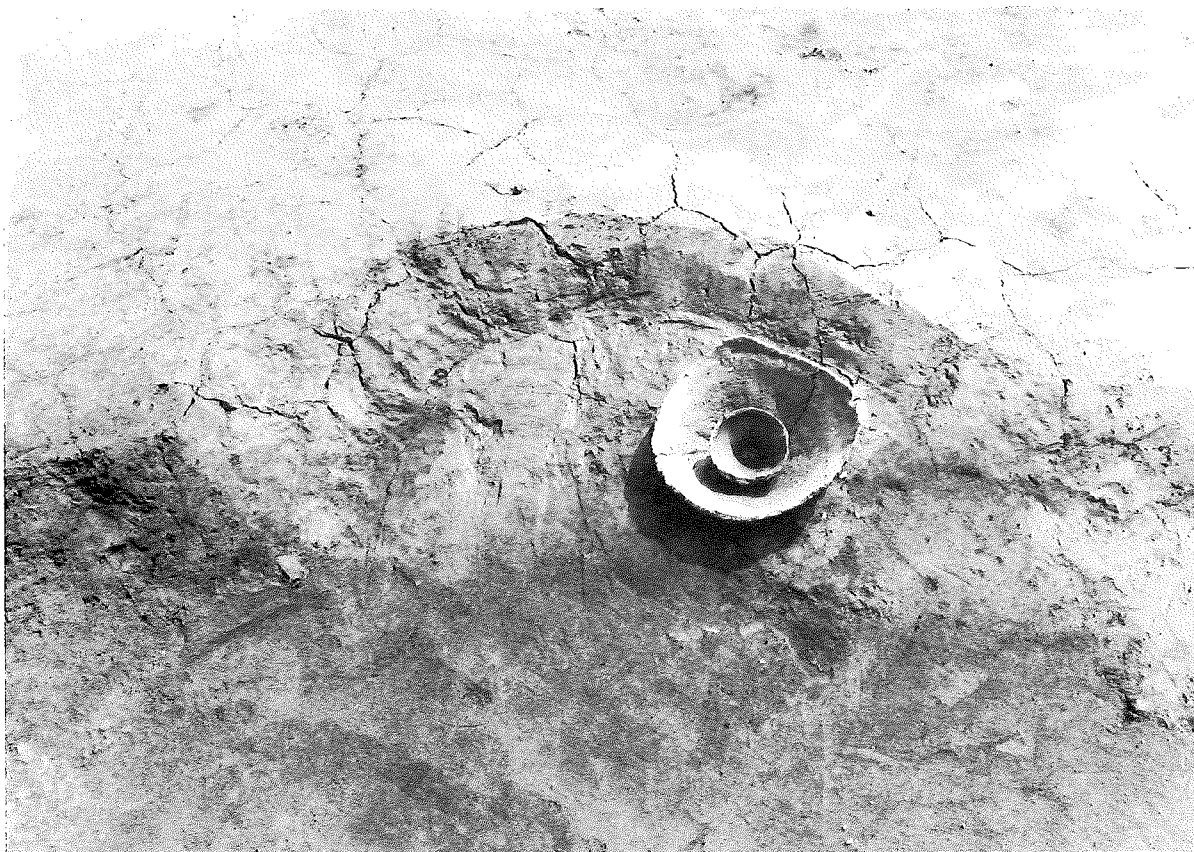
B. S K36出土ヨコツチ



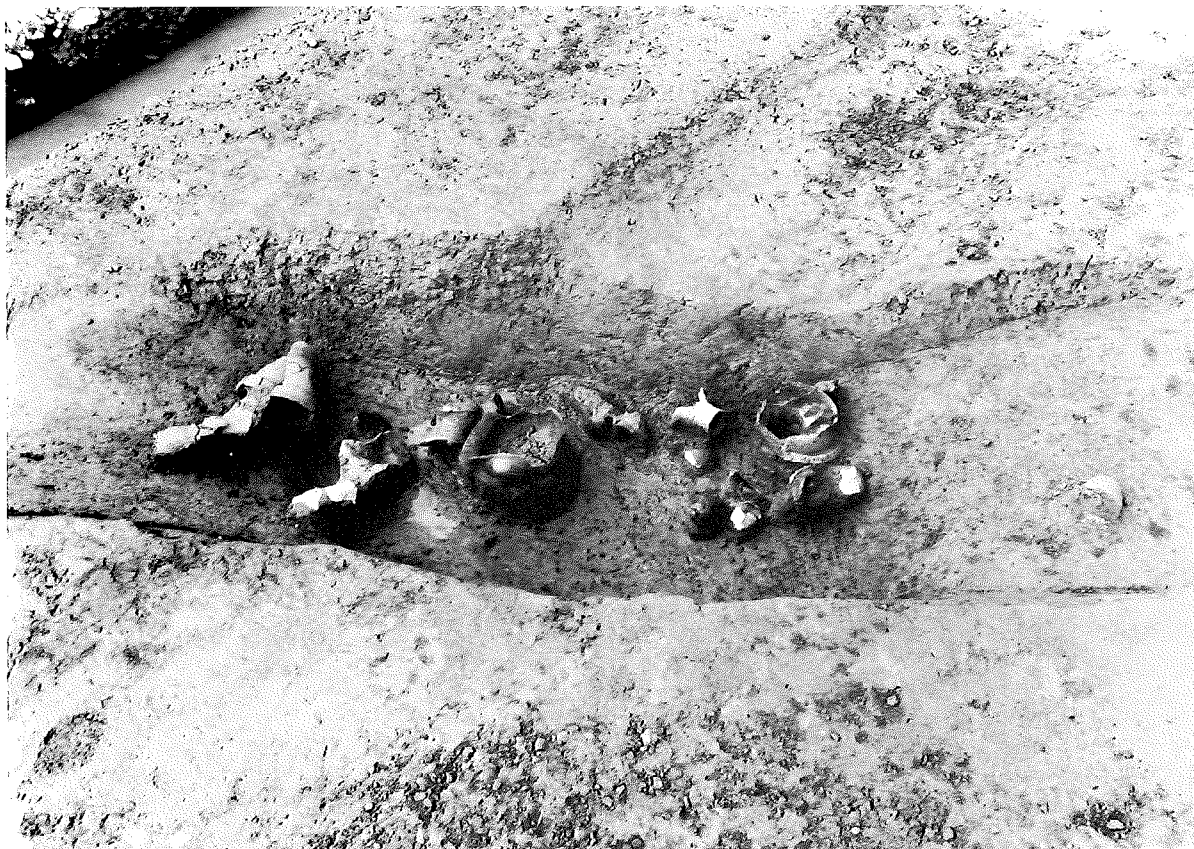
A. SK44全景（西より）



B. SK38全景（南より）



A. Pit413遺物出土状態



B. SK47全景（西より）



A. SK59全景（東より）



B. Pit477全景（北より）



A. SK73全景（南より）



B. SK73全景（西より）



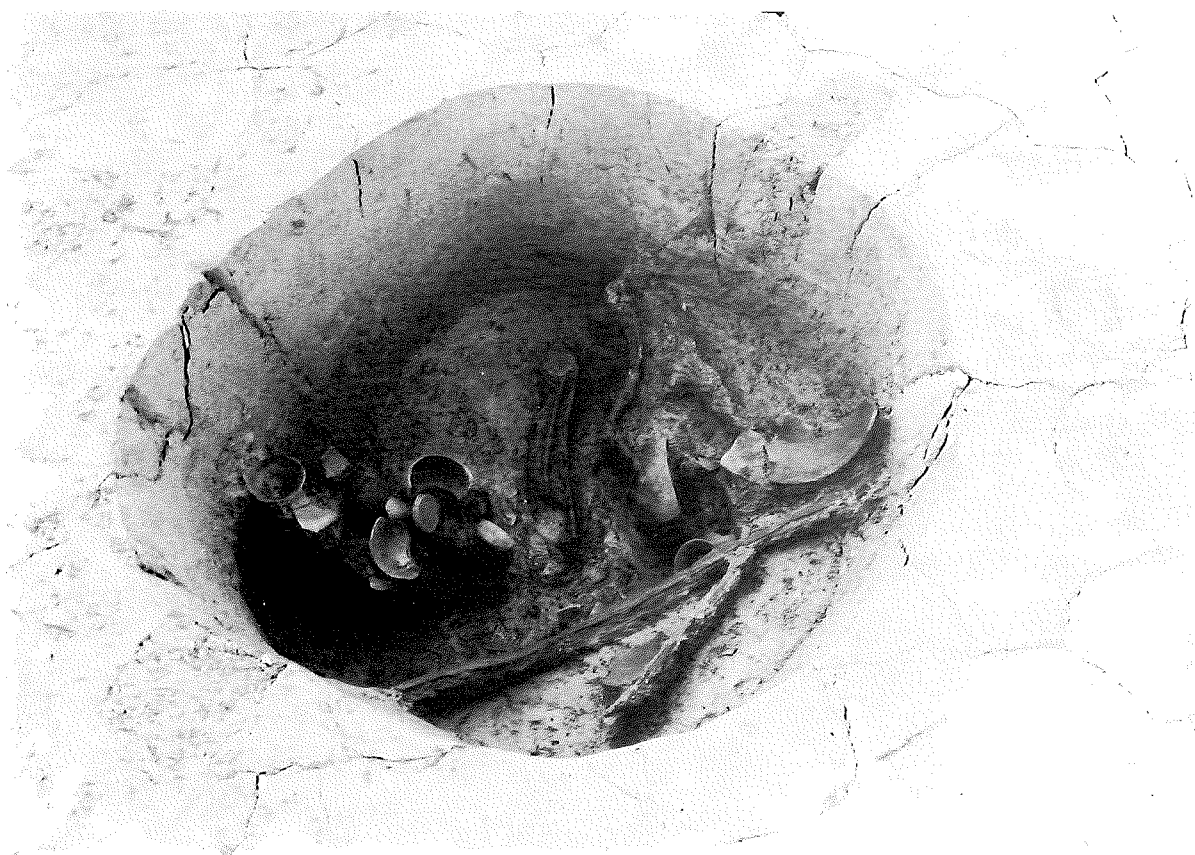
A. S K74全景（北より）



B. S K75全景（東より）



A. S K76上面出土遺物



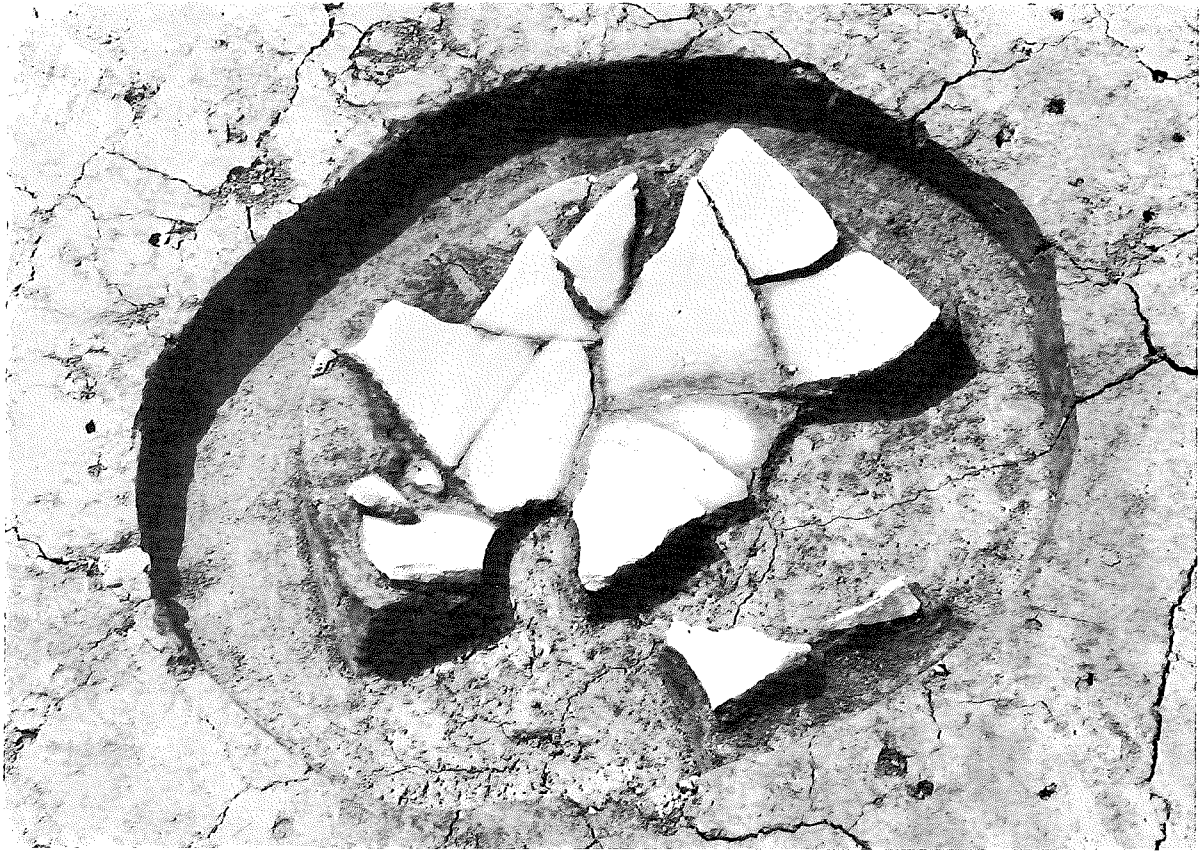
B. S K76下面出土遺物



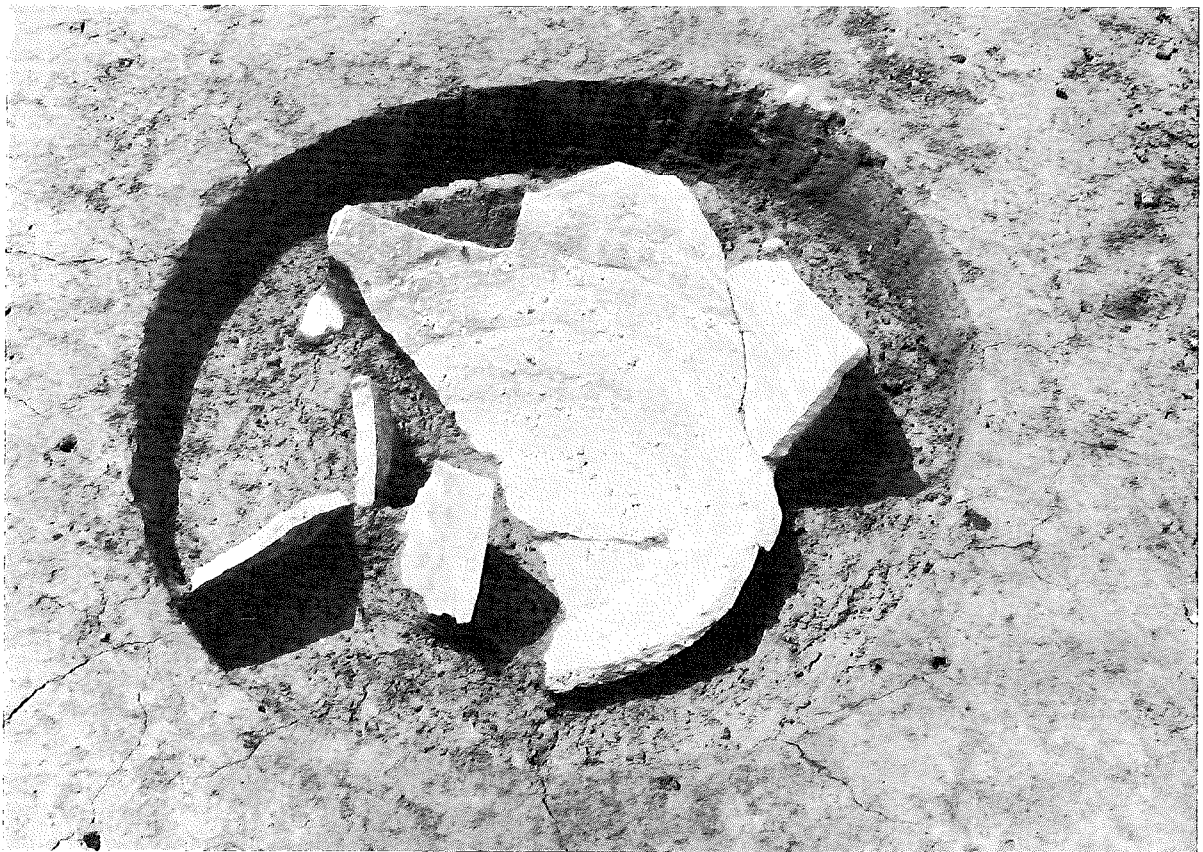
A. SK77全景（東より）



B. SK77全景（南より）



A. SK78全景（南より）



B. SK79全景（南より）



A. S D102と中央のS K80



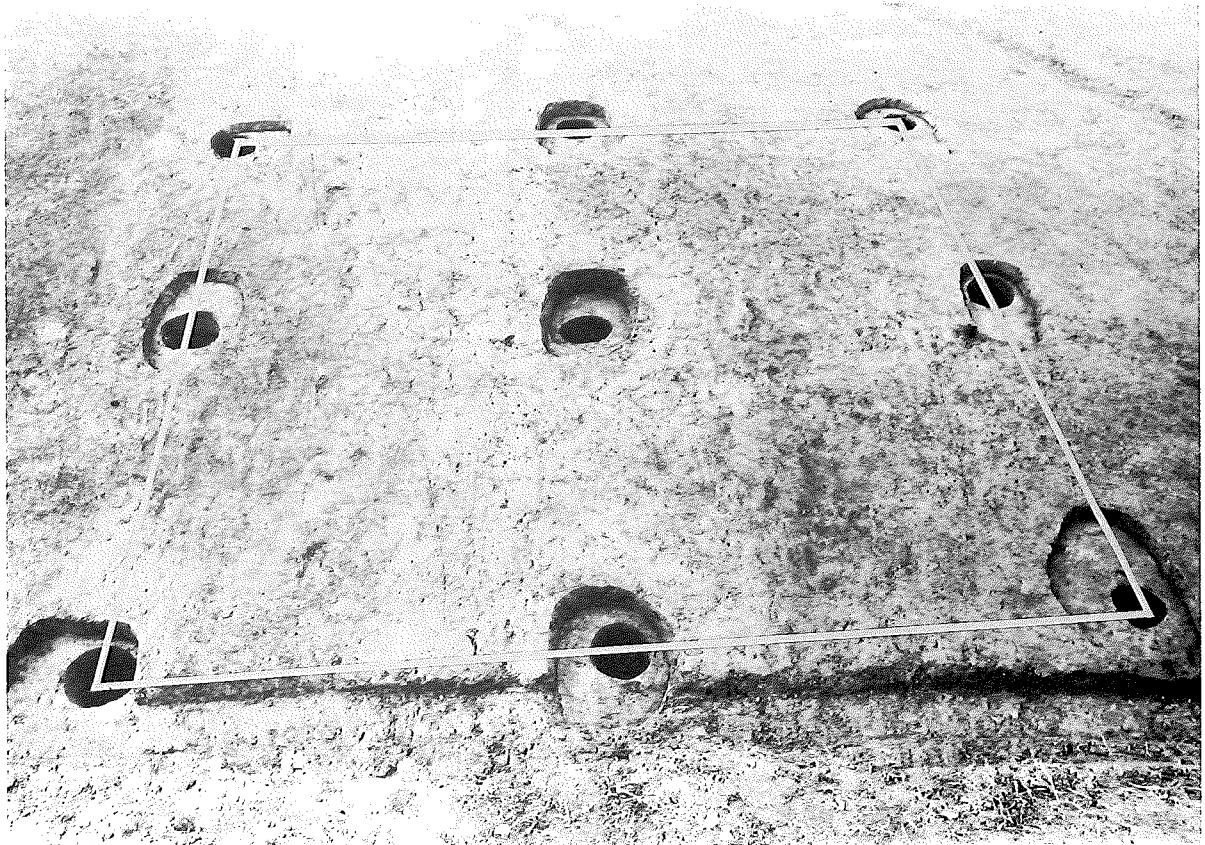
B. S K80全景（弥生後期犬遺体）



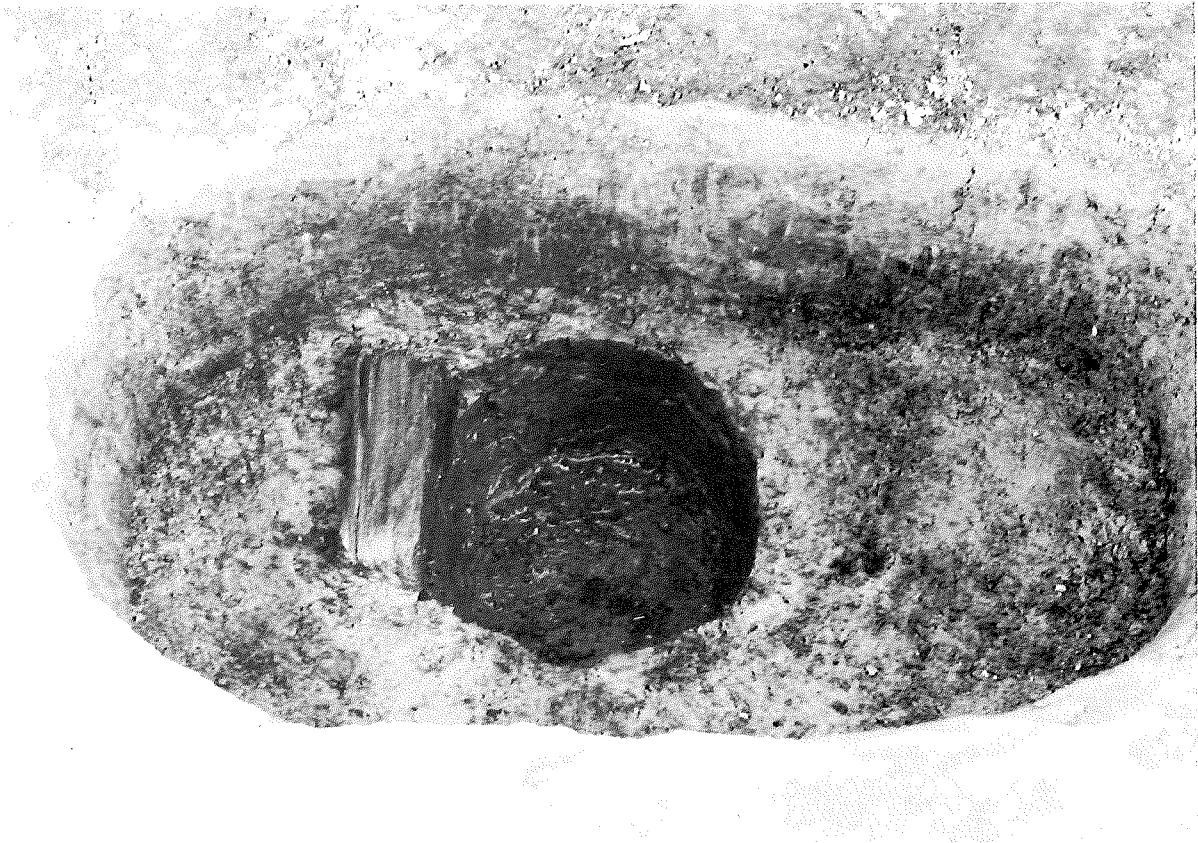
A. SX 4 全景



B. SK 41 全景



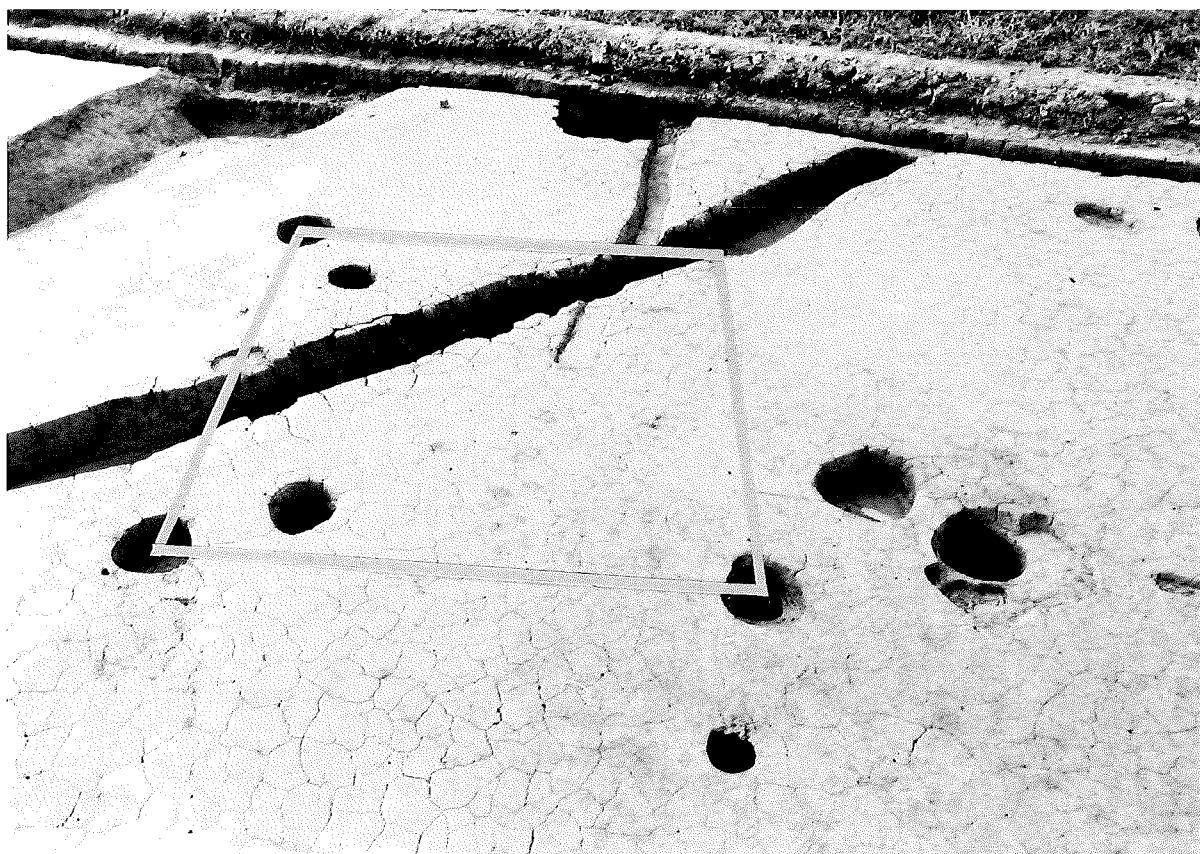
A. SB1 全景 (南より)



B. 柱穴内に残る根固めの木片



A. S D 29、S D 21、S D 3、S D 2 全景



B. S B 2 全景



A. SB4 全景



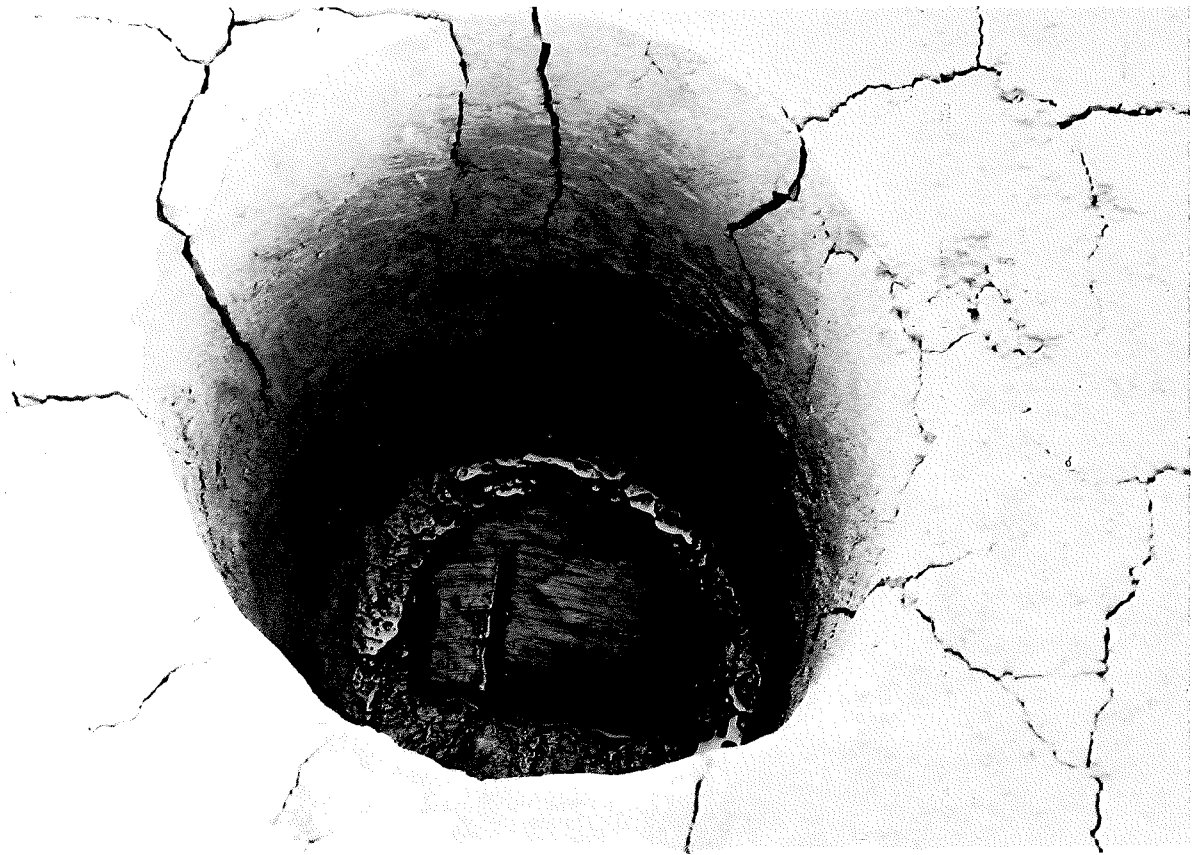
B. SB3 全景



A. SB 5 全景 (北より)



B. SX 2 全景 (西より)



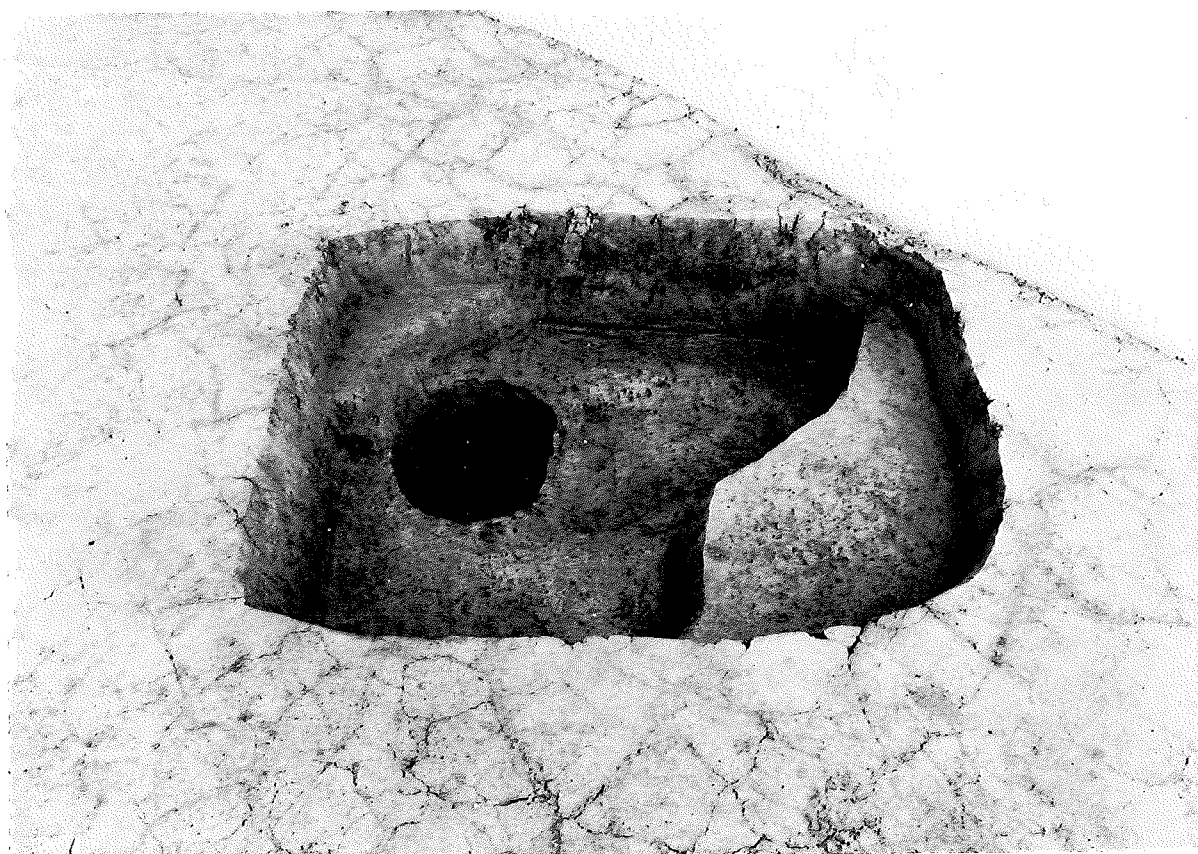
A. S B 6 柱穴礎板



B. S B 6 柱穴礎板



A. S B 7 全景 (南より)



B. S B 7 柱穴 (Pit356)



A. SD4 全景 (南より)



B. SD7 全景 (南より)



A. S D36全景（南より）



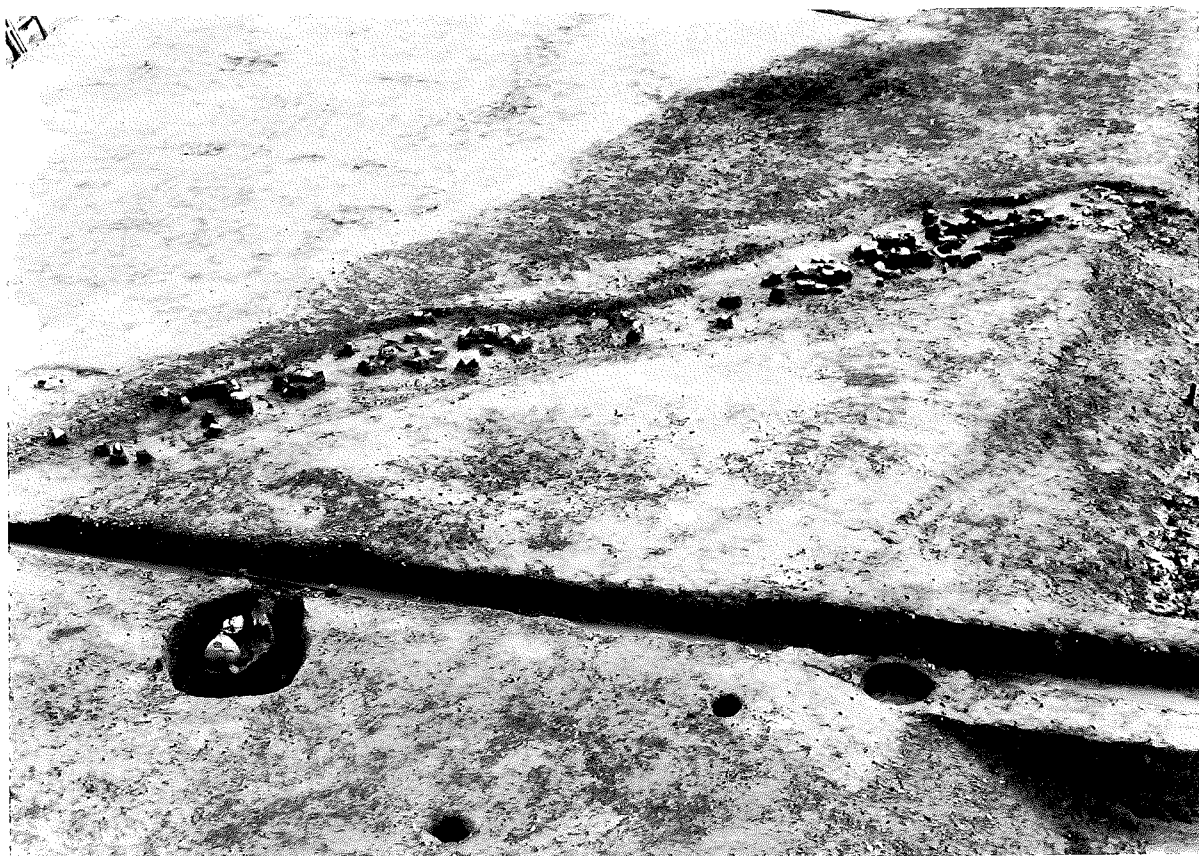
B. S D37全景（南より）



A. S D39全景



B. S D45遺物出土狀態



A. S D 89全景 (東より)



B. S D 89全景 (南より)



A. S D94全景（北より）



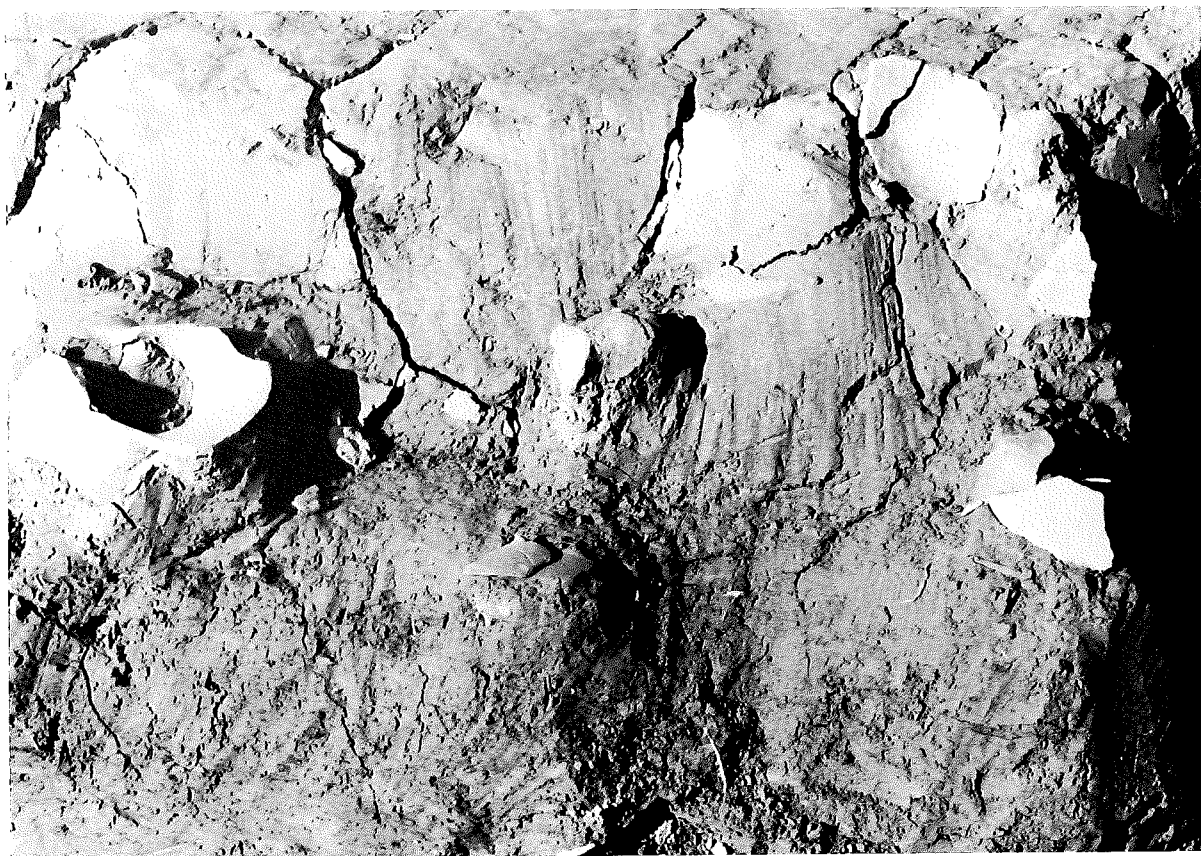
B. S D93全景（北より）



A. S D114、118全景（北より）



B. S D114、118全景（南より）



A. S D 115遺物出土状態



B. S D 115遺物出土状態

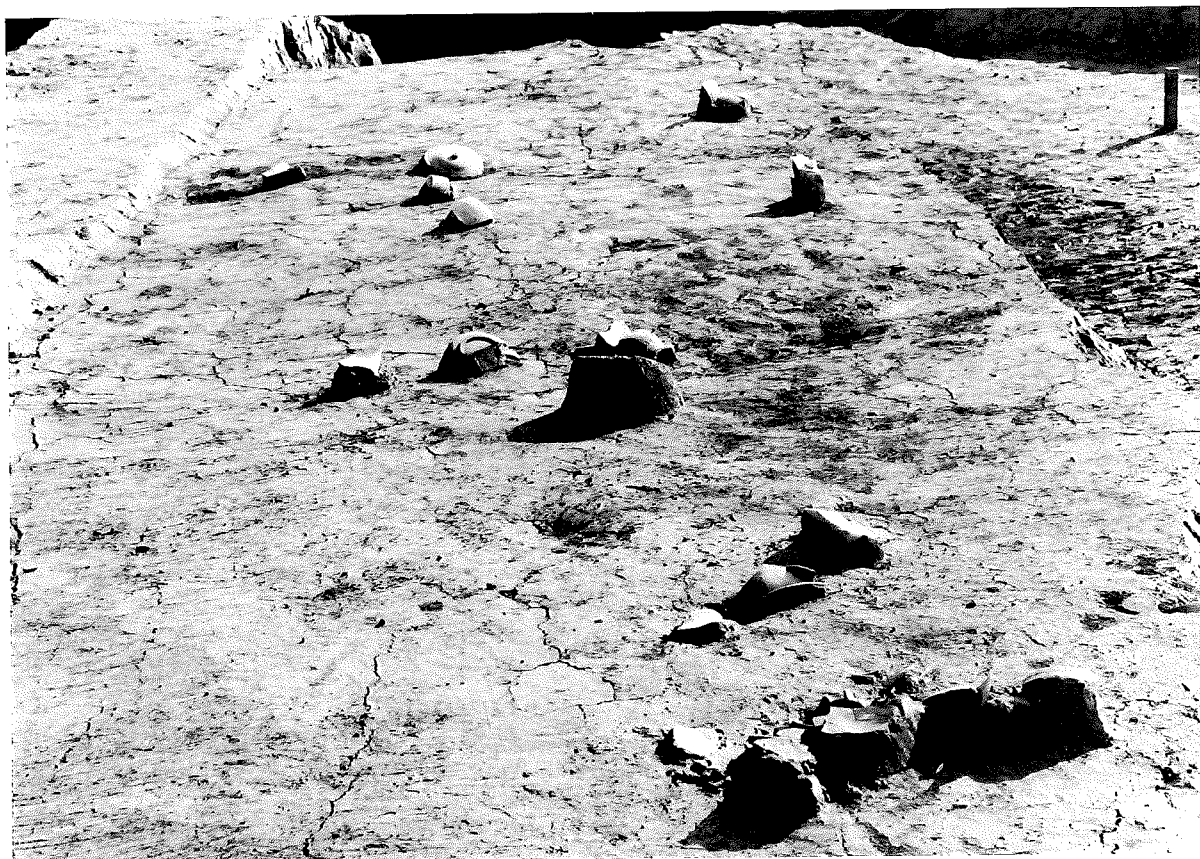
図版43

A. S D120
全景（北より）



B. S D120
遺物出土状態





A. S D130遺物出土状態



B. S D130遺物出土状態

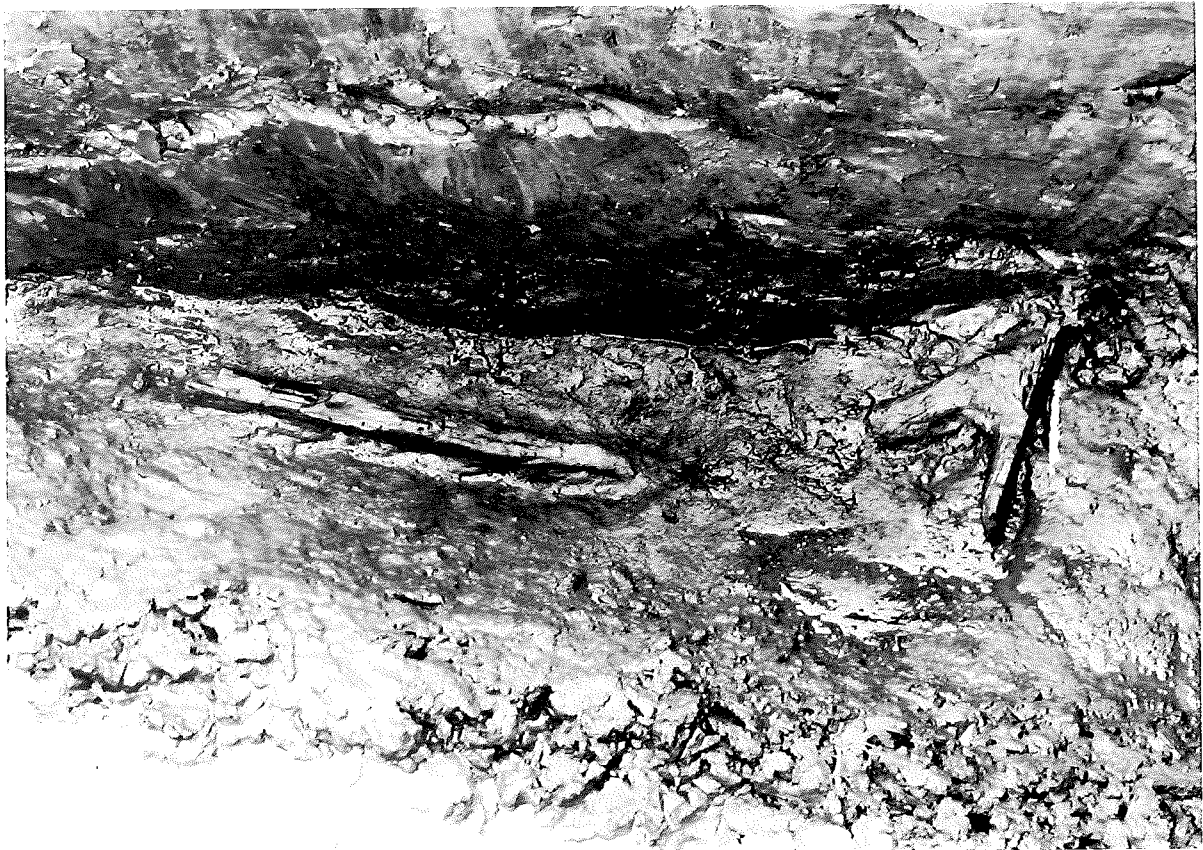
図版45



A. S I 1・2・3・4とS D32・34



B. S I 4 全景



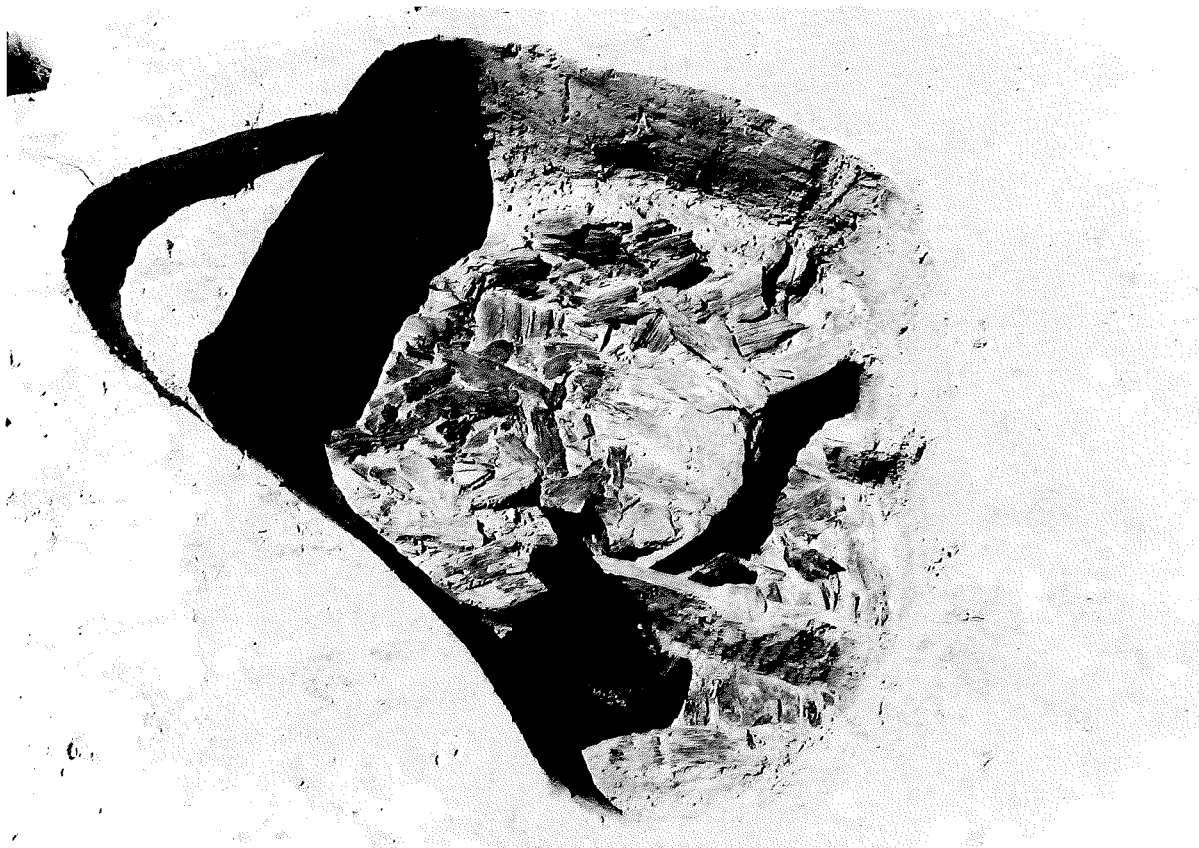
A. S I 3 出土の着柄式鍬の柄出土



B. S I 2 遺物出土状態



A. 環濠を持つ掘立柱建物群



B. Pit449全景



A. Pit493 (北より)



B. Pit492 (北より)



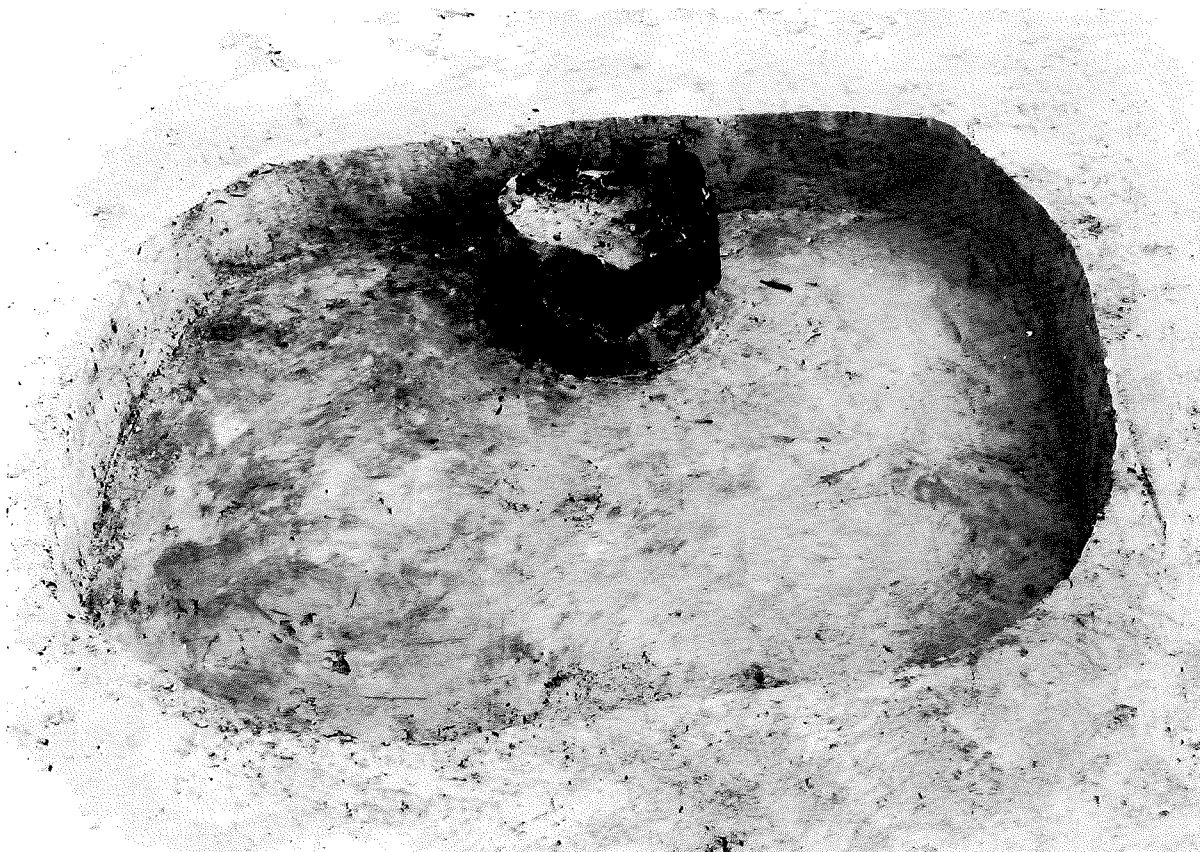
A. Pit465



B. Pit463



A. Pit470



B. Pit487



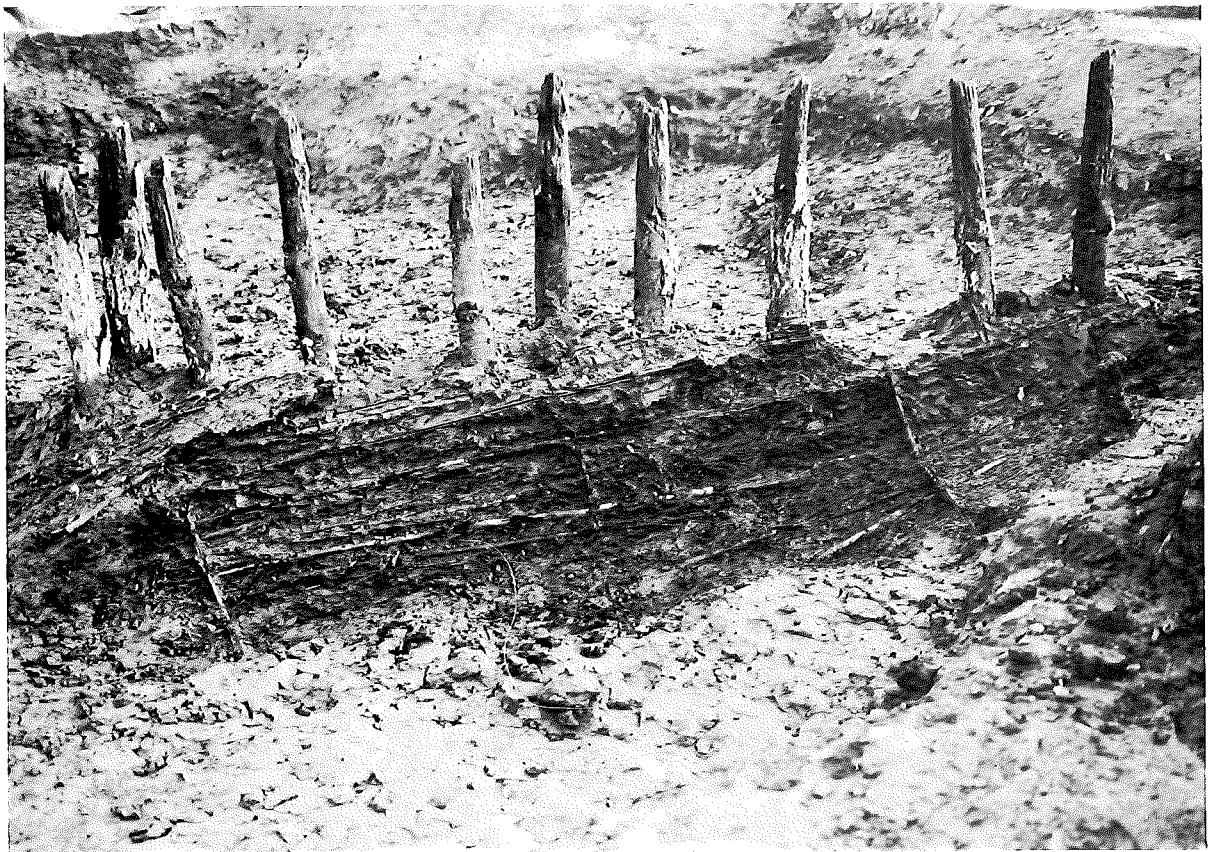
A. 中世屋敷跡（東より）



B. 中世屋敷跡（西より）



A. SX1 全景（北より）



B. 杭列としがらみ



A. S X 1 出土イヌ遺骸



B. S X 1 出土木製品



A. S D128全景（北より）



B. S D128杭列（小ポールは卒塔婆出土地点）

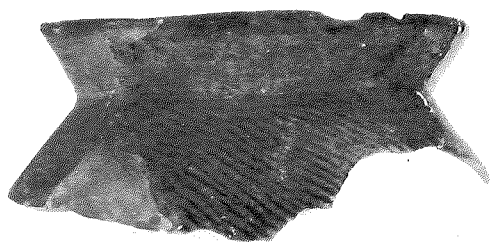
図版55



A. S D125と派生するS D115



B. S D128の杭列と卒塔婆出土地点（小ボール）



1



14



2



4



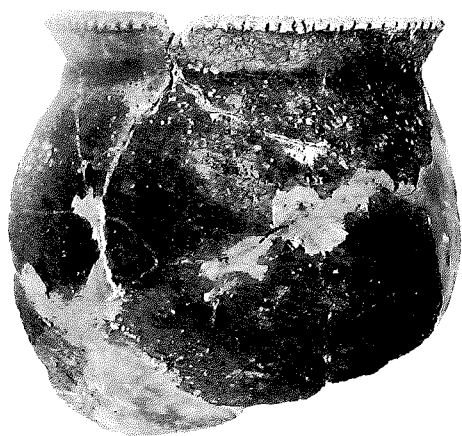
15



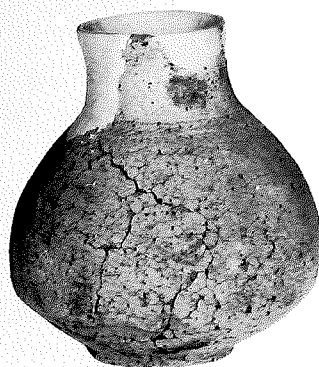
11



17



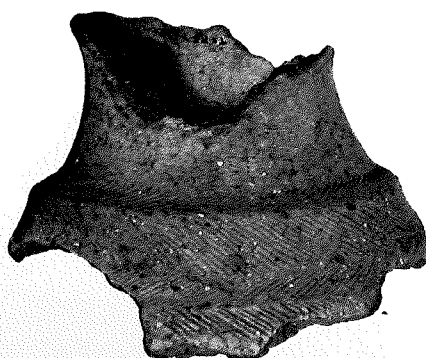
22



34



25



35



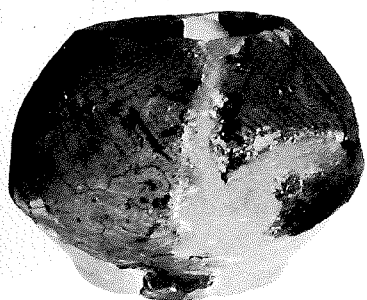
26



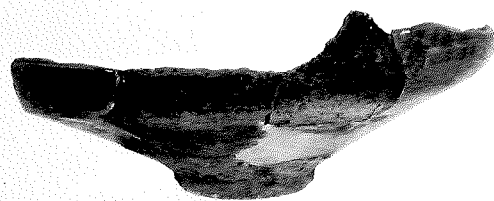
37



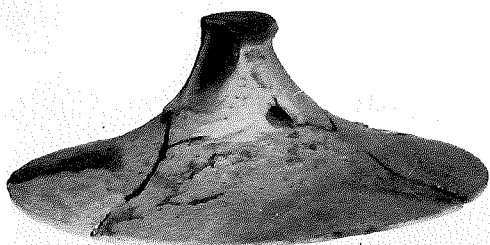
55



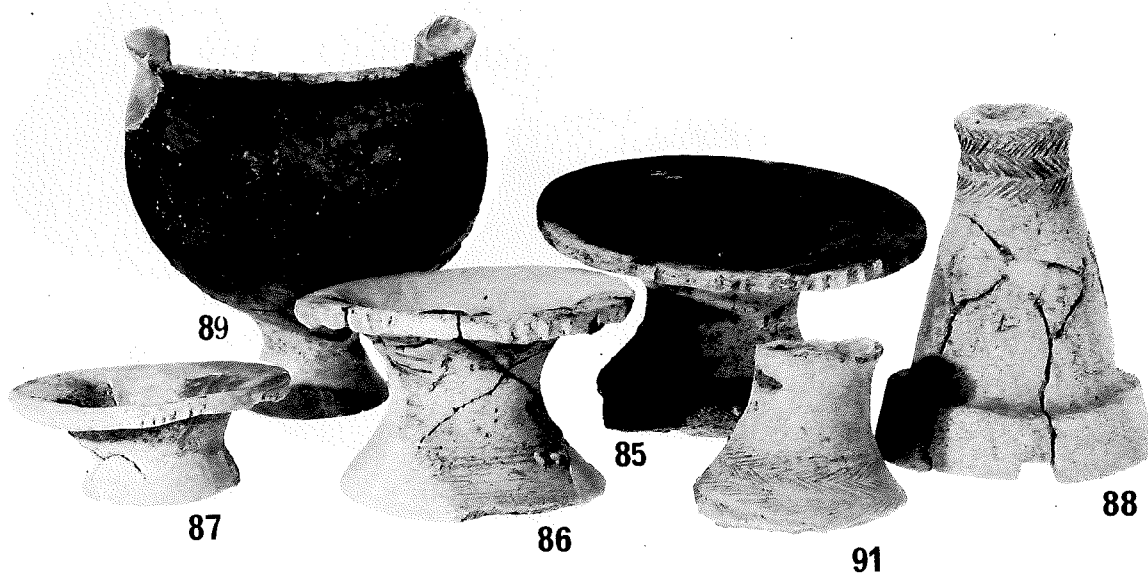
61



81



63



89

87

86

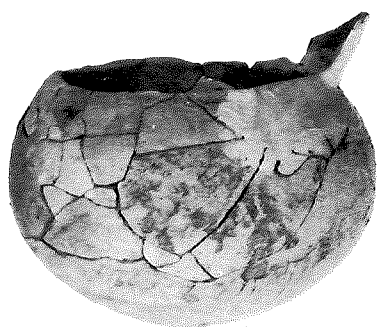
85

91

88



123



121



126



122



120



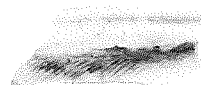
130



129



128



127



137



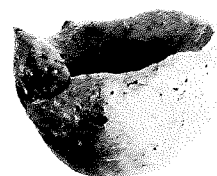
138



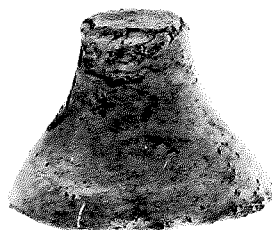
136



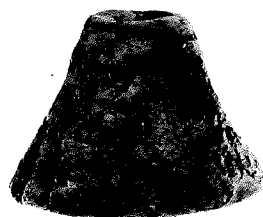
135



134



139



140



141



143



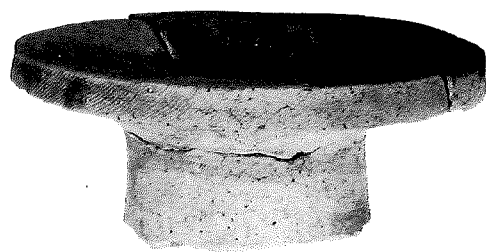
144



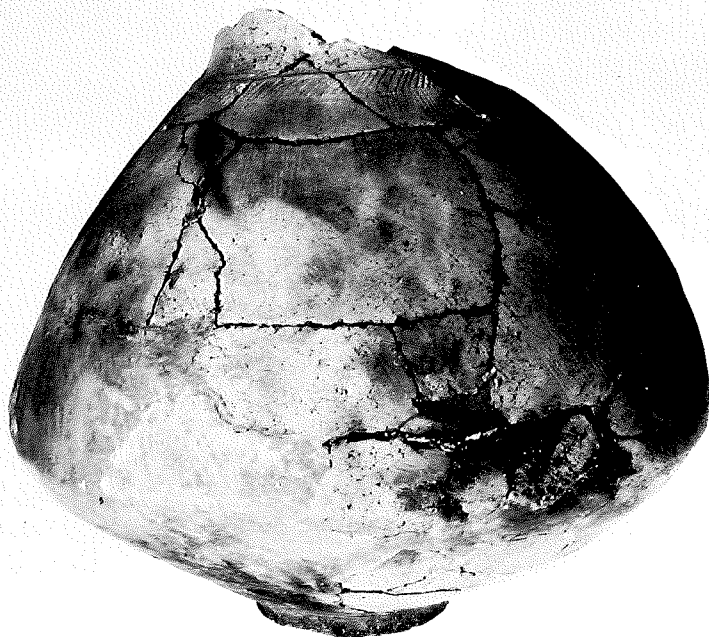
145



147



158



162



154



164



165



173



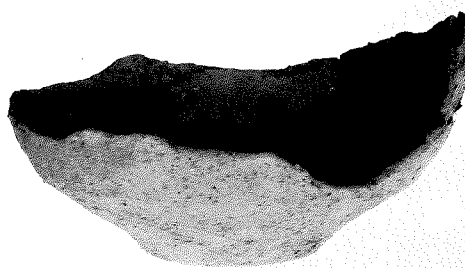
168



170



171



163



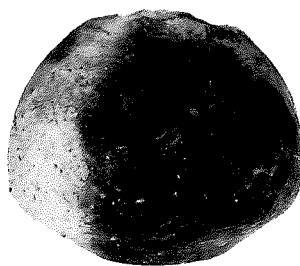
186



195



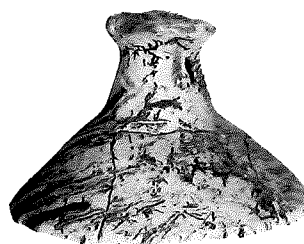
196



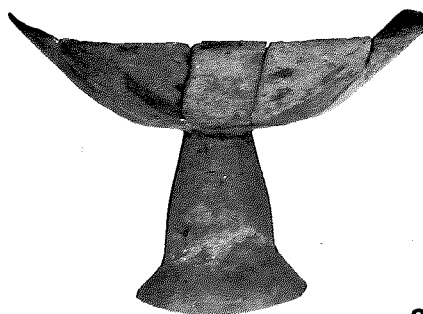
198



200



207



226



230



239



237



281



290



284



264



285



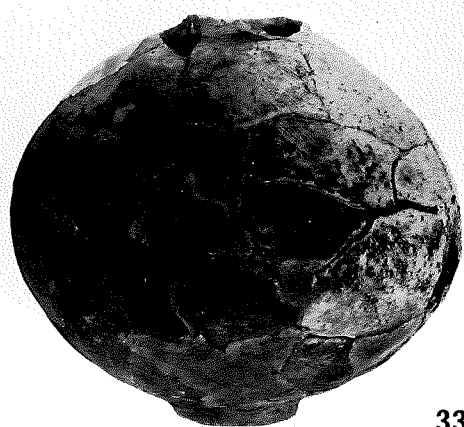
328



289



335



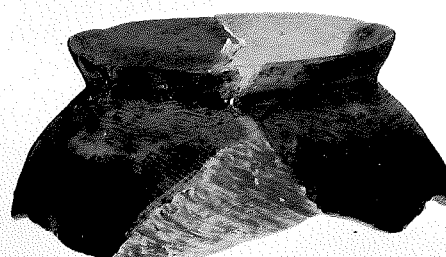
338



386



367



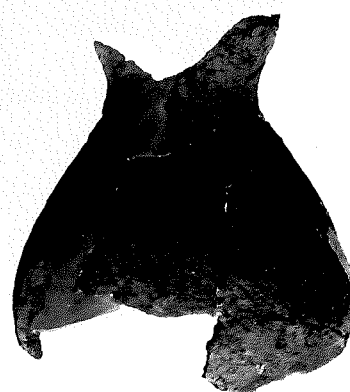
419



368



408



383



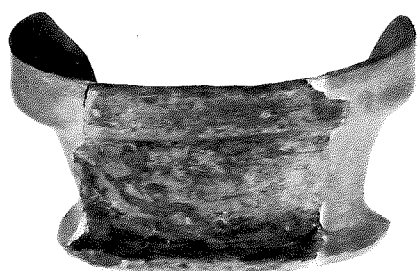
438



443



474



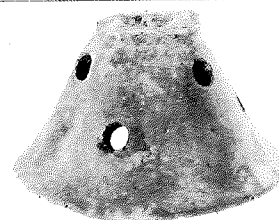
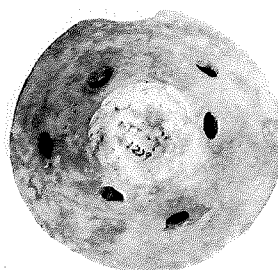
449



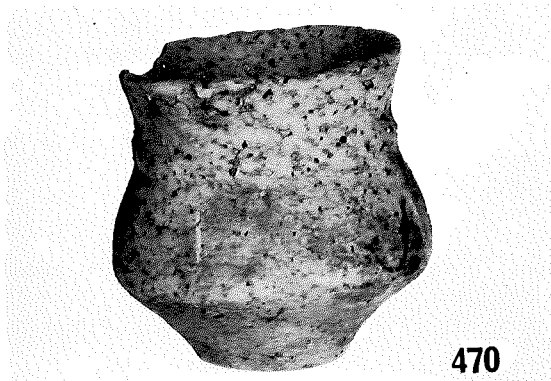
475



451



478



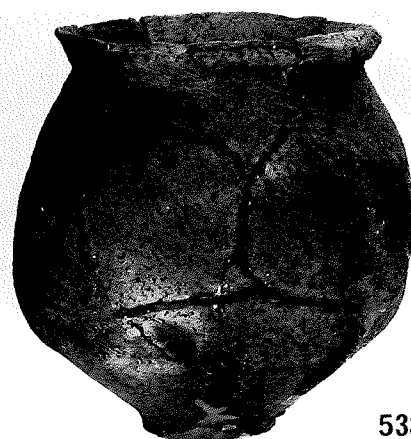
470



491



498



533



507



534



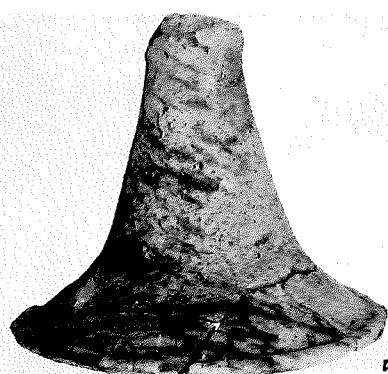
508



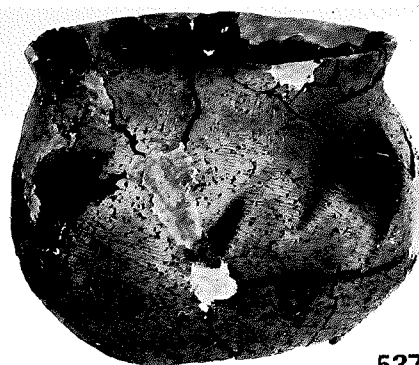
535



516



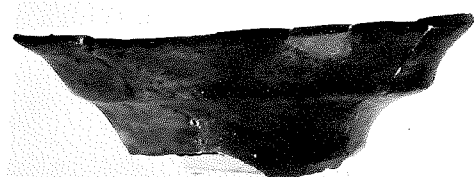
532



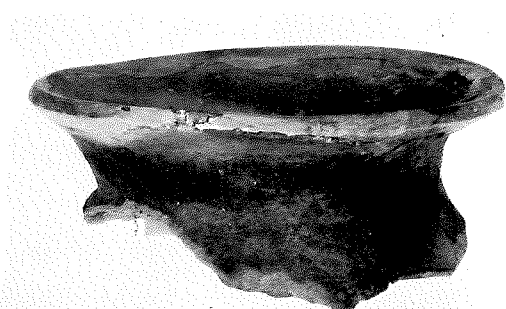
537



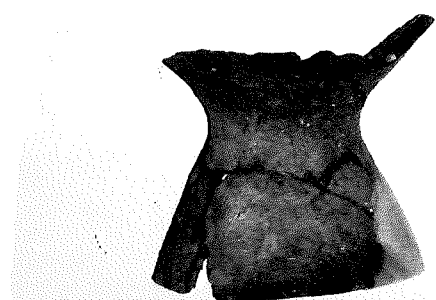
540



560



583



587



616



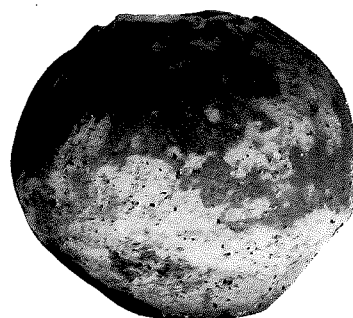
617



623



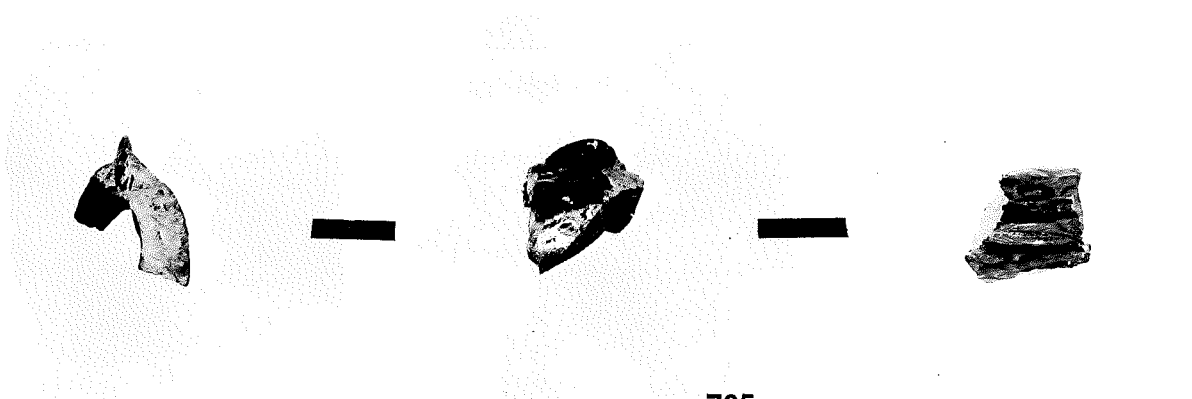
637



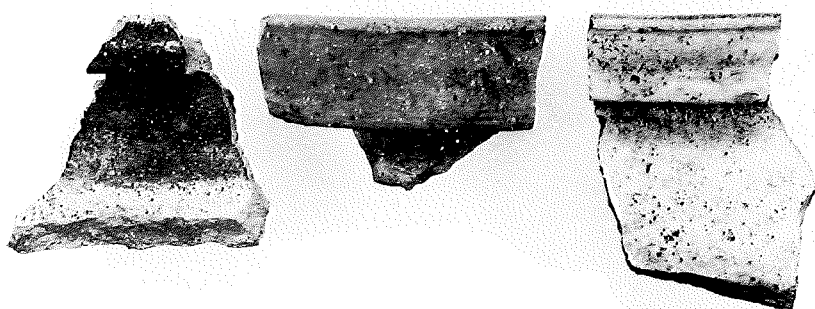
642



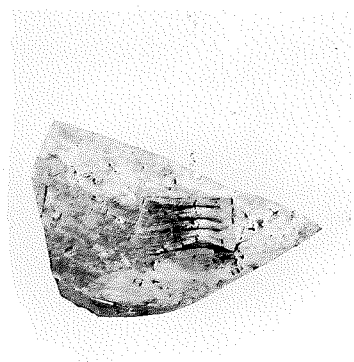
643



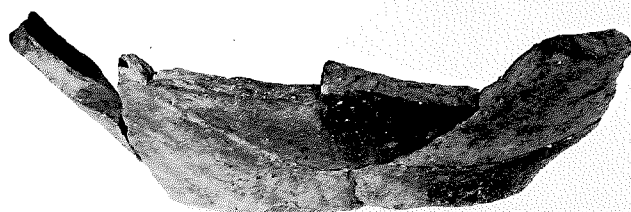
705



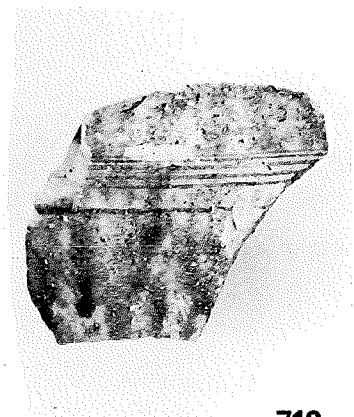
714 - 716



726



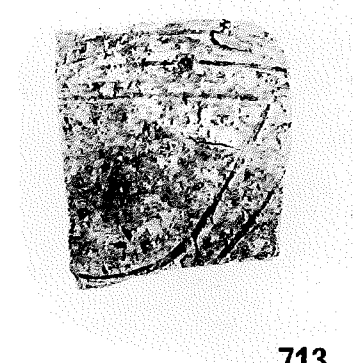
719



712



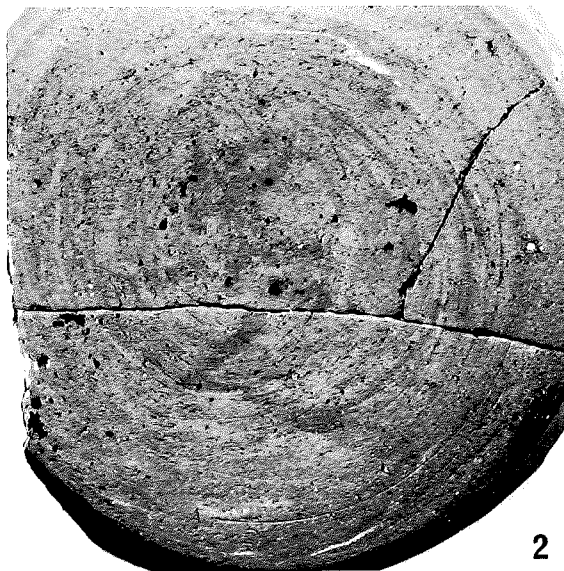
720



713



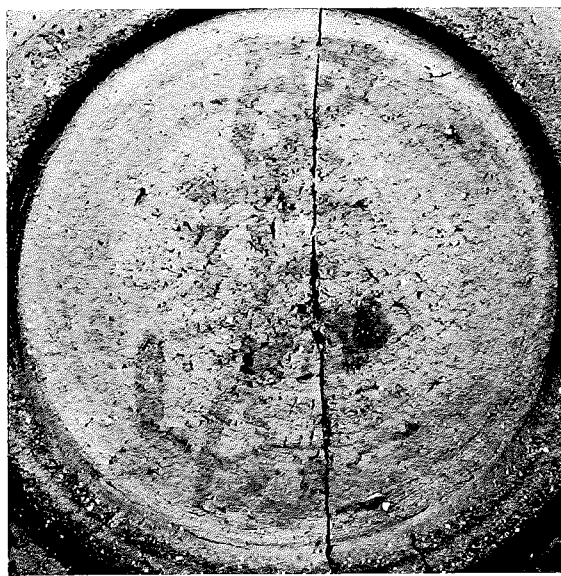
1



2



3



6



5



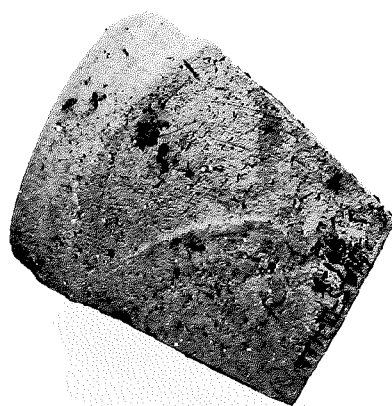
10



8



9



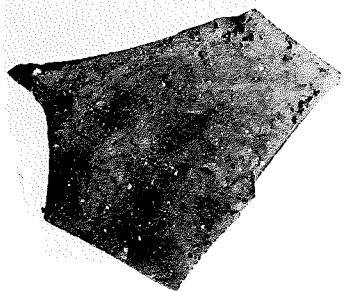
7



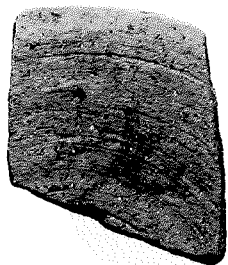
11



12



13



14



15

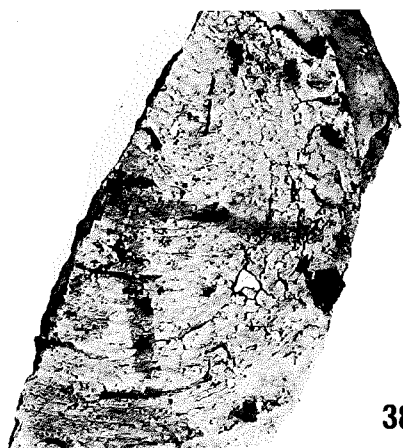


16



17





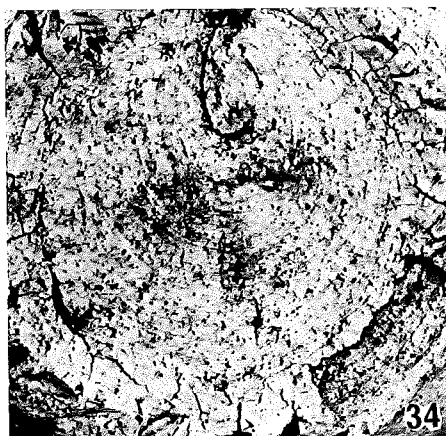
38



29



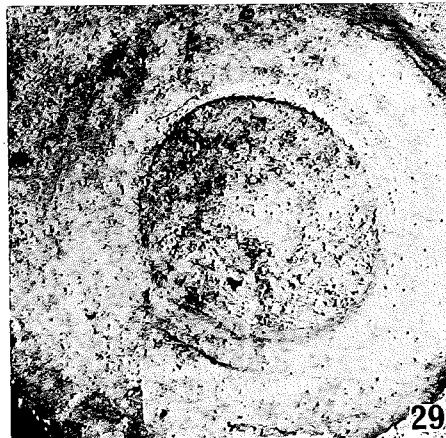
45



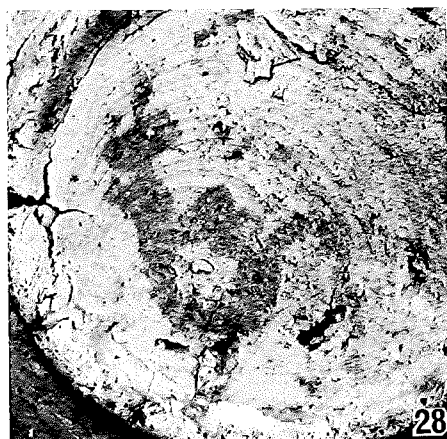
34



31



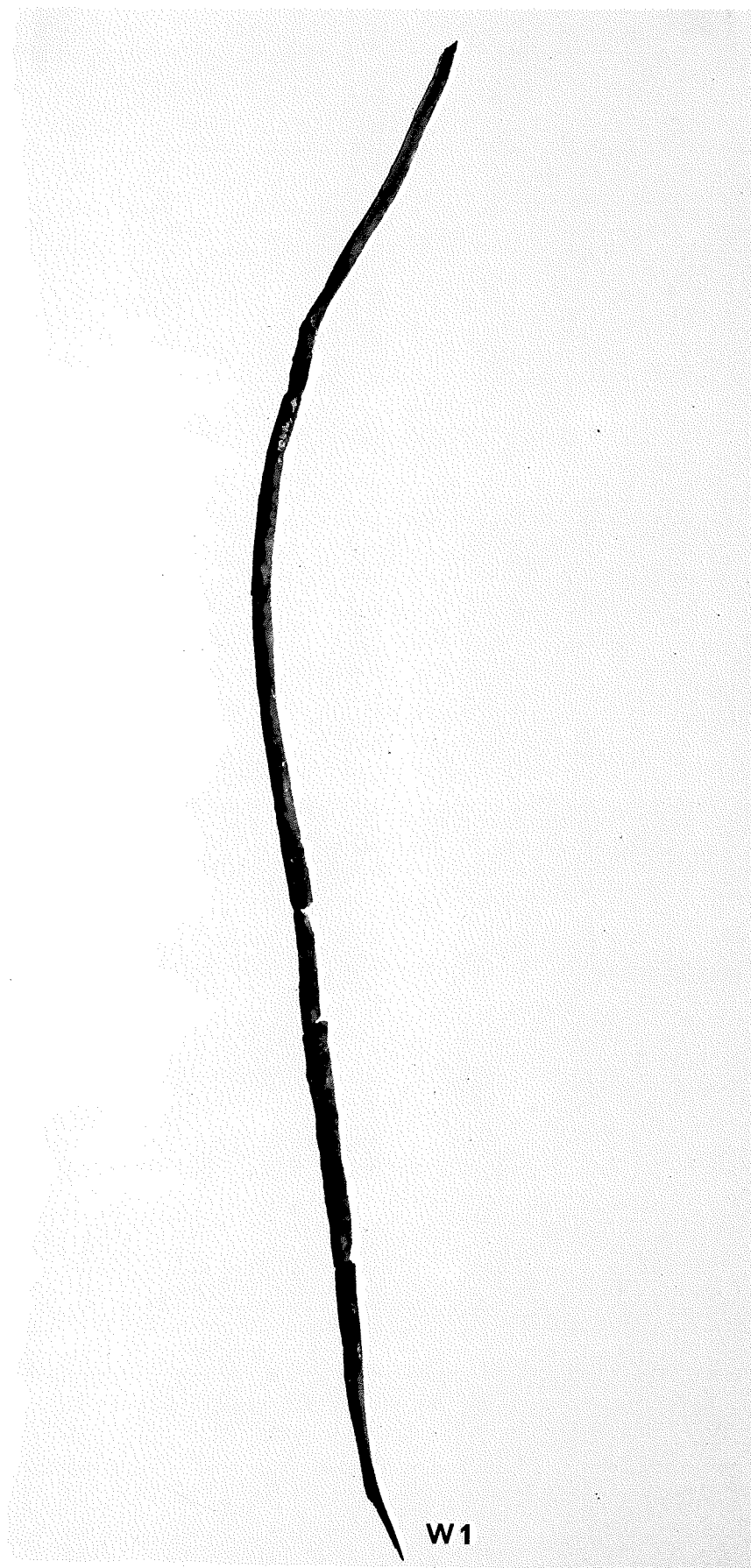
29



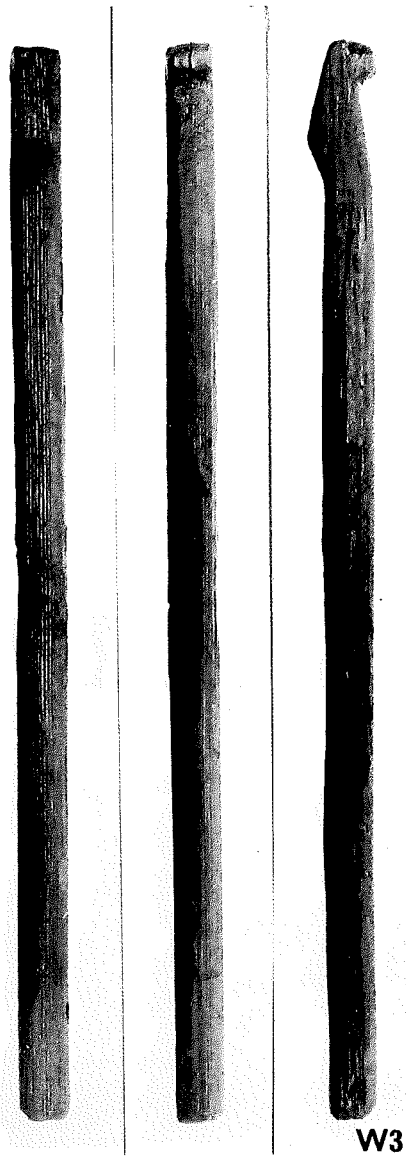
28



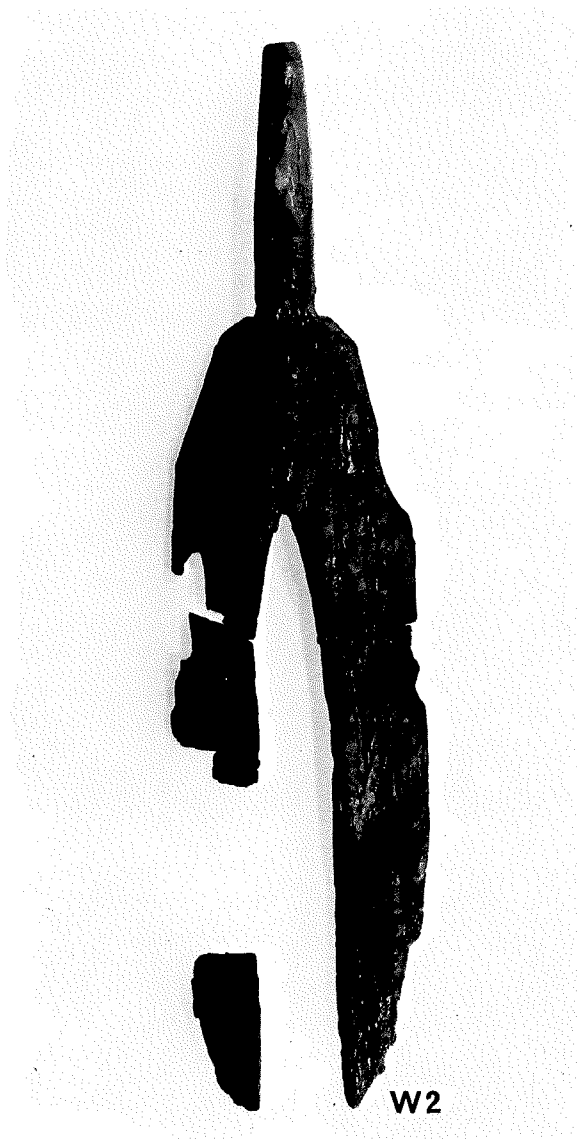
57



丸木弓



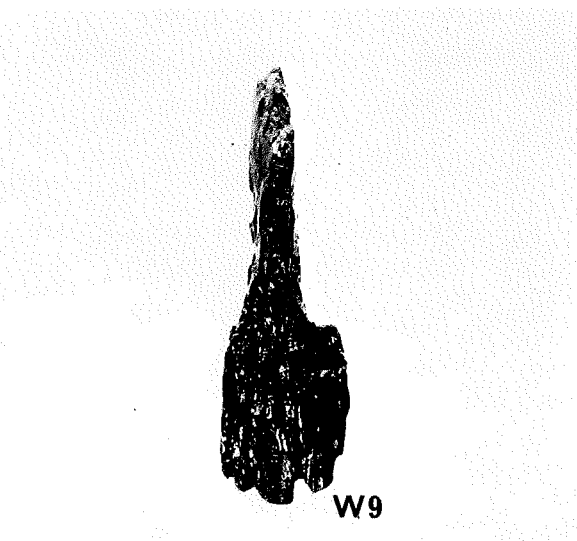
B. 木製農具の柄



A. 着柄式二又鍬



C. 先端加工木製品



D. スコップ状木製品



W7

A. ヨコヅチ



W8

B. ヘラ状木製品



W10-W16

A. 木製農具



W25-W34

B. 曲物



W17-W22(A)

A. 下駄 (表)



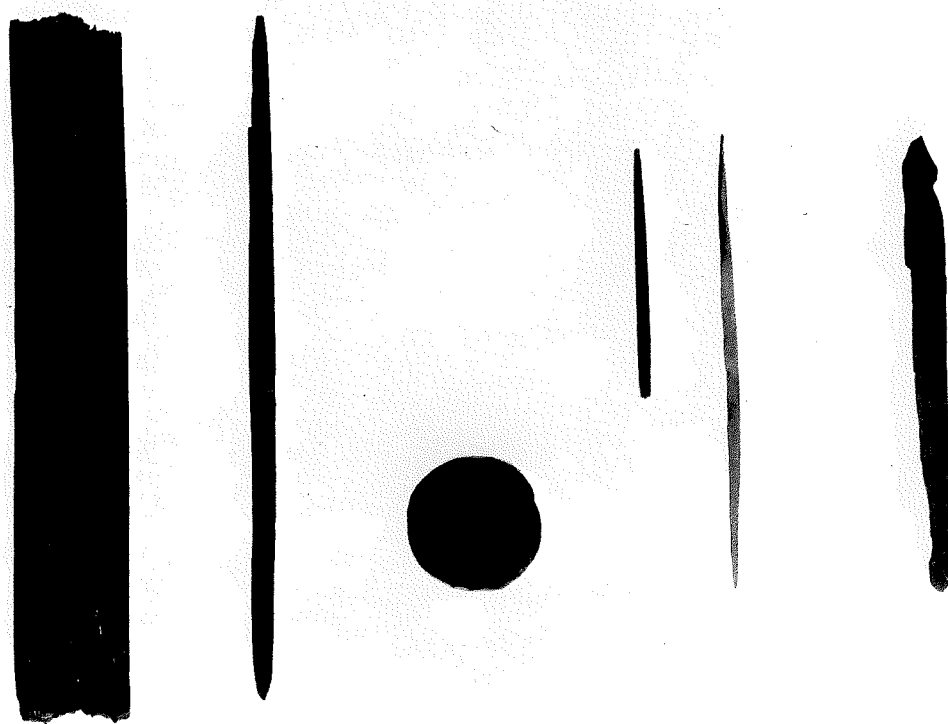
(B)

B. 下駄 (裏)



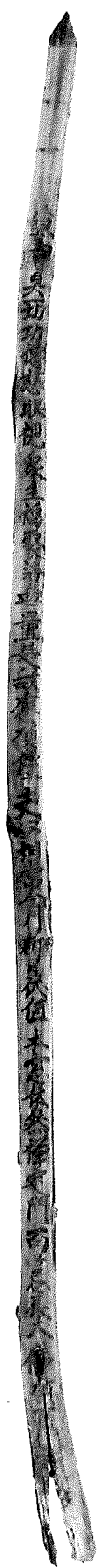
W37-W49

A. 日常生活木製品



W50-W57

B. その他の木製品



1



2



3



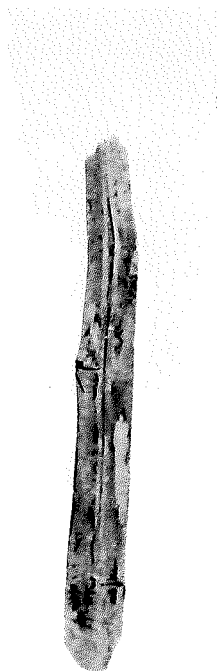
4



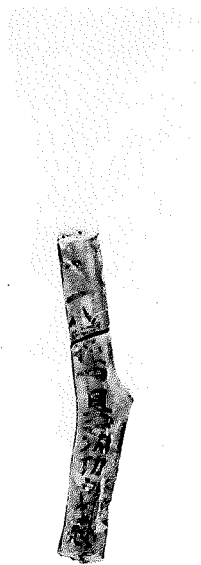
5



6



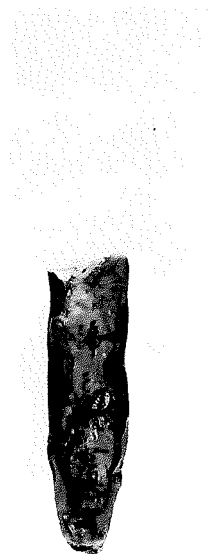
7



8



9



10



12



13

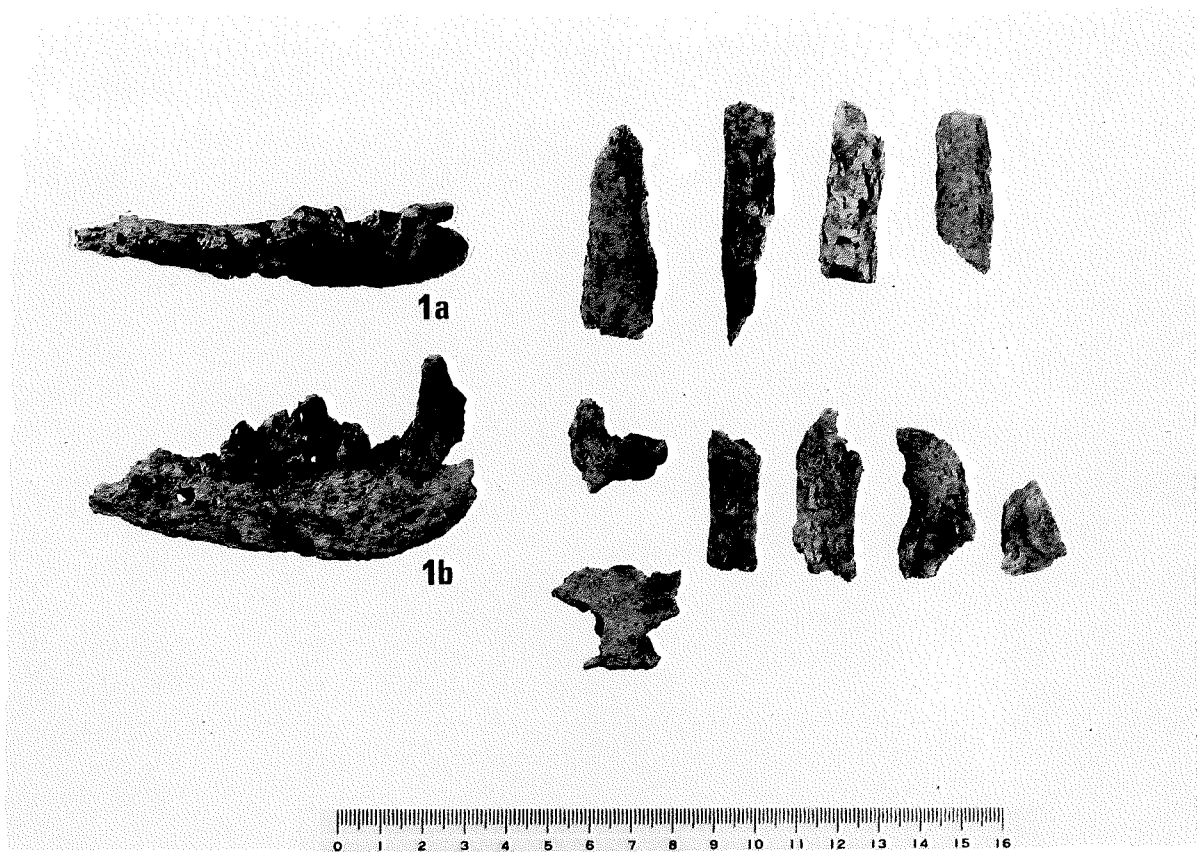


14



15





弥生期土壌内のイヌ

1 a・b : 左下顎骨とその咬面



近世イヌ頭蓋骨

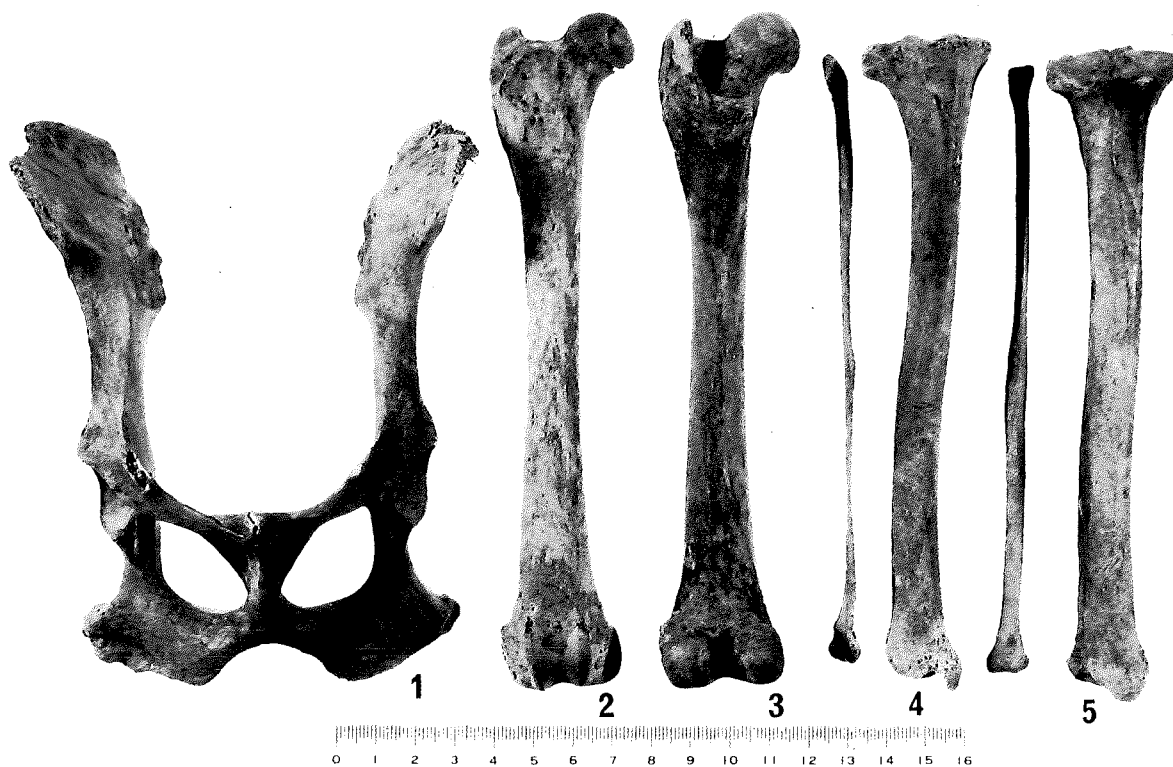
1.上面 2.側面 3.頭蓋底



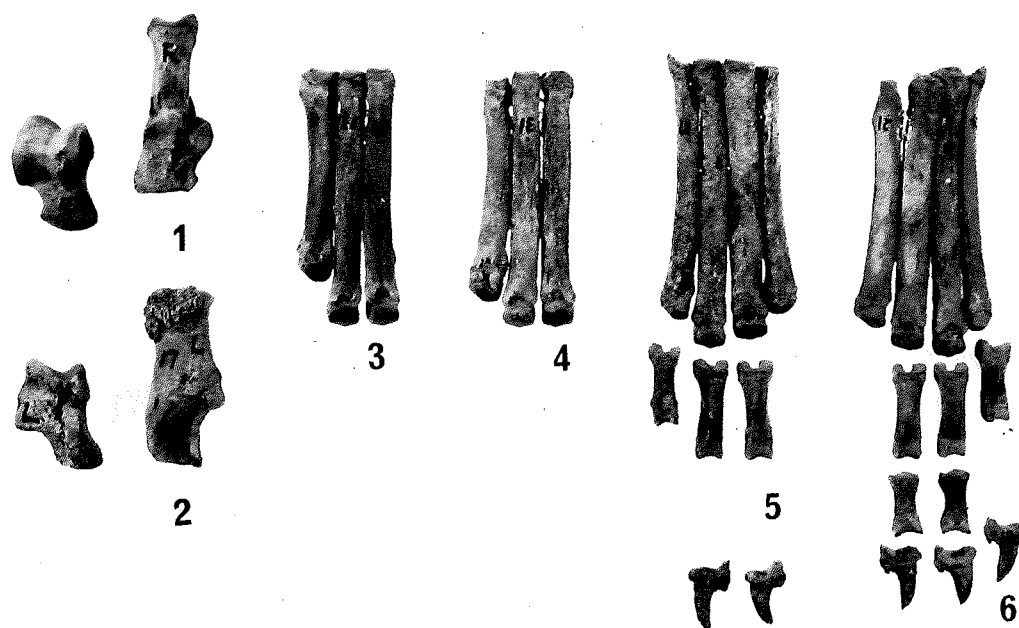
上：側面 下：右下顎骨 左下顎骨 咬面と側面（左は内側）



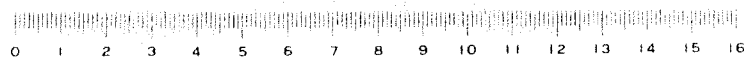
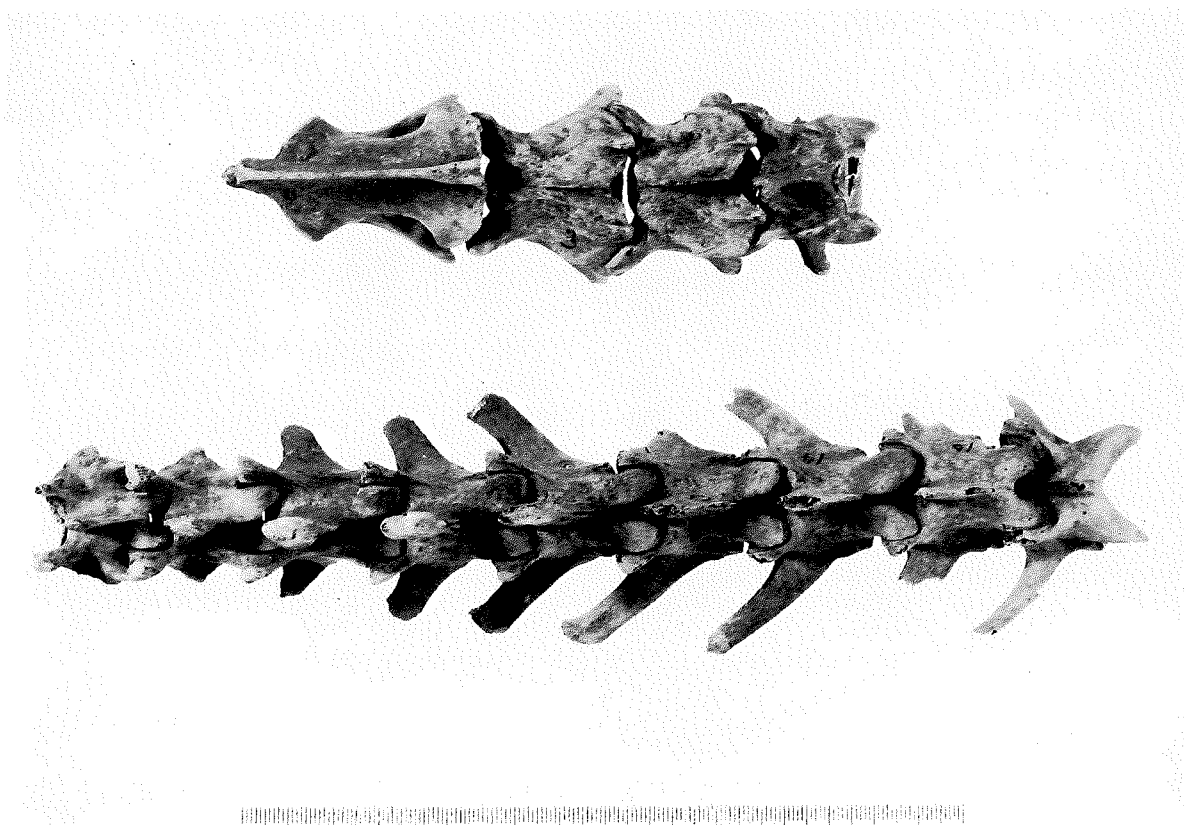
1. 右肩甲骨 2. 左肩甲骨 3. 右上腕骨(後面) 4. 左上腕骨 5. 右橈骨(後面)
6. 左橈骨 7. 右尺骨内面 8. 左尺骨



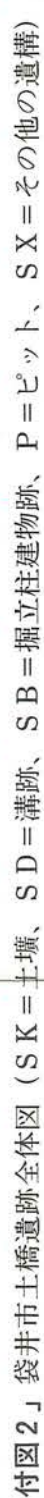
1. 骨盤 2. 右大腿骨 3. 左大腿骨(後面) 4. 右脛骨と腓骨 5. 左脛骨と腓骨(後面)



1.右距骨と踵骨 2.左距骨と踵骨 3.右中手骨 4.左中手骨 5.右中足骨と指骨
6.左中足骨と指骨 (3~6は左よりⅡ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ指の順)



上段左より軸椎と頸椎 下段は腰椎



付図2」袋井市土橋遺跡全体図 (SK=土壌、SD=溝跡、SB=掘立柱建物跡、P=ピット、SX=その他の遺構)